

絶対不可避の異世界更生

浅葱 沼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校に行かず、家でゲームばかりして、自堕落な生活を送っている高校二年生のツガヤマ コウイチ

ある日、彼は普段からの不摂生と不運に見舞われ死んでしまう。

死んだ直後、謎の空間で目の前に現れた、クレナという自身を女神と名乗る、関西弁の女の子に、生産性のない日々を過ごしてきたダメ人間を異世界に送って更生させるというプログラムに強制に巻き込まれる。

そんな女神に授けられた能力は〈絶対不可避〉

それは自身も相手も必ず攻撃が当たるといふ曰く付き能力で、挙げて身に身の回りで起こる、あらゆる事件や問題にも絶対不可避で巻き込まれるというもはや特殊能力とは言い難い能力で……

この物語は、そんなツガヤマ コウイチが沢山の人達と沢山の事件に巻き込まれながら真つ当な人間になるための異世界更生物語である。

目次

プロローグ	1
第一村人発見	9
情報収集と実感	12
仕事を探そう	16
途中経過	19
外の世界へ	23
いざ王都	27
一休み	30
測定	34
ステータスと適正と仕事	39
ジャック山のシズク草	44
噂の魔獣の正体	49
帰路	54
パーティー結成?	60
初仕事へむけて	68
依頼内容	74
違和感	78
真相	84
『宵の手』	89
vs プリム	94
決着	99
新しい仲間	106
お買い物	112
再会	118

異世界更生者達	123
騎士団長	128
お仕事を頑張ろう	132
夜の訪問	135
途中経過 その2	138
お誘い（物理）	142
v s. チンピラ	146
レイドバトル v s. ゼルバート	150
レイドバトル v s. ゼルバート その2	154
夜明け	159
出頭	163
新しい依頼	167
【鬼人】シャバラ	171
準備	175
セルカの武具屋	178
漠のロマンのマジックロッド	182
新装備	186
搜索開始！	189
路地裏	193
スイレン	197
女王様	201
v s. カシユーム？	205
v s. コウイチ	209
嵐の前	212
v s. カリム	215

v s.	カリム	その2	219
謝罪			223
合流			227
合流	その2		230
落下			233
卑怯とは言うまいな？			237
パニック			241
窮地			244
壁の中から			247
包囲			250
なんでこうなった			253
あっけない終幕と、			257
後片付け			261
新天地へ			266
カカマオの町にて			269
急行			272
王都サラン			276
火中			279
夜は明けて			283
密会			287
喧嘩と啖呵はロンシヤの華			290
ヨン老師			293
『絶対不可避』とは			298
武の女神			301
仕組み			305

修行開始と	308
途中経過 その3	311
覚悟	315
殺気	318
ダンジョンアタック	322
ガマラダンジョン	325
深層	329
遭遇	332
成長	336
意外な再会	339

プロローグ

7月、蒸し暑い部屋の中でデスクトップPCのファンの音だけが響く。

「今頃、みんなは学校か」

PCのゲーム画面を眺めながら、ふと、そんな独り言を呟いた。いつから学校に行かなくなったか、別にいじめられたというわけではないし、友達がいなかったというわけでもない。

端的に言うなら興味が湧かなかった。

元より興味がある事には寝食も忘れて没頭できるが、興味がないものは全く集中してできない性格だった。

勉強はできるとも言わないしできないとも言わないが、やる価値を見出せなかった。

人付き合いも誰かに常に気を遣わなければいけないのが疲れる。仲のいい奴とは家でも一緒にゲームはできるし、むこうが休みの日に一緒に外に遊びに行けばいい。

そんな風に思っているうちに高校1年の秋頃には学校に行かなくなった。

それからもう半年ほど経つ、最近エアコンが故障したせいで部屋の中は異常に暑い、全く、こんな時期に壊れるなんてタイミングが悪いな、などと思いつつ、そういえば、いつからゲームをしていたんだっただか、ずっと家にいるせいで時間の感覚が狂っている。

最後に何か飲んだのはいつだったか、さすがに何か飲まなければと、ふと椅子から立ち上がった瞬間。

目の前が真っ暗になった。

目が覚めると辺り一面真っ白な空間にいた。どこまで続いているような空間で、光源がどこにあるか分からないがどこまでも明るく、上

下左右の感覚が無くなりそうだ。

「どこだ(´▽´)?」

確か自室でゲームをしてて、飲み物を取りに行こうとして、と今までの状況を頭で整理していると。

「なにポーっとしとんねん、こつちやこつち」

背後から声がした。

振り返るとそこには女の子がいた。歳は俺の少し上ぐらいだろうか。

真っ赤な髪ショートヘアだが、癖つ毛なのかパーマなのか全体的に軽く巻いている。

目は少し垂れ目で瞳は吸い込まれそうな金色をしている。

服も赤を基調とし、ところどころに金色の模様で装飾されているドレスを着ていた。今いる場所が真っ白なせいか、赤色が一際目立つ。

めちやくちや美人な人だなあ

「なにジロジロ見とんねん、ええからこつちきんさい」

ずいぶんキツイ関西弁だ。女性の方に歩きながら質問してみる。

「あの一、お姉さんここがどこだか分かります?」

そう言われると女性は一つため息をつく。

「それを今から説明したる言うとんねん」

ツガヤマ コウイチ君

突然、自分の名前を呼ばれ驚いた。

「何で名前…」

「ええか? 単刀直入に教えたるけど、あんたは現世で死んでん」

そう言いながら彼女はその場にあっただけであろう椅子に腰掛けた。

座った椅子も白い色らしく、背景と溶け込んで認識がしづらい。

「死んだ? 俺が?」

「そういうこと、ほんでここは、この世とあの世の間みたいな場所や」

彼女は人差し指を立てて振りながら、得意げな顔で話始めた。

「そういえばまだ名乗ってなかったな、うちの名前はクレナ、あんたら人間でいうところの女神みたいなもんや」

「いや、ここがどことかああなたがクレナさんって事は分かりましたけ

ど、死んだの？俺」

まだ、現状に追いついていけない。

「そうやで、急に立ったから立ちくらみで意識を無くして転倒、両親は仕事に出ていて家には誰もいなく、気づかれる事なく放置、そのまま、既に出ていた脱水症が悪化して死亡」

自分でも呆れる死因に言葉を失っていると、目の前の女神を語る女の子はだっさいよなあ、などと言いながら笑いを堪えて続ける。

「でも、わざわざそんな事教える為に、ここに呼んだわけちゃうねんで」

そんなに笑われると余計に恥ずかしくなる。しかし――

「そうですね、まあ、死んじやったならしょうがないですね」

「なんや、ずいぶん飲み込み早いな。普通はもうしばらく狼狽えるんやけど、からかい甲斐ないなあ」

人の死をからかうなよ。ほんとに女神か？という言葉は口に出さず。

「それで、何で俺はこんなところに呼ばれたんです？」

「まあそう怒りなや、別に死んだ事教える為に呼んだ訳ちゃう言うたやろ」

どうやら、口には出していないが顔には出ていたらしい。

「言ってしまうえば、現世で死んだダメ人間を、更生の意味も込めて異世界に送って、人生をもう一度やり直せる機会をあげようっていう事を伝える為に呼んでん」

「人生をやり直す？」

クレナはこくりと頷き。

「そ、まあ機会っていうか強制的に異世界に送るから頑張っつてねって話なんやけど」

「ちよつと待て、強制？なんで俺がそんな事させられるんだ？」

問いかけるとクレナはキョトンとした顔で答える。

「だって、あんた日がな一日、寝て起きてゲームして、ご飯を食べて、眠くなったらまた寝るっていう生産性ゼロの生活しか送ってこなかったやん？」

ふむ

「そんな奴にもう一度チャンスあげるって言うてんねんから、断る権利なんか持つてる訳ないやろ」

ぐうの音も出ないな。

改めて、今までの自堕落な生活を第三者に指摘されると、自分がどうしようもない人間に聞こえる。

しかし、このまま言われっぱなしも癪だ。少し引つかかる部分もあるし、なんとか言いくるめられんだろうか。

「確かに、ずいぶん生産性のない生活を送ってきた事は認めよう」

「せやろ？」

「しかしだ！とは言ってもそれはある一方から見た側面でしかないとは言えないか？」

クレナは、少し驚いた顔をした後、微笑を浮かべながら試すように俺に問う。

「というと？」

よしきた。

「ゲームばかりして、なんて言い方をすれば遊んでばかりの

ダメ人間のように聞こえるかも知れないが、今ではプロゲーマーなんてものは常識として、世に浸透している訳だ」

「ほうほう」

我ながら苦しい言い分だ。しかし、始めてしまった事だし、とりあえず行けるとこまで行くか。

「それでいうと、俺はゲームをして遊んでいただけ、というのではなくプロゲーマーになる為の努力をしていた、とは考えられないか？」

クレナは何も言わずに話を聞いている。

「それを考慮せず、一方的に生産性がない、なんて一言でまとめ、ダメ人間とまで言いい、異世界に行つて更生してこいなんて横暴じゃないか？」

言い切るだけ言い切った。現状の沈黙は少し心にくるが、これですり切れたなら万々歳だろう。

沈黙を破ったのはクレナだった。彼女は、ケタケタと笑いながら話し始める。

「咄嗟に出た言い訳にしては、ようできとるな」

見透かされているようだが、ここは表情に出さず気丈に対応しなければ。

「俺は心からの言葉で伝えたつもりなんだが」

クレナは俺の顔を見ながらニヤニヤしながら続ける。

「ま、人間相手なら言いくるめられたかもしれないけど、相手が悪かったなあ、最初にも言ったけど、うち女神やから、あんたの思考なんかぜんぶ筒抜けやで。」

……………とんだ茶番じゃないか。

「せやで」

ふざけるなよこの女神、性格悪くないか？

クレナは笑いながら、

「まあそう怒りなや、でも咄嗟にあそこまでの言い訳できる頭もあるみたいやし、異世界行つてもなんとかなるやろ」

「ずいぶんテキトーだな」

どうせ思考が読まれるなら、もはや気遣いなど不要だろう。

「テキトーいうても、いきなり異世界に放り込む訳ちゃうから安心しい。あと気遣いもいらんから、楽にしてええで」

思考を読まれるのは初めての体験だが、なんだかそわそわしてしまふな。

「じゃあ、いきなり異世界に行く前になにしてくれるんだ？」

するとクレナは椅子からスツと立ち上がり、得意げな顔で話し出した。

「よう聞いてくれたー…ここが一番大事やからよう聞いとときや、いきなり異世界に放り出すのは、いくら更生の為とはいえ、うちら神様も忍びない。そこでや、まずは異世界の人と会話できる為の言語能力と識字能力は与えてあげよう。」

クレナはセールスマンの様に身振り手振りをつけながら説明を続ける。

「さらにさらに、なんと一つ、誰も持っていない様な特殊能力を授けてあげちゃうって訳や」

「特殊能力か、なんか異世界っぽくて、ちょっとワクワクしてきたな」
クレナは、俺の反応が良かったのか嬉しそうな顔をしている。この女神ノリノリだな。

「せやろせやろ、でもただ何度も言うけど、あくまで更生の為に異世界に行ってもらうから、うちから与えられる使命を人生を賭して達成してもらおうで」

「使命？それってどんな使命なんだ？」

その質問を遮る様に出し静止される。

「まあそう慌てなや。その使命はあんたに授ける特殊能力によって決まんねん」

クレナは足を整え、両腕を広げ、目を閉じ、改まった口調で、

「汝、ツガヤマ コウイチ、あなたに授ける特殊能力を教えましょう。」

丁寧な言葉遣いで話し始めたクレナを見て不覚にも綺麗だと思っ
てしまった。この人、それっぽくしておけば美人なのになあ。

「あなたに授ける特殊能力、それは、＜絶対不可避＞です」

絶対不可避、俺の攻撃が全部相手に当たるとかか？だとしたら結構強そうだな。

「そして、＜絶対不可避＞の能力を授かった者に与えられる使命は、」

この使命の方が大事だ、せつかく異世界に行くんだ。できる限り厄介事に巻き込まれずに、ほどほどの使命でお願いしたい。更生とは言われている手前、真面目には生きていくから！

「親しい人達に見守られながら、天寿を全うする事です」

……………へ？

天寿を全うする？それだけ？

つまり、ただ死ぬまで生きればいいって事？そんな簡単な事でいいのか？

「簡単やろ？じゃあ今から＜絶対不可避＞について説明しよか」

クレナは使命についてはあっさりと言ひ淡々と説明を始める。

「一つ、自分の射程圏内でくり出す攻撃は必ず相手に命中する」

これは想定通り。

「二つ、敵対者の射程圏内であなたに対して、くり出す攻撃も必ず命中する」

「ちよつと待て」

「ん？どしたん？」

「どうしたもこうしたもあるか！相手の攻撃も必ず当たるって、とんだ欠陥能力じゃねーか！」

「まあそのぐらいのリスクは背負わなあかんやろ」

「それは特別な能力と言えるのか？」

「まだ説明は終わってないから最後まで聞きんしゃい」

クレナはノリノリで説明を続ける。

「三つ、この能力は生きている間、常に発動し続けるパッシブスキルです」

「最後に、＜絶対不可避＞の能力の所有者はこの世のあらゆる運命に巻き込まれる、これもまた絶対不可避である」

「それってつまりどういう事？」

「つまりは身の回りで起こる、幸不幸、大なり小なりに関わらず、あらゆる事件や問題にことごとく巻き込まれるってことやな」

「ふざんなー！」

そんな俺を見てクレナは腹を抱えて笑っている。笑いすぎて出てきた涙を指で拭きながら、

「やから使命は天寿を全うするだけっていう、簡単なのにしてるやろ？」

「それってつまり大層な使命を与えなくても、俺が生きてる間厄介事に巻き込まれ続けるから、使命なんて与えなくてもいいだけじゃねーかよー」

「さすが、飲み込みが早くて助かるわ」

「やかましいー！」

「ナイスツツコミ、笑いのセンスもあるやん」

こいつ俺が苦しむの見て楽しみたいだけの自称女神の悪魔かなにかなんじゃないだろうか。

「女神や言うとするやろ！疑いなや！」

困った。実に困った。こんな能力、一番のハズレ粹じゃないのか？平穩に暮らしていこうにも、問題の方から俺の所に来るんじゃないか？ようもないじゃないか。

「ほな、説明も終わったし、そろそろ異世界に行ってもらおか」

クレナの突然の宣告に、動揺が隠しきれない。

「ちよつと待ってくれ！まだ心の整理が…」

「ちよくちよく更生の経過観察しに行くから、頑張りや〜」

突然新しい情報を出すな！余計、頭がこんがらがって…

「行ってらっしゃーい！」

クレナの言葉と同時に視界が眩い光でみちてゆく。

こうして、俺の異世界更生が始まった。

第一村人発見

目を開けると、目の前には一面緑の平原が広がっていた。空は顔を上げると眩しくて、思わず目を細めてしまう程の快晴である。

背後には青々とした森が広がっている。

何もなければ、ピクニックでもしようかと思える程のロケーションである。

しかし、今は散歩などしている場合ではない。俺は、ついさっきまで、女神を語る関西弁の女の子に異世界に行つて更生してこいと言われて今ここにいる。

という事はつまり、ここは我が愛しの故郷、日本ではなく、全く知りもしない異世界であるということだ。

そんな未知の世界に、部屋着の半袖に薄いジャージの長ズボンだけを身につけた、男が一人ポツンと佇んでいる。

「さて、これからどうするか」

説明不足の女神に対して、沸々と湧く怒りをどこにぶつけてよいかわからず、一旦、そこに女神がいるかも分からない、曇りひとつない空に向かって、目を瞑り、伸びをする形で両手を天高く突き上げ、中指を立てる事にした。

……少し気が晴れた。

その時、背後の森から葉が揺れる音が聞こえた。

「こんなところで何してるんだ？」

突然、後ろからの野太い声に驚き、中指を立てたまま振り返ると、そこには屈強そうな、ガツシリとした体つきで髭がよく似合う、見た目30歳ぐらいの男が立っていた。

……………血がべったりと付いたナイフを手に持って。

「なんでもしますから、命だけは勘弁してください。」
流れるように膝をつき土下座へと移行。

怖い！怖いよ異世界！

男は俺の突然の懇願に驚いたように、

「すまんすまん、驚かせるつもりはなかったんだ。」

と、手に持っているモノを俺に見せてきた。

「俺はコイツを森で狩ってただけだ。随分と暴れたから返り血で汚れちまったが、人殺しなんかじゃないから、安心しろ。」

顔を上げて男の手元を見てみると、ウサギがいた。

しかし、俺の知っているウサギとは明らかに違う。大きさがそもそも1.5m程ある。毛の色も鮮やかな紫色をしていた。

俺が初めてみる異世界の動物に言葉を失っていると、男が話しかけてきた。

「大丈夫か？つい同じクレナ教徒が祈りを捧げているように見て、声をかけてしまったが」

「すいません、驚いてしまって、もう大丈夫です」

これ以上、黙っているのも相手に悪いので返事をする。

……………今この人、すごい事さらつと言わなかった？

「あのー、今クレナ教徒って言いました？」

そう、あろうことか異世界で初めて会った人間から、俺を異世界に送りつけた女神と同じ名前の宗教を聞かされた。

「ああ、言ったが、

あんたもクレナ教徒だろ？さつき祈りを捧げてたし」

「祈り？」

俺の気の抜けた返事に、男は笑いながら、

「おいおいしつかりしてくれよ！あんな風に両手を上げて中指を立てるのは、クレナ様が生誕した時にされたとされるポーズで、クレナ教の祈りのポーズじゃないか。びっくりして記憶を無くしちまったか？」

……………言葉が出てこない。

俺は立ち上がって顔を両手で覆い、天を仰いだ。

そんなふざけた祈りのポーズがある宗教は、十中八九、俺を異世界に送りこんだ女神、あのクレナを信仰しているのだろう。

ツツコミどころが多すぎる！

その間も男が心配そうに俺の顔を覗き込んでいる。

考えるのも疲れた。もうどうにでもなれ！

「いやー、すいません。僕、田舎からやってきたもんなんで、同じクレナ教徒の方と会えて感激しちゃいました。」

俺が突然、元気になって喋り出したので、男は少し驚いたようだが、すぐに気を取り直した。

「そうかそうか、この出会いもクレナ様のお導きかもな！何かの縁だ、すぐ近くのタートス村に俺の家があるから、このジブウサギでも食べて、ゆっくりしていくといい」

ジブウサギとはあのデカいウサギの名前だろうか。

そのウサギ食えるの？

しかし、村に連れていってくれるのはありがたい。

俺はクレナ教徒の男に着いていくことにした。

情報収集と実感

タートス村へ向かう道中

「そういえばまだ名乗ってなかったな、俺の名前はゴートだ。よろしくな！」

「俺はツガヤマ コウイチです。よろしくお願いします」

「おいおい、敬語なんていらないぞ。同じクレナ教徒じゃないか」

一緒にしないで欲しい。

「じゃあ、改めてよろしくゴートさん」

「さんもいらねえよ！コウイチは随分と礼儀正しいな」

ゴートはそう言いながら豪快にがははと笑う。

いい人なのは分かるのになあ。なんでクレナ教なんぞに…

「ならゴート、俺田舎から出てきて世間の事に疎くてさ。色々質問してもいいかな？」

「おうよ。俺が答えられる事ならなんでも聞いてくれ」

異世界に来て初めて会った人がいい人で助かった。とにかく俺はこの世界のことを知らなすぎる。まずは情報収集だ。

だがとりあえず今一番知りたいことは…

「クレナ様ってどんな神様なの？」

俺の質問にガジは顔をしかめた。

「そんな事、クレナ教徒のお前さんなら知ってるだろ」

まあそう思いますよね。

「いやあ、うちの親がクレナ教徒だったから俺もクレナ教なんだけど、俺が小さい頃に両親とも死んじゃってさ。村に他のクレナ教徒もいなかったから、さっきの祈りのポーズしか知らないんだよね」

もちろん嘘だが。

「そうだったのか。大変だったんだな」

俺の話を聞いて、ガジは少し涙ぐんでいた。

この人、俺でも壺かなんか売りつけられそうだな。

「よし！俺がクレナ教がなんたるかを教えてやる」

ゴートの熱心な話は長かったので割愛するが、まとめると、クレナ教は極東から伝来した宗教で、信仰している人が少ないマイナーな宗教らしく、クレナは武の神様として崇められているらしい。(そのため武闘家などが多く信仰している)

その後は、ここがクエス王国という国の西の端に位置する場所だという事を教えてもらった所でタートス村に到着した。

村は高さ2メートル程はある、丸太を立てて縄で縛った壁に囲まれているようで、同じぐらいの高さの木製の門から中に入るらしい。門の前には門番らしき若い男が立っていた。

「おかえりゴートさん。狩りはどうだった？」

「おう、今日はいいジブウサギが獲れたぞ。しかも今日は珍しく、客人もいるぞ！」

どうも、獲物のコウイチです。と一礼。

「あはは、俺は門番のサクだ。なんにもない所だけど歓迎するよ。」

柵の中は思ったよりも広く、今入ってきた所の反対の柵は目を凝らしても見えず、緑の野原と小麦？と思われる物を育てている畑が広がっている中に、家がぼつぼつと建っている。

「なんで村にこんな柵に門番までいるんだ？」

畑と野原に挟まれた、土の道を歩きながらゴートに聞いてみる。

「まあこの辺はまだ平和だが、近くに森もあるし、いつ魔獣が出てくるか分からんからなあ」

「魔獣!？」

俺の驚きの声にも驚いた様子で、

「なんだ急に大声出して、魔獣ぐらい大なり小なりどこの森にもいるだろう」

魔獣って俺の想像しているような怪物で合ってるんだらうか。

「いやごめん、俺のいた所では魔獣なんて出てこなかったから」

「コウイチ、お前本当にどっから来たんだ？魔獣も出てこないなんて所、聞いたことないぞ」

日本っていう所なんですけど、知るわけないよな。

俺が黙っていると、

「まあ無理に詮索したりはしないさ。誰にでも知られたくない事の一つや二つ、あるもんだしな。さあ着いたぞ」

前を見ると小さな木造の家が立っていた。家の隣に木が一本立っていて、少し離れたところに、小屋が一つ立っているが、それ以外は特に目立つものは何もない。なんというか…

「今飾りっ気のない家だと思っただろう」

「い、いや？そんな事全然思わなかったよ？シンプルな感じではないか」

「嘘つけ、顔に出てたぞ」

「……………すみません」

「あつはつは、まあこの辺のじゃ一番簡素な家なのは確かだから間違っていないがな。まあ寝れさえすればどこも同じよ」

ゴートはそう言いながらドアを開けて中に入るように勧めた。

「おお」

家の中に入ってみると思ってみたよりいい家だと感じた。木造だからなのか、どこか暖かさが感じられて安心する。物は外と同じで生活するのに最低限の物しかないが、そこもまた味があるというか。

「案外いい家だろう？」

「だね」

「やつぱりお前は分かりやすく面白いな」

すぐに飯を作るからくつろいでてくれと言い、ゴートはキッチンに向かった。

やつと一息つける。異世界に来たばかりで右も左も分からなかったが、人のいる村にこれて良かった。これからどうしていくか考えなければ。俺はブーツと外を眺めながら現状や将来についてぼんやりと思索する。

てか俺、無一文じゃね？

着てる服しか服もないし、そもそも家もないし、職もなし。これは

俗に言う浮浪者という事では？

俺がお先真つ暗な事に絶望して、うんうん悩んでいると、声がかける。

「コウイチ、飯ができたぞ、食おう」

勧められるまま、テーブルにつき、出てきた料理を見る。シチュー？のようなクリーム色のスープとパンが置かれていた。このスープに入ってるのってさっきのデカイウサギの肉か？

「ほら、冷めちまうぞ、早く食え」

ゴートは先にシチューとパンを食べ始める。

少し抵抗があるが、シチューにスプーンを入れて一口啜る。

………美味い。めちゃくちゃ美味い。

俺は腹が減ってたこともあつてか夢中でご飯を流し込む。

「おいおい、あんまり急いで食べると喉に詰まるぞ」

ガジは少し嬉しそうに笑いながら俺が食うところを見ていた。

「これ美味しいよ、すげー美味い」

気づくと、目から涙が流れていた。

「おい、大丈夫か？」

「あれ、なんで泣いてんだろ俺

ごめん、俺、なんで」

俺は自分がなぜ泣いているのか説明できず、言葉もうまく出てこないことに困惑した。

「心配するな、お前さんにも色々あったんだろう。ここは安全だし、いたけりやいつまでもゆつくりしてていいんだぞ」

ゴートが優しく声をかけながら俺の肩を叩いてくれた。

俺は泣いた。

声を出しながら泣いたのなんて何年ぶりだろう。

俺は死んで、何も知らない世界に飛ばされて、これからどうすればいいかも分からないし、知り合いもいないこの世界で生きていく事に対しての不安が込み上げてきたんだと思う。

その日は泣き疲れていつのまにか寝てしまった。

仕事を探そう

朝、窓から差し込む光で目が覚めた。どうやらゴートはベッドのある二階まで俺を運んでくれたらしい。一階に降りてみるがゴートの姿は見当たらない。

辺りを見渡していると、外から物音が聞こえる。

外に出てみると、ゴートが斧で薪割りをしていた。

「おお、起きたかコウイチ。おはよう」

ゴートは昨日の事は無かったように話しかけてくれた。

「おはようゴート、昨日は急に泣いたりしてごめん」

「気にするな、その若さで知らない土地に一人で出てきて不安だったんだろう。気持ちは分かる。すぐに朝飯にしよう」

「なにか手伝う事ある?」

「薪割りはしたことあるか?」

「ないけど、やってみてもいい?」

「おお、じゃあ手伝ってもらおうかな」

その後は、薪割りのコツを教えてもらいながらやってみたり、朝ご飯の用意を手伝ったりして時間を過ごした。俺のおぼつかない手つきで、きつと手伝いにもなっていないし、時間的にはロスになっているはずなのに、そんな俺にゴートは優しく教えながら朝ごはんを作った。

「うん、美味しく作れたな!」

ゴートは俺が作った、ほぼスクランブルエッグになってしまった目玉焼きを食べながら褒めてくれた。

食事が終わり、ゆつくりとした時間が過ぎた後、ゴートが尋ねてきた。

「コウイチ、お前さんこれからどうするかあてはあるのか?」

「実は俺無一文でさ、仕事を探そうと思うんだけどこの村で何か仕事あるかな?」

「そうか、そいつはいい、しかしこの村は基本みんな農家だし、人は今

足りてるだろうなあ。王都なら仕事もあるだろうが。」

「どうやらこの村は日本と違い、少子化の波がきていないらしく、人手が十分だそうだ。」

「ゴートさえ良ければ、俺に狩りの手伝いをさせてくれない？」

俺の提案はゴートの顔を曇らせた。

「ふむ、確かに俺は一人でやってるし、手伝いがいればいくらか助かる部分はあるが、狩りは森に入ることになるし、命を落とす危険だってあるぞ？」

昨日、デカイウサギを見たり、魔獣の話聞いたことで、この世界は危険が多い事は薄々気づいていた。しかし、それならなおのこと生き残る術を身に付けなければならぬ。

そしてなにより、俺みたいな人間に優しくしてくれたゴートに少しでも恩返しをしたい。

「危険なのは分かってるつもりだよ。でもせめて一宿一飯の恩は返したいし、これから生き残る術を覚えたいんだ」

ゴートは黙り込んでしまった。やはり甘い考えだったか。

「分かった」

まさかの了承に俺は驚いた。

「ほんとにいいの？」

「ああ、男の言葉だ、嘘はない。」

しかし、一瞬間を置いて、

「ただし！一宿一飯の恩なんていらん。俺が勝手に泊めて飯を食わせただけだ。俺の為に働くなんて理由はいらん、生き残る術を身につけたいっていう、お前さん自身の為にやるんだ。」

嬉しくてまた泣きそうになってしまった。涙腺が弱くなってしまっているな。

「ありがとう！」

俺は頭を机にぶつけるぐらいの勢いで下げた。

「よし！そうと決まれば今日から忙しくなるぞ！容赦なくこき使うから覚悟しろよコウイチ！」

「分かった！なんでもやるから任せてよ！」

こうして俺はゴートの狩りの手伝いをするようになった。

—そしてあつという間に1年と半年の時が過ぎた。

途中経過

吐く息は白く、辺りは白銀の雪に覆われ、木は葉を散らし、殺風景な景色が広がっている。そんな森の中を俺は今、息を切らしながら走っていた。

「はあ…はあ…、あと少し」

走るのを一旦やめ、木影に隠れながら独り言を呟く。

その数瞬後…

ズシン、と木を挟んだ背後から重たい音が聞こえる。

息を整え、覚悟を決めて木から飛び出して走り出す。

木から飛び出した瞬間、背後から低く重い、身体に響くような大きな音が鳴る。

後ろをちらりとみると、そこには音の主である体長3メートルはあると思われる熊のような見た目の魔獣が自分に向かって6本の手足を使って走ってきている。

「怖い怖い怖い！死ぬって！」

降り積もった雪に足を取られながらも全力で走る。

すぐに目印の為に??印に置いた木の枝が見えた。踏まないようにその上を飛び越えてから魔獣に向き直す。

熊のような魔獣は依然こちらに向かって走ってきている。

俺は腰に差している牛刀より一回りほど大きいナイフを抜き臨戦体制を取る。

魔獣との距離がどんどん縮まっていく。

10メートル…7メートル…5メートル

魔獣が目印の木の枝を踏み抜く。すると雪の下に仕掛けていたロープが魔獣の足を縛り付ける。

魔獣は急に足を取られた事で体勢を崩す。それを見計らい声を上げる。

「今だーゴート！」

俺の声に反応し、ゴートがすぐそばの木陰から両手剣を構えて走ってくる。

魔獣はゴートに気づき、体勢崩しながらも鋭い爪のついた手を払うように振る。

ゴートは魔獣の攻撃を剣でガードするも、耐えきれず少し後ろに吹き飛ぶ。

俺はふと魔獣の足のロープを見ると今にも切れそうになっていることに気づく。

すかさず俺は持っていたナイフを魔獣に投げつける。

ナイフは見事に魔獣の肩に突き刺さり、怯ませることに成功した。その一瞬の隙を逃さず、ゴートは魔獣の首に剣を振り抜く。

雪の上にどさりと魔獣の首が落ちる。

少し遅れて首のなくなった胴体も地面に倒れる。

「うおおおおおおお!!」

ゴートの咆哮が森に響く。

「やったなコウイチ！」

「死ぬかと思ったけどね」

ゴートは笑いながらソリを取ってくると言っただけで場を離れた。

俺は安心からほっと一息つく。

ゴートの仕事を手伝うようになってから1年半が過ぎた。

今回は冬になりタートス村の近くに熊型の魔獣が出たという情報が入ったのでゴートと一緒に森に入って討伐に来たというわけだが、こんな大型の魔獣との戦闘は初めてだったので緊張からかひどく疲れた。

しばらくするとゴートが戻ってきて、二人で魔獣をソリに乗せて村への帰路に着く。

村の門の前には相変わらずサクの姿があった。

「ゴートさん、コウイチおかえり！」

挨拶をしながら俺たちの後ろの荷物を見てサクは驚く。

「それってもしかして…」

「ああ、俺とコウイチで倒してきたぞ」

「俺の見事な活躍をサクにも見せてあげたかったよ」

俺のドヤ顔を見てサクが訝しみながら、

「どうせコウイチは囷になるぐらいしかしてないだろ？」

「そんな事ないわ！まあ囷は合ってるけど…、ナイフを投げて隙を作ったりしたわ！」

「ははは、悪い悪い冗談だよ」

サクは俺たち二人に労いの言葉をかけて村長のところに報告に行くと言ってその場を後にした。

家に着き、魔獣の解体を一通り終えた後、ゴートと剣術の訓練を始める。

お互いに打ち合いながらもゴートにはしゃべる余裕がある実力差だが、

「最近は随分動きが良くなってきたなコウイチ」

すでに狩りでヘトヘトの体を動かしながらも答える。

「そう？なら攻撃当たってくれてもいいんだよ？」

ゴートは笑いながら喋り続ける。

「お前さんの＜絶対不可避＞の能力に始めは驚いたが、避けれんだけでガードはできるからな」

この一年半でゴートに剣術の訓練をつけてもらって分かったことがいくつもある。

俺の＜絶対不可避＞の能力は攻撃は当たるが、ガードはされてしまうという事、それは相手も自分も同じらしい。仮に避けようとしても相手が何故か動けなかったり、自分の攻撃の軌道が逸れたりして、必ず相手に当たるという事。

後、俺には少しだけだが剣術の才があるらしいという事。これは俺がゴートに勝てたことが無いのであまり自信はないが。

これも後から知ったのだがどうやらガジは王国の騎士団に所属し

ている騎士らしい。そんな人がなんでこんな村にいるんだと聞いた
ら、色々あつて長期休暇を貰っているらしい。色々の事は教えてくれ
なかつたが…。

剣術の訓練を終え、風呂に入り、ぐ飯を終え、眠りにつこうと、か
つて客間だった自室に戻ると部屋の中に人が立っていた。明かりが
ないので顔が分からない。

「え、誰？」

謎の人物が俺の声で振り返ると同時に窓の外の雲の切れ目から月
明かりが差す。

そこには真っ赤な髪に真っ赤なドレスを着た、俺を異世界に送り込
んだ張本人クレナが立っていた。

「久しぶりやな、ツガヤマ コウイチ

クレナちゃんが経過観察に来ったで」

外の世界へ

「元氣しとったか？まあちよくちよく見とったから大体知ってんねんけどな」

俺は無言でゆっくりとクレナに近づく。

「ん？どした？感動の再会で言葉も出んか？ハグでもしたるか？」

ふふんと鼻を鳴らし、得意げな顔で腕を広げるクレナ

「…ちよつ、いたつ、いたって、なにすんねん！」

俺はクレナの頭に連続チョップを入れていた。

「あ、ごめん。次会ったらぶん殴ろうと思ってたからつい。次はグーで殴っていいか？」

クレナは頭をさすりながら頬を膨らませる。

「いい訳ないやろ！こんなかわいい女の子に手上げなや！」

自分でかわいいって言うなよ

「かわいいのは事実やからしゃーないやろ？でも案外異世界の生活にも慣れて楽しんでるやん」

人の心が読めるクレナは俺の脳内のツツコミにも反応してくる。

「そうカリカリしなや、今日は途中経過を見に来たんやから」

「その途中経過も何か教えてもらってないけど」

クレナは今から説明するからと自分は椅子に腰かけ、俺をベッドの方に座るよう促すので渋々座る。どこからか手帳を取り出し、中身を眺めながら足を組んで話し始める。

「ふむふむ、まあ概ね経過良好みたいやな。でも生活に変化がなくておもんないなあ」

「面白いかどうかはどうでもいいだろ。まともな人間になって天寿を全うするのが俺の使命とやらなんだろ？」

「まあせやねんけど？ほんまにずっとこんな辺鄙な村で一生を終えるつもりなん？せつかくの異世界やで？」

クレナは組んでいた足を入れ替え、髪の毛をくるくるといじりなが

ら口を尖らせぶーぶーとぼやく。

「関係あるか、それに俺はゴートに恩があるし、この恩は返さなくちゃならない」

「ふーん恩返しねえ、ほんまにできるかなあ?」

クレナの妙に含みのある言い方に違和感を覚える。

「なんだよ何か問題でもあるのか?」

「うーんまあ恩返しをしようとするのはいい事やけど? あんた自分の能力のこと忘れてない?」

「能力つて<絶対不可避>のことか?」

クレナはうんうんと頷く。

「あんたのその能力は問題なり事件なりを引き寄せてまう事忘れたん? こんな平和な田舎にあんな大型の魔獣が出たのはなんでやるなあ」
確かにタートス村の近くで凶暴な魔獣が出たのは初めてだと村の人には聞いたが、

「まさか俺のせいなのか?」

「そういう能力やって言うたやろ?」

それじゃあ俺は恩を返すどころか、仇で返しまくりのやべー奴じゃないか。俺は頭を抱えた。

「せやから、ある程度この世界に慣れてきたみたいやし、そろそろ外の世界に出ることをおすすめに来たつて訳やで。」

どうしたものか。突然の通告に動揺が隠せない。確かにこの一年半である程度体は鍛えられたし、剣術も様になってきていると言われているが。いざ外の世界に出ていくとなると心の準備が…、しかし、このまま村に居続けても村のみんなに迷惑がかかってしまう。

俺は、村を出る決意を決めた。

「心が決まったみたいでよかったよかった」

お前が出て行って言ったんじゃん。

「外の世界は外の世界で楽しいこといっぱいやから期待しとき」

悪戯っぽい顔をして笑うクレナ。

楽しみより不安の方が圧倒的に勝っているが…

「それよりクレナ、お前ゴートに会ってやれよ。あいつクレナ教徒なんだぜ」

「いやいや、うちって女神やん？ 貴い存在な訳ですよ。いくら自分の教徒とて、下界の人間に接触する事は神界の法により禁止されてるわけよ」

下界の人間に女神が会うと厳しく罰せられるだとか、俺にもペナルティーが科せられる等、物騒な事を説明するクレナ

「だからあんたに会いに来る時は結界を張って近くの人に気づかれんように…」

そこまで話すと、クレナは固まってしまった。

「どうした？」

クレナの顔を覗き込みながら尋ねた時、

「コウイチく、なんだか騒がしいが大丈夫か？」

階下からゴートの声が聞こえる。

クレナの方を振り返り、

「おい」

「なに？」

「結界とやらを張ってるんだよな？」

「忘れてた」

片手を頭に寄せ、舌を少し出しておどけるクレナ

「おいふざけんな！ お前さつきバレたら俺にもペナルティーあるとか言っただけか!?!」

なるべく小さな声でクレナに詰め寄る。

「コウイチ？ 誰かいるのか？」

ゴートが階段を登ってくる音が聞こえる。

「早く帰れお前！」

「そんな怒りなや、ほなまた来るから」

「もう来るなお前は」

はいはいと言いながらクレナの姿が半透明になって消えていく。

「あ、そういえばあんたの事正式にクレナ教徒にしといてあげたから」

「だから別れ際に新情報を出すな！」

クレナはいつの間にか部屋から消えていた。その場に冬の冷たい空気だけが残る。

「何やってんだ？」

ゴートが心配そうに部屋に入ってくる。

「いや？何もしてないよ？」

思わず声が上がってしまった。

「ふん？まあ何もなければよかったが、人の気配がしたんだがなあ」
辺りを見渡しながら頭を掻くゴート。

鋭いな。

「そんなことよりゴート、ちょっと話があるんだけど…」

俺はゴートに村を出る話を始めた。

ゴートはしばらく黙って話を聞いてくれた。

俺の〈絶対不可避〉が問題なんかも寄せ付けてしまう事、そのせいで、今日討伐した魔獣が現れたかもしれない事、だからみんなに迷惑をかける為にも、そろそろ村を出ようと思う旨を伝えた。

「そうか、分かった。だが村を出るのは雪が溶けて暖かくなってからにしる。冬は寒さが厳しいし、王都へ向かう馬車も出てないからな」

「怒らないの？」

正直、村のみんなやゴートを危険に晒したのだから、殴られるのだから覚悟していたのだが。

「怒る？なんで怒る必要があるんだ？コウイチの〈絶対不可避〉は生まれ持ったもんだろ。そんなことで怒ったってなんにもならんだろ」
ゴートは怒ることなく、明日も朝から剣術の訓練だから早く寝ろとだけ言って、自室に戻っていった。

—そして数ヶ月経ち、王都へ向かう日がやってきた。

いざ王都

王都へ出発する日の早朝、俺はゴートと最後の訓練をしていた。
「ふっー！」

ゴートの素早い一振りが、脇腹に滑るように入ってくる。それを体を少し振らせて木剣で受け流す。これは最近覚えた技だが、俺の<絶対不可避>は回避はできないが、一旦攻撃を受けてから避けるようにいなす事はできるようだ。

「せー！」
今度は俺の上から叩きつける様に振る一撃が、ゴートの脳天に落ちる。しかし、これはあっさりとは躲され反撃の突きが飛んでくる。鋭い突きは見事に俺の額に直撃し、後ろに吹き飛ばされる。

「いだあぁあ!!」
「はっはっは、まだまだだなコウイチ」
倒れた俺に手を差し伸ばしてゴートは言う。

「だがさっきの受け流しは良かったぞ。最近では反射で避けようとしてしまう事も少なくなってきたし、後は実践経験を積むだけだな」
「ありがとう。でも最後ぐらい勝たせてくれても良かったんだよ？」
差し出された手に起こし上げてもらいながらヒリヒリと痛む額をさする。結局最後までゴートには勝てなかったな、流石だよとゴートを褒める。

ゴートは鼻の下を人差し指で擦って自慢げに笑う。これはゴートの癖だ。誉められたりすると照れ隠しで鼻の下を指で擦る。つまりその瞬間は片手がお留守な訳だが…

「隙ありー！」
ガラ空きの胸に一閃。最後ぐらい不意打ちでもいいから一撃食らわせてやる！

次の瞬間、ガンツ！っという音と共に俺の木剣は宙に舞っていた。
「いい攻撃だが、まだまだ鋭さが足りんな」

ゴートは完全に不意を突いたはずの俺の攻撃に反応して、剣を振り

上げる形で弾いていた。

不意打ちしても当てられないなら勝てねえよ。化け物かこのおっさん。

「不意打ちでもいいから攻撃を当てようとする気概はいい事だぞ」

そろそろ終わるかと言ってゴートは家へと歩き出した。

王都への馬車はもう少しで来る。家へ戻り、身支度をし終わるとガジは俺を居間に呼んだ。

「これは今までの仕事を手伝ってくれた礼だ」

そう言っつてゴートはお金の入った皮袋を俺の前に置いた。俺は今まで特にお金を使う理由がなかったので生活費を差し引いてもらつて、お金はゴートに預かつてもらっていた。

「ありがとう」

俺は皮袋を受け取りながら感謝を伝える。

「本当に行くのか？俺はいつか王都に戻るが、お前さえよければこの家は使つてもいいんだぞ？」

「そこまでしてもらうわけにはいかないよ。それにあまり長く一つ所に留まるのも良くないと思うから」

「そうか」

ゴートは少し待つてろと言ひ席を立つ。

「これを持つてけ。餞別だ」

そう言つとゴートはテーブルの上に短剣を置いた。

「こんなの貰つていいの？」

「御守りみたいなもんだ。王都に行つたら武器屋に行つて自分に合う武器を調達すればいい」

できれば剣を使う様な仕事には就きたくないのだが…

短剣を抜いて見てみるとよく手入れされている様で、刀身は光を反射する程綺麗で、重さも軽すぎず重すぎず、手に馴染む様に感じた。

「ありがとう、ゴートには世話になってばかりだな」

「そんな事はない、俺もお前には色々世話になった。特にコウイチの料理はうまいからな。これから食えなくなると少し残念だ」

「俺でもそこそこ作れる様になったんだからゴートも料理の練習しろよ」

笑いながら他愛無い話をして馬車をが来る時間を待った。

しばらくすると外から馬車の音が聞こえてきた。

御者に王都までの運賃を払い、荷台の前でゴートに別れを告げる。

「じゃあ、そろそろ行くよ」

「ああ、元気にしてろよ。俺もじきに王都へ戻る。その時はまた飯でも食おう。できれば恋人ぐらい作っておけよ」

「親か！俺より先にゴートが恋人作れよな」

「お前みたいな若造に心配されんでも大丈夫だわ！」

お互いに笑いながら俺は荷台に乗り込み、馬車が動き出す。

「コウイチ！剣の鍛錬は怠るなよ！」

ゴートは見えなくなるまで俺を見送ってくれた。

それから半日ほど馬車に揺られ、王都の入り口に着いた。

一休み

「お客さん、王都に着きたしたぜ」

馬車が止まり、御者に声をかけられる。

尻が痛い。馬車がこんなに揺れるとは。まあ舗装もされてない道ならこうなるか。尻をさすりながら荷台から降りる。

「おおー」

顔を上げると、目の前には高さ10mはありそうな、石でできた壁と木を鉄の留め具で加工した大きな門が現れた。

「でけー」

感心しながら門の方へと歩を進める。壁といい、開いている門から見える街並みといい、まさに西洋って感じがして少しワクワクする。

「そこで止まれいー」

門の前に着くと、甲冑を着込んだ門兵らしい人に止められる。門兵は近づいてきて俺の顔をじっくり見ると、

「よし。手配書などには載ってない様だな、では通行料を」

と銅貨20枚を要求してきた。

俺が異世界に送られた時に与えられた情報では銅貨1枚は日本円にして約100円、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨10枚で金貨1枚といった換算らしい。ちなみに大人1人が1日過ごす分には銅貨30枚ほどあれば十分といった程度だ。

俺は門兵に皮袋から出した銅貨20枚を渡すと門をくぐって王都の中へと入っていった。

とりあえずは今日の宿を探さなくては…王都の街を歩きながら宿を探す。それにしても、さすがは都会といった所か活気に溢れている。石畳で舗装された道の脇には所々に屋台があり、装飾品や食べ物売っている。

人の量もタートス村とは比べるまでもなく、剣や弓を携えた若者や、豪華な装飾品を身に付け、荷物持ちだと思われる人と護衛を引き連れた商人の様な人等、様々だ。

その中でも一際目についたのは、ロツドの様なものを持ち、鰐広の
とんがり帽子をかぶった人を何人か見かけた。

魔法使いだよな、あれ。この世界って魔法あるのか、フアンタ
ジーって感じでいいねえ。俺も使えたりするんだろうか。もし俺が
使えたら絶対に回避できない魔法使いになれて、この世界で無双とか
できるのでは？

などと考えながら屋台に売っていた串焼きを頬張っていた。

「なあおっちゃん」

串焼きの屋台の店主に話しかけてみる。

「なんだ坊主、もう一本か？」

「いや、これはめっちゃくちゃ美味しいけど、聞きたいことがあってさ」
俺はこの辺の宿の場所を店主に聞いてみた。一番近い宿はこのま
ま王都の中心に向かっていく道を少し行けばあるらしい。俺は礼を
言ってもう一本串焼きを買って宿に向かう。

宿の外観は街に並ぶ家々と大した変わりはなく玄関の上に「コルト
亭」とだけ書かれている看板をつけているだけだ。中に入ってみる
と、一階が食堂になっていているらしく、すでに何人かがテーブルにつき
ご飯を食べていた。

店員はどこかと入り口で店内を見渡していると、

「いらっしやい！お泊まりですか？お食事ですか？」

よく通る大きな声で俺と同じ歳ぐらいの金髪の可愛らしい女の子
が話しかけてきた。

「泊まりたいんだけど、部屋あるかな？」

「お泊まりですね！おばあちゃん、泊まりのお客さんだよー」

女の子が呼ぶと厨房らしき所から両手を腰の後ろで組んだ小さい
お婆さんが出てきた。

「じゃあ私戻るね。お客さん、ぜひ食堂もご利用して下さいね」

そう言って女の子は食堂の方へと戻っていった。

その場には俺とお婆さんが残された。

「お泊まりでしたね、素泊まりなら銅貨15枚、三食の食事付きなら銅
貨40枚ですが、どうされますか？」

どこか落ち着く声で尋ねられる。

「えつと、じゃあ食事付きでお願いします」

相場は分からないが、多分安い方だろうと思ひ、銅貨40枚をお婆さんに渡す。

「それじゃあお部屋に案内しますね」

お婆さんは二階へと続く階段を登っていく。通された部屋は二階の三部屋並んでいるうちの階段から一番離れた奥の部屋で、中はベッドと机と椅子だけが置かれたシンプルな造りになっていた。

「お食事は朝、昼、晩でお好きなタイミングで来て下さい」

それでは、とペコリと礼をして戻っていった。

「ありがとうございます」

ポツリと部屋に残された俺は、とりあえず今の所持金を確認しようと机の上に皮袋の中身を出してみる。

銅貨 13枚

銀貨 7枚

金貨 5枚

なんか多くね？こんだけあればしばらく遊んで暮らせるぞ？

ゴートの手伝いをしていたとはいえ、こんなにあるのは明らかにおかしい。多分だが、ゴートがいくらか足してくれているのは間違いない。

「あの人は聖人か？」

ゴートに感謝しつつ、無駄遣いしないように慎ましく生きようと決めた。

「飯の前に風呂入るか」

大衆浴場の場所を聞こうと思ひ、荷物を置いて、部屋に鍵をかけて下に降りると、さっきの女の子がいた。

「あ、ご飯ですか？」

「いや、その前に風呂に行こうと思っただけど、どこかな？」

女の子は懇切丁寧に大衆浴場への道を教えてくれた。

「ありがとう。えーとっ…」

「シャロットです」

「ありがとうシャロット。俺はコウイチ。しばらく泊めさせてもらうつもりだから、よろしく頼むよ」

シャロットと別れて風呂に入り、帰ってからご飯を食べてその日は寝ることにした。

明日はいよいよ仕事探しだ。

測定

王都で迎える初めての朝、コルト亭の裏庭で朝の鍛錬を行なつてから、井戸の水を浴び、朝ご飯を食べに食堂へ向かう。

「おはようコウイチ！随分早いね」

「おはようシャロット。そうかな？」

狩りを手伝っていた時は朝日と共に起きていたし、夜はすることもないし疲れて寝ていたので、確かに健康的な生活だとは思うが。確かに食堂には俺以外に人の姿は見当たらない。とりあえずシャロットに朝ご飯をお願いする。

「はい。どうぞ」

少し待つとシャロットは俺の前に焼いたパンとスープを出してくれた。

「それとこれは朝早い人に特別サービス」

と言つてリングを一つくれた。聞くと朝の市場でサービスで多くもらったそうだ。まあこんなに可愛い子ならサービスの一つや二つされるだろうなと思いつつながらスープを啜る。

このスープ美味しいな。野菜とミルクで作っているであろうスープは野菜の旨味が染み出しており、パンとの相性もいい。また今度作る機会があれば作ってみようと考えながら、ご飯を堪能していると、そういうえばシャロットに聞いてみようと思つていたことを思い出した。

「シャロット、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「なあに？」

食堂の客はまだ俺一人なので、シャロットを呼んで仕事を探しに王都に来た旨を説明して紹介所の様な所はないか聞いてみる。

「なるほどね、ちなみになんだけどコウイチのステータスと適正ってどんな感じなの？」

「ステータスと適正？」

初めて聞く話でついキョトンとした顔で聞き返す。

「え!?コウイチ測定してもらってないの?」

聞くところによるとこの世界では全ての人にステータスと適正があるらしく、調べる事によってその人に向いている仕事がある程度分かるらしい。

「でも私、てつきりコウイチは出稼ぎで探索者になり王都に来た人だと思ったよ」

「探索者?」

「またもや知らない単語。」

「探索者も知らないの!?コウイチって本当にどこから来たの?」

こんな会話ガジとも前にしたなあ。俺はとんでもない田舎から出てきて世の中の事もよく知らないと適当に嘘をつけて説明して、探索者とは何か聞いてみる。

「探索者っていえば世界の未知の部分を解明したり、ドラゴンとかグリフォンとかを討伐する、世界を股にかけるすごい人達の事だよ」
詳しく聞くとシャロットの言った説明は探索者の中でも一握りの上位の人の事で、大半の探索者は街の便利屋さんの様な存在で、街の外に薬草採取や魔獣討伐に出て、それで得た報酬で暮らしているらしい。

外に出る危険を冒すぐらいなら手に職をつけて街の中にいた方がいいから、俺には関係ない話だなと聞きながらスプーンの皿にスプーンを入れる。いつのまにかスプーンは空になっていた。俺はデザートのリングに手を伸ばす。

「それにしても、なんで俺が探索者になりに来たと思ったんだ?」

「だってきつき、裏庭で剣振ったりしてたでしょ?」

「見てたの!?!」

「あ、いや?たまたま見かけたっていうかなんていうか…」

シャロットはモジモジしながら恥ずかしそうに答える。

大した実力もない人間の鍛錬を見られて恥ずかしいのは俺の方なんだが。

「出稼ぎに来たってのは間違えてないけど、剣は自衛手段としてちよつとかじった程度だから探索者なんかにはなれないと思うよ」

「そっかー、うちの宿屋からすごい探索者の人が出たら宣伝して人気出るかと思っただのになー」

この子案外強かだな。

「それで、そのステータスと適正はどこで調べられるの?」

「それなら探索者ギルドで調べてもらえるよ」

なるほど、ならとりあえず今日はそのギルドでステータスと適正を調べてもらって、雇ってもらえるところを探しにいくか。

俺はリングを食べ終わるとシャロットに礼を言い。ギルドのある程度の場所を聞いて、そこに向かった。

途中で道を聞きながら、コルト亭から歩いて15分ほど歩いたところにギルドはあり、他の建物より一回り程大きい、しつかりとした造りの建物だった。

早速中に入ってみると、すぐ前に受付らしき所が五箇所あり、その一つずつに人が立っている。受付の奥は日本の役所の様に広い空間が広がっており、職員らしき人たちが書類を運んだり何かを書き込んだりしている。

「どうぞー」

受付のうちの一つに立っていたおっとりしてそうな女性に呼ばれたのでそこに向かう。女性の胸には名札らしきものが付いており、「ロゼル」と書かれている。

「本日はどうされましたか?」

「あの一、ステータスと適正を調べて欲しいんですけど」

「はい、ステータス測定ですね。では発行手数料として銀貨一枚いただきますがよろしいですか?」

そこそこの値段するな。まあ自分に合った仕事に分かるなら安いもんか。俺は皮袋から銀貨一枚を取り出し、ロゼルさんに渡す。

「ありがとうございます!では測定器をお持ちしますので少々お待ちください」

今から俺のステータスとやらが分かるのか、ゲームみたいでちよつと興奮してきたな。とんでもないステータスを持つたら、シャロッツ

トの言う通りに探索者になって世界を股にかけるのも悪くないかもなど妄想を膨らませていると、ロゼルさんが戻ってきた。

測定器といわれて目の前に置かれたそれはただの箱にしか見えな
い。木製の箱は全体的に黒色で塗られており、箱の上部に丸い穴が一
つ開いているだけの、抽選箱にしか見えなかった。

「ではこちらの穴に手を入れてください。紙を掴んだ感覚があれば手
を抜いてもらって大丈夫ですの」

「はあ」

促されて手を穴の中に入れようとした時、

「お客様、紙を掴む感覚があるまでは、絶対に手を抜かないでください
ね。怪我をしたりすることはないの」

えらく慎重な物言いだなと思いつつ改めて箱に手を入れる。

「ピョエッ！」

思わず変な声が漏れた。箱に手を入れた瞬間何かが手をヌメツと
した何かがまとわりついてきた。

「お、お姉さん!?!これなんですか!?!」

「大丈夫ですよー、そのままでもお願いしますねー、途中で抜くともう一
度手数料を頂きますので」

眩しいほどの笑顔で告げるロゼルさん。その間も何かが俺の手に
絡みついてくる。

「そんなこと言っちゃって…これマジでなんなんですか」

「精霊ですよ、有名な話じゃないですか。知らないんですか?それに
しても判定結果が出るの遅いですね、いつもなら一分ぐらいで終わる
んですけど」

そんな事を話されながら三分程、手を精霊とやりに弄られた所で紙
を掴む感覚があったので素早く箱から手を抜く。

「なかなかいい反応でしたよー。私、測定に来た人のあの反応見るの
好きなんですよねー」

このお姉さん見た目に反してめちゃくちゃDSなお姉さんだ！

「それでは、改めてそちらがステータスカードになりますので確認し

て下さい」

測定は気持ち悪かったが、自分のステータスを見れる事に少し期待をしながらカードを覗いてみる。

ステータスと適正と仕事

ロゼルさんに促されるままステータスカードを覗いてみる。

…いいのか悪いのか分からん。

「あのー、俺仕事を探してるんですけど、ステータスによってどんなのがおすすりめとかありますか？」

「そうですね、基本的に成人の方だと数値が40あれば平均といった所ですね。筋力、敏捷が高ければ力仕事に向いてますし、知力、魔力が高ければ事務仕事や魔道具などの取り扱いに長けてるのでこちら系の仕事がおすすりめですね。運は高ければ仕事が上手く行きやすい傾向がありますね。」

よろしければ拝見してみましようか？と言われたのでロゼルさんにステータスカードを渡して見てもらうことにした。

「では失礼しますねー」

ロゼルさんはカードを受け取ると眺め始める。

「ツガヤマ様ですか、珍しいお名前ですね。筋力と俊敏はなかなか高めですね、しっかり鍛えられてるんですねー、でも知力が一際高めですね、魔力と運は……ん？うん!？」

ロゼルさんが顔をしかめて止まってしまふ。

「なに、これ？しかもこのスキル……」

小さい声でなにか呟きながらロゼルさんの顔はどんどん険しくなっていく。

「しよ、少々お待ちくださいてもよろしいですか？」

「え、はい大丈夫ですよ」

しばらく受付の前で待っていると、ロゼルさんとモノクルをかけた鋭い目つきの初老の女性が戻ってきた。

「あんたかい、ツガヤマってのは」

「はい、そうですけど」

これってあれなんじゃないんですか？俺って実はすごい潜在能力を持っててみたいな？これからみんなにちやほやされちゃうみたいなの？やつじゃないの？

「あたしや、ブランってんだ。一応このギルドマスターをやらせてもらってる。単刀直入に聞くよ……あんた何やらかしたんだい？」

「はい？」

「悪事かなんか働いたんだろって聞いているのさ」

ほんとに何言ってるの？この人。

「悪事って言われても、身に覚えがないんですけど、なんでそんな事になるんですか？」

「測定の精霊は滅多な事で測定ミスしないんだよ。それなのにこのステータス……どう考えても異常さね」

そう言ってるブランは俺の前にステータスカードを突き出す。

ステータスカードにはこのように表示されていた。

〈ツガヤマ コウイチ〉

レベル 3

職業 無職

信仰 クレナ教

〈ステータス〉

筋力：53

敏捷：58

持久力：57

知力：65

魔力：なし

運：なし

〈適正〉

武術S

剣術C

〈スキル〉

絶対不可避

料理

「これのどの辺が異常なんですか？」

俺の返事にブランは顔を鼻がつきそうなほど近づけて、声を荒げる。

「すつとぼけるんじゃないよ。まず魔力、普通はどれだけ少ない人でも1はあるはずなのに0ってなんだい0って、あんた魔力器官どうなってんだい」

魔力器官ってなんだ。この世界の人はみんな付いてんのか？

俺が聞いたことのない単語に頭を悩ましていると、ブランは話し続ける。…というかブランが大きい声を出すせいでギルドにいる人の注目が集まりだしてるとんだが。

「一番問題なのは運のステータスだよ。いいかい？運ってのはその人がどれだけ世界に愛されているかという数値でもあるんだよ」

ブランは一息ついて、

「その数値がなしってのはもう意味不明だよ。世界に嫌われてるというより最早、認知されてないとかってレベルの話だよ」

俺はこの世界にとって路傍の石みたいなものって事？

「こんな事はないのさ、だからあんた世界から拒絶される程の事やらかしたんじゃないのかい？」

そんなこと言われたって何もしてないのになあ。まあ強いて言うなら異世界から更生しに来たって事になるかのだけど、そんなこと

言って変なやつに思われるわけにもいかんしな。

俺がしばらくなんと説明しようか思い詰めているとブランが、

「しかし、あんたまだレベルも低いし、悪人がわざわざ測定しに探索者ギルドなんぞに来る理由もないしねえ」

ブランは少し考えるように顎に手を当てて俯くと、

「あんた、しばらくウチで探索者として働きな」

「はい!？」

「聞くとあんた仕事探すためにウチに来たみたいじゃないか、こんなステータスで雇ってくれるところなんか、どこにも無いよ。それを様子見って事で探索者にしてやるってんだからありがたく思いな」

「そんな横暴な!」

ブランは鼻を鳴らして、

「まあ働きたくないなら別に構わないよ。職無し文無しになって野垂れ死ぬのが関の山だろうがねえ」

くそ、人の足元見やがってこのババア。

俺は口から出そうな言葉をぐっと飲み込み答える。

「分かりました。ここで働けばいいんですね」

「そう構えなくなたっていいよ。探索者になった所でブロンズランクからスタートだから、簡単な魔獣の討伐や薬草なんかの採取しか受けないし、しばらく働いてまともな人間って分かれば仕事の斡旋ぐらいしてやろうじゃないか」

言われるだけ言われて探索者としてギルドに登録されてその日は帰された。

結局、王都まで来てもタートス村とやる事が変わらないな。

しかし、落胆するのはまだ早い。しばらく探索者として働いて、ブランに認められれば仕事は斡旋して貰えるみたいだし、さっさと認め

てもらえるように一生懸命働くとしよう。

その日のコルト亭のご飯はいつもより優しい味のような気がした。

ジャック山のシズク草

「ふわぁー」

大きな欠伸をしながらコルト亭の階段を下りる。
最近暑くなってきたな。

探索者として働き始めて2ヶ月程経ち、季節はもう夏に差し掛かるうかというところである。

危ない討伐の依頼は極力避けて、採取の依頼を日々こなし、採取の時に時に遭遇した弱い魔獣などを倒して、その皮や牙を売って稼ぎの足しにしている。

働き始めて分かった事だが、自分のレベルは魔獣を倒す事で経験値が手に入り上がるらしく、今の俺のレベルは5になっていた。

他にも日々の鍛錬でもステータスは上昇するが、レベルアップによつて上がるステータスの方が圧倒的に高いという事など、まだまだ俺はこの世界で知らない事が多すぎる事を痛感させられる毎日をごしている。

「おはようコウイチ」

一階に降りると、シャロットがいつものように挨拶をしてくれるが挨拶の後に手をこまねいて近くに呼ばれた。

近づいてみるとシャロットは顔をしかめて小さい声で俺に囁く。

「コウイチ、またあの人来てるんだけど」

シャロットがチラリと視線を向ける先に目をやると、食堂の隅のテーブルに腰掛けている男と目が合う。

「やあやあコウイチ君、おはよう。いい朝だねえ」

俺に手を振ってくる男を一旦無視して、シャロットに一言謝り、朝ご飯と酒を一杯頼む。

「なんか脅されてたりするんなら私があいつぶつ飛ばしてあげるからね」

「そんなんじゃないから大丈夫だつて」

長髪で無精髭を生やし、着古した服を着た見るからに怪しい男の方を睨みながら袖を捲っているシャロットを制止して、男が座っているテーブルの方へ向かう。

「コウイチ君、今朝も早いねえ、剣の鍛錬かい？真面目なのはいい事だよ。僕も見習わないとねえ」

この調子のいいことを言っている男の名前はサルビア。以前コルト亭の前で行き倒れていた所を助けたのだが、懐かれてしまったようで、たまにコルト亭に来ては俺に酒をせがみにくるようになった。

「サルビアさんさあ、いつも飲んでるけど働いてんのか？」

「心配してくれてるのかい？大丈夫だよ。こうやってコウイチ君がお酒を奢ってくれるしね。僕は酒さえ飲めれば他は何もいらぬのさ」

目の前の酒に取り憑かれた男を見ながら呆れていると、シャロットがご飯と酒を持ってきてくれた。

「ありがとうシャロットちゃん。相変わらずかわいいねえ」

「どうも」

サルビアの軽口をさらりと流し、料理を置くとすぐに踵を返し厨房に戻っていくシャロット。

「サルビアさん胡散臭すぎるんだよ。せめてもうちよつと身なり整えて来てくれよ」

「僕はあるのままで生きていたいんだよ。自由が一番」

そう言いながら置かれた酒に手を伸ばすサルビア。

「ちよつと待った」

俺は素早く酒を自分の手元に寄せる。

「まずは情報を聞いてからだろ？」

「ちえつ、イジワルだなあコウイチ君、心配しなくてもちちゃんと教えるよ」

なぜ俺がサルビアに酒を奢るのか、それはサルビアが俺に儲け話の情報を与えるからである。

行き倒れていたサルビアを助けた時、俺がいつも薬草採取に行っている森のある場所に、ツノの生えた珍しいジブウサギ、ツノジブウサ

ギが出るという情報を教えられ、半信半疑のまま薬草採取のついでに教えられた場所に行くと、見事にツノジブウサギを見つけ、俺はありがたい臨時収入を得る事ができた。

それ以来、サルビアが俺に儲け話の情報を教える代わりに、その情報で得た報酬の一部をサルビアの酒代として支払う約束をしているという訳だ。

「んー、そうだねえ。今持ってる情報でコウイチ君におすすめなのはジャック山にあるシズク草の話かな」

「シズク草？」

ここクエス王国は周辺に大小12個の山々に囲まれている国で、ジャック山は王都から西に半日ほど歩いたところにある緑豊かな比較的標高の低い山で、魔獣も小型のジブウサギなどが大半で、稀に中型のローウルフなどがいる程度だが滅多に会うことはなく、探索者にとってもいわゆる『初心者向け』の山である。

かくいう俺もジャック山には採取クエストで頻繁に行くのでお世話になってはいるが、シズク草という名前は初めて聞く。

「知らないかい？シズク草は薬にすると風邪とかの体調不良全般に効く万能薬になるんだよ。一部では呪いなんかにも効くって噂のね」

話し始めたのでサルビアに酒を渡す。サルビアは幸せそうに酒を一口飲むと話を続ける。

「少し問題があるとすれば、ジャック山に最近とっても強そうな魔獣が出たって噂があることぐらいかなあ」

「だったら俺あんまり行きたくないな、危険はできるだけ冒したくないし」

前にあるご飯をスプーンでつつきながらサルビアの話を聞く。

「大丈夫さ、僕はその人が問題なくこなせる情報しか教えないよ。じゃないと報酬でお酒が飲めないからね」

「確かにサルビアさんの情報は信じてるけど…」

「心配なのは分かるけど、このシズク草はコウイチ君なら取ってこれると僕は思うがね」

サルビアは飲み切った木のグラスをテーブルに叩きつけるように置きながら勢いよく息を吐く。

俺はしばし考え込んだあとサルビアの仕事を受けることにした。人としては怪しいが情報屋としては俺はサルビアを信用している。

「ならシズク草のある場所を教えるところでしょうか…その前にもう一杯もらえるかな？」

門番に探索者カードを見せる。門番が探索者カードとクエストの確認をすると、通つていいぞとだけ無愛想に言われ門をくぐり外に出る。

探索者はクエストを受注していれば通行料を免除される仕組みになっている。ジャック山に行つて今日中に帰るのは厳しいので、今日は山で野宿をし、帰るのは明日になるだろう。

俺は歩きながらサルビアに言われたシズク草の場所を思い出してみる。どうやらシズク草は決まった群生地がない特殊な薬草らしく世界中どこにでも自生する事ができるが数が極端に少なく、見つけることが困難らしい。

ジャック山にあるシズク草は山の中腹にある湖の程近い洞窟にあるらしい。そこまで詳しい場所が分かるならサルビアが自分で取りに行けばいいのと思いつつ、道中金になりそうな薬草や小型の魔獣を狩りつつ、のんびり目的地へと歩を進める。

ジャック山に入る頃には夜がそこまで迫ってきており、辺りが暗くなり始めていた。

「ちよつとのんびり来すぎたな」

今日はここで一泊して、明日の朝にシズク草を取って帰ろうと考えながら火を焚いて道中に狩った魔獣の肉を焼きながら小型のテントの準備をする。

小型のテントは泊まりでクエストに行く事が多いので買ったものだ。値段は銀貨6枚、痛い出費だが必要なので仕方がない。

今回取りに来たシズク草は量にもよるが、サルビアの情報によると

金貨一枚の儲けは堅いらしい。俺は何を買おうかと妄想を膨らませながら、その日は眠りについた。

噂の魔獣の正体

朝、辺りに魔獣がいないか注意を払いながらテントから顔を出す。ジャック山は危険な魔獣も少なく、安全な場所なのは知っているが、サルビアから聞いた魔獣のこともある、慎重になって損なことはない。

「大丈夫かな」

焚き火は消えており、少し肌寒く感じるが、気持ちのいい朝だ。テントを畳み、後片付けをしてから湖へと歩き出す。

一時間ほど山を登ると開けた場所にでた、そこは大きな湖が広がっており、サルビアが言っていた場所だとすぐに分かった。ただ一つ違和感があるとすれば俺の視線の先、湖のほとりに先客が一人いる事だ。

フードを被っていて性別は分からないが、背丈から見るとどうやら子供らしい。いくらこの辺りが安全とはいえ子供が一人で来るには危なすぎる。

俺はふと異世界に来たばかりの頃を思い出した、あの時俺はこの世界の右も左も分からない子供のようなものだった。運よくゴートと出会ったから今俺は生きていけると言っても過言ではない。

ゴートならこんな所に一人でいる子供は放っておかないだろうと、俺は声をかける事にした。

「なあ君、迷子か？」

「びひい!」

突然声をかけられた事に驚いたようで、フードの子は変な声を出して、その拍子にフードが取れた。

肩まで伸びた薄い銀色の髪に丸くて大きな瞳は驚いた事で潤んでおり、透き通るような青をより強調させる。どうやら女の子らしい。しかもよく見ると耳が少し尖っていて長い、ファンタジー世界でよく見るエルフってやつかな？

「お、オバケさん？」

身を縮めて震えながら俺を見上げるエルフの少女。はたから見れば俺が犯罪者に見えそうな状況だが…、身をかがめて話し続ける。

「驚かせてごめんよ、オバケなんかじゃないから安心して。君が一人でいるように見えたから心配で話しかけただけなんだ。誰か大人と一緒にだったりする?」

少女はまだ怯えているようだが、俺の顔を見て小さい声で喋り出した。

「私が人に見えるんですか?」

急に当たり前のことを聞かれて思わず首を傾げる。

「そりゃ人以外にはとても見えないな。それがどうかした?」

変な質問に笑いながら答えると少女は目にいっぱい涙を浮かべて泣き始めた。

「やつど、わだしがびえる人に会えました〜」

少女の瞳からは大粒の涙がボロボロとこぼれる。

「え!?なんて?俺なんかした?だとしたらごめん!」

突然、女の子に泣かれた事でどうしていいか分からず、バッグに入っていた食料なんかを出してみても食べるか?とか聞いてみたり、しばらくあたふたしてその場を行ったり来たりしていると、

「ふふっ」

少女は声を上げて笑い出した、そして涙を拭いた後もくつくつと笑いながら

「どうしてお兄さんの方がそんなに慌てるんですか?」

「どうやら俺の慌てようは笑えるほど酷かったらしい。ちよつと恥ずかしいがひとまず泣き止んでくれたからいいか。」

しばらくしてお互い落ち着いてからは湖で顔を洗い、俺が持っていた食べ物を食べながら自己紹介をする事にした。

「すいません急に泣いたりしてしまって。私の名前はクウです。」

クウ・ネルと言います」

「俺の方こそ驚かせちゃったみたいでごめんな。俺はコウイチ。ツガヤマ コウイチだ」

「いえいえ！私は誰かと久しぶりに話せてとっても嬉しいですよ」
ちよつとずつ俺のあげた干し肉を頬張っている。小動物のようで可愛らしい。

俺も一口、干し肉をかじり質問する。

「それにしても、クウはなんでこんな所に一人でいたんだ？」

「そのことなんです…」

クウは俺の質問に顔色を暗くし、俯いて干し肉を眺めた後、勢いよく俺の方を見上げて、

「お願いします！私を助けていただけませんか？」

クウはまた涙目になっている。

「実は私、呪いをかけられているんです！」

話をよく聞くと、どうやらサルビアの言っていた強そうな魔獣というのはクウのことらしい、クウは一週間程前、エルフの里から出てきたらしいのだが、出てすぐに何者かに呪いをかけられたらしい。しかもクウにかけられた呪いは強力なものらしく、魔力を持っている者には魔獣に見えるとのこと。

そのせいでジャツク山にいる魔獣も恐れてクウを避け、山に来た探索者に助けを求めようとしても初心者向けのジャツク山に来るような探索者にもクウは強そうな魔獣に見えるため、逃げられてしまうので途方に暮れていた所に俺が現れたらしい。

「でもなんで俺はクウが魔獣に見えないんだ？」

「あの、その事なんです、私は魔力感知のスキルを持っているんですけど、コウイチさんからは一切の魔力を感じないんです。全ての生物には魔力器官があるので少なくとも魔力があるはずなのに…」

うーん、身に覚えしかないな。

「それなら多分、俺には魔力器官つてのが無いからだと思うよ」

「魔力器官が無い!?ほんとにオバケさんですか？」

俺のカミングアウトにクウはまた少し怯えた様子を見せた。

「いやいやオバケじゃないって、説明は難しいけど、色々あってさ」
「なるほど、でも魔力が無くて生きている人は初めて見ました。やつ

ぱり里を出て正解でした。世界は不思議でいっぱいです」

クウは小声で何やら呟いているが、どうやら喜んでいらしい。

「そんなことよりクウ。助けて欲しいのは分かったけど、具体的にはどうすればいいんだ？」

「無茶なお願いなのは自分でも分かっているんですが、呪いを解く為の解呪の札が欲しいんです」

解呪の札か、初めて聞くな。

「それってどこで手に入るんだ？」

「王都にある教会で売っていると思うんですが…その…ちよつと高いらしいんです」

クウの声はどんどん小さくなっていく。

「どうした？買ってくるぐらいならお安い御用さ。ところでその解呪の札っていくらなんだ？」

「金貨15枚ぐらいだったと思います…」

なるほど金貨15枚か…

「金貨15枚!?そんな高いのか!?!」

俺の声にびつくりして謝りだすクウ。

「ごめんなさいごめんなさい!やっぱり無理ですよね、最近はお金を払われる植物も見分けられるようになりましたし、コウイチさんに貰った干し肉のおかげで元気が出ましたから」

また今にも泣き出しそうなクウ。どうしたものか、助けてあげたいが俺の手持ちじゃ解呪の札なんて到底買えない。

待てよ。そういえば…

「なあクウ」

「はい、なんですか？」

「俺がここに来たのはシズク草を取りに来たからなんだ」

「はあ」

気の抜けた返事だけ返ってくる。

「知ってる？」

「知っているのは知ってますが、貴重な薬草ってことを文献で見たことがある程度ですね」

「ああ、そのシズク草がどうやらこの近くの洞窟にあるらしいんだ」

「それは凄いことですが、どうかしたんですか？」

「どうやらクウはシズク草の噂は知らないらしい。」

「そのシズク草って呪いも解呪できるって噂なんだけど、試してみる？」

「本当ですか!？」

クウは耳をぴくりと動かして顔が明るくなる。表情豊かで見ていて面白いな。

「そうと決まれば早速取りに行くとしよう！」

お互いその場を立ち上がり、シズク草を求めて洞窟へ向かった。

帰路

クウと二人で岩壁に沿って洞窟を探すと案外あっさり見つけるとができた。

「ここっぽいな」

「結構奥まで続いてそうですけど、入るんですか？」

外の明るさと対照的にどこまで続いているか分からない暗く湿っている洞窟を二人で覗き込む。

「クウはここで待っていていいぞ。俺が中に入って取ってくるよ」

身の回りの装備を確認しながら大きい荷物を置いてクウに待つように言う。

「え?…はい」

クウは一瞬驚いたような顔をした。そんなに驚かなくてもわざわざ危ない洞窟の中にこんな小さな女の子連れて行く訳には行かないからな。

「じゃあ行ってくるよ」

「ちよつと待って下さい」

洞窟に足を踏み入れようとするときに呼び止められた。

「どうした?心配しなくてもすぐ帰ってくるから安心しなよ」

「そうじゃなくてですね」

顔を赤らめながら否定された。大人ぶりたい年頃なのかな、などと思いつつクウの顔を見ていると、クウは暖を取るような形で両手を前に出し、なにやら呟いている。

『筋力強化』

『敏捷強化』

『持久力強化』

『視力強化』

このような事を呟くと、クウの周りがほのかに光りだしたと同時に俺の体が見るみる軽くなり、力が漲ってくる感覚を感じた。

「これで少しは戦いやすくなると思います」

「これって支援魔法ってやつか？」

「はい。私、支援魔法だけは得意なので」

にっこりと笑いながら照れ臭そうに頬を掻く。

「ありがとう。なんかすげー調子いい感じがするよ」

「気をつけて下さいね。危なかつたら逃げて下さいね。私なんかの為にここまでしていただいて、本当にすみません」

また申し訳なきように頭を下げられる。

「気にしなくていいって、じゃあ行ってくるよ」

そう言いながら笑ってみせて、俺は洞窟へと足を踏み入れていった。

洞窟内は暗い……はずなのだが、クウの『視力強化』のおかげか全体的にほんのりと光が差しているような明るさに感じる。

慎重に奥に進んでいると、視界の端の岩陰で何かが動いた。短剣を構えてそこを覗き込むと何かが飛びかかってきた。

普段より軽い体は飛びかかってきたモノに瞬時に反応し、上半身を捻って身を躲しながら短剣を横薙ぎに振るう。何かを切りつけた感覚が短剣を伝って腕に感じる。

切りつけた何かは、べちゃりという音と共に地面の落ちる。振り向きながら正体を確かめようと目を凝らす。

そこにいたのは半透明で全身がゲル状の液体で構成されているスライム だった。

「うわー、話には聞いてたけど本物は初めて見るな」

ギルドで聞いた話によると、こいつは中心にある核を破壊しない限り再生し続けるらしい。強くはないが素早く、攻撃を受けるたびに全身にスライムのゲルが付き汚れるので初心者探索者泣かせの魔獣だそうだ。洗濯代も馬鹿にならないのでスライムのいそうな所には近づかないようにしていたが、今はそんな事を言ってる場合ではない。

すぐさま俺は短剣を構え直して剣先をスライムの核に狙いを定める。足を擦りながらじりじりとスライムに近づき、射程圏内に入った瞬間、鋭く突き刺す。狙い通り、短剣は核を貫き、スライムは形を保

てなくなりドロドロと崩れていく。

「うげえ、噂通りベトベトだな」

腕に付いたスライムの粘液を振り払いながら奥へと進む。

その後すぐに洞窟の終点に突き当たった。周りを見渡すと壁の下に植物が生えているのを見つけた。それは、その辺にあるような花と同じような形をしているが、一つだけ明らかに違う場所がある。それは茎から伸びた花の部分が雫の形をした透明な実をつけている所だ。十中八九これがシズク草で間違い無いだろうが、

「スライム見た後に見たくなかったな」

シズク草を根本から優しく摘み取り、それを持って洞窟の入り口へと急いで戻る。

外に出ると、クウが膝を抱えて小さく座っていた。

「コウイチさん！おかえりなさい。大丈夫でしたか？」

「なんてことないさ、スライムが一匹出ただけだよ」

粘液で汚れた服のそでを振りながら茶化してみせる。

「そんなことより、ほらこれ」

俺は手に持っているシズク草をクウに見せる。

「ほんとに見つかったんですね！すごいですコウイチさん！」

顔を輝かせて喜ぶクウ。こんな匂い喜んでくれるなら頑張った甲斐があるというものだ。

「お礼は呪いが解けてからでいいよ」

シズク草を渡して、使うように勧める。

「では、いただきます」

クウは、ぱくりと一口で雫の部分を口に含む。すると…

「うっ」

クウは突然、苦しそうにその場にしゃがみ込む。

「大丈夫か!？」

うずくまりながら大丈夫だと言わんばかりに頷くクウ。

「苦いです」

少し舌を出しながら顔を歪ませたクウ。

「それって苦いんだ。で、どう？呪いは消えた？」

「あ、はい。確認してみます」

そう言うのとクウは目を閉じて黙り込む。

「完全に消えてはない、みたいですけど…大分弱まっています。これなら他の人達にはちよつと変な感じのする人ぐらいに見えると思います！」

「じゃあそれなら街に出ても大丈夫か？」

「はい！大丈夫だと思います！」

「やったな！」

俺達二人は手を繋いで飛び跳ねながら喜びを分かち合う。

「じゃあ俺が今住んでる王都に行こうぜ。そこで完全に呪いを消す方法を探そう。俺も手伝うからさ」

俺が明るく話しかけると、クウは押し黙ってしまった。

「どうした？さっきのシズク草で具合でも悪くなつたのか？」

「いえ、そうじゃないんですけど…」

なんだか歯切れの悪い返事だ。

「じゃあ、どうしたんだ？」

「自分から頼んでおいてなんですが、どうしてそこまでしてくれるのかなって。見ず知らずの私なんか…」

あー、そういう理由を言っただけ。

「クウ、実は俺も2年ぐらい前に自分の田舎からこの辺に出てきたんだよ」

俺はゴートに助けってもらったことや、生きる術を教えてもらったことをクウに説明した。

「だから俺はその人みたいになりたいから困ってる人がいたら助けてあげようって決めたんだよ。だからクウを助けるのも俺の自己満足みたいなもんさ」

「でも、コウイチさんの自己満足だとしても私はとっても助かりましたし、すごく…嬉しかったです！」

クウは俺の目を真っ直ぐに見据えて感謝の言葉を伝えてくれた。

「そう言ってくれると俺も嬉しいよ。じゃあ王都に行こうか」

「はい！」

こうして俺達は王都への帰路についた。王都に着いたのは、もう日が沈もうかといった時分だった。

——王都探索者ギルドにて

「あ、お疲れ様クウイチ君」

いつものようにロゼルさんはにこやかに笑いながら労いの言葉をかけてくれる。

「お疲れ様です。これお願いします」

俺は袋に入れた薬草と魔獣の素材を受付に出す。

「はい、じゃあ査定させていただきますね。…あれ？」

ロゼルさんは俺の後ろのフードを被ったクウに目を向ける。

「クウイチ君、そちらは？」

「ああ、この子は最近ジャック山で噂になってた魔獣の正体です」

「どうも、クウと申します。ご迷惑をおかけしてすみません」

俺の背中から顔を覗かせ、ペこりとお辞儀する。

「はい!?こんな小さな子がですか?いや、でも確かにこの子から漠然とですが不穏な雰囲気伝わってくる気がしますけど」

ロゼルさんは眉をひそめながらクウをじっと見つめる。

「この子呪いをかけられちゃってみたいで、他の人には魔獣に見えてたらしいんですね。偶然ジャック山にシズク草があったんで、使ったら呪いは大分弱まったらしいんですけど、完全に呪いを解く方法とか分かります?」

「シズク草!?!ちよつと情報量が多すぎてついていけないです」

ロゼルは頭に手を押さええて困惑しているが、すぐに気を取り直し、

「まあ今日はもう遅いですし、明日また来てもらえますか?報酬も明日には用意しておきますので」

「了解です。じゃあまた明日」

ロゼルさんに挨拶をして、俺とクウはギルドの外に出る。

「さて、クウ今日泊まるどころのあてはある?」

クウはかぶりを振って、

「いえ、ここには初めて来たので」

「じゃあ俺が泊まってるコルト亭に来なよ。部屋も空いてたはずだし」

「本当ですか！助かります」

こうして、クウと二人でコルト亭に泊まることになった。

コルト亭に着くとシャロットに俺がクウをどこからか誘拐してきたと勘違いされたりしたが、なんとか誤解を解くことができ、クウは俺の隣の部屋に泊まることになった。

明日はギルドに行つてクウの呪いを解く方法を詳しく聞かなければと考えながら、その日は眠りについた。

パーティー結成？

朝、ドアをノックされる音で目が覚めた。

「起きてますか？コウイチさん」

ドアの向こうから小さな女の子の声が聞こえる。一瞬誰かと思っただけで寝ぼけた頭でクウの事を思い出し、昨日の疲れからか重たい体を起こしながら返事をする。

「ああ、おはようクウ。すぐ出るからちよつと待つて」

手早く着替えを済ませてドアを開ける。

「ごめんごめん、なんか疲れちゃってたみたいで、ぐっすり寝ちゃってたよ」

そういえば、朝の鍛錬に起きれないほど寝たのは初めてかもしれない。

「それ多分私の支援魔法のせいかもです」

クウは支援魔法は身体能力などを向上させて、その人の持つ以上の力を出せるようになる代わりに体にはそれ相応の負担がかかる為、疲労したのだろうと説明してくれた。

「なるほどなあ、まあ流石なんのリスクも無く強くなるなんてズルみたいなもんだもんね」

バフ系のスキルってゲームとかじゃノーリスクでただ強くなるもんだと思ってたけど、現実で考えたらそりやそうなるよなと一人で納得する。

「お疲れでしたら、私一人で行ってきますよ？ギルドへの道も覚えましたし」

「いや、大丈夫だよ。寝たらスッキリしたし、まだクウの呪いが完全に消えてるわけじゃないから心配だし」

「ありがとうございます」

クウの幸の薄そうな感じを見てると保護欲というか、父性というか、そういう感情が湧いてくる。妹とか娘とかがいたらこんな感じなのかなあ。俺には姉貴しかいなかったから分からんが。

「とりあえず下で飯食べてからギルドに行こう」

「はい！」

一階に下りてサルビアがいたらシズク草の説明をどうしようか考えていたが、今は来ていないし良かった。

「あ、ロリコンの誘拐犯が起きてきた」

疑いの目を向けながら話しかけてくるシャロット。

「だから違うって昨日説明したじゃん！」

「クウちゃんいい？もし変なことされそうになったら叫んで助けを求めるとよ？」

シャロットは心配そうにクウを優しく抱きしめる。

「しねーよそんな事！」

俺がロリコンって噂が立つたらどうしてくれるんだ。ただでさえ探索者仲間の奴らからも変な奴だと思われてんのに。

「もういいから、朝ごはん二人分くれ」

やや諦め気味にシャロットに話す。

「はいはい。テキトーなどこ座って待つてー」

俺とクウは手近なテーブルに着き食事を待つ。

「クウ。シャロットの言うことは間に受けるなよ？」

「はい。コウイチさんはそんな事しない人だと分かっていますから」

優しく微笑んでくれるクウ。俺のこと信用し過ぎて逆に心配になるな。俺が神様にクズ認定されて、更生の為に生きているとは口が裂けても言えん。

などと考えているとシャロットが食事を持ってきてくれる。

「はいお待ちどうさま」

「サンキュー」

「ありがとうございます」

二人で食事を始めると空いているテーブルの席にシャロットが座り話し始める。

「ねえねえ、クウちゃんはエルフの里から出てきたんでしょ？お仕事はどうするの？」

また藪から棒に聞くなあ。

「そうですねえ。まずは私にかかっている呪いをなんとかしないですけど…もし解呪できたら、コウイチさんにシズク草の代金も払いたいのので働ければなんでもいいですね」

もぐもぐと食事を口にしながら返事をするクウ。

「おいクウ、だから気にすることないって言っただろ？俺の勝手に助けただけなんだから礼なんていらないよ」

俺がそう言いながらスープを啜ると、隣のシャロットがにやけた顔で、

「まーたかつこつけちやつてコウイチつたら。あんた、そんなこと言って探索者の仕事でほぼその日暮らしのくせに」

「ねえなんでそんなこと言うの？かつこぐらいつけさせてくれよ」

ちよつとかつこいいとこ見せようとしてる男がいるのに台無しだよ。

俺とシャロットが言い合っていると、突然シャロットがクウに向き直って、

「じゃあさ、クウちゃんも探索者になりなよ。コウイチに聞いたけど支援魔法使えるんでしょ？絶対将来有望だよ！クウちゃんかわいし男共に守ってもらいながら安全に働けるって！」

目を輝かせながらクウに詰め寄る。

「またすぐ人を探索者にしようとするな！大体こんな小さい子が探索者なんて危ないだろうが！クウ、相手にしなくていいぞ。シャロットは探索者に変な憧れを抱いている変な人だから…」

そう言いながらクウの方を見ると。

「探索者…確かに…それはそれでありかもですね」

と、顎に手をかけながらぶつぶつと呟いている。

本気にしないでくれよ。

「もうこの話はおしまいーほら、ギルド行くぞ」

立ち上がりながらクウに呼びかける。

「あ、はい。そうですね」

「シャロットもサボってないで働けよ」

シャロットに捨て台詞を吐きながらコルト亭を出る。後ろから何

やらうるさい声が聞こえるが気にしないでおう。

ギルドに着くとロゼルさんの受付が空いていたのですぐに話げきた。

「お二人ともおはようございます。昨日は取り乱してしまつてすいません」

いつものように優しく微笑みながら挨拶をするロゼルさん。

「おはようございます」

「クウさんの話の真偽は確認できました。そのことでギルドマスターからもお話があるそうなので、こちらへどうぞ」

そう言つて受付の奥の職員スペースに招かれる。

案内されるままロゼルさんについて行くと一つの部屋の前で止められる。

「それではギルドマスターの部屋に入りますが、コウイチさん」

突然俺の方を向き直るロゼルさん。

「はい？」

「くれぐれも失礼のないようにしてくださいね？」

顔は優しい笑顔を浮かべているが、明らかに圧を感じる言い方をされる。

「はあ、まああつちが失礼じゃなければこつちから失礼なことはしませんよ」

「それがダメなんですよー！」

「コウイチさん、ギルドマスターさんと仲が悪いんですか？」

クウが心配そうに聞いてくる。

「そうなんだよ。こここのギルドマスター、やな婆さんでさあ」

俺はどうもギルドマスターのブランと相性が悪いらしい。ほぼ無理矢理探索者として働かされているし、文句しかないから仕方がないことだが。

「はあ、もう知りませんか？」

ロゼルはもう観念したのかドアをノックして開ける。

ギルドマスターの部屋は壁に本棚が並べられており、入り口から奥にある窓の前の机には、書類が山のようにつまれており、そこに座り片眼鏡の奥から覗く鋭い目で俺を睨むブランがそこにはいた。

「やな婆さんで悪かったね」

聞かれてるじゃん。壁薄すぎるんじゃないの？そんな俺の隣ではクウが小動物のように小さくなっていた。

「まあいいさね、そこ座んな」

ブランは自分の机の前にある長机とソファを指差す。

「で？わざわざ部屋まで呼び出してなんですか？」

俺はソファに腰かけながら質問する。隣にはクウが何も言わずに座った。

「その子がジャック山で最近問題になってた魔獣の正体だってことは調べて確認済みさ。ほんととは大々的にクエストにして討伐隊を組もうかとしてたんだが、あんたが解決してくれたおかげでその必要がなくなつたから感謝してやろうって訳さ」

「どう考えても感謝する側の態度じゃねーじゃん」

俺のツツコミに焦つたようで俺を睨むロゼルさん。

「かっかっか、言葉だけの感謝なんてあんたもいらないだろう？だから特別報酬をくれてやるって言ってるんだよ」

高笑いをしながら話すブラン。

それにしても特別報酬って言った？なんていい響きの言葉だろう。

「マジで？サンキュー婆ちゃん」

「誰が婆ちゃんだい！あたしやまだ若いわ！」

そう言いながらブランは机の引き出しから何かを取り出す。

「こいつが特別報酬さね」

何かをロゼルさんに渡して俺の所に持って来させる。渡されたものは何やら呪文のような文字が書かれた紙だった。

「なにこれ？」

俺がぼかんとして渡された紙を見ていると横にいるクウが、

「あっ」

と声を出す。

「うちのギルドはそんなに裕福じゃないから現物で支給させてもらうことにしたよ。そいつが解呪の札さ、その子に使ってやんな」

「おお！マジか!?これが解呪の札なのか。どうやって使うんだ?」

「その子に紙を付けるだけで発動するよ」

言われるままクウに解呪の札を触れさせてみる。解呪の札はクウに触れた途端、光を放ち消え去ってしまった。

「どうだ?クウ、呪いは消えたか?」

クウはまた目をつぶって少し待つと、

「はい！完全に消えています!」

「おー！良かったなクウ。それにしても婆ちゃん、これって教会で買ったら結構な値段するんじゃないの?」

俺とクウが呪いが消えたことに喜んでいるとブランがにつこりと笑って、

「よく知ってるじゃないか。そうだよ解呪の札は高価なものだよ」

この婆さんが笑ってる所初めて見たかも。

なんか嫌な予感がする。

「今回の特別報酬じゃ全然足りないくらいにね」

「はい?足りないってなに?」

俺はしらばっくれようと思いつくと、ブランは気味の悪い笑顔を崩さず続ける。

「だから足りない分は働いて返してもらおうことにしたのさ。あんたら二人にね」

そう言っただけ俺とクウの二人を指差すブラン。

「はあ!？」

「はい!？」

俺とクウはほぼ同時に驚きの声を上げた。そんな俺たちを無視してブランは話し続ける。

「聞くとも小さい方のあんた。クウって言ったっけかい？あんた支援魔法が使えるらしいじゃないか。ちようどいいからコウイチとパーティー組んで探索者やりな」

「おいババア！何言い出すかと思えばめちやくちや横暴じゃねーか」「ギルドマスターが横暴して何が悪いんだい!？」

このババア開き直りやがった…。その頃ロゼルさんかというと、もう色々諦めたのか部屋の隅で自分はいないもののように息を潜めている。

「大体その子のおかげで新人の探索者たちがしばらくジャック山に行けなくて商売あがったりだったんだよ？本来なら騎士団にでも突き出してもやってもいい所を肉体労働で許してやるって言ってんだから感謝しな！」

このままでは俺が探索者にされた時の二の舞だ。クウに探索者なんて危ない仕事をさせるわけには…

「だったら俺が働いて足りない分を払えばいいだろうが！わざわざこんな小さい子を探索者なんかにさせなくてもいいだろ！」

俺の抗議にブランは鼻を鳴らしながら、

「あんたその子の保護者でもなんでもないんだから黙ってな。クウ、あんたはどうなんだい？」

クウの方に目を向けるブラン。

クウは自分に注目が集まったので少し動転したようだが、深呼吸をすると、

「私…探索者やります！いえ、やらせてください！」

「よし、決まりだね！じゃあロゼルに着いて行って測定してもらってきな。特別に測定の代金はまけてやるよ」

ブランはそれだけ言って手を一回叩くと、俺とクウを部屋の外に追い出した。

こうして半ば強制的にクウは探索者にされ、俺とパーティーを組む

こととなった。

初仕事へむけて

「ほんとに良かったのか?」

ギルドの受付に戻りながら俺は心配でクウに念を押す。

「私は大丈夫です。お役に立てるよう努力しますから」

両腕でガッツポーズをしてやる気を見せるクウ。

「ほんとに申し訳ないとは思ってるんですが、ブランさんには誰も逆らえないので…」

俺達の横でロゼルさんが謝りながら歩く。

「たしかに…あの人には逆らえなさそうですね」

クウは真剣な顔で頷く。

「なんで二人ともそんなに怯えてるんだ?ただの婆さんじゃん」

何気なく呟くと二人とも目を見開いて俺を見る。

「な、なに?」

「あれを見て平気でいられるコウイチさんがおかしいんですよ!」

ロゼルさんはまるで恐ろしいものでも見たように大声を出す。

その時、隣でクウが考え込むように呟く。

「もしかして…コウイチさんには魔力器官がないから感じられないんじゃないですか?」

それを聞いてロゼルさんも頷き、

「確かに、魔力を感じられなければなら納得がいくかもですね」

魔力を感じられたらブランってどんな風に見えるんだろ。

気になって聞いてみると、魔力器官は人間なら全身に張り巡らされていて、一般人でもとても強い魔力なら感じる事ができるらしい、そこにブランは凄まじい量の魔力を発していたらしく、魔力器官を持つている者ならその魔力だけでとんでもない圧力を感じるということらしい。

しかも、俺は魔力がないので魔力感知というスキルを持っている人には感知されず、そこにいるのにいないような奇妙な存在に感じららしい。クウは魔力感知のスキルを持っているらしく、そのため俺と初

めて会った時ひどく驚いたらしい。

「じゃあ、あの婆さんってすごい人ってこと？」

「すごいなんてもんじゃないですよ、ブランさんはかつて高名な魔法使いだったんですよ」

ロゼルはなぜか誇らしそうに話している。

「さ、そんなことより気を取り直してクウさんの測定を済ませて探索者登録をしましょー」

ロゼルさんはブランと会う緊張から解放されたからか、いつも通りのロゼルさんに戻っていた。

「ではクウさん、こちらの測定器に手を入れて下さい。何か紙のようなものを掴む感覚があれば、手を引き抜いて下さいねー」

ロゼルさんはそう言いながら俺の方を見ながら意味ありげに薄笑いを浮かべている。

この人ほんと好きだよなー。

あの測定器には嫌な思い出がある。そして、かくいうロゼルさんは測定される人を見るのが大好きな隠れサディストである。

俺が探索者になってからも何人かが測定を受けるところを見たが、いつもその傍らには恍惚の表情を浮かべたロゼルさんがいて、俺も測定を受ける人たちの苦悶の表情を見ることにハマっていた。そしていつからか、俺とロゼルさんは測定を受ける人を見るのが密かな共通の趣味になっていた。

「いいかあクウ、絶対途中で手を抜いたりしたら駄目だぞ？」

「なんでそんな悪そうな顔してるんですか？」

そんな悪い顔なんてしてないよ？

「まあ測定はしないとだし、とりあえず手え入れてみなって」

俺は優しく測定器に手を入れるように勧める。横には最早何も語らず、ただ笑顔を浮かべているだけのロゼルさん。

「はあ、まあどうせ測定はしないと駄目ですし、じゃあ入れますね」

そつと測定器の穴の中に手を入れるクウ。そして次の瞬間、

「うぴゃあああああああ」

絶叫しながら手を弄られているであろうクウ。

初めて会った時も思ったけどクウって驚いた時面白い声出すよなあ。

「こ、これ…ヒエッ！、な、なんなんですか」

目に涙を浮かべながらも言われたことを守って必死で手を抜きたい衝動を我慢している。

「なんだかこの絵面、俺達悪いことしてるみたいじゃないですか？」

そつと隣のロゼルさんに耳打ちする。

「何言ってるんですかコウイチさん！最高ですよ！ここ最近はおかしい男ばかりでしたが、こんないたいけな少女のリアクションはなかなか見れませんよ！」

目を輝かせながら涎でも垂れてきそうなほど興奮しているロゼルさん。

この人マジもんだな。

と思いつつ俺もちよつと楽しんでるけど。

一分程、測定器とクウの格闘を見物したところでクウが勢いよく手を引き抜いた。

「はあ、はあ…なんだったんですかアレ!？」

身震いしながら肩で息をして、測定器から距離を取るクウ。

「なんなんだろうな」

「なんなんでしょうね」

「二人してとぼけないでください！」

俺とロゼルさんは謝ってから、測定器の説明をする。

「二人ともイジワルしたんですね？もう嫌いです」

「ごめんってクウ。ちよつとした遊びだよ。探索者になるやつはみんな通る道だよ」

ふてくされた顔で怒ったクウもまた可愛らしいが、今はこれ以上からかうのは良くないかな。

「そんなことより、ステータスはどんな感じだ？」

「なんかはぐらかされてる気がしますけど…そうですね見てみましょう」

クウはステータスカードを少し眺めてから小首を傾げて、ロゼルさ

んに、

「基準が分からないので教えていただけますか？」

「そうでしたね、すいません。では説明させていただきますね」

ロゼルさんによるステータスの説明がされる。

まず、基本ステータスの筋力、敏捷、持久力、知力、魔力、運は、レベル1の一般の成人なら平均50程度、

1000〜5000ならレベルを上げた探索者なら届くと言ったところ、

501〜999は探索者の中でも才能がある部類に入り、ここが人間の限界値と言われているらしいが、稀に1000を超えるような人も存在するらしい。

次に適正だが、ランクはS〜Dまで存在し、

Dが触ったことがある程度でほぼ才能なし。

Cが少し心得がある。

Bが修練を積みめばある程度はできるようになる。

Aは才能があり、基本から応用までを短期間で習得できる。

Sは天賦の才の持ち主で、スキルの習得、威力などに大きく補正がかかる。

最後にスキル、スキルには誰でも修練や条件を満たせば習得できる汎用スキルと、世界でその人しか持たない特殊なスキルのユニークスキルの二通りがあり、俺の〈絶対不可避〉は後者に当てはまる、ユニークスキルだからといって強いとは限らないが…

「ざっとこんな所ですかね、以上を踏まえてどうですか？」

「えつと、そうですね、魔力はそこそこ高くて、支援魔法や、ちよつとした魔法なら使えるので役には立てると思います」

なんだか、ふんわりした言い方だな。

「よかつたら見てもいいか？」

「えつ、は、はい」

クウは少し恥ずかしそうにステータスカードを渡してきた。

「どれどれ？」

何気に他人のステータスを見るのは初めてだなと思いつつカード

をしてみる。

〈クウ・ネル〉

レベル2

職業 無職

〈ステータス〉

筋力：24

敏捷：33

持久力：28

知力：312

魔力：2164

〈適正〉

魔法：S

〈スキル〉

全魔法適正

魔力感知

魔力強化

「なんだこれ!？」

思わず叫んでしまい、周囲にいた人の視線が集まる。

「ロゼルさん、これってめっちゃくちゃすごいんじゃないの?」

周りに聞かれないように顔を近づけて小声で聞く。

ロゼルさんもステータスを見て目を大きくして、小声で叫ぶ。

「すごいなんてもんじゃないですよ!このステータスとスキルなら、あつという間にゴールドランク:それどころかプラチナランクにまでなれるほど優秀なステータスですよ!」

「クウ、お前すごい子だったんだな」

俺は感心しながらステータスカードを返し、無意識でクウの頭をなでる。

「私なんて大したことないですから、恥ずかしいのでやめて下さい」

どんだん声を小さくしながらフードで顔を隠して否定するクウ。

すごい上に謙虚だなんて、よくできた子だなあ。

「将来有望な方が探索者になってくれるなんて、ギルドとしては嬉しい限りですよ。では私はクウさんを探索者登録してきますね〜」

それからはクウの探索者登録を済ませ、解呪の札の代金、金貨10枚の請求書を渡されて、一旦コルト亭に帰ることにした。

「どうしたもんかなあ。解呪ができたのはいいけど、金貨10枚は中々厳しい問題だな」

コルト亭への帰り道、これからどうやって金を稼ぐか悩んでいた。

「私も頑張って働きます！巻き込んでしまったには本当に申し訳ないですけど…」

気合を入れているクウとは反対に俺は不安だった。確かにクウのステータスは素晴らしいが、クウを守りながら魔獣と戦える程、俺は強いわけではない。したがって、今まで通り討伐クエストなど受けれるわけもなく、採取クエストを受けることになるだろうが…それではその日暮らしがやっつとで借金返済など不可能だ。

どこかに俺とクウの二人でもこなせられて、大金を手に入れられる都合のいいクエストがあつたりしないだろうか。

「ちよūdōいい依頼があるよ」

コルト亭の食堂で酒とつまみを楽しみながら、そんな都合のいい依頼の話をしだすサルビアが、そこにはいた。

依頼内容

時間は少し遡り、俺とクウがコルト亭に帰ってきた時。

「やあやあ、コウイチ君。おかえり」

食堂には髪が長いせいで目元が隠れている怪しい男、サルビアが座っていた。

「あー、サルビアさん。元気してた？」

俺はサルビアの情報でジャック山にシズク草を取りに行つて。報酬を山分けする約束をしていたわけだが、肝心のシズク草はクウに使ってしまったため、報酬は入ってきていない。

どう説明したものか。とりあえずしばらくタダで酒を奢らなければならぬのは確定だろうな。

「僕はいつも通りさ。ところでどうだった？シズク草は」

「えーつと、そのことなんだけど、ちよつと色々あつてさ」

報酬がないことを報告しようと思ひ席につき、シャロットにサルビアに酒を持ってくるよう頼む。

「おや？その子はどうしたんだい？コウイチ君」

俺の後ろに隠れているクウの方を見て聞いてきたサルビア。

「ああ、この子がジャック山にいるって言つてた例の魔獣でさ」

俺はクウに視線をやり、挨拶するよう促す。

「どうも、クウと申します」

小さくお辞儀をして、人見知りなのか俺の服を掴んでいるクウ。

「あー、なるほどなるほど」

何かに納得したように頷くサルビア。

「つまりシズク草はその子に使つちやつたわけだね？」

「なんで分かんのか？ちよつと怖いんだけど」

「やだなあ、ちよつと予想しただけさ。ようはその子が困つてたら助けてあげたんだろう？良いことじゃないか。そして探索者ギルドのマスターに上手いこと丸め込まれて金に困つてるって所だろう？」

どこから情報を手に入れてるんだこの人は。

「まあ知ってるなら話がい早いや、稼ぎのいい仕事とかないな、もちろんシズク草の分の報酬は俺が払うからさ」

サルビアは届いた酒を一気に飲み干して、

「あるよ、そんな都合のいい仕事。しかも君達二人でやるのにぴったりの仕事だね」

「ほんと!? 助かるよサルビアさん。お酒おかわりお願い!」

金が手に入る目処さえ立てばクウは探索者をやらなくてすむし、ちよよいい。

「で? どういう内容の仕事なんだ?」

「誘拐犯を捕まえるって依頼だよ」

誘拐犯ときたか、相手が人ならまだ危なくないかな。

俺はサルビアの話聞いてみることにした。

誘拐犯の捕獲依頼は以下の通りだ。

誘拐されたのは貴族の娘でカミラという子で、誘拐犯はこの前サルビアさんが話したクエス王国の裏で暗躍していると噂の秘密結社の一員らしいのだが、相当腕が立つらしい。貴族の家の警備を担当していた衛兵をあとという間に蹴散らしてカミラを攫って行き、身代金を要求。王国騎士団や探索者ギルドに通報すれば即刻娘は殺すのと。

前言撤回。めちやくちやばやばそんな事件じゃん。

「そんな誘拐犯に俺らで太刀打ちできるの?」

「前にも言ったけど、僕はその人ができると思った仕事しか勧めないよ」

二杯目の酒を飲みながらあつけらかなとした態度で話すサルビア。

どうしたものか、危ない事にクウを巻き込むわけには…

「私はやれます。コウイチさんには助けられてばかりですし、早く借金も返して、お役に立ちたいです!」

俺が悩んでいると横のクウは依頼に乗り気らしい。

「ほんとに大丈夫か? 相手は衛兵だって倒したって話だし、危険かもしれないぞ?」

「大丈夫です！危なかったら逃げますし、コウイチさんのことも守って見せます！」

こんな小さな女の子に守るって言われるとなんだか男として情けない気もするが…

俺の慎重過ぎる態度を見かねてか、サルビアが俺に後押しをするように、

「シズク草を取る時も彼女のおかげで魔獣と戦わずに済んだろ？」

「なんのことだ？シズク草を取るときはスライムがいたぞ？」

俺の返事にサルビアは不思議そうに顔を傾げて、

「彼女は呪いのせいで魔獣を寄せ付けないから、一緒にいれば戦闘になることはないだろう？」

俺はクウの方に振り返って、

「……………そうだったの？」

「えっと、あの、…………はい」

クウは気まずそうに目を逸らして答える。

「コウイチさん、とつても張り切ってたので、言いつらくて…」

「俺ってカッコつけようとするって失敗する呪いでもかかってんのかな」

「私は、そんなところも素敵だと思いますよ？」

「クウ、それフォローになってないよ？」

気を遣われて少し泣きそうになった所で、サルビアが咳払いをして話を続ける。

「コウイチ君の失敗談は置いておいて、どうだい？やる気になったかな？彼女の支援魔法があればコウイチ君でも誘拐犯にも対抗できると僕は思うんだが…」

……………ここまでできたらしようがないか。

「分かった。やるよ。でも危険だと思ったらすぐ逃げるし、身の安全を優先するぞ。失敗しても文句言わないでくれよう？」

俺の答えにサルビア満足そうに頷き、

「ああもちろんだとも。いつも通り成功したら分け前をくれる契約でいいとも。さあ契約成立祝いだ！酒を頼もう！」

その後はベロベロに酔っ払ったサルビアと店にいた連中に絡まれたり、場の空気に酔ったのかテンションが上がったクウに絡まれたりで気付けば日が沈もうかという時間になっていた。

コルト亭の裏で酔い潰れたサルビアを介抱しながら、自分は何をしてるんだろうと思いつながら井戸の水を汲む。

「悪いねえコウイチ君。うつぶ、今日は楽しい日だ」
吐きそうになりながらも喋り続けるサルビア。

「分かったからじっとしてなつて。ほら、水飲みな」
桶から水を飲むサルビアを見ながら、俺の隣の部屋に連れて行って寝かしたクウを心配していると。

「はいこれ」
サルビアがポケットから出した紙を渡してきた。

「これは？」
「依頼者の貴族の家の場所と紹介状だよ。明日行くといい」

「分かった。でも上手くいくとは思わないけど…」
俺が紙を受け取りながらぼやくと、サルビアは俺の肩に手を置いて、

「大丈夫だって言ってるだろ？コウイチ君。僕は君にとっても期待してるんだ。君は面白いし、将来きつと……」

急に黙り込むサルビア。
「どうした？」
俺が顔を覗いた瞬間。

「おそろそろそろそろ」
「うぎゃあああ!!」
大リバースで大惨事である。

その日は、潰れたサルビアの為の部屋をコルト亭で借りて、そこにサルビアを放り込んでから眠りについた。

違和感

ここは、クエス王都から少し離れたクイン山の麓にある廃れた館。かつては人が生活したであろう館の中は壁にヒビが入り、窓も割れている箇所の方が目立つ。外壁は野放図に伸びた植物が覆っており、最早かつての栄華は感じられない。

そんな館の中に、長い黒髪を後ろで束ね、暗い室内で妖しく光る琥珀色の目を持つ女性。秘密結社『宵の手』のメンバーであるプリム・ロツシュはいた。

彼女は貴族の娘、キーラ・セルンを誘拐した犯人である。

プリムは気絶したキーラを横目で見ながら椅子に座り肘をつき、ため息をつく。

「まったく、さっさとこんなこと終わらせて帰って酒でも飲みたいわね。しっかし、随分変わったお嬢様だね」

床に寝かされている彼女はお嬢様らしいドレスを着てはいるが、明らかにその服に似合わない剣を腰に差していた。誘拐する時、剣を抜こうとしたので咄嗟に攻撃して気絶させてしまったわけだが。

ま、こんな子に負ける程、やわな鍛え方してないから放置でいいけど。

プリムは割れた窓から夜の空を見ながら、まだ届かない身代金を待つ。彼女の目は、月の光のせいかな、より一層輝きを増したように見える。

遠くで館のドアが開く音が聞こえる。身代金を持ってきたのだから、そうでなければ人質を奪還しにきたか、どちらにせよ痛い目にはあってもらうが…

プリムは椅子から立ち上がり、客を迎える事にした。

窓から目元に差す陽の光と鳥のさえずりで目を覚ます。少し頭が痛い。机に置いておいた水を一杯飲み、出かける用意をして部屋を出る。まったく、昨日は酷い目にあった。

ポケットからサルビアに貰った紙を出しながらクウの部屋をノックする。

「おーいクウ、起きてるかー?」

「は、はひー!今出ますね」

部屋の中から慌てた声が聞こえる。

少し待つと、フードを深くかぶったクウが出てきた。

「お待たせしました」

「どうした?体調でも悪いのか?」

「あ、いえ、あのですね」

もじもじとフードをいじりながら、

「昨日は、大変お見苦しいところを見せてしまい、すみません」

なんだそんなことか。昨日、場の空気に酔ったクウにも絡まれたのだが、それはそれで心を開いてくれたように感じて嬉しかったぐらいである。

「サルビアさんなんかもつと酷かったんだぜ?それに、クウと仲良くなれたみたいで俺は嬉しかったよ」

「は、はい!私もです!」

顔を明るくしてフードを外すクウ。

「そんなことより、サルビアさんに依頼主の住所を教えてくださいましたから、飯食つて行くでしょう」

俺とクウは食堂で朝食を済まし、サルビアさんに貰った紙に書かれている住所に向かうことにした。

コルト亭を出る時ふと思ったのだが、貴族の娘が誘拐されてるのに昨日の晩に宴会まがいのことなんてしててよかったのか?

俺の疑問は娘が誘拐されたはずの貴族、セルン家の前で更に深まることになる。

「誘拐？なんのことだ？」

門の前に立っている門番に「何のことを言ってるのか分からないぞ」と胡乱な目で睨まれる。

「ここは紙に書かれた住所で合ってるよな？何度も確認してみるが、やっぱりここで合っているはずだが…。」

「ここは貴様らのような平民が来ていい所じゃないぞ。帰った帰った」

飛んでいた虫でも払うように手であつちに行けと仕草で語る門番。

貴族様がそんなに偉いつてのかよ。身分制度のことはよく分からないけど同じ人間だろうが。

どうしたものかと業を煮やしていると横からクウが門番に話しかける。

「あの、私達、キーラさんって方が誘拐されたって聞いたんですが、誘拐されていないなら別にいいんです。確認していただけませんか？」

門番の返答はさつきと変わらず、

「だからキーラお嬢様なら誘拐されていないんだって、今朝見たばかりだ。それにあの方を誘拐したところで…」

門番はなにやら含みのある笑みを浮かべて話す。

「そのキーラって子、なんかあんの？」

「私わたしがどうかしたの？」

俺が門番に質問しようとした時、突然どこからか女の子の声が聞こえた。

門番含め三人で周囲をキョロキョロと見回す。

「(ん)(ん)(よ)(ん)(ん)ー！」

上から聞こえた声に顔を上げると、門の向こう側に植えられた木の樹冠の隙間から顔を覗かせている女の子と目が合う。

「よつと」

掛け声と同時に木の上から飛び降りてきた女の子は俺とクウの前にすたりと降り立つ。

「私がキーラ・セルンよ。何か用かしら？」

髪を手でなびかせながらそう話す彼女は、綺麗なブロンドの髪によく似合う高そうなドレスを着ているが、そのどこかしこに木の葉や木の枝が付いていた。

それに、特に気になるのは彼女がドレスにあまりにも似合わない剣を腰に携えている事だ。とりあえず、お嬢様イコールお淑やかという俺の勝手な思い込みは改めることにしよう。

「キーラお嬢様！危ない事はおやめ下さい！」

門番が青い顔をしながらキーラに注意する。

「大丈夫よ、どこも怪我してないから。それよりさっきの話を続きを試してみなさいよ。私を誘拐したところで…の続きを」

「それは、その」

キーラの強い口調に門番はもごもごと口ごもり後ろに下がっている。

「それで？さっき私が誘拐されたって話してたけど、あれどういうことなの？」

俺とクウの方に向き直り質問してくるキーラ。

「あ、いや、そういう情報を聞いたんですけど。本人がここにいるみたいですし、勘違いみたいですね。それじゃあ」

「なんだ騒がしい。人の家の前で何をやっている。」

俺は状況がさっぱり分からないので帰ってサルビアに聞いたのだと思うその場を後にしようとする、門の中から男の声が聞こえた。次から次へと今度は誰だよ。

「これはパゴス様！大変失礼しました！」

門番が頭を下げる先には小太りで髭を蓄え、見るからに高そうな服を着た男が両脇に使用人と思われる女性を二人連れて立っていた。

「あらお父様、おはようございます」

ペーコりと挨拶するキーラ。

「キーラ！またお前は服も髪もそんなに汚してどういふつもりだ！」

「…ごめんなさい」

パゴスが叱ると、肩をすくませて謝る。

「まあいい、で？そいつらはなんだ？」

俺とクウを怪しむように見ながら門番に問う。パゴス。

「はっ…この者どもがキーラお嬢様が誘拐されたと聞いたなどと話しております…」

パゴスはキーラの方をちらと見てから、

「キーラならここにいないか」と言う。

どうしたものか、横ではクウが俺の方を見ながら、「どうしましょう？」と小声で囁く。どうするもなにも誘拐がないんじゃないでしょうか。適当に誤魔化して帰るとするか。

少し気になることもできたし。

俺は一步前に出てパゴスの目を見て話し始める。

「大変失礼しました。私は探索者をやっているツガヤマ コウイチという者です。貴族であられるパゴス様のご息女が誘拐されたという情報を耳にしまして、クエス王国に住む者として、いても立ってもいられず何かお役に立てればと思ひ来たのですが、どうやら私達の勘違いだったようです。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
それではと一礼をしてクウを引き連れて今度こそその場を後にする。

「コウイチさん凄いですね。よく咄嗟にあんなに喋れましたね」

コルト亭に帰りながらクウが誉めてくれた。

「まあ咄嗟の言い訳は俺の唯一の特技みたいなもんだからな。誉められたことじゃないけど」

こんなことで誉められたことに少しむず痒く、頬を掻く。

「しかし、なーんかあのパゴスっておっさん怪しくなかったか？」

「え？どうかしたんですか？」

思いもよらぬ発言だったらしく首を傾げるクウ。

「だってあの人、門番が『誘拐』って単語話した時明らかに反応がおかしかった気がするんだよな」

「そうだったんですか？私、人がいっぱい怖くてそれどころじゃなかったです」

確かに誘拐されたって突拍子もないこと言われたにしても、目の前にキーラがいるのは分かってたことだし、なんか引つかかるんだよな。まあ俺の考えすぎな気もするし、とりあえずサルビアさんに聞いてみることにしよう。

「それにしてもあのメイドさん達すっげー美人だったよな？メイドってみんなあんな人ばっかなのか？」

俺が独り言を呟くと、

「コウイチさんはああいう大人の女性が好きなんですか？」

とクウが俺の方を何故か睨むようにして聞いてくる。

「いやいや、俺の好みかどうかなんて話じゃなくてだな、一般論だよ一般論。クウだって美人だと思っただろ？」

「まあ、確かに美人だと思いますが…私だっていつかは…」

聞こえないほど小さい声でぶつぶつと何か呟いている。

でも実際美人だったしなあ。特にあの黒髪のメイドさん。長くて綺麗な黒髪で目は琥珀っぽい色してて映えてたな。あんな黒髪美人はなかなかお目にかかれんだろうし、眼福眼福。

俺は手を合わせて天に感謝しておく。

そんなことをしているうちにコルト亭に着いた。とにかくまずはサルビアに確認だな。俺はドアを開けて店の中に入っていった。

真相

コルト亭の中に入ると食堂ではサルビアが既に酒盛りを始めているところだった。

「おや、帰ってきたね、お二人さん。おかえり」

長い髪のせいで目元が隠れて表情は分からないが、いつも通りの呑気な調子で話しかけてくる。

「おかえりじゃないよ。キーラって子は誘拐なんてされてなかったぞ？」

呆れながらため息をつき、サルビアのいるテーブルにクウと一緒に座る。

「そうだろうね」

サルビアは分かりきったことのように答え、酒を飲む。その口元は笑っているように見えた。

「そうだろうねって、どういうことだよ？俺達、不審者かなんかで通報されてもおかしくなかったぞ？」

少し怒気を込めながら話し、横に座っているクウに同意を求める。

「ハラハラでした」

さっきの状況を思い出してか胸に手を当てながら、おもちゃの人形みたいに首を縦に振って肯定するクウ。

「まあまあ、ちよつと訳ありだね」

サルビアは俺達をなだめるように両手を上下させる。

「誘拐はされるんだよ。まあそれは今夜なんだけどね」

話しながら飲み干したジョッキを置くサルビア。

「はあ？」

俺はどうゆうことか状況を飲み込めず、ただただ困惑することしかできなかった。横にいるクウも同じらしく、頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるのが見えてきそうである。

サルビアはそれじゃあと言って手を組んで話し始める。情報によ

ると、キーラは今夜に秘密結社『宵の手』によって誘拐されるらしいのだが、問題は誘拐を頼んだ依頼主らしい。

「どうやらその誘拐を依頼したのは、キーラの父親であるパゴス・セルンその人らしいのだ。」

「なんで父親が娘の誘拐を依頼するんだよう？」

「その説明をするにはまず、君達が会ったキーラ嬢や貴族について話さないといけないね」

続けてキーラの事についての説明を聞いた。

セルン家には二人の子供がいるらしく、キーラともう一人の幼い弟がいるらしい。ここで貴族の話になるが、この国では貴族は世襲制らしく、特別な例外を除けば男女問わず第一子が世襲することになっているらしい。

パゴスは次期当主であるキーラを有力な貴族に嫁がせることでセルン家を大きくしようと考えたらしいのだが、いかんせん当のキーラは俺達が見た通りのあのお転婆ぶりでお堅い貴族達に貰い手などおらず、悩みの種になっているらしい。

このままではキーラは結婚せずに当主になり、その代でセルン家が途絶えてしまい、今のパゴスの代にもこれ以上権力を大きくすることができないと…。

そこでパゴスは、キーラを消して弟を次期当主にする算段を立てたのだと、そのための誘拐ということらしい。しかもただの誘拐ではなく、身代金を報酬として相手に渡すことで殺害まで依頼しているというのだ。

こうすれば後に残るのは、身代金を払ったのにもかかわらず、娘を殺害されて身代金まで奪われた可哀想なセルン家の人々…という結末になる。

「それは…なんていうか…」

俺はあまりにも自分の常識から外れたその話にどう答えていいか戸惑っていた。すると、

「酷すぎます！そんなの許せません！」

普段からは想像もつかない勢いで、声を荒げながら机を叩いて立ち上がるクウ。

「血の繋がった家族なのに…殺すなんて。」

その言葉を聞きサルビアはにこりと笑い、

「そうなんだよ。自分の生きたいように生きる無垢な少女が殺されるなんて非道いことだと思わないかい？」

わざとらしい言い方で話すサルビアの髪で隠れた目元の隙間か僅かに見えた彼の目は不思議な光りを発しているように見えた。

「確かに可哀想だとは思うけど、前にも言ったけど俺達が危ないと思ったら逃げるからな」

「コウイチさん！」

クウは諭すように俺に目を向けてくる。

そんな目で見られたって悪いけど俺はリアリストなんぞね。

確かに会ったことある人が殺されると聞いたら助けてあげたい気持ちは湧くが、俺やもしかするとクウが命の危険に晒されるってんならそつちを守るのを優先する。

「それにこの仕事って誰が報酬くれるんだよ。俺は慈善事業なんてごめんだぜ？」

溜息混じりの現実的な質問にクウは「お金の問題なんて」などと横で言っているが、仕事を受けるにしてもお金がもらえないんじや骨折り損もいとこだ。

「報酬なら貰えるよ。この誘拐を阻止したい人を知ってるからね」

サルビアはのらりくらりと返答する。もうすでに酒は五杯目を飲み終えようかといったところ。何杯飲む気だ昼間から。

「誰が？いくらで？」

酔っ払いに詰めるように質問する。

「誰かは言えない。けど報酬は金貨20枚つてとこだね」

金貨20枚もあれば解呪の札の借金を返してもお釣りがくるな。

「どうだい？やる気になったかな？」

酒をまた一口飲んで改めて聞いてくるサルビア。

どうしたものか。話だけ聞いてりやどつかの貴族のお嬢様が自分

勝手な親父の自分勝手な尊厳の維持と権力欲しさに巻き込まれて殺された悲劇つてだけだが、キーラ本人とは会ってしまったてるし…でも俺は死ぬ訳にはいかないし…

「受けますー！」

俺が悩んでいるとクウが前のめりで返事をする。

「ちよちよ、待てつてクウ」

「なんですか？」

そんな怖い顔で見ないでくれ。

「こつちの命だつて危ないかもしれないんだぞ？」

「それがどうしたんですか？」

「それがどうしたんですかって…」

「コウイチさんがやらないなら私一人でもやります！私はコウイチさんに助けてもらいました。私も誰かを助ける力になれるなら喜んでなりますー！」

「やらないとは言っていないけど…」

俺がクウに叱られるように話されている間もサルビアはにやにやしながら俺達を眺めている。少しは助けようとか思ってくれよ。

「んーったく、分かったよ！やる！俺もやるよ！」

「ありがとうございますー！」

さつき怒ってたのは嘘みたいに明るい笑顔を見せるクウ。…でもしかしして上手くのせられた？

「ただし！危なかつたらほんとに逃げるからな！」

「はい。もちろんです！」

クウ。きみのその笑顔を俺はもう素直に信じられないよ。

「よし！決まりだね。じゃあ今夜の真夜中にクイン山の麓にある古びた館に行くといい。誘拐犯の潜伏場所だ」

サルビアは嬉しそうに酒を飲む。もう何杯目か分からない。

それになんて毎回そんな詳しい事まで知ってんだよ。

「コウイチさん！頑張りましょうね！」

やる気に満ちた目で俺を見て意気込むクウ。

「おー」

力無い拳を天に突き上げ返事をする。

もうどうにでもなれってんだ。

そして夜は更け、俺とクウはクイン山に向かった。

『宵の手』

「うわー、映画なら幽霊でも出てきそうな見た目だな…」

俺とクウは今、誘拐犯がいるという館を少し離れた茂みに身を潜めながら様子を伺っている。

「エイガってなんですか?」

クウは少女らしい可愛らしい顔を傾けて、初めて聞く言葉を不思議そうに聞き返してきたが、すぐに我に振り返りを振りながら、

「今はそんなことより。呑気な事言わないでください。今から私達、あそこに行くんですからね!」

「行くのは分かっているけど、作戦ぐらい立てとかなないと駄目だろ? 無策で行って全滅は洒落にならないぞ」

声を殺しながらも、鼻息を荒くして今にも館に突入しそうなクウを抑える。しかし、なんでこんなにやる気なんだろうか。キーラになにか思うところでもあるのか?」

「そうですね、コウイチさんは、なにかいい作戦ありますか?」

クウは冷静さを取り戻して聞いてくる。

「……それを今から考える。とりあえず敵の数だ。クウは探知系のスキル持っていたりするか?」

「魔力感知で館の中の人数ぐらいなら分かると思います」

「よし。じゃあ調べてみてくれ」

クウは少しの間、館をじっと見つめながら、

「館の中には二人、いるみたいですね。二人とも二階にいるみたいですよ」

「多分片方はキーラだろうから、相手は一人みたいだな」

相手が一人なら…なんとかなるか?」

「クウ、お互いにスキルや出来ることの確認しとこう」

俺はステータスカードをクウに見せることにした。

「コウイチさん、武術適正Sってすごいですね!」

「あー、それは…無いものと思ってくれ」

俺の言葉の詰まった返答にクウは顔をしかめる。

「クエス王国に武術を学べる場所がないんだよ」

そう、ここクエス王国は、王国騎士団があるだけのことはあり、剣術がとても発展している国である。俺も自分のステータスに武術Sがある事を見た時、すぐに武術を学ぼうと思いいギルドで聞いてみたのだが…結果は前述の通りである。

「だから、この適正は宝の持ち腐れってわけ」

「でもこの【正拳突き】って武術スキルじゃないですか？」

クウは俺のスキルの欄を指差しながら聞いてくる。

「ああ、それは偶然身についたスキルだな」

実は少し前の朝、鍛錬の時に見様見真似で空手の正拳突きをやっていたら、いつの間にかスキルの欄に追加されていたのだが。

「普通のパンチよりちよつと威力が出る程度のパンチだと思っただれ」

「そうですか…、でもこの【絶対不可避】ってユニークスキ…」

「そつちはおつと話にならないから期待しないでくれ」

クウの言葉を遮るように否定し、そのまま【絶対不可避】について説明することにした。

「それは…なんというか、大変ですね…でもでも、ユニークスキルは持つてるだけで凄いいことですし、きつといつかコウイチさんの役に立ちますよ！」

俺の説明を聞いたクウは、険しい顔をしながらも必死に慰めようとしているのが伝わってくる。まあ普通はそういう反応になるよね。適正といいスキルといい、なんか絶妙に噛み合っていないよね。

「ありがとう、じゃあ次はクウが使える魔法を教えてください」

一瞬、自分の不甲斐なさに泣きたくなったが、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

その後クウの使える魔法を一通り教えてもらい、それを元に作戦を立てて館に入ることにした。

「よし。じゃあ頼む」

館の玄関前でクウの方を向き頷く。

「はい」

両手を俺の方に向けて支援魔法を唱え始めるクウ。

「これで一通りの支援魔法はかけ終わりました。効果は5分程で消えるので注意してくださいね」

今度は互いに頷いて館のドアを開ける。

館の中は異様なほど静かだった。壁や柱には所々ヒビが入っており、全体的に少し埃っぽい。当然明かりは無いが、クウの支援魔法のおかげで少し明るく見える。支援魔法は自分にかけれない為、クウは暗さに怖がってか、俺の服の裾を掴みながら付いてくる。

これが誘拐犯に会いに行くためでなければ、妹とお化け屋敷にでも行ってる楽しいイベントなのだが。

館を探索し始めてから程なくして階段を見つけたことができた。音を立てないようゆっくりと登り、クウにもう一度、魔力感知で誘拐犯の詳しい位置を探してもらおう。

二階は階段を登って右に一本道になっており、左側に窓があり右側に等間隔でドアが付いているが、廊下の突き当たりにもドアがある。

「その突き当たりの部屋みたいです」

クウの指差す廊下の先には、他の部屋より一回り大きい両開きのドアが付いている。

俺とクウは向かい合う形でドアの影に隠れ、少しだけ開けて覗き込む。中は随分広いようで隙間からでは全体は見渡せないが、床に横になってるキーラと思われる人影は見えた。顔は見えないが昼間に見た、ドレスに剣という目印のおかげで一目見てキーラだと分かる。「キーラがいるのは分かったけど誘拐犯がどこにいるか分からないな。そっちからは見えるか？」

クウに聞いてみるが、かぶりを振って返される。

それならともう少し隙間を広げようとドアに手をかけた瞬間――

「ゴソゴソしないで出てきたら?」

声が聞こえた。しかもとても近くから…。そう、まるで俺の目の前の扉を隔てたすぐそこといったところの…

「クウ!逃げ…」

俺が退避を告げようとした瞬間、衝撃音と共にドアごと後ろに吹き飛ばされる。

「コウイチさん!」

「いつてえ…」

攻撃をもらった肩を庇いながら、粉々になりただの木片になった元ドアを払って立ち上がる。さつきまで俺がいた場所を見ると、そこには人影が一つ立っていた。

「あんたが誘拐犯か?」

俺が問いかけると同時に、窓から廊下に月明かりが差し、俺と人影が照らされる。

「あんたは…」

「あら?誰かと思えばあなた達、昼間の…」

そこにいたのは、服装もそのままの昼間パゴスの隣にいた、琥珀色の目が輝いて見える黒髪美人の使用人だった。

「どうやら、身代金を持ってきたわけじゃないみたいね。まあどのみち痛い目にはあってもらうけど…」

俺を見てひどくつまらなそうに呟くと、クウの方に目をやる。

「クウ!」

「遅いよ」

クウは俺の声に反応して、何か唱えようとした瞬間、誘拐犯に素早い当て身で意識を奪われ、床に倒れ込む。

「宣伝の為に自己紹介しておかなくちゃね、私の名前はプリム・ロツシュ。秘密結社『宵の手』のメンバーよ。以後はないかもだけど、よろしくね」

そう言いながら笑う彼女は、いやというほど美人である。

V S プリム

「くそっ！」

素早く腰に差した短刀を抜いて臨戦態勢をとる。

「あなた達、なんであの貴族の娘を助けようとするの？別に関係ないでしょ？」

短刀を向けられてなお、顎に指を置きながらひどくつまらなそうに聞いてくるプリム。

「関係はないけど、こっちにも色々あるんでね。今なら人質さえ返してくれば、あんたのこと見なかったことにするぜ？」

俺の答えにプリムは口角を上げていたずらっぽく笑うと、

「そう言われるとなおさら返したくなくなっちゃうなあ」

プリムは横で気絶しているクウを物のように片手で雑に掴むと、後ろの部屋の中に投げ入れた。

「ちようど身代金が来るまで退屈してたところだし、ちよっとお姉さんの相手してくれると嬉しいな」

蠱惑的な笑顔を向けながら、片足を上げてプリムも臨戦態勢をとる。

まったく、なんでこんなことに…もうどうにでもなれってんだ！

短く息を吐き、プリムに向かって駆け出す。

姿勢は低く、相手に対して体を横にして右手の短刀をプリムに向かって突き上げる。

『鞭蹴《ウィップ》』

プリムの鋭くしなるような蹴りが短刀の側面を蹴り飛ばし、右手ごと弾かれる。

「つゝゝッ」

なんとか短刀は手放さなかったが、衝撃で右手が痺れる。

「思ったより速くてびっくりしちやった」

プリムは余裕の笑顔を崩すことなく構え直す。

「ーはあッ！」

今度は横に振り抜くように短刀を振るおうとすると、

「あら危ない」

プリムは瞬時に半歩下がり、躲そうとする。が、

「ん!？」

驚愕の表情を浮かべて固まる。そのまま俺の短刀はプリムの長い髪の一部を断ち切る。

「何なの？今は」

プリムは困惑の表情を浮かべながら、断ち切られた髪を触る。

「さあ？なんだろうな」

本当は俺のスキル『絶対不可避』のおかげだが、わざわざ相手に教えてやる必要もないだろ。

それにしても、さつき俺が攻撃する前に反応したように見えたけど…気のせいかな？

そんなことより、もうすぐクウにかけてもらった支援魔法が消える。早いとこ決めないと…

「どうやら厄介なスキルか何かを持ってるみたいね」

そう話すプリムの顔からは、さつきまでの笑顔が消え失せた。空気に肌を刺すような緊張感が走る。

その空気に耐えきれず、がむしやらに剣撃を繰り出すも、プリムはそのことごとくを素早い脚技で淡々と弾く。

「ーぐっ」

プリムのつま先がみぞおちに刺さる。

「よっ」と

続け様に短刀を上蹴り上げ、短刀は俺の右手を離れ天井に突き刺さる。

あれはすぐには取れないだろうな。

「そこそこ筋はいいけど。相手が悪かったわね」

確かに強い。それにしてもあまりにも歯が立たなすぎる。支援魔法で強化されてるはずなのに…まるで、

「まるで攻撃を読まれてるみたいでしょ？」

俺が考えていたことをプリムに先を越されて言われ、ドキリとする。

「実は私、未来が見えるんだよねえ」

「未来が、見える？」

プリムは頷きながら自分の目を指差して、

「この目、綺麗でしょ？元々はこんな色じゃなかったのよ？魔眼になったからこんな色になっちゃったの」

「悪いけど、魔眼が何なのか知らん」

拳を構えながら、自慢げに語る魔眼の事をあしらう。

「はあ!?あなた探索者のくせに魔眼も知らないの?しょうがないわね、魔眼がいかによいかわか私に教えて…」

プリムは呆れたような驚いたような声を出しながら、魔眼の説明をしはじめようとする。

そんなこと言われても知らないものは知らないし、

「知らなくても生きていけるんでねー」

悪態をつきながら、右ストレートを打ち込む。

『三日月蹴り《ムーンシュート》』

俺の拳が届く前に、プリムは体を捻り、高速の後ろ回し蹴りが俺の側頭部を叩き、体を壁に打ち付けられる。

「ツ~~~~」

激痛で声にならない音が口から漏れる。

「人が気持ちよく話してるんだからちゃんと聞きなさいよ」

プリムは床に転がる俺の事など気にもとめず、悦に浸った表情で話し続ける。

「この魔眼は見た物の魔力の流れを見ることができると、魔力の流れは力の動き。あなたが右手で殴ろうとすれば、動く前に右手の魔力にゆらぎが生じる。それが分かれば先回りして動けるって訳よ」

「わざわざ、ご丁寧に説明どうも」

さっきの蹴りのせいで目眩を感じながらも、なんとか立ち上がる。

「でもそんなこと、敵に教えていいのかよ?」

俺の指摘にプリムは嘲るあざけように笑いながら、

「知ったところで、あなたにはどうしようもないでしょう?」

「そうでもないかも知れないぜ?」

魔力の流れを見るって事なら…可能性はある。ただ、もう少し時間がある。ほんの少しでもいい、時間が。

「そんなみえみえの強がりには騙されるわけないでしょ? さ、もう終わりにしましょうか。いい暇つぶしにはなったしね」

プリムはそれだけ言うと、足を上げて構える。

「まだだ、もう少し。」

「ビビってるのか?」

「は?」

プリムの上げた足が、少し下がる。

「食いついたか?」

「奥の手があるから出してやるって言ってんのに、さつさと終わらせようとしてるからビビってるのかなって、いや別にいいよ、さつさとやってくれていいぜ?」

「苦しい言い分だが、少しでも時間が稼げればなんでもいい。」

「見苦しいわね。そんなのがあるなら、もつと早く出すべきだったわね」

プリムは冷たく言い放ち、構え直そうとする。が、

今度は足が完全に下がる。その顔からは、もう余裕など感じられないほどの焦りが伺える。

「あんた、それ、どういうことよ?」

支援魔法が切れたせいなの、全身の倦怠感を表に出さないようにしながら、精一杯のしたり顔を見せる。

「未来が見えるんだろ? だったら見てみやがれ!」

魔力器官がないせいで、魔力を持たない人間の、渾身の一撃がプリムを襲う。

『正拳突き』!!

決着

プリム・ロツシユは目の前の光景が信じられなかった。本来、この世の全ての生物には魔力が流れている。彼女は自身の持つ『智覚の魔眼』によって、その機微を感じ取ることで、未来予測を可能にする：はずなのだが。

今、目の前にいる少年からは、さつきまでは確かにあつた一切の魔力を感じることができない。そんなことは、ありえないはずなのに。少年が何かしようとしている。多分、攻撃がくる。時間がゆっくりと過ぎていく感覚に襲われる。防御を、しなければ…

『正拳突き』!!

プリムは両腕を前に構えて防御姿勢をとるが、腕ごと体は吹き飛ばされ、後ろの部屋へと転がっていく。

◇◇◇

支援魔法の副作用で、全身が何倍にも重くなったように感じながらも、追撃を与えるためにプリムに向かって歩を進める。

「いてっ…」

さつきまでのダメージと筋肉痛が相まって、全身が痛い。いくら借金が返せるつつつてもこんな目に合うって知ってたら、ちまちま薬草集めしてる方が数段マシだったな。帰ったらとりあえずサルビアを一発殴ろう。

部屋に入るとプリムはすでに立ち上がっていたが、不意を突かれたせいもあつてか、息を荒くしていた。

「あなた、一体何したの!？」

「何って?」

弱っていることを相手に悟られないよう、余裕の表情を作って話す。少しでも休んで体力を回復しないと、今にも倒れそうだ。

「なんであなたからは魔力が感じられないのかって聞いているのよ!」

捲し立てるように話すプリム。

「なんでって言われても、俺生まれた時から魔力なんて持ってないし」
「……は？」

俺のあっさりとしたカミングアウトに、プリムは口を開けたまま固まっっている。

「ありえないでしょ、そんなこと。魔力は生命力そのものなのよ？あなただけ幽霊かなんかな訳？でもさっきまでは確かに魔力が…」

今度は一人でぶつぶつ呟き出したプリム。

その反応はみんなにされてきたからもういいよ。

「で？どうすんだ？ご自慢の魔眼とやらが意味ない相手と戦う術はあんなのかよ？」

あくまで余力があるように話す、こつちがもうなす術なしだからビビって降参してくれ。頼む。

心の中で祈りながら、プリムへと一歩近づく。すると、

「ふふ、大人しく降参しろですって？こつちは結社のルール破って、覚悟決めてまで来てるのよ」

俯いて肩を震わせ始めるプリム。

なんだか様子がおかしくないか？これって、もしかしなくてもやばい状況なんじゃ。

「おい、ちよつと話を…」

「もういいわ。こうなったら身代金はまた後日にすればいいしね」

俺が気を逸らそうとするも、プリムは顔を上げると、床に寝ているキーラに向かって駆け出した。

やっぱりなんか地雷踏んでるじゃねーか！まずいぞ、このままじゃキーラが殺される。何かあいつを止める方法は…。

プリムとキーラの距離はどんどん近づいていく。走りながら、プリムは腰の辺りから小さなナイフを取り出す。

くそつ、動け体!!

もう二人の距離は3メートルほどしかない。その時、

『バインド』!!

「がぐっ!？」

俺が目の中の光景をただ傍観することしかできない中、横から聞こえた声と同時に地面から光を発する鎖のようなものが、彼女をその場で縛り付けた。

「なんとか、間に合ったみたいで良かったです」

声が聞こえた方を見ると、そこにはふらふらと力無く立つクウの姿があった。

「大丈夫かクウ!？」

「すみませんコウイチさん。肝心な時に…」

クウは申し訳なさそうに、目を伏せながら謝ってくる。

「いや、クウが無事なら良かったよ」

「えへへ、ありがとうございます」

照れながら笑うクウ。なんというかわいさだ。思わず頭でも撫でてあげたくなるような笑顔である。いやでも、女の子の頭撫でるのって犯罪になったりしない？騎士団とかに言われたら捕まったりするんじゃない？

「いちやついてんじゃないわよ！ロリコン！」

クウのあまりの可愛さに、ついどうでもいいことを考えてしまっている、プリムの声で我にかえる。

「だ、誰がロリコンじゃない！」

「あんたに 決まってんでしょ！これ 外しな さいよ！」

プリムは言葉の節々で語気を荒げながら拘束を解こうと体を振って暴れている。

なんかキャラ変わってないかこの人。

「人殺そうとしてたやつ解放する訳ねーだろ。ところでクウ」

「なんですか？」

「あの拘束魔法って破られたりしないよね？」

プリムに聞かれないよう、顔を近づけて小声で聞く。

「すぐにということはないと思いますが、そんなに長くも持たないと

思います」

なら助けをのんびり待ってる時間はなさそうだな。

「じゃあ俺に、もう一回支援魔法かけてくれ」

今度はプリムに聞こえるような声で話す。

「なんでですか？」

「あいつ思いつきりぶん殴って気絶させるから」

「でも支援魔法が切れたらしばらく動けないぐらい疲れちゃうかもしれないよ？」

「すぐ解いてくれれば、歩いて帰れはするだろ」

動けない今なら魔眼で防ぐこともできないだろうし。

「ちよつと待ちなさいよー」

俺の発言に目を開いて驚くプリム。

「待たないけど？」

支援魔法をかけてもらいながら肩を回して準備する。

「こんな美人を殴るなんて男としてどうなのよー」

プリムは必死に俺を止めようともがきながら抗議する。

「俺は相手が誰だろうとやられたらやり返す主義なんでね」

体が軽くなるのを感じ、プリムに向かって駆け出す。

「ちよつと寝てもらおうだけだから安心してくれ」

俺の中で出来る限りの笑顔を見せたつもりがプリムの顔は余計に青くなる。

「分かった！分かったから、もう何もせずに帰るからー！」

「もう遅いわ！くらすえ『筋力増強』《ドーピング》『正拳突き』!!」

「ひいひい!!」

「ー」

振り抜いた拳はプリムに当たる直前で、何者かに止められた。

顔を上げると、そこには身長2メートル以上はありそうな茶色い肌の大男が俺のパンチを片手で止めて立っていた。どっから湧いたこのおっさん!?

「あんた誰？」

パンチを抑えられたままだが、あくまで冷静を装って男に話しかける。

「おっと、挨拶が遅れてしまったな。宣伝もしなければ」

男は拳を抑えていた手を離し、戦う意志がないように手のひらをこちらに向け少しあげて続ける。

「私の名はグレゴリ。秘密結社『宵の手』のメンバーだ」

『宵の手』って秘密結社なんだよな？どいつもこいつも自分からメンバーって宣伝するのなんなんだよ。

「プリムを助けにきたのか？」

質問にグレゴリは首を横に振る。

「いや、助けではなく回収だ」

グレゴリは短く話しながらプリムの方に目をやると、プリムは目を逸らして黙り込む。

「こいつが、ウチのルールの「殺しはやらない」を破って勝手なことをしていると情報が入ったんでな…色々迷惑をかけたみたいで、すまないな少年」

そう言っって頭を下げるグレゴリ。

「謝られても、そいつは俺が騎士団に突き出すから置いてっってくれると助かるんだが」

「悪いがそれはできない。こんな奴でも仲間だからな 黙って見ていてくれればこちらも危害は加えない」

そう話すグレゴリの目からは、一瞬恐ろしい程の寒気を感じた。

無理矢理プリムを取り返すつてのは無理そうだな。支援魔法付きの正拳突きを片手で止めるような奴だし。それに、これ以上危険を犯すことはできない。

「分かった」

俺の了承にグレゴリはにこりと微笑み、

「賢い選択だ。君、名前は？」

「…ツガヤマ コウイチ」

「ツガヤマ コウイチか、いい名だ。君とはまた会えそうだ」

「俺は会いたくないかな」

「ははは、嫌われてしまったかな？」

そう言っつてグレゴリはプリムの首根っこを掴みひよいと持ち上げると、拘束魔法をいとも簡単に引きちぎって彼女を脇に抱える。

「ではまたなコウイチ」

『転移 《テレポート》』

そう唱えた次の瞬間、グレゴリとプリムの姿は忽然と消え、その場には夜の静けさだけが残っていた。

「……ふはー！死ぬかと思った！」

大きく息を吐き出しながらその場に座り込む。

「大丈夫だったか、クウ？」

「心臓が止まるかと思いました」

クウも地面にぺたんとして座り込みながら胸を撫で下ろしていた。

「全くだよ。さっさとそこのお嬢様連れて帰るとするか」

クウに支援魔法を解いてもらい、さっきよりも重くなった体を無理矢理動かしてキーラに近づく。

「おーい。大丈夫か？」

呼びかけながらキーラの体を揺すってみると、

「んう……」

キーラはゆっくりと目を開ける。

「お、起きたか？もう大丈夫だから安心……」

「いやあああ！」

あまりに咄嗟の出来事で、反応が遅れたのはあつたかもしれない。だが、致命的なのは、あろうことか避けようとしてしまったことだろう。

キーラが怯えた顔で瞬時に剣を抜き、振り抜かれた剣筋を俺は動けない体で見ているしかできなかつた。

「いつてー！？」

キーラの剣は、見事に俺の胸を切り裂き、辺りに血が飛び散る。胸を触ると、手にはべったりと赤黒い血が付いていた。

「これ、全部俺の血か？」

視界がぼやけていく。遠くでクウの声が聞こえる中、俺の意識は途切れた。

新しい仲間

気がつくとき、知らない部屋のベッドの上で目を覚ました。ぼんやりとした視界がだんだん明瞭になっていく。

「いでい」

体を起こそうとすると、全身が少し痛む。体に目をやると上半身は包帯が巻かれていた。その時に、誘拐犯を撃退した後、自分が誘拐された貴族の娘キーラに誤解されて斬られたことを思い出す。

「酷い目にあつたもんだな…で、ここどこだ？」

部屋を見渡してみる。自分の住んでるコルト亭に比べると随分といい部屋だ。絨毯も敷かれてるし、そこそこの広さもある。ベッドの横にはテーブルと椅子が置かれており、誰かが座っていたのか少しずれている。窓の外を見るに今は昼ぐらいか。

「おや、気付かれましたかな？丸二日寝込んでおられたので心配しましたよ」

動けない体でどうしたものかと思っていたら、扉が開けられ声をかけられる。

声の主の方を見ると、そこには白髪頭に白い髭でスーツを着たやけに姿勢のいい老人が立っていた。

「えーっと、誰ですか？」

「私、セルン家の執事を務めております ジークと申します。ここは私の家でございますので、どうかご安心ください」

そう言って綺麗なお辞儀をするジーク。

「なんで俺、そのジークさんの家にいるんですか？」

気を失ってから何があったのか、さっぱり分からないので聞いてみると、ジークは「説明させていただきます」と言いながら俺にコップに入った水を俺に渡しながら話します。

「私はパゴス様にあの館へ身代金を持っていくよう仰せ付かったのですが行ってみるとびっくり、誘拐されたはずのお嬢様が剣を持ったまま固まっており、横には血溜まりに倒れたコウイチ様を抱えたクウ様

がいらつしやいました」

それはまた随分と、カオスな状況だなあと聞いた話を脳内で映像化して苦笑する。

「クウ様が回復魔法を持っていたおかげで一命は取り留めていたが、危険な状態に変わりはないので私の家に一旦運んだ次第です。その後クウ様からパゴス様が誘拐の首謀者だという話を聞きまして、皆様を私の家に匿わせていただきました」

ということらしいのだが、

「よく信じてくれましたね」

ジークは鼻から息を吹いて首を振るとベッドの横の椅子に座りこむ。

「以前からパゴス様はキーラ様のことと頭を悩ましていましたし、それに最近は怪しい者と話しているところも見たことがあったので…」なるほどね。パゴスの用心の甘さは置いといて、これからどうしようかと考えているとドアがノックされる。

「失礼します」

可愛らしい声と共にドアが開いて、クウが顔を覗かせた。

「やっほー」

おどけながら腕を振って挨拶してみる。

「コウイチさん！」

そう言いながら駆け寄って抱きつかれた。わお、積極的。

「起きたんですね！良かった、ほんとに良かったです！」

そう話すクウは今にも泣き出しそうに目を潤ませている。

思ったより反応が激しくて動揺してしまう。俺ってそんなにやばい状態だったの？

「あら、起きたみたいね」

また違う声がドアの方から聞こえたと思うと、キーラが立っていた。

「あ、殺人未遂お嬢様だ」

「わざとじゃないわよ！あの時は動揺してたの！」

顔を真っ赤にして反論してくるキーラ。冗談の通じないお嬢様だ

な。

「その件は、本当に申し訳ないと思ってるわよ…」

これからは間違っても人は斬らないで欲しいところだ。

「まあ無事で良かったよ。それじゃあ誘拐犯は止めたし、帰るとするか」

ジークに泊めてもらったことに感謝を伝えてベッドから起きあがろうとすると、

「それなんです…」

クウが言い出しづらそうに話し始めた。

「キーラさんがセルン家に行ってパゴスさんと話がしたいそうなんです」

「はい？」

親とはいえ、自分の暗殺を依頼した人に会いに行くのは危なすぎないか?と考えるつつキーラの方を見てみる。

「お父様とは今回のことでちゃんと話がしたいの」

あくまで気丈な態度でそう話すキーラ。その話に付け足すようにクウが、

「その場に私達もついていくことになったんです」

「はい??」

なんでそんなことになってるのかますます分からんぞ。

「だってキーラちゃんを一人で行かせるのは危ないですし」

キーラちゃん?

「私は一人で行くって言ったけど、クウが心配だから付いていくって言うてくれたのよ」

そう言いながら目を合わせる二人。

いつのまにそんなに仲良くなったんだ…俺が寝てる間に女子会でもしたのか?

「私からも、どうかお願い致します」

そう言いながらジークも立ち上がって頭を下げられる。

「あー、まあ付いていくぐらいなら、行きますけど…」

「じゃあ今から行くわよ」

「今から!？」

キーラは高圧的な態度で俺に命令してくる。こいつ、自分が斬ったせいで俺がこうなったって分かってんのか？

「ったく、分かったよ」

◇

それからは着替えを済ませ、あれよあれよという間にセルン家の前に到着した。

「キーラお嬢様!?!誘拐されたと聞きましたが…」

「誘拐されたけど帰ってきたのよ。早く門を開きなさい」

驚く門番など意に介さず門をくぐり、敷地の中へどんどん進んでいくキーラについて行く俺とクウ。

屋敷に入っても驚いている使用人達にパゴスの居場所を聞いたかと思うと早足でパゴスのいる書斎へと向かう。

「お父様！」

「キ、キーラ?！」

勢いよく扉を開け放ち、大声で話すキーラを見てひどく動揺している様子のパゴス。

「お、おお、よく無事で帰ってきてくれたね。大丈夫だったか?後ろの者はなんだね?」

「白々しい態度はやめて下さい。お父様が私を殺そうとしたのは知ってるんですよ?」

「何を言ってるんだ、私がそんな事するわけがないだろう?」

そう話すパゴスの額には脂汗が滲んでいる。

「詳しく話していただけるんですよ?さもなくて…」

腰の剣に手を伸ばし、相手が話すのを促すキーラ。このお嬢様は怒らせん方がいいな。

「ぐ、お前は昔からそうやって私に迷惑しかかけんな。黙って殺されていけばよかったものを…」

観念したのか、こちらを睨みながら話し始めるパゴス。

「お前のような外を走り回って剣ばかり振るっている者がこれからセルン家をどうやって存続させていくつもりなのだ!」

「それならアルに継がせればいいと言ってきたではありませんか！」
アルとは多分彼女の弟のことだろう。

「それができれば苦労はしなかった！お前が死んでしまわん限りはな！だから結婚して婿養子でも迎えれば良かったのに、それもしないようなお前はいらないのだ！」

「そんな理由で私を殺そうと？」

「貴族は次の世代、次の世代へと脈々と受け継いでいくものだ、それを放棄するような者は私の子供ではない！」

随分な言い草に俺も少し苛立つてきた時、キーラが居住まいを正しパゴスに向き合い、

「でしたら、私がこの家を出ていきます。正式には私は行方不明にでもなったことにしてくれて構いません。これからはキーラ・セルンではなく、ただのキーラとして生きていきますので」

後ろから見えづらいが、彼女の頬からきらりと光るものが床に落ちるのが見えた。

「ああ、そうしてくれるとこちらもありがたいよ」

気がつくくと、俺はパゴスを思い切りぶん殴っていた。

「あんた自分の娘をなんだと思ってるんだクソ野郎！」

「貴様！誰に手を出していると思ってる!?!」

殴られた頬を抑えながら怒声を上げるパゴス。

「知るかボケ！貴族なんてクソ食らえってるんだよ！」

「よし、二人とも逃げるぞ！」

踵を返してキーラとクウを連れて帰ろうとすると後ろから「どうなつても知らんからな！」とか何やら負け惜しみが聞こえてくるがもう知ったことではない。

セルン家を後にしながら一旦コルト亭に向かうことにした。外はすっかり赤くなり、日が沈もうとしていた。

「すまんキーラ。親父さん殴っちまって」

「私もスッキリしたわ。コウイチが殴ってなかったら私が殴ってたし」

そう話す彼女の目は夕日のせいなのか少し赤く見える。

「これからどうするんだ？」

「そうね、これからは心置きなく剣を振るえるし、探索者か騎士団にでも入ろうかしら」

「それなら是非私とコウイチさんのパーティーに入って下さいよ！」

パーティー加入を持ちかけるクウ。あれ？俺の意見とかは…

「それいいわね！じゃ、これからよろしくねコウイチ。私のことはキーラって呼んでいいわよ」

手を差し出して笑うキーラ。

なんか勝手にパーティーに入ることになってるけど、もうこの際一人も二人も変わらないか。

「ああ、よろしく頼むよ」

こうして俺とクウのパーティーに新しい仲間が加わったのだった。

お買い物

「ふう…」

朝の鍛錬を終えて部屋で一息つくこの時間は落ち着く。王都に来てから大変な目に遭ってばかりで心休まらない日々が続いていたが、汗をかいた体を水で流して部屋に戻り、水を飲みながら朝日を感じるこの時間だけは心が休まる。

我ながらジジくさいなと思いながら、コップを口に運び水を飲むとすると…

「コウイチ大変よ！起きなさい！」

俺の癒しの時間の終焉を告げる声が聞こえてきた。思わずため息をついてしまいなながら、コップを机に置く。

「ちよつと聞いているの？起きなさいって！」

「起きてるよ！今開けるから、ちよつと待て！」

ドアを叩きながら、がなる声を制止して椅子から立ち上がる。

「なんだよ朝っぱらから、今日は依頼受け^{クエスト}ないから休みって昨日言っただろ？」

「休みなのは知ってるわよ。今から市場に行くから着いてきてよ」

今、目の前で突拍子もないことを言ってる金髪の女の子はキーラ。先日、誘拐されたところを助けた後、なんやかんやあって新たなパーティーメンバーとして加わった。

その誘拐事件からもう1週間経つ、この1週間も随分と慌ただしい日々が続いた。

誘拐首謀者のパゴスはキーラからの頼みで騎士団に突き出すようなことはしなかったが、キーラは公的に行方不明ということになっており、そのせいでギルドで探索者登録する時にも一悶着あったのだが、ギルド長^{プラン}がどうやってか、うやむやにしてくれたらしく登録できた。そのせいで手数料とか言って金貨5枚の借金が新しくできたわけだが…

他にも、初めてキーラを連れて薬草採取クエストを受けたのだが、

近くにいた魔獣を狩ろうと勝手に暴走して3人まとめてボロボロになつて帰つてきたり。

キーラが俺とクウが宿で隣同士で住んでいると話すと、「私も住む！」とか言い出して本当に住みだしたり。今ではコルト亭の2階の3部屋は、奥から俺、クウ、キーラの順で満室である。

そんな毎日で疲れが溜まっていたので、今日は休みにして各自ゆつくり休養を取ろうという事になっているのだが…

「市場なんかになんの用があるんだよ？」

「シャロットが食材が足りないって話してたから、買いに行つてあげるって言ったのよ。私、市場って行ったことなかったから行つてみたかったのよね」

この世間知らずの元お嬢様は好奇心旺盛なのはいいのだが、人まで巻き込むのはどうにかしてほしいものだな。

「まあ、買い物ぐらいなら付き合つか。俺この後行くところあるからさっさと終わらせよう」

「コウイチこそなんの用があるのよ？」

俺に用事があつちやいかんか。

「短刀だよ短刀。キーラが誘拐された館に忘れたままだから取りに行くんだ」

1週間バタバタしてたせいですつかり存在を忘れてたが、ゴートに貰った大事な短刀だから取りに行かなければ。あんな幽霊屋敷なら誰かに取られる心配はないと思うが、手元がないと不安だからな。

「それなら買い物終わつたら付き合つてあげるから、さっさと用意しなさい」

「分かった分かった。じゃあ用意するからクウも呼んでこいよ」

「クウは今日、王立図書館に行くって言つてたからいいわよ」

「なるほど。じゃあ二人か」

手短に用意を済ませて、何も買う予定はないが財布を持って市場に行くことにした。



「ここが市場ねー、ほんとに色々売ってるのねー、あ！あれ何かしら？あれも！見たことない物ばかりね」

初めて見るものばかりらしく、目を輝かせて落ち着きのないキララ。

「必要なものだけ買うんだぞ。いらぬものは買わないからな」
「分かってるわよ」

俺も市場は初めて来たが、確かに出てる店は多種多様で目を引かれる。食材を売っている露店だけで数えきれないほどあるし、他にもアクセサリーを売っている露店、日用品を売っている露店、見ただけじゃ何か分からない怪しい物を売ってる露店、見て回るだけでも中々楽しめそうだ。

人も多いしさっさとシャロットの買い物を済ませて帰るとするか。

「おいキララ、早くメモの店に…」

周りを見渡すとキララの姿が消えていた。

「ちよつと目を離したらこれかよー！ったく」

キララは一旦置いておいて、渡されたメモの店で買い物をしてキララを探していると、人混みの中に知った顔を見かけた。

「こんなところで会うなんて珍しいな。シエイク」

「ぎゃっ！ってなんだよコウイチかよ」

どこから声を出したのか分からない目の前の男は、シエイクという探索者だ。ギルドで何度か話すうちに仲が良くなった数少ない同年代の男友達である。

「そんなにびつくりすることないだろ。何見てたんだ？」

シエイクが覗いていた店を見ると、なんだがよく分からない小瓶やら、何かの動物の干物だったり置かれており、不思議な匂いを漂わせていた。

「なんの店だ？…んん」

「女の子に囲まれてるお前には必要のない店だよ」

頭ごなしに否定し、どこかへ行けと目で語るシエイク。そんな風に

されると余計に知りたくなるのが人間というものだ。

シエイクの肩に腕を回し、

「そう言わずになんなのか言えよ」

シエイクは観念したのか溜息をついてから話し出す。

「誰にも言うなよ?」

「言わない言わない」

「……惚れ薬だよ」

「惚れ薬!?!」

「しー!、声がでかい声が!」

俺の口を手で抑えながら小声で怒るシエイク。

「惚れ薬って、あの惚れ薬か?」

「そうだよ。飲ませた相手を虜にできるあの惚れ薬だ」

そう話すシエイクは絵に描いたような悪い顔をしている。

「お前にはキーラちゃんやクウちゃんがいるからいらないだろ?」

「待て待て、あの二人はそんなじゃねーよ」

「信じられるか!ただでさえ貴重な女探索者を二人もパーティーに入れておいて何もないわけないだろ!」

そんなすごい剣幕で言われてもほんとに何もありませんが…

「クウは俺が犯罪者になるし、キーラに関しては美人かもしれないけど、一回殺されかけたんだぞ?何かあるわけないだろ」

「怪しいところだな」

どうやらまだ疑惑は晴れていないらしく、じつとりとした目線を感じるが、話を変えよう。

「で?それ買うのかよシエイク」

「うーん。欲しい所だが、値段がなあ」

どれどれと惚れ薬の値札を見てみると、

「金貨1枚!?! たっか!」

「だろ?こんなの買ったらしばらく生活がままならないぜ」

肩をすくめて残念そうに話すシエイク。

効くかも分からないこんな値段のものを買う物好きが世の中にいるんだな。などと考えていると、

「コウイチ、お前買えよ」

「俺が？」

さつきまでと打って変わって、急に薬を勧めてくるシエイク。

「お前、なんだかんだで金持ってるだろう？金貨一枚ぐらい安いもんだろ」

確かに買っても生活には困らないが…

「効くか分かんないだろう？…これ」

「だから試してみてくれよ。値段の3割払うからテストしてきてくれ。効くと分かったら俺も買うから」

俺で試そうとするなよ。

けど、気になることは気になるな。

「親友を助けると思ってたさ。な？」

シエイクは祈るように上目遣いで懇願してくる。

まあ、そこまで言うなら？

「しょ、しょうがねえなあ。俺は興味ないけど？そんなに気になるなら試してやってもいいけど？」

「さすがコウイチだぜ。それでこそ男だ」

気がつくくと、惚れ薬を買ってしまった。

これは不可抗力というもの。友達の為に仕方なく買ったただけだから。別にやましい気持ちとか一切ないから！

惚れ薬の使い方は、惚れさせたい相手の飲み物に数滴垂らすだけらしいが…

「ちよつとコウイチ！どこ行つたのよ？」

どこか浮足立ったまま、市場をふらふらしていると後ろからキーラに声をかけられる。

「はい！ってなんだキーラか」

「なんだって何よ。探したんだからね？買い物済ませたの？」

「ああ、ほらこれ」

シャロツトのおつかいの品が入っている紙袋を見せる。

「そっちはなに？」

キーラは惚れ薬の入った紙袋を指差して聞いてくる。

「これは、あれだ、俺の個人的な買い物だ」

「なんであんただけ欲しいもの買ってるのよ！ずるい！」

明らかに動揺を隠せなかったが、キーラにとっては俺が個人的に買い物をしてる方が許せなかったらしい。

そんなこと言われたって、俺のお金なんですけど。しかし、機嫌を損ねて紙袋の中身を詮索されるとまずいし、ここはご機嫌取つとくか。

「分かったよ。なんか好きなの一個買つてやるからそれで許してくれ」

「ほんと？じゃあまずは喉乾いたからどこかで飲み物買いましょ」

まずはって言葉が気になるが、惚れ薬がバレるよりましか。

ちよつと待てよ？今飲み物つて言った？

これは惚れ薬の効果を確かめるチャンスつてことなのでは？

再会

「ほら、早く行くわよ」

コウイチはキーラが照れながらも手を引いている事など全く気付かず私利私欲の思考を深めていく。

問題は、どうやってバレずに飲み物に惚れ薬を混入させるかである。買ったその場で入れるなどまず不可能。愚策以外のなにものもあるまい。どこかで気を逸らし、その隙に入れるとかか？いやしかし、こんなことをするのはさすがに罪悪感が…でもこれはシエイクの為にちよつと試してみるだけだし…

そんな事がぐるぐると頭の中で堂々巡りをしていると、

「あそこの屋台、なんだか人だかりができてるわね、人気なのかしら？」

キーラの言葉でふと我にかえり、彼女の目線の先を見ると、確かに屋台の前でちよつとした人だかりができていた。

その屋台は店の前にいくつかのテーブルとイスが並べられており、テラス席のように買ったものをすぐその場で座って飲み食いできるようになっている。

「あそこなら少し休めるかも、行ってみましょう！」

キーラに手を引かれるがまま屋台の近くに行くとき香ばしい良い匂いが鼻をくすぐる。こんな匂いがするなら確かに客が寄ってくるだろうなと思いつつ、近くの看板に目をやると『おいしい！タコヤキ』と書かれていた。

「タコヤキ!?!」

「何？コウイチこのいい匂いの食べ物知ってるの？」

キーラがこちらを見て興味津々で聞いてくる。知ってるも何も、この匂いとこの名前なら間違いなくあの『たこ焼き』で間違い無いだろうが…

ここって異世界だよな？しかも西洋っぽい文化の国だし、なんでこ

んなどこにたこ焼きがあるんだ？

「？まあとりあえず買ってみましょうよ」

キーラは俺が困惑しているのを見て不思議そうにしながらも、俺の手を引いて屋台の列に並び始める。

もう何が何やらと考えている内に列は進み、注文の番が回ってきた。

「えっと、このタコヤキっていうのの一つと、ジュースを二つ下さい」

「はい、かしこまりました！：げ！」

キーラがメニューを見ながら注文した後に店員が急に声を上げたので、ふと顔を上げると、これまた知った顔がそこにいた。

「こんなところでなにしてんすか？」

「それはごつちのセリフよ！」

そこには、キーラを誘拐して殺そうとした張本人で秘密結社『宵の手』のメンバーである、プリム・ロツシュが、バンダナを頭に巻いた定員の姿で屋台の中に立っていた。

「おや、また会ったなコウイチ」

「げっ、あんたもかよ！」

屋台の奥から顔を出したのは、これまた『宵の手』のメンバー、グレゴリだった。

「なに？コウイチこの人達と知り合いなの？」

気の抜けた顔で首を傾げて聞いてくるキーラ。

「知ってるも何も、こいつらお前を誘拐した張本人だよ」

「え!?! そうなの!?!」

そういえば誘拐された時は気を失ってたから顔を見てないんだっただな。キーラが驚きながらプリム達の顔と俺とを行ったり来たりさせていると、

「おい！早く注文しろよ！」

後ろに並んでいる人達から声が上がる。やばいなかなかの長蛇の列ができ始めてるぞ。

「みんなすまないが食材が切れたから今日はもう店じまいだ！また来てくれ！」

グレゴリが、屋台から出て列の人に大声で呼びかける。店じまいと聞いて文句を言う人もいたが、次第に人が散らばっていく。

「まあそこに座ってくれ。少し話したい事があったんだ」

グレゴリが近くのテーブルを指差すので、キーラと二人で座る。

「これはサービスだ。もらってくれ」

グレゴリがプリムとたこ焼きを持って来ると、俺達と同じテーブルに着き四人でたこ焼きをつつく。

なんだこの空間は…気まずいぞ。

「キーラさん。その節は、本当にうちのキーラが迷惑をかけてしまい申し訳なかった」

「ちよつと痛いわよグレゴリ！」

しばし黙々とたこ焼きを食べていると、最初に口を開いたグレゴリは、そう言つてプリムの頭を掴んで一緒に下げる。

「それならもう終わった事だし、気にしてないわ」

「え!?!いいのかわ？」

「まあ、あれはお父様と私の問題だし、今はコウイチ達と毎日楽しく過ごしてるから満足よ」

案外あっさりと許したキーラに驚いて口を挟んでしまった。優しいというかお人好しというか、まあ俺が口を出すことでもないし黙っておくか。

「話というのは、近々ボスがどうしても直接謝りに来たいと言っているんだが、その時に改めて謝罪の機会が欲しいという事を伝えたかったんだ」

「別に気にしてないってば、でもどうしてもって言ってるならいつでもいいわよ」

「本来なら我々は今ここで斬られても文句は言えない立場だが…キーラさんの優しさに感謝する」

もう一度深く頭を下げながらプリムを睨みつけると横のプリムも「すいませんでした」と言って頭を下げる。

随分と律儀な秘密結社だな。と思っていると、顔を上げたグレゴリは今度は俺の方に向き直り、

「コウイチにも先日の謝罪と、後これを」

そう話しながらどこからか短刀を取り出し俺の前に置く。

「これってまさか!？」

それは、間違いなく俺が館に忘れて来たゴートにもらった短刀だった。

「ああ、あの後また館に行った時に見つけたんだが、プリムが君の物だと言っていたので取っておいたんだ」

「サンキューー！今から取りに行こうと思ってたところなんだよ」

久しぶりに手に持った短刀を眺めながら感謝の言葉を伝える。

「そういえば、どこでたこ焼きなんて知ったんだよ」

嬉しい気持ちそのままに疑問に思っていたことを聞いてみることにした。

「粉もんは材料費が安くすんで儲けがいいんだ。いい商売だろう？『宵の手』は万年金欠の組織なもんでな」

グレゴリはどこか自慢げに粉もんがいかに儲けがいいかという話をし始める。

「いや、そうじゃなくて。たこ焼きなんてこの辺じゃ見ない食べ物だし、どこで知ったのかなって」

「うちのボスが教えてくれたんだ。なんでもかっていた国じゃよく食べたらしい」

かっていた国？この異世界には粉もん文化がある国でもあったりするの？それか、もしかすると、

「そのボスがいた国の名前って聞いたりしたか？」

淡い期待を胸に聞いてみる。

「ああ、確か、ニホンとか言ってたっけなあ」

俺が口に運ぼうと持っていたたこ焼きはべちやりと音を立ててテーブルに落ちる。聞き間違いじゃなければ、今日日本って言ったか？

いるのか？俺以外にこの異世界に来てる日本人が…

異世界更生者達

グレゴリとプリムと会ってから数日が経ったある日のこと。

「結局、惚れ薬使うタイミング見失ったし、どうしたもんか」

コウイチは探索ギルドに併設されている食堂にて、溜息混じりに惚れ薬の小瓶を眺めていた。

「びびってないで早く使って本物かどうか確かめてくれよ」

「うっせーな、分かってるって。使える時があつたら使うって言ってるんだろ？」

横で軽口を叩いているのは、探索者仲間のシェイク。惚れ薬は、こいつの口車にいいように乗せられて買ってしまった訳だが…、あの日は『宵の手』の奴らに会ったせいでもそれどころではなかったし。

まあ、会つてようが会つてなからうがこれをキーラに使える度胸が俺にあつたかどうかは自分でも疑問に思うが…

「それより今日はクウちゃんとかキーラちゃんいないのかよ。女の子がいないと空気に華やかさが足りないんだよ」

こいゆほんと女好きだな。思ってること全部口にしちゃうタイプの人間だから嫌いじゃないが、

「じきに来ると思うけど。もうキーラを口説こうとするのやめろよ？」

「なんで？」

「なんでって、お前この間殺されかけてただろうが!？」

つい先日、シェイクはキーラに会うと流れるような動きで彼女の前に跪いたかと思うと、手の甲にキスをしてデートに誘ったのだが、キーラはそんな彼に無表情のまま剣を抜き、あわや団欒の場である食堂が殺伐とした殺人現場になるところであつた。

「シェイクって顔はいいのに頭が残念だよな」

「いやー、美人を見ると体が勝手に動くんだよ」

反省の色が全く見えんな。黙つてじつとしとけばただのイケメンなのにもつたいない。

「でもキーラちゃんって剣の扱い上手いよなー。俺一応、ゴールドランクの探索者なのに本当に斬られるかと思ったよ」

「キーラ^{あいつ}剣術適正持つてるからな」

「マジで!?すげーじゃん」

キーラの剣術適正はAなので、なかなかの使い手であることは確かだ。一度鍛錬に付き合ってもらったが、ボコボコにされたのは嫌な思い出である。

なんでも、キーラは少し前まで騎士団長だった人物と幼い頃に出会い、その人に憧れて剣を独学で学び始めたんだとか。

俺は人に^{ゴート}教えてもらったのに独学に負けるとは…これが才能の差か。

「美人で強いなんてもう最高じゃん。結婚するしかないじゃん」

目を輝かせながら中空を眺めてバカなことを言うシェイク。

「……もう好きにしてくれ」

シェイクに呆れながら惚れ薬を腰のポーチにしまい、自分の食事に手を伸ばさそうとした時、

「コウイチさーん。お客さんですよー」

後ろから受付嬢であるロゼルの声が聞こえたので振り返ると、ロゼルの横に男が一人立っていた。

男は30代ぐらいで、サラリーマンのようなキツチリとしたスーツを着てトランクケースまで持っていた。

誰?あの人?ていいうかなんでスーツ?

頭にいくつもの疑問符が浮かび上がっている中、スーツの男はつかつかとこちらに近づいてくると。

「はじめましてツガヤマ君、僕は ヤクモ と言います」

「はあ」

珍しく苗字で呼ばれた事にどこか新鮮さを覚えながら気のない返事をする、温和な表情で笑うヤクモと名乗る男はちらとシェイクの方を一瞥^{いちべつ}すると、

「一応、秘密結社『宵の手』のボスってことになってる者です。少し二人で話せますか?」

俺に顔を近づけて小声で呟いた後、にこりと笑ってみせる。

シェイクに一言謝ってから、ヤクモと周りに人がいないテーブルに移動する。

「こないだはプリムが迷惑かけたみたいで本当にすいません。『宵の手』は貧乏組織なので、あの子は良かれと思って依頼を受けちゃったみたいで」

話しながらも彼は終始にこにここと優しい笑みを浮かべている。

「なんかすつげー胡散臭いと思うの俺だけ？」

「俺は気にしてないですけど、そんなことより聞きたいことが…」

「僕が日本人かどうかでことですか？そういうことならツガヤマ君の予想は正しいですよ。僕も日本から来た異世界更生者なので」

「なんともあつさりとしたカミングアウトで、気が抜けてしまい言葉が出てこない。」

「そんな事より、たこ焼きは美味しかったですか？あんまり異世界の知識を出すのは目立つからやりたくなかったんですが、プリムの事もあつたし普通に働いて稼ぐやり方を教えてあげようと思ひまして」

「あまつさえ、たこ焼きの話をし始めたヤクモ。」

「今はたこ焼きの話重要じゃないだろ!？」

「そうですね？お客さんの感想を聞くチャンスだと思つたんですが、残念」

「この人なに考えてるかさっぱり分からん。」

「ていうかヤクモさんも異世界更生者なら、こうして同じ日本人に会うなんて珍しい事でしょ？」

「確かにプリムの謝罪っていうのは建前で、異世界更生者である君に会いに来た、というのが本当の狙いです」

「だつたらなおのこと、たこ焼きの話などしている場合ではないだろ。と考えるとヤクモは続けて、」

「私達の他にもいますよ。異世界更生者」

「マジですか!?!例えば?」

ヤクモは俺の質問に少し考えるそぶりを見せて。

「教えてもいいですが、ツガヤマ君が『宵の手』に入ってくれるのが条件ですね」

「意味が分からないです」

「この人ほんとになに考えてんだろう。」

「俺、おたくのプリムに殺されかけたんですけど…」

「その件は色々行き違いがあったんですけど…」

「行き違いで殺されかけてたまるか!」

「じゃあ入ってくれませんか?」

「入らないですよ。大体、秘密結社って怪しすぎるでしょ。『宵の手』って何やってるんですか?」

「うちは秘密結社って言うてますが、中身はただの慈善団体ですよ。騎士団とかじゃ助けられない困ってる人を助けるのが僕達の目的です」

かわらず、ニコニコとそんな話を話すヤクモ。

いや怪しすぎるだろ!秘密結社で慈善団体ってなんだよ!

「きつと今、君は僕の事すつごく怪しい人間に見えてると思うんですが」

「はい。めちやくちや見えています」

「わあ、とつても正直で助かります。でもその感情は僕のスキルの副作用というか、呪いみたいなもののせいなんですよ」

スキルの呪いと聞いて、はつとする。俺にもあるじゃないか、異世界に来る時にもらったの呪いのようなスキルが…

「それって異世界に来る時に貰ったスキルの事ですか?」

「やっぱり同じ異世界更生者だと話が早い。つまりそういう事です」

やっぱりこの人も貰ったのか、一体どんなスキルなのか気になったので、率直に聞いてみる事にした。

「それってどんなスキルなんですか?」

「ああ、それはですね…」

「失礼します!クエス王国騎士ですが、」

ヤクモが話そうとした時、ギルドの入り口からよく通る声が出て遮られる。

声の方を見ると、俺と同じ年頃の青年が後ろに何人かの騎士を連れて立っていた。

青年は端正な顔立ちをしており、後ろにいる騎士は重そうな装備をしているのに対し、彼は動きやすさを重視したような軽装のアーマーを着ている。

騎士団がギルドに来るなんて珍しいな、何かあったのかと思いついてみると、ギルド内を睨み付けるように見回している青年がこちらの方に目をやると、

「そこにいたかヤクモ！」

「噂をすればですね…」

青年に名指しで呼ばれたにも関わらず、ヤクモはやれやれといった感じに首を振っているところを見るに、どうやら二人は知り合いらしい。

「今日という今日は捕まえさせてもらおうぞ！」

前言撤回、剣を抜きながら近づいてくる彼を見るにどうやら知り合いたいな優しい関係ではないらしい。

「ツガヤマ君。彼は スメラギ 君と言って、僕達と同じ異世界更生で現クエス王国騎士団長だよ」

「はい？」

呑気な調子で重大な情報を話すヤクモ。同じ異世界更生者で、しかも騎士団長!?なんだそのもりもり設定は…

「何をこそこそ話してるー！」

スメラギの剣先はヤクモの喉元に付くか付かないかといった所までぴたりと止められる。

一方で表情ひとつ変えず椅子に座ったまま動かないヤクモ。

なんだかやばい空気、これが修羅場ってやつですか？

騎士団長

クエス王国に住んでいれば、騎士団長の話はいやでも耳に入ってくる。彼は騎士団に入った時はいい人で皆に好かれてはいたが特に目立つ存在ではなかったらしい、しかし時間が経つにつれ剣士としての頭角を表してきたらしい。

そして数年前、今まで一度も負けたことがないという無敗伝説を持った前任の騎士団長と対決、それに見事勝利。前任者は彼に騎士団長の座を譲った後、長期の休暇をとり消息不明。

それからは名実ともに歴代最高の騎士団長として、大型魔獣の討伐から犯罪者を捕らえるなど、活躍は多岐にわたる。民に優しく、皆に好かれる彼はいつしか畏敬の念を込められてこう呼ばれるようになる。

『全ての者のための剣』

そんな大層な二つ名を持ち、俺と同じ異世界更生者でもある騎士団長が今、目の前にいるわけだが…

「さあ、付いてきてもらおうぞ ヤクモ」

「僕、ただ人と話してただけですよ？」

ギルドの食堂はピリついた空気が漂っていた。

『宵の手』には今窃盗、強盗、誘拐等々、さまざまな嫌疑がかけられている。リーダーのお前には聞きたいことが山ほどある」

淡々と話すスメラギの持つ剣は、ヤクモの喉元に突きつけられたまま微動だにせず、光を反射させてゆらりと濡れたように光る。

「君もこいつの仲間か？」

目の前の出来事をただ見ているだけしかできなかった俺に、スメラギは目も向けず質問してくるが、なんと返していいか戸惑っている、と、

「まだですよ、今勧誘してましたけど」

「違う！違います！ちょっと話してただけの一般人です！」

ヤクモが勝手に返事をするので全力で否定する。もう変な事に巻き込まれるのはごめんだ。

「一般人ではないでしょう？スメラギ君、この子も僕達と同じ更生者ですよ」

スメラギは更生者という言葉に反応してこちらを見る。

「そうなのか？」

「ええ、まあ日本出身ですけど…」

「名前は？」

「ツガヤマ コウイチです」

「そうか、ならツガヤマ、同じ更生者のよしみで教えてやるがヤクモとはあまり関わらない方がいいぞ」

「ええー、ひどい言い方だなあスメラギ君」

剣を突きつけられているのに呑気に話に混ぜてくるヤクモ。

「本当なら少し君とも話をしたいが、今はヤクモを連れて行くのが優先なんでな。またいつかゆっくり話そう」

スメラギはそれだけ言うと突きつけていた剣を納剣し、ヤクモに椅子から立つよう促す。

「コウイチ君、スメラギ君のスキルと呪いも面白いんですよ。聞きます？」

ヤクモは立ち上がりながらそんな事を話すと、

「勝手に人の秘密をバラすな！」

スメラギはさつき納めた剣を目にも止まらぬ速さでヤクモの首に振り抜く。

あ、これ人死ぬやつでは？

しかし、俺の思いとは反し、振り抜いたように見えた剣はヤクモの首を飛ばさずに首の皮に触れた所でぴたりと止まった、というより止められたように見えた。

「相変わらず厄介なスキルだな」

吐き捨てるように言つてまた剣をしまうスメラギに、

「冗談だよ。人の個人情報に勝手に漏らさないから」
笑いながら頭を掻いて

今何が起こったのか分からず口を開けたまま呆然としていると、

「コウイチさん、どうしたんですか!？」

ギルドの入り口からクウが駆け寄ってくる。

「なんといえればいいか…」

俺がどう説明すればいいか悩んでいると、

「コウイチさんを困らせないであげて下さい!」

クウはキツと眉を寄せてスメラギ達を見据える。

その姿たるや、小動物の精一杯の威嚇を見ているようで、かわいい
という感想しか出てこない。

「この子達は君の仲間かい？」

小動物のようなクウを見て尋ねてくるスメラギ。

「はい、そうですけど」

「君がうらやま…」

「はい？」

「いや、なんでもない。それでは失礼するよ。行くぞヤクモ」

何か小さい声で呟いた気がするけどよく聞こえなかった。そのまま
まヤクモを連れて歩き出すスメラギ。

「じゃあツガヤマ君。邪魔が入ったけど実は君にはちよつとした頼み
事があるんです、また追って伝えますね」

ヤクモはすれ違いざまにスメラギに聞こえないような小さな声で
俺に囁いてその場を後にする。

俺、またなんか変な事に巻き込まれそうになってないか?これも全
部『絶対不可避』のせいだとするなら、ヤクモの言う通りまさに呪い
だな。

ヤクモとスメラギが出ていくのをぼんやりと見送った後、キーラが
来るのを待ってパーティーで仕事を受けることにした。

お仕事を頑張ろう

「さっきの方達はお知り合いですか？」

キーラが来るのを待ちながら、ギルドの掲示板で依頼を探しているとクウに質問される。

「知り合いつていうか、出身が同じってだけであんまり知らないかな」

「出身というとニホンでしたっけ？この間、図書館に行つて調べてみましたけど、どこの国か分かりませんでした」

そういえば、この間の休みに王立図書館に行つてたっけ。

「わざわざ俺の国を調べに図書館に行ったのか？」

「い、いえ？ちよつとついだに調べて見ただけです。そ、そんなことよりの依頼なんてどうです？」

クウはなぜか顔を赤くしながら慌てた様子で依頼の紙を見せてくる。

「なにになに？エース山の山頂付近にてワイバーンが巢作りをしているとの情報が入ったので、偵察してきてほしい。ってこんな危なそうな依頼受けれるわけないだろう？」

「そうですね〜」

こんな怖い依頼、見せないでほしい。しかも紙の下の方に小さい文字で（命を落としても一切の責任は取れません）とか書いてるし、探索者の命軽すぎない？

「こんなのより、こつちの依頼なんてどうだ？」

ワイバーンの依頼を掲示板に戻しながら別の依頼をクウに渡す。

「ジブウサギの狩猟依頼、ですか？」

「ああ、ジブウサギなら今まで山ほど狩ってきたからちよろいもんだよ。それに捨てるところが無いからそこそこの金にもなるしな」

「ならこれにしましよか。私、受付に行つてきますね」

にこりと笑つて、小さな歩幅で受付へと駆けていくクウ。その後ろ姿を見ているだけで癒される。騎士団だとか宵の手だとかの面倒くさそうな現実を忘れられる気がする。

「あんた何ニヤニヤしてるのよ。気持ち悪い」

「うわお！」

クウを眺めていると突然後ろから声をかけられたので思わず姿勢が良くなる。

「なんだ、キーラか。びつくりさせるなよ」

「あんたが犯罪者みたいな目でクウを見てたからでしょ？」

「誰が犯罪者だよ！俺は妹のような存在としてクウを温かく見守ってただけだ」

「はいはい、そんなことより、どう？これ」

必死の講義をさらりと流して、着ている物を見せびらかすように脇腹に手を置いて胸を張る。

キーラは最近まで、ただの村女といった服装だったのだが、今彼女が身につけているのはプレートアーマーを胸部に付け、ロングソードを腰に差している。

「おお、探索者っぽくなったな」

「なかなかいい出来でしょ？」

ここ最近キーラは自分で稼いだお金で自分に合った装備を誂あつらえてもらっていたのだが、今日完成したらしく取りに行っていたのだ。

「あ、キーラちゃん！とつても似合ってますよ。その新しい装備」

「そうでしょう？ありがとクウ」

受付から帰ってきたクウはキーラの装備を褒めると、キーラ自慢げに返事をする。

「じゃあキーラも来たし、仕事に行くとするか」

「今日の依頼はなんなの？」

「ジブウサギの狩猟依頼だよ」

「ジブウサギ？なんでそんな、よわっちそうなやつ狩りに行くのよ。せっかく装備も整えたんだし、その依頼のワイバーンでも狩りに行きましようよ」

「こいつもか。」

「ワイバーンなんて狩りに行きません！日々の生活で精一杯なんだか

ら身の丈に合った仕事をするんです」

「えー、せっかく探索者になったんだから私もドラゴンとかと戦ってみたいわ」

「キーラちゃんは戦うの好きですもんね」

つまらなそうに文句を言うキーラを宥めるように話すクウ。

ドラゴンなんてとんでもない。そんなのと戦ってたら命がいくつあっても足りないっての。

「お前今日は変な魔獣にちよつかいかけて追いかけるなんてことごめんだからな」

「大丈夫よ。コウイチは心配し過ぎなの」

前回そう言ってデカイ熊みたいな魔獣に追いかけられたの誰のせいだと思ってるんだ。

「だいたいけど、じゃあ行くか」

こうして三人で狩猟依頼をこなしに、デイエス山に向かった。…のだが。

「ふぎけんなー！」

「ごめんってばー！」

「二人とも早く走って下さいー！」

結局、キーラが謎の魔獣にちよつかいを出して追いかけられる羽目になり、その日は少しのジブウサギを狩って、全員泥だらけで帰ってくる事になった。

夜の訪問

「まったく、何回言えば分かるんだよ！変な魔獣にちよつかい出すなって言ってるだろうが！」

ギルドに帰ってきて、泥だらけの荷物を置きながらキーラを叱る。「ごめんって言ってるでしょ？勝てると思ったのよ」

まったく反省の色を見せないキーラは悪態を吐きながら自分の防具を外す。

「お前一人なら勝てるかもしれないけど、こっちはクウだっているし、俺は攻撃されたら避けれないんだからな！」

「二人共、喧嘩は、あの、えつと…」

クウはあたふたして俺とキーラの間を行ったり来たりしている。いつもなら困った顔のクウの頭でも撫でてあげたいと思う所だが、今はそんな気分ではない。

「まったく、迷惑しかかけられないのかお前は」

「だからさつきから謝ってるでしょ!?私だってね良かれと思って…もういいわよ先に帰るわ」

「キーラちゃん待って下さい！」

キーラは一つ溜息をついた後にさつきとその場を後にして、その跡をクウが追いかけていった。

「なんか俺が悪いみたいなき感じじゃん」

一人取り残された俺は受け取った報酬を持って大衆浴場に寄ってから、コルト亭へ帰る事にした。

コルト亭に帰ってからは、なんだかいつもより味が薄く感じるご飯を食べた後、夜も更けてきたので自室へ戻ってベッドに腰掛けた時、ドアをノックする音が聞こえる。

「コウイチさん、いますか？」

ドアの向こうからクウの声が聞こえる。

「ああ、いるよ」

「入っても？」

ベッドから立ち上がり、ドアを開けてクウを中へ招く。

「どうしたんだ？こんな時間に」

「あの、今日の事で少しお話したくて」

どこか物憂げな表情の彼女を椅子に座らせて話しを聞く事にする。

「キーラちゃんは時々、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ無鉄砲ですけど」

ちよつとではない気がするが…

「でもでも、彼女は自分の装備の一部にコウイチさんがお金を出してくれたのを早く返したいと思って、稼ぎのいい魔獣を討伐しようとしただけなんです」

確かに、装備を買うにあたって少しばかりお金は出したけど…

「だからって、クウや俺が危ない目に合うのは違うだろ？」

「私なら大丈夫です。最近は、攻撃魔法も覚えようかと思ってたところですよ」

クウはそう話しながら笑ってみせる。

「でもクウ、攻撃魔法は覚えたくないんだろ？」

そう、彼女は全ての魔法の適性を持っているのだが、誰かを傷つけるのが嫌で攻撃魔法は覚えないようにしているはずだが。

「いいんです。私が攻撃魔法を覚えるだけで今より稼げる魔獣討伐にも行けますし、二人の足を引っぱりたくないんです」

「クウは足なんて引っぱり張ってないよ。それにキーラにも、もう怒ってないから大丈夫」

「ほんとですか？」

「あいつ、誰かが注意しないと暴走しそうで心配なんだよ。俺からもキーラには謝っておくからさ」

今にも泣き出しそうなクウを慰めるように頭を撫でて微笑みかける。こんな小さな子に気を使わせるなんて、自分が情けないな。

「今日はもう遅いから部屋に戻って寝るといい」

クウが落ち着くのを待ってから彼女の部屋に送る事にした。

「すいません。泣いちゃったりして」

「大丈夫だからさ。おやすみクウ」

「おやすみなさい」

クウがドアが閉めるのを確認してから、一息を吐き自室へ戻る。

「やっほー ツガヤマ コウイチ あんたの大好きなクレナちゃんや
で」

ドアを開けると、ふざけた調子の赤髪の女がたこ焼きを口に運びながら、部屋の椅子に我が物顔で座っていた。

その人は俺をこの異世界に送った、女神クレナその人である。

言いたいことは山ほどあるが、ここは久しぶりの再会だし粋な挨拶でもしておこうではないか。

「間に合ってるんで、帰って下さい」

俺は笑顔で言い捨てる。

途中経過 その2

「出口はこちらなんで、どうぞ」

「うちの扱い酷すぎひん!? 仮にも女神なんですけど!」

クレナはたこ焼きの船皿を机に叩きつけるように置きながら
だいおんじょう大音声で話す。

「でかいでかい、声がでけーよ!」

口の前で指を立てながら声を抑えるように注意する。

「大丈夫やって、今日はちゃんと部屋に結界張ってるから中からの音は外に聞こえへんから」

「食べる?」と言いながらたこ焼きを前に出して勧めてくるのせで一つもらう事にする。

「これ美味しいよな。かわいいねーちゃんとでっかいおっさんが売ってる店で買ってきてん」

たこ焼き売っててその見た目の二人が定員の店なら十中八九『宵の手』の連中の店だろうな。確かにこの店のたこ焼き、美味いんだよな。

いや、ちよつと待てよ?」

「お前コレ自分で買ってきたのか!」

「せやで?」

何を呑気な顔して「せやで?」だよ。

「お前、下界の人に見られたら駄目なんだろう?」

「ちゃんと変装したから大丈夫やって」

困るのは俺なんだけど、ほんとに危機感ないなこの女神。

「で、何しにきたんだよ?」

「途中経過を見に来たに決まってるやろ」

クレナはたこ焼きを一つひよいと口に入れて続ける。

「最近頑張ってるみたいやん? かわいい仲間もできたし、別の異世界更生者とも会ったみたいやし」

「そうだよ、異世界更生者が他にもいるなら前もって言つていてくれよ!」

「あんたが会ったのは私の担当の子じゃないから知らんし、言ったところでもうにもならんやろ」

クレナはまた一つたこ焼きを食べる。

「担当じゃない?」

「そ、更生者には各自に担当の神がついてるからな。それに他の更生者に会ったところで何にもならんやろ。結局個人個人の天命を遂げるだけやねんから」

それはお前の決める事じゃないだろ。異世界の情報を聞けるかも知れないのに。こいつどうしてやろうかと考えていると。

「それに、教えたら分からないまま異世界生活に困惑するあんたを見られへんやん」

あ、結局困ってる俺を見たいだけだなこいつ。

俺が頭にチョップでもかましてやろうと手を上げたその時だった。

「コウイチ、いる?入るわよ?」

ドアのノックと共にキーラの声が聞こえてきた。やばい、なんつータイミングで来るんだこのお嬢様は。今入られるとまずい。下界の人にクレナを見られると、内容不明のペナルティーが科せられるらしいので、この場を見られるわけにはいかない。

ドアのノブが音を立てて回り、今にもキーラが入ってこようとしている。どうする、どうする。

「クレナ、俺の声が外に聞こえるようにしてくれ」

「なんで!?!」

いいからと俺が急かすと、クレナはパチンと指を鳴らすと喋らずに手を差し出して話すようにとジェスチャーをする。

「クレナ、今は入らないでくれ」

ドアを抑えながらドア越しに話しかける。

「お、起きてたの?なら早く返事しなさいよ」

「ごめんごめん。今ちよつと考え事しててさ」

「どないするつもりやねん」

クレナが小声で聞いてくる。

「誰か中にいるの?」

「いや!?誰もいないけど?」

ちよつと黙ってる小声でクレナに釘を刺す。

「今日の事で、ちよつと話があるんだけど」

「あー、それなら気にしてないから大丈夫だよ」

「ほんとに?」

「ほんとほんと」

なんだか焦りすぎて今なんの話してるか頭に入ってるこない。しかもクレナが話を聞こうとこちらに近づいてくる。

「なんてなんて?」

「お前ちよつとマジであっち行ってる」

こいつほんとに何考えてんだよ。

「ありがとうコウイチ、そ、それとなんだけど」

「なんだ?」

話している最中だというのにクレナはたこ焼きを口に頬張りながらにやにやと俺に食べるよう勧めてくる。どう考えても今じゃねーだろ!

「今までちゃんと言ってこなかったけど、誘拐犯から助けてくれた事や、お父様と話すときに怒ってくれた事、すっごく嬉しかった」

「全然いいよー」

「あと、えつと、ほんとに感謝してるから!それだけ!じゃあおやすみ!」

キーラはなんだか照れていそうな口ぶりで、言うだけ言ってトタトタと音を立てて部屋へと戻っていく。

あんまりちゃんと聞いてなかったけど、今結構大事なイベント軽く流しちゃうなかった?

「あーん、青春してるやんかコウイチ!」

クレナが酒でも飲んだ後の顔のように眉を寄せて俺を叩いてくる。

「お前のせいで、まったく頭に入ってこなかったんだが何の話してた？」

「今のちゃんと聞いてなかったん!? どうしようもない男やな」

「なんだよ、じゃあ教えてくれよ!」

「あ、もうこんな時間やん」

クレナは腕時計もつけていないのに手首を見て話す。

「途中経過は良好って事でいいから、引き続き頑張つてな」

「おい、マジで何の話してたか教えてくれないのかよ!」

「他の異世界更生者ともよろしくやるんやで」

クレナがまた指を一つ鳴らすと、彼女は霞のように消えてしまった。

キララに今日何の話したっけとか聞いたら怒られそうだし、どうしたものか…。

「もう、考えるの疲れた」

俺は思考を放棄して、布団に入った。

お誘い（物理）

「起きなさい ツガヤマ コウイチ」

ぐっすりと寝ている中、命令口調の女性の声が耳に入ってくる。誰だよ、人が気持ちよく寝てるつてのに、ただでさえ今日は夜に来客が多かったから疲れてるんだよ…

「起きろつて、言ってるでしょーが！」

「いたー!!」

頬に激しい痛みを覚えながら目が覚める。目を開けると大きな影が、俺に馬乗りになって顔を覗き込んでいた。

え、なに？怖い怖い！

目が闇に慣れてくると、ゆっくりと影の正体が姿を表す。

「お前…」

そこには、月の光を長い黒髪にきらりと反射させる美人がいた。本来ならこんな美人が俺の上に跨っているなんて状況はありがたい事この上ないのだが…

今、俺の上にいるのはどう考えても密かに俺に好意を寄せて夜這いに来たなどという女性ではなく、怒りの表情を顔いっぱいに滲ませている秘密結社『宵の手』のプリムがそこにはいた。

「やっと起きたね。じゃあすぐ行くから支度なさい」

俺が起きたのを確認して、ベッドから降りて愛想なくそれだけ話すと、彼女は椅子に座り込む。

あまりに慮外な出来事に、思考は見事ショートして金縛りにでもあったかのように固まってしまったが、今感じた思いを喉から言葉として絞り出す。

「また誘拐ですか？」

彼女は椅子から立ち上がり、無言で近づいてきたかと思うともう一

発、今度はさつき打たれた反対の頬に平手が飛んでくる。

「いてーよー！いちいち殴んな！ていうかどこ行くんだよ？」

「仕事よ仕事」

「は？」

仕事ってなんだよ。何も身に覚えが無さすぎるぞ。

「どういう事か説明ぐらいしてくれ」

「あなた『宵の手』に入るんでしょ？そう聞いたから仕事手伝わってもらおうと思って」

どこで誰にどう聞いたら俺が怪しい秘密結社なんぞに入るって事になるんだろう。

「俺、『宵の手』に入るつもりはないし、仕事も手伝わな…」

断ろうと返事をしている途中、プリムの足先が俺の顎の数センチ手前で止められる。

「ボスからの返事を断るとかありえないわよね？いいから手伝いなさい。今ここで顎を砕いてあげてもいいのよ？」

仕事の誘いじゃなくてただの脅しになってるじゃん…。仕事の誘いだとしても、こんな危ない子じゃなくて話の通じそうなグレゴリを寄越してくれよ。

「喜んで…行かせていただきます」

「それでいいのよ」

プリムは足を下ろしながらとても満足そうに微笑む。

こいついつか酷い目に合わせてやる。

「で？こんな夜中にどこ行くんだよ」

コルト亭を出て、プリムの後について行きながら当然の疑問を投げかけてみる。空を見上げると、月はまだ天高く煌めいている時分なので、クレナが来た後に寝付いてからはそんなに時間が経っていないことが分かる。

「コウイチは『骸狩り』って名前聞いたことある？」

「なにそれ？」

「ここ最近、クエス王国で暗躍してる犯罪組織の名前よ。今から行くのはそのアジトの一つよ」

そんな奴らと関わりたくないから名前なんて知るわけないだろ。

「ていうかクエス王国で暗躍してるのって『宵の手』何だろ?」

「それは騎士団の馬鹿どもが勝手に言ってるだけ。ボスが私達は困ってる人を助ける組織だって言ったでしよ?」

だからその理念が胡散臭いんだって。とは口に出して言えるはずもなく、プリムの後を追いながらしばらく歩いているとある場所で彼女の足が止まる。

「情報だとここのはずよ」

プリムの目線の先は、何の変哲もないレンガ造りの家が立ち並ぶ中の一つだった。

「こんなところに犯罪組織のアジトなんかあんのか?」

『宵の手』の情報網舐めないでよね。いい、今日は情報収集が目的だからバレないようにね」

プリムは口を閉ざして、ついて来いと手だけで合図し二人で家の窓の死角へと隠れる。ちらりと覗くと、中にはいかにもガラの悪そうな男が三人で酒を片手に談笑していた。

「いやー、最近ウチの組織金回りいいつすよねー」

一番若そうな金髪の男が口を開く。

「馬鹿、あんまりそういう話でかい声ですんな」

金髪に注意するのはピアスを付けた茶髪の男。

「まあいいじゃねえか、気持ちは分かるしな」

今度は頬に傷跡のついた黒髪の男。口ぶりからみるにこの中で立場が一番上の人間なのだろう。

「そういえば、この地下ってなにやってるんすか?」

「そんなのも知らないで見張りやってんのかお前は、クスリだよクスリ」

得意げな顔で答える黒髪に金髪はまだ理解してない顔をしている。

「クスリってなんすか?」

「お前ほんとに馬鹿だなあ、麻薬だよ麻薬。最近金回りがいいのもそれで大金稼いでるからだよ」

「でも麻薬なんか売ってたらすぐに騎士団に目つけられるんじゃない

んすか？」

「そこをうちのボスがうまい具合に『宵の手』とかいう馬鹿共になすりつけてくれてんだよ」

「なるほどっす」

それからは三人で『宵の手』の事を散々にこき下ろして笑い合っていた。

思ったよりやばそうな話だな。この王都で麻薬が蔓延しようとしているなんて話、騎士団に持っていけば動いてくれるだろ。

そろそろ帰ろうかと思おうと思っけてプリムの方を見ると、さっきまであった彼女の姿が消えていた。

あいつどこ行っった？

「誰だおめー！」

消えたプリムを探していると家の中から男の怒声が聞こえる。

嘘ですよね？

「よくも私の仲間の事を悪く言ってくれたわね！」

家を覗くと、憤怒の相を浮かべたプリムが男達に囲まれていた。

なにやっちゃってんの？あの子。

V S. チンピラ

「おい嬢ちゃん、なにしに来た?」

男たちは立ち上がり、プリムを威圧するように近づいて行く。

「なにしに来たですって? 決まってるでしょ。あんたらをぶちのめむぐつ!」

「いやー、すみませんすみません。ちよつとこの子酔っ払ってるんで勘弁してやって下さい」

今にも啖呵を切って男共に襲いかかりそうなプリムの口を後ろから塞いで入れ替わるように会話に割って入る。

「じゃあこれで失礼しますね」

「ちよつと待て」

そそくさと出ようとする後ろから黒髪に肩を掴んで止められる。

「さつき、その嬢ちゃん、私の仲間…とか言ってたか? もしかしてお前ら、『宵の手』のメンバーだったりしねえよな?」

まずいまずい、はちゃめちゃに怪しまれてるって。情報収集だけって話だったのに、なぜこんなことに…

なんて悔やんでる場合じゃないな、ここは適当に誤魔化して見逃してもらおう。

「なんですかその ヨイ、ノテ? 劇団かなんかの名前ですか?」

あくまで笑顔は崩さず、本当に心当たりがないよう取り繕って話す。

「なんか怪しいな、お前ら」

黒髪はまだ疑惑の念が消えないらしく俺に顔を近づけてじっと見つめてくる。DQN怖いよう。

どうしようかと目を泳がせていると、黒髪に後ろからわざとらしく口角を上げて話しかける茶髪。

「でも先輩、いくら『宵の手』の奴らがまぬけって言ってもこんな奴らじゃないでしょ?」

いかん、両手で必死に押さえつけているプリムが怒りで小刻みに震

えているのが伝わってくる。殺気を感じるとはこういうのを言うんだらうな。

「そんな事よりお姉さんなかなかの美人だね。どう？そんななよなよしてる男より俺達と遊ばね？」

そう言つてプリムの方へと手を伸ばしてくる茶髪…の顔を前蹴りで豪快に蹴りつけるプリム。

「私にはもうボスっていう心に決めた人がいるのよ！あなた達みたいなゴミに興味ないわ！」

予想もしない攻撃をもらった茶髪は、黒髪と金髪の間を抜けて頭から勢いよく壁に叩きつけられる。

あれ死んでないよな？

「このアマ何しやがる！」

部下がやられた事で当然殴り掛かってくる黒髪。

プリムは勢いよく突き出された腕を側面から掴むと体を相手の方へ回転させながら勢いを殺さずに投げ飛ばす。

「ぐはっ!?クソ！」

床に転がるように倒された黒髪はすぐに体勢を立て直すと今度は右足で蹴りを放つ。

「誰に足技を挑んでるのか分かってるの？」

プリムは嘲笑うように言い放つと黒髪のキックに対して真正面からキックを合わせる。

お互いの脛がぶつかる、ゴキんと鈍い音が響くと同時に黒髪の体が中空に舞う。

「ゴハア!？」

背中から受け身も取れず床に叩きつけられた黒髪は、息ができないのか過呼吸のように悶えている。そんな彼の右足は、本来足が向いている方ではない方に曲がっていた。

絶対痛い！あれ絶対痛い！

「て、てめえ!!」

仲間がやられたのを目の当たりにして、何かに押し出されるように金髪がプリムの後ろから襲い掛かる。その手にはキラリと光るナイ

フが握られていた。

「プリム危ない！」

咄嗟にプリムを庇うように前に出てしまった。どうする？短剣はあるが抜いてる暇はなさそうだ。『正拳突き』を撃つても拳がナイフと衝突しそうだし：

もうどうにでもなれ！ここは一か八か、刺されたら刺された時考える！

『ムーンシュート
『三日月蹴り』！

「ぐぶっ!？」

咄嗟に放った俺の渾身の後ろ回し蹴りは、ナイフが刺さる前に見事側頭部とまではいかなかったが金髪の頬に直撃、金髪は錐揉み回転して床に伏す。

「で、出来た…よかったー」

「良くないわよ！」

命の危機を乗り越え、安堵で胸を撫で下ろしているとプリムから横槍を入れられる。

「なにあなたが『三日月蹴り』使ってるのよ!?!それは私が編み出したオリジナルスキルなのよ！」

「いや、まあ一応掛け声みたいな感じで言ってみただけで、今のはただの後ろ回し蹴りだろ」

「パクリよパクリ！二度と使わないでね！」

「何がパクリだよ！元はといえばお前がこいつらに喧嘩売ったからだろうが！」

「はあ!?!あなた『宵の手』が馬鹿にされてるのに黙ってるメンバーがいる訳ないでしょ！」

それに俺を巻き込むなって言ってるんだよ…駄目だ、狂信者に何を言っても仕方ない。こいつはヤクモと『宵の手』が好きすぎてそれ以外が見えてないようだ。

「もういいよ。それより情報も手に入ったし、こいつらが起きる前にさっさと帰ろう」

「それもそうね、長居してたら見つかるかもだし。ほんとには他のアジトの場所も聞き出したかったけど」

お前のせいで聞く前にこんなことになったんですよ？

溜息をついてから、盲目的狂信者を連れて家を出ようとしたその時

：

「君達、何してるのかな？」

突然後ろから声をかけられる。振り返ると家の奥、おそらく地下へと続く扉の前に眼鏡をかけた痩せ男が一人立っていた。

「この状況を見るに、客人：というわけではなさそうだね」

男は眼鏡のずれを直しながら床に倒れている男達を見て、おもむろに右手をこちらに向けてくる。

「コウイチ！避けなさい！」

「へ？」

プリムの声とほぼ同時に轟音と共に玄関のドアとそれに接した壁が通りに弾け飛ぶ。

レイドバトル vs. ゼルバート

「いってえ、何だったんだ？今の…」

自分の出している声のはずなのに水の中にでもいるように曇って聞こえる。

激しい耳鳴りと舞う埃で、自分の身に何が起こったのかを理解する事ができたのは耳鳴りと埃がおさまりはじめた頃だった。

「コウイチ！大丈夫!？」

「ああ、なんとかか…ってなんだこれ!？」

声をかけてきたプリムに起き上がりながら返事をして、自分が座り込んでいる横を見るとさつきまで俺が立っていた傍の壁はなくなっており家の前の通りと繋がって辺りには壁やドアであったと思われる煉瓦や木片が散乱していた。

爆発音の寸前、プリムに蹴飛ばされたおかげで目の前の壁の様に粉々にならずに済んだようだが、あんなの当たったらひとたまりもないぞ。

「おや、二人とも無事でしたか。殺す気で撃ったんですけど」

痩せ男はつまらなさそうに呟くと、こちらに向かって歩き始める。

「そこで止まりなさい。蹴り飛ばすわよ」

臨戦態勢は崩さず、痩せ男と俺の間に割って入って行く手を阻むプリム。

「おや、誰かと思えばプリムじゃないですか。今さら戻ってきてても仕事はないですよ?」

「誰があなたみたいなくズの所に帰るのよ」

あれ、もしかして知り合い？

「おいプリム、そいつは?」

「こいつは『骸狩り』の幹部の一人 ゼルバートよ。私は『宵の手』に入る前、こいつの下で働いていたの」

「碌に役に立たずに逃げ出したのは君だけど、生きていたとは驚きだよ。今日は何しに来たのかな?」

「あなたに教える義理はないわ」

『宵の手』に拾われたと聞きましたが、どうせ向こうでも役に立たずに仲間に迷惑ばかりかけてるんだらう?」

嘲笑混じりにプリムを挑発する様に話すゼルバートに、絶賛迷惑かけられ中の俺は激しく同意したい所だが、現状の物々しい雰囲気から口を開くのは憚られる。

「コウイチ、今日は引くわよ」

「俺は初めからそう言ってるんですけど」

「今はそんな毒吐いてる場合じゃないのよ!」

視線はゼルバートから外さず、背中を向けたまま話すプリムに苦言を呈すと怒られる。どうやらこの言い方からするに余程やばい相手らしい。

「僕が今から逃げると言ってる人はいそうですねかと逃がすような奴に見えますか?」

ゼルバートが話しながら、さっきのように右手を前に出そうとしたのとプリムが彼に蹴りかかったのはほぼ同時だった。

「あなたは先に逃げなさい!」

俺に指示しながらゼルバートの右手を蹴り上げると、彼の右手から出たなにかは今度は家の天井を激しい音と共に吹き飛ばし、

「あんなの飛んできてたのかよ!」
立ち上がって通りに出ながら破壊力を目の当たりにしながら驚愕してしまふ。

「おいプリム!お前も早くこっち来い!」

「分かってるわよ!」

家に舞う埃の中から声色に少し怒りを含みながらプリムが飛び出ししてくる。

「まさかこんな所にあいつがいるとは思わなかったわ」

「どうすんだよ、あんな攻撃まともにくらったら死ぬぞ」

しかも俺は狙われたら避けられないのだから余計に危ない。

「しょうがないわね。グレゴリを呼ぶからちよつと待ちなさい」

そう言うのとプリムは腰につけたポーチに中からビー玉より一回り

大きいぐらいの丸い結晶を取り出すとそれを地面に叩きつけた。

当然、結晶は粉々に砕け散り、飛び散った欠片は空気に溶けるようにスツと消えていく。

「何今の!？」

「はあ?あなた仮にも探索者のなのに魔封晶も知らないの!？」

俺が自然と口をついて出た驚愕に、プリムも驚きを隠せないように反応する。

「簡単にいうと魔法を封じ込めた結晶よ。これでグレゴリに連絡がいったはずだから数分後にはここに来るはずよ」

「で、その来るまでの数分はどうすんの?」

「それは…」

当然の疑問ではあった。今は一分一秒一瞬が惜しい状況であるし、今にも目の前の家から俺達を殺そうとする奴が出てこようとしているのだから…それなのに目の前の無鉄砲で盲目的な狂信者は少し考えないように口をつぐんだ後、通りに響く程高らかに咆える。

「頑張るのよ!!」

「ぶぎけんな!」

「作戦会議は終わったかな?」

俺がやられる前にこいつだけでも先にやってしまおうかと考えた時、家の中から舞っている埃に穴を空けるようにゼルバートの声と共に何か空間を裂いて飛んでくる。

それは俺の足から僅か数センチの地面に激突し、石畳でできた道はアイスクリームディッシュシャーですくわれたかのように抉れる。

「あつぶねえー!」

地面に異変が生じるまで全く反応できなかった。あれが体に当たったらと考えるだけで背中に冷たい汗が滴れるのを感じる。

「コウイチ、よく聞きなさい。理屈は知らないけど、あなた攻撃が避けられない代わりに相手も攻撃を避けられなくできるでしょ?」

「お前、なんでそれ知って…」

「一回あなたとは戦ったことあるんだからなんとなく分かるわよそれぐらい」

何を当たり前のことを…とでもいった顔で話すプリム。そんなの分かるもんなんですか？

「そんなことより、私がなんとかゼルバートの攻撃を防いで置くから、あなたは隙をみて一撃、なんでもいいからぶち込みなさい」

そんな事急に言われても…俺は変なスキル持つてゐる以外は等しくパンピーなんですけど。

「それと、殺しは無しよ。『宵の手』は困っている人を助けるだけなんだからね」

俺がどうしようかとふと腰の短剣に意識を向けた時、プリムは諭すように声をかけてきた。

それに関しては俺も賛成だ。人を殺したりなんかは御免被りたい。しかし、それこそ素手なんてあのヤバそうな奴に近づかなきゃいけないし、そんな事できるのか？

「行くわよー」

俺の心の葛藤など露知らずといったようにゼルバートに向かって駆け出すプリム。

まずいぞこれ、本格的にどうしたもんか…。

レイドバトル vs. ゼルバート その2

石畳が抉れ、弾ける音と、肉越しに骨がぶつかる鈍い音が、静かな夜の通りに響く。

今、目の前では同じ人間が行っているとは思えないようなような光景が繰り広げられていた。

プリムが地面を踏み込めば石畳はガラスのように簡単に割れ、二人はまるで殺陣でも行っているかのように流れる動きで攻撃を繰り出しては受け止め、また繰り出しては次は紙一重で躲す。

それにしても、ゼルバートが手から放っていると思われるあの見えない攻撃はなんなんだ？

あの中に入って一発打ち込むとか無理だろ！

「ちよつとコウイチ！早く入ってきなさいよー！」

俺が二人の戦いを目の当たりにし、そこに入っていくことに二の足を踏んでいると、ゼルバートの攻撃を躲して俺の隣に戻ってきたプリムに怒鳴られる。

「無理ですけど!?!」

「援護するから突っ込みなさいって言うてんのよ！私一人じゃこれ以上は…がっ!?!」

一瞬、俺に意識を向けたせいでゼルバートの放った見えない攻撃がプリムを直撃し、彼女を後ろへと吹き飛ばす。

「プリム！」

すぐさま吹き飛ばされた彼女の元に駆け寄り安否を確かめる。

「私は大丈夫。ちゃんとガードしてたから」

「余所見とは舐められたものだね」

満身創痍のプリムとは対照的に、かすり傷一つ負っていないゼルバートは、まるで痛ぶるのを楽しんでいるように悠々とした態度でこちらに近づいてくる。

「あいつがさつきから出してるあの見えない攻撃なんなんだよ?」

プリムに肩を貸しながら正体不明の攻撃について聞いてみると、彼

女は眉をひそめて言葉を返してくる。

「見えないって、何がよ？あいつがさつきから出してるのは魔力を圧縮して放つ魔法、『魔弾』よ」

あーなるほど、道理で見えないわけか。

俺には、魔力とか魔法とか、そういうファンタジーな物を見ることできない。支援魔法をかけられると強化されたりはできるので、魔力から生じる現象は感知できるが、『魔力』そのものを見たりすることは一切できない。

となると俺は、ただでさえとんでもなく強そうな目の前の男に、魔法による攻撃が見えない、というハンデを負って戦わなければならぬという訳なのだが：

俺は、ちらりとプリムに目をやる。彼女の身体中には痣や傷ができていないのに対して、俺は少しの擦り傷程度。一人だけ離れたところから女の子が傷ついていくのを見ているだけなど、流石に男以前に人として駄目な気がしてきた。

「プリム 俺が突っ込むから援護頼めるな」

「やっとやる気になったわけ？思ったよりヘタレだからどうしようかと思っただわ」

そう話すと彼女は少し笑ってみせる。ヘタレで悪かったな。

「策はあるの？」

「策と呼べるほど大層な物じゃないけどな」

こうなってしまった以上、もうどうにでもなれってんだ。

「よっしゃ行くぞー！」

プリムに手短かに作戦を伝えた後、自らを鼓舞するための声を発してから、ゼルバートへと駆け出す。

『正拳突き』！

まずは挨拶がわりに相手の鳩尾みぞおちめがけて右拳を放つ……が、
「なんだい、この弱いパンチは？」

俺の渾身の一撃は、子供でも抑えつけるようにあっさりと片手で止められてしまう。

「こんなんじゃないや当たってもダメージにならないよ?」

それはこつちが一番分かってるわ!

心の中で突っ込んでいると、ゼルバートと触れ合っている右手から全身に悪寒が走る。

『鞭蹴』^{ウイップ}!

魔弾が放たれる前に俺の後ろの影からしなるように振り下ろされるローキックがゼルバートの足を直撃する。

「ぐっ!?!」

ゼルバートはプリムの攻撃で体勢を崩し、俺の手を離れ後ずさる。

「小賢しいね」

ゼルバートは片手ではなく、両手を前に出して攻撃の予備動作を始める。

瞬時に前に出て、ゼルバートの腕ごと蹴り上げるプリムの左後ろから、今度は俺が低い姿勢から左手に握った短刀を彼の横腹にむかつて僅かに切り上げるように薙ぐ。

「短刀だろうと結果は同じだよ!」

蹴り上げられた腕を振り下ろして俺の手首を弾くゼルバート。骨の擦れるような鈍い音がすると、左手に激痛が走る。

いってー!ー!ー!絶対折れた!

左手の痛みを堪えながら右手を振りかぶるように上から相手の顔めがけて振り抜く。攻撃を下に集中させていた分、一瞬反応が遅れたゼルバートは咄嗟に避けようとして体を逸らせようとするも俺の『絶対不可避』で体が硬直する。

「な、なんだ?」

焦りの表情を見せるゼルバートの口に、右手でポーチから出した小瓶をねじ込んだ後、すぐさまプリムと後ろに引く。

「何を飲ませた!」

ゼルバートは小瓶の中を少し飲んでしまったからか、唾を吐きながら怒気を孕んだ声で問いただしてくる。

「さあ、なんだろうな？」

俺のポーチに入っている小瓶は惚れ薬しかないが。毒とでも勘違いしてくれれば、ここは一旦引いてくれるかもしれない。

「そこで何をしてる！」

俺達の間に一瞬の静寂が流れた時、意識の外から声がかけられたので、そちらを見てみると夜警の為、巡回して来たと思われる騎士が二人、数メートル離れたところに立っていた。

それを見たゼルバートは短く舌打ちをして、騎士のいる方へ左手を向けたかと思うと、騎士の一人の鎧がぐしゃりと変形しながら吹き飛ばされる。

「悪いが、今日はここまでみたいだね。今度、君達を見かけたら確実に殺す」

ゼルバートはこちらを睨みながら、先程プリムから聞いた魔封晶をどこから取り出して、右手で握りつぶした。

握りつぶされた魔封晶からは黒い霧のような物がたち上り始め、みるみるゼルバートの全身を覆ったかと思うと、霧が晴れると同時に彼の姿は跡形もなく消え去っていた。

「行ったのか？」

「……みたいね」

「助かったー……いつつ!？」

息を吐きながら安堵した瞬間、左手の痛みが増す。

「何でこんな目に遭わにやならねえんだ」

左手を庇いながら、プリムと一緒に吹き飛ばされた騎士の方へと向かう。

「大丈夫か？」

「うう…」

魔弾が直撃していたが、鎧を着ていたおかげで一命は取り留めてくれるらしい。だとしても、まるで紙のようにひしゃげた鎧を見ると、直接体に当たったことを考えるだけで震えるな。

「君達、さっきのは誰だ？」

倒れた騎士を介抱していた、もう一人の騎士が尋ねてくる。

「そんなことより、この人医者に連れて行こう。話はその後で……」

「その必要はない。今聞こう」

騎士を立ち上げらせようとすると、後ろから声をかけられる。今度は誰だよ？

振り返ると、顔の目の前に剣の切っ先が突きつけられていた。剣の持ち主を見上げると、そこにはプリムの首を右手で押さえながらこちらを見下ろす俺と同じ異世界更生者であり、クエス王国騎士団長のスメラギが立っていた。

夜明け

目の前に剣が突きつけられたまま、この間もこの人ヤクモさんにも剣を突き立ててたなどと思いつきながらも反論してみる。

「そんなことより今はこの人を医者かなんかに連れてかないと…」
「だからその必要はないと言ったんだ」

『ヒール』

俺から目を離さずにスメラギが小さく呟くと、痛みを苦しんでいた騎士は段々と呼吸が落ち着いていき、自分で立ち上がった。

「ありがとうございます」

「大丈夫か？二人共今日はもう帰って他の人を呼んできてくれ。ここは俺一人で十分だ」

少しふらつきながら立ち上がった騎士に、優しい口調で話しかけると、騎士達は一礼して夜の街へと消えていった。

「ぐつ、ううー！」

首を手で押さえられたままのプリムが苦しそうにしながらスメラギにむかってパンチやキックを闇雲に放つも、スメラギは一切効いていないようで微動だにしない。

「離してやってくれ！俺達は別にあんたの敵じゃねーよ！」

「それを決めるのは俺だが、まあいい、女性を苦しめるのは胸が痛いしな」

そう言うってプリムから手を離すと、解放されたプリムはすぐさま、スメラギの顔へハイキックを繰り出す…が、その足も片手であっさり止められてしまう。

「おいおい、随分足癖の悪いお嬢さんだな。これじゃ話もできないぞ」
プリムの足から手を離しながら呆れたように話すスメラギ。

プリムのキックを片手で止めるって、こいつどんだけ力強いんだよ。流石に騎士団長やってるだけはあるな。しかも、さつきサラツと回復魔法使ってたかったか？俺は魔法使えないのに。

「それで？君達はここで何をしてたんだ？」

『骸狩り』のアジトで盗み聞きしてて、バレちゃったんで戦ってましたなんて馬鹿正直には流石に言えないので、ほどよく誤魔化して喋ることにする。

「俺達、この辺を散歩しててさ」

「こんな人気の少ない通りを男女二人で？」

いきなりめちやくちや怪しまれてるな、これ。

「それで、偶然『骸狩り』って奴らに襲われて、戦ってただけで、俺達は被害者なんだよ」

スメラギはまだ訝しむような目をしたまま話を聞いていると、

「プリム！コウイチ！大丈夫か！」

その時、さつきまで俺とプリムがいた場所に『テレポート転移』で現れたグレゴリが、俺達を探すように声を上げていた。

「お、そこにいたか。無事みたいだな」

グレゴリはこちらに気付いて、安堵の表情を浮かべながら小走りで駆けてきたかと思うと、スメラギの姿を見た途端その顔は一変して陰しくなる。

「何で騎士団長サマなんぞと一緒にいる？」

「色々あったのよ。そんなことより来るのが遅いわよ！」

返事をしたのはプリムで、彼女は口では怒りつつもグレゴリの姿を見て安心したのか少し表情が緩んだように感じる。

「せっかくヤクモを釈放してやったのに、部下が早速怪しい事をするようじゃあ、また捕まえなくちゃならないか？」

おもむろに腰の剣に手を伸ばすスメラギ。

「悪いがお前さんと話してる場合ではないんでな。それにボスが釈放されたのはお前さんら騎士が証拠を持ってないからだろう？今日は帰らせてもらうぞ」

グレゴリは冷たく言い放つと、両手を俺とプリムのそれぞれの肩に置いてから、短く呟く。

『テレポート転移』

次の瞬間、一瞬視界が暗闇に覆われたと思ったら、いつのまにか俺達はコルト亭の前に立っていた。

「おい！今の感じだと、俺がお前らの仲間と思われる逃げ方しちやつてるんですけど!?!」

「だからもう仲間でしょ？何言ってるのよ」

プリムは眉をひそめながら話す。

無理矢理連れて行ったやつがよく言うな。

「そんな事よりコウイチ、お前さんその手は大丈夫なのか？」

グレゴリが心配そうに俺の左手を指して言う。

「痛いよーさつきからずっとめちやくちや痛いよー!」

「じゃあ今日はさつきと帰って、あの小さい嬢ちゃんに治してもらおうといい。じゃあまた連絡する」

それだけ言って、プリムの肩に手を置くと、『転移』で消えてしまった。言いたいことだけ言って逃げやがった。こんな目に合うなら二度と来ないでほしい!

などと誰も聞いていないのに言っても仕方がないので、大人しくコルト亭に入ってクウの部屋へと向かう。

夜中に起こされたクウは、眠そうに瞼を擦りながら扉を開けて顔を出したが、俺の手を見るなり目を丸くして驚いていた。

それからは何故こうなったかをあらかじめ説明しながら、治癒魔法をかけてもらうことにした。

「さつき部屋に行つて話したと思つたら、いきなりこんな怪我して帰ってきたからビックリしましたよう」

「それに関しては、本人の俺も驚いてるから安心してくれ」

「全然安心できませんよー!」

治癒魔法のおかげで痛みは徐々に薄れていき、手首が動かせるようになる。

「コウイチさんが、そういうのに巻き込まれるのは知ってますけど…そういう時は、私やキーラちゃんも頼って下さいね?」

クウは上目遣いで心配そうに話しかけてくる。

「クウだけだよ。俺を心配してくれるの」

すっかり元通りになった左手でクウの頭を撫でながら、感謝の言葉を伝えていると、窓から朝日が差し込んでくる。

「もう朝か。悪いけど今日は仕事休んで寝るとするよ」

「ゆっくりして下さいね」

優しくそう言ってくれるクウに癒されながら部屋を出て、自室に戻ろうとすると、後ろから階段を上がる音が聞こえる。

「ツガヤマ コウイチさんですか？」

呼ばれたので振り返ると、そこには茶色の髪を額が出るほど短く切り揃えた、美男子の騎士が立っていた。

「私はクエス王国騎士団の シャバラ と申します。 昨晚の『骸狩り』アジト襲撃の件で話をお聞かせ願いたいのですが、付いてきていただけますか？」

さっきの今で、もうこんなところまで来たの？騎士団って優秀だなあ、と頭の片隅で思いながら口からは全く別の言葉を紡ぐ。

「今から寝るので、おやすみなさい」

できうる限りの笑顔でそう言って自室の扉をそっと閉めることにした。

出頭

——コウイチ達がゼルバートと戦った後すぐ、『骸狩り』のアジトの一つにて、

「ゼルバート、お前鼠を殺し損ねたんだって？情けねえなあ」

いたるところが破れたボロボロの服を着た大柄の男がその体軀に似合う豪快な笑い方と共に嫌味を言い放つ。彼の名は カリム、『骸狩り』の幹部である。

「えー、ゼルちゃんが獲物を殺し損ねるなんて珍しいねー、そんなに強かったの？」

今度は、腰から大胆にスリットが入った体のラインがはつきりと分かるローブを着た妖艶な女性が質問を投げかける。彼女は カシューム、こちらも『骸狩り』の幹部の一人。

「強いも何も、こいつの元部下とその辺のガキ一人らしいぜ」

カリムが勝手に返事を返すとカシュームは「えー、そうなのー？」とわざとらしく驚いて口に手を当てる。

「勝手な事を言わないで下さい。あの時は騎士団の邪魔が入ったので、騎士団長が来ると思い撤退したまでです」

「そんなこと言って、実はかつての部下に情が湧いちゃったとかじゃないのー？」

「そんなものは湧きません。次は見かけ次第始末するつもりなので。特にあの少年は…」

「ガキがどうかしたのか？そっちに情が湧いたか？」

「ゼルちゃんのことだから、その子虐めるのが楽しみだけじゃないの？」

次から次へと湧いてくる二人からのからかいの言葉を冷たくあしらう「では」と一言だけ挨拶してその場を後にする。

あの少年、私に何を飲ませたんだ？毒、ではないようだったが…。いかん、近頃あの少年の事ばかり考えてしまうな。いくら苛ついたか

らといつても、これでは仕事に支障が出てしまう。次会った時にゆつくりと痛ぶればいいだけだ：

また会うのが楽しみになってきてしまうな。

ゼルバートは邪悪な笑みを浮かべながら夜の街へと消えていく。



——ゼルバートと戦った後、夜が明けてすぐのコルト亭にて、

俺は今、突然押しかけてきた騎士 シャバラ が俺を連行しようとしてきたので、絶賛拒否中である。

「ツガヤマさん!?起きてください!騎士団に来て少しお話を聞くだけですから!」

「うっせー!今から寝るつつつてんだろが!明日来い明日あ!」

「明日やろうは馬鹿野郎とも言いますし、そこをなんとかお願いしたいんです!」

どこで知ったんだよそんな言葉。

「じゃあ俺、馬鹿野郎でいいから明日頼むわー」

「ちよちよ、困ります。来ていただかないと私が団長に怒られますから!」

「それこそ知ったこっちゃねーよ」

「ちよつと!朝からうるさい!」

来てくれ、行かない、の押し問答が繰り広げられている所にキーラの声が割り込んでくる。

「なんでここに騎士がいるのよ?」

「お騒がせしてすいません、こちらの部屋の方に用がありません…」

寝起きであからさまに機嫌が悪いキーラに対して、おどおどとした様子で話すシャバラ。

「コウイチがどうかしたの?」

「いえ、昨晚起きた犯罪組織のアジト襲撃事件の重要参考人として、お

話をお伺いしたくてですね」

「昨夜？」

「はい。騎士団長からツガヤマさんに会ったと聞いたので間違いありません。そこからここに住んでいると分かったので来た次第ですから」

「コウイチ、あんた何したの？」

当然そういう反応になるよな。昨日はキーラと話したばかりだし、よく考えてみれば昨日の夜は色んな事が起きすぎている気がする。

クウに諭された後、クレナが来て話してる最中にキーラが来て、そのせいで話の内容は全く頭に入ってこなかったし…、それから寝ようとしたらプリムに連れ出されてあんな事に巻き込まれた訳で、そりゃ疲れるわな。

「お二人はご友人ですか？でしたら一緒に来ていただいても構いませんよ？」

「だから行かねえって言ってんだよ！」

「ちよつとコウイチ、あんた悪さしたなら謝りに行ったほうがいいわよ？なんなら私も一緒にいくし…」

なんで俺が悪い事が前提なのかツツコミたい所だが、これ以上体力使うのも面倒になってきた。シャバラも俺が行くって言うまでここに居座るだろうし…

「分かったよ。行けばいいんだろ？」

「本当ですか！ありがとうございます！」

ドアを開けると舌を出して尻尾をぶんぶん振っている犬のように目を爛々とさせて立っているシャバラと目が合う。

まあ、悪い奴ではないんだろうが、こいつ、馬鹿なんだろうなあ。

その後、「ホントについて行かなくていい？」と母親のような目で話しかけてくるキーラはコルト亭に置いて来て、騎士団の庁舎に向けてシャバラと二人で歩いて行く。

「騎士団の庁舎ってどこにあんの？」

「少し歩きますね。庁舎は王都の中央、王城のすぐそばにあるので」
王城なんてなんの用もないから行ったことはないが、コルト亭のある地区からならざっと3〜40分つてところだろうな。

「それにしても、事件の重要参考人を連れてくるのに一人で来るって
どうなの？普通もつと大所帯でくるもんなんじゃね？」

昔見たドラマとかでも、せめて数人で来てたと思うが：

「そうですね。普通はそうですが、なにぶん今は人手が足りなくて、副
団長の私なら一人でいいだろうと団長に言われました」

「ふーん、そっかー…」

副団長ねえ。

「副団長!？」

「わっ、びつくりした。急にどうしたんですか？」

俺の突然の大声にびくついたこの男が、

「副団長？」

シャバラを指差しながら改めて聞くと、

「はい。あれ？言いませんでしたっけ？」

首を傾げられた。

言ってますせん。

「舐めた態度取ってますいませんでした!」

直立して90度に腰を曲げて頭を下げる。

騎士団長があんなヤバい奴なら副団長も相当のはず。先に謝つと
かないと後が怖いです。馬鹿とか思ってますんませんでした!

「やだなあ、そんな改まらなくても、気にしてないので大丈夫ですよ。
むしろ今までの方がお互い話しやすくいいでしょう?」

や、優しい。すぐに剣を人に突き立ててくるスメラギとはえらい違
いである。副団長はこんなに優しい人だったなんて。騎士団ちよつ
と見直しちゃう。

それから他愛のない雑談を交わしながら庁舎へと向かうのだつ
た。

「さあ、着きました。ここがクエス王国の誇る騎士団の庁舎です」

新しい依頼

「はー、流石に立派なもんだな」

見上げる先には、白いレンガを基調とした荘厳な構えの騎士団の庁舎が聳え立っている。

王都の探索者ギルドも大きい建物の部類だと思っていたが、比べるまでもないほどの大ききなのが一見するだけで分かる。

これ何人ぐらい入れるんだろう。数百人、いや下手したら千人なんて軽く入りそうな大きさだぞ。

シャバラの後を追う形で鉄格子でできた門を開けてもらい、それを潜って庁舎の中へと入って行く。

庁舎の全体像は長方形の中をくり抜いたようになっており、中央には訓練所兼広場のようなスペースで、そこで騎士達は素振りの練習や雑談など、思い思いに過ごしているようである。その広場を囲うように五階建て程の建物は建っている。

「ツガヤマさん、こちらです」

俺がお上りさんのように辺りを見渡していると、それに気付いたシャバラが少し先から声をかけてきた。

誘われるがまま建物の中に入って行き、階段を一番上まで登った後、ある一室の前で止まるよう言われる。

「団長、ツガヤマさんをお連れしました」

ドアをノックしてからよく通る声で呼びかける。

「入っていいぞ」

「失礼します」

ドアの向こうから入室の許可の声が聞こえてくると、ドアを開いて中へ入るよう促されるのでシャバラと部屋に入る。

「来たかツガヤマ 遅かったな」

「いや、ちよつとは寝させてくれよ。ついさつき会ったばかりじゃん」

もう来てしまったからいいけれど、これだけは言っておかないと気が済まないのので椅子に座って書類にペンを走らせているスメラギに

悪態を吐く。

「事態は急を要する、お前の睡眠を待っている時間などないし、逃げたのはお前だ」

目線は変わらず書類に向けられたまま、淡々と言葉を返してくる。
いやまあ、逃げたのは確かにそうだけど…

俺、この人苦手だ。

スメラギは「ふう」と短く息を吐くと、ペンを置いてやっところちらに目を向けたと思うと、昨晚の質問が始まった。

「ツガヤマ、『骸狩り』に襲われたと言っていたいな？」

「だからそうだって言ったじゃない」

喧嘩を吹っかけたのはプリムだが…黙っておこう。

「逃げた奴の名前は知ってるか？」

「確か、ゼルバートって言ったっけな」

「ふむ、ゼルバートか…」

今思い返すと、よくあんなのと戦って骨折だけで済んだな、そこに関してはプリムに感謝だが。

「ツガヤマ、『骸狩り』についてどこまで知ってる？」

ゼルバートとの戦いを思い出していると、不意にそんな事を聞かれた。どこまで知っていると云われても、さつき会ったのが初めてなんだけどな。

「その顔を見るに本当に何も知らないみたいだな」

どうやら間抜けな顔をしていたらしく呆れられた。

「いいか、ゼルバートは『骸狩り』の幹部の一人だ。騎士団が知っている情報では幹部は三人、【魔弾】のゼルバート、【怪腕】のカリム、【妖香】のカシユームと言う。ボスはいないからその三人が実質のボスだな」

「へえ」

なんで急に『骸狩り』の話なんかしだしたんだ？それにその二つ名みたいな何？ちよっとカッコいいって思っちゃったじゃん。

「最近急激に勢力を増してきたいる奴等なんだが、どうやら麻薬を売って稼いでるらしいんだ。こればかりは看過できない」

そういえばそんな事言ってたな、そのおかげで最近金回りもいってアジトにいたチンピラが言ってたな。

「そこでなんだが、お前とパーティーの仲間達で『骸狩り』のアジト捜索と幹部の捕獲を依頼したい」

「はあ!?なんで?」

本当になんでだよ。絶対嫌ですけど!

「それともお前は『宵の手』のメンバーだから騎士団には手を貸せないか?」

こいつ、俺の事試してやがるな。暗にヤクモじやなく俺の下に付いておけと言われている気がする。

「俺は『宵の手』のメンバーじゃないけど、そんな危ない仕事を受けるつもりはないって事だよ」

「ちなみに報酬は前払いで金貨10枚、後払いで30枚だ」

「やらせていただきます」

「それでいい」

しまった。つい金に目が眩んで一瞬で了承してしまった。だってそんなにお金あったら向こう何年か働かなくていいんだもん。

「じゃあ決まりだな。俺は今から急ぎの用事でクエス王国をしばらく離れるから、帰るまでに終わらせておけ。シャバラもツガヤマを手伝ってやれ」

「はい!かしこまりました!」

俺に随分と上からな物言いだ命令した後、名を呼ばれたシャバラが元気よく返事をする、スメラギは「後は頼んだ」とだけ言って部屋から出て行ってしまった。

取り残された俺とシャバラ。

「ツガヤマさん。こちらが前払いの金貨10枚です」

シャバラが巾着袋を渡してきたので、若干の後悔を覚えながら受け取った後、二人で部屋を出る。

「でもアジトの捜索と幹部の捕獲つつつても、騎士団も探して見つからないのに俺が見つけれられるのか?」

階段を降りながら至極当たり前の質問を聞いてみる。

「団長はツガヤマさんのことを評価してますから。なんでも同じ国の出身だそうですね？」

「まあそうだけど……」

変な期待をされても困る。というか多分転生する時に貰ったスキルに期待しているのかも知れないが、スメラギは俺の『絶対不可避』を知らないのに勝手に強いスキルを貰っていると思っこの依頼出したんじゃあるまいな。

まあこんな事になったのも、俺を無理矢理連れ出したプリムのせいだからあいつにも手伝わせよう。

「シャバラさん！順位戦お願いしますー！」

プリムをどうやって道連れにしようかと心の中で画策していると、一人の騎士が随分と真剣な眼差しで横にいるシャバラに何かを申し込んできた。

順位戦ってなに？

【鬼人】 シャバラ

「シャバラさんが順位戦を申し込まれたらしいぞ」

「ほんとか!? 相手は誰だ!」

「今三位のククリらしいぞ」

先程、シャバラが騎士の一人に順位戦なるものを申し込まれてから庁舎が騒がしくなり、庁舎中央の広場にはあつという間に人だかりができていた。

「これ何が始まるの?」

「せっかくですしツガヤマさんも見ていって下さい」

シャバラから話を聞いたところ、ここクエス王国騎士団ではその人の功績と順位戦の順位で序列を決めているらしく、全ての騎士に順位がつけられていて、自分より順位が上のものに木剣を用いた模擬戦で勝つと順位が繰り上がる仕組みになっている。それが順位戦と呼ばれていて一位が騎士団長、二位が副団長といった風らしい。

めちやめちや脳筋システムだな。

「団長はその順位戦でかつて無敗だった前騎士団長を倒して騎士団長になったんですよ」

シャバラはどこか誇らしそうにスメラギの事を語る。すごい奴なのは分かるが、俺はあいつが好きになれん。

「じゃあ今からシャバラが負けたら、対戦相手の奴が新しい副団長つて事になるのか?」

「そういうことですな。ツガヤマさんも騎士団に入った時の為に順位戦は見ていて損はないですよ」

笑顔でなぜか俺が騎士団に入る前提で話すシャバラ。誰が入るかこんなところ。

しばらく広場で待っていると、全身に鎧を身に付けた対戦相手が周りの騎士達からの応援を背に受けながら現れる。しかし、対するシャバラは何も装備していない。

「おいシャバラ。鎧とか付けなくていいのか?」

「ええ、私はこのままで大丈夫ですよ」

少し心配で聞いてみると、何も心配ないといった様子で木剣を握った片手を二、三回振ってみせる。

「よろしくお願いしますー!」

「よろしくね。ククリ君」

お互いに一礼した後、ククリは剣を振り上げて一直線に駆け出す。そのまま前に出た推進力と体重を乗せた振り下ろしの一撃がシャバラを襲う。

「ふんっ!!」

シャバラは攻撃を避けず、真正面から剣を振り上げて迎え撃つ。ガーンと木剣のぶつかる音が響いた後、両者は鏢迫り合いの形で睨み合う。

「いい踏み込みだね」

余裕の口ぶりでもまだ笑顔の崩れないシャバラに対して、ククリは徐々に押され始め、鎧で見えないが食いしばっているとされる口から荒い息が漏れる。

「はあ!!」

鏢迫り合いに耐えきれなかったククリは一步後ろに跳んでから体勢を立て直し、今度はシャバラの右胸を狙った鋭い横払いが飛ぶ。

俺は、その時一瞬見えたシャバラの表情に背筋が冷えるのを感じた。

笑っていた。

しかし、さつきまで俺に向けられていた柔らかな笑みでは無く、瞳はぎらりと鈍い光を持ち、歯を剥き出しにして上がりきった口角は邪悪ともいえる狂気を孕んだ笑顔になっている。さつきまで聖人だと思っていた人間は、一瞬にして悪鬼のようになっていた。

シャバラの変貌ぶりに驚いていると、彼は飛んできた剣撃を木刀を持った左手一本で下から上へと斬りあげて弾いたかと思うと、体を回転させて相手の左胸に向けて一閃。

「いふうッ!」

剣を弾き上げられ、体勢を崩したせいで反応が遅れたククリは、鎧を着ているのにも関わらずシャバラの一振りで体がくの字に曲がり苦悶の声を出しながら宙に浮いて吹き飛ぶ。

「まだやるか？」

うずくまっっているククリに、少し恐怖を覚える程の真剣な表情で喋りかけるシャバラは口調まで変わっている。

「お、お願い……します」

「さっきのは胴狙いがバレバレだ。もつと意識を散らせ」

力無くよろよろと立ち上がるククリに、アドバイスをしながら構え直すシャバラ。

そこから先は一方的だった。

ククリの出す攻撃は悉く弾かれ、その度にカウンターをくらって吹っ飛ぶの繰り返し。鬼気迫るシャバラの攻撃が当たるたびに鎧にへこみができているのが、少し離れた所で見ても分かった。

「さすが【鬼人】シャバラさんだな」

近くの騎士がぼそりと呟くのが耳に入った。そんな恐ろしい二つ名付けられてんのかよシャバラ。

突っ込んでカウンターをくらって吹っ飛ぶ、突っ込んでカウンターをくらって吹っ飛ぶ、それが何度か繰り返された後、ククリはもう立ち上がる気力も無くしたのかへたり込んでしまった。

「ふう」

汗ひとつつかいていないまま、軽く息を吐いたシャバラは憑き物でも落ちたように爽やかな顔に戻っており、倒れ込むククリへと歩いていき手を差し伸べる。

「良かったよククリ君。日々熱心に鍛錬しているのが伝わってきた」

「ありがとうございます」

周りの騎士達からの労いの言葉と拍手を受けて立ち上がったククリは足がおぼつかないまま他の騎士に支えられてその場を去って行った。

「どうでしたか？ツガヤマさん！こんなに心が昂ることはないですよね！」

ククリを見送った後、首をぐるりとこちらに回して話しかけてくるシャバラの顔は光でも放っているかのように眩しい笑顔だったが、もうさつきまでの優しい笑顔と同じとは到底思えなかった。めっちゃ怖いですシャバラさん。

「っス。シャバラさんさすがっス」

「え!?!なんでそんな距離取るんですかツガヤマさん!?!」

「いえ、自分みたいなもの近づくのは恐れ多くて」

「なんでそんな怯えた顔するんですか!」

お互い無言のまま、俺が一步下がってはシャバラが一步近づく、まるで怯えた猫を手懐けようとするやり取りをしばらくした後、シャバラが口を開く。

「ツガヤマさん、今はこんな事してる場合じゃなく、パーティーメンバーの方にお話をしに行きましょう」

「確かに、そうだったな」

冷静さを取り戻した所で、コルト亭に向かって庁舎を後にすることにした。

準備

「と、いうことで。仕事が決まりました」

コルト亭の食堂にて、クウとキーラにシャバラと俺でテーブルを囲みながら昨日の晩に起きたゼルバートとの戦闘、そして『骸狩り』の搜索と捕獲の依頼について説明していた。

「なにが と、いうことでよ。なんであんたがそんな危ない事に首突っ込んでる訳?」

少しばかり不満そうな顔をして目の前に置かれたパンケーキをフォークでつつくキーラ。それもそのはず、昨日危ない事はするなど言った本人が危ない事をしてしまっている訳で…。

「いや、俺が自分からそんな事する訳ないだろ? あれはプリ…」

プリムの名を出しそうになった所で思いとどまる。ちらりと横のシャバラを見ると、シャバラも俺の視線に気付いてどうかしたのかという表情でこちらを見返してくる。

スメラギにはプリムと偶然会ったと言ってるから連れ出されたとは言えないな。

「どうしたのよ?」

「ほんとに偶然で俺もびつくりだよ。でも『骸狩り』は世の為人の為、放っておく訳にもいかないだろう?」

「なんか嘘くさいわね」

嘘くさいとは失礼な。

「まあまあ、キーラちゃんいいじゃないですか。コウイチさんがやるって言うなら私も頑張りますよ?」

事情も知ってくれているクウが、助け舟を出してくれる。流石クウ、俺の味方はやはりお前だけだよ。

「私も別にやらないとは言ってないわよ? ただそんな危険な連中を相手したらコウイチなんてあつという間にやられちゃうんじゃないの?」

最初に俺がやられるという発想になる辺り、どんだけ弱いと思われ

てるんだ俺は…まあ弱いけども。そんなにはつきり言われるとそれはそれで傷つくぞ。

「まあその辺は、このシャバラが付いてくれるから大丈夫だろ。なんたって副団長様だしな」

「なんであんたがそんなに威張ってんのよ」

「あははは」

俺達のやりとりを見ていたシャバラが急に笑い出す。

「どうした?」

「いえ、とても仲が良さそうなのでつい」

なんだそりゃ。

「ツガヤマさんはこんなかわいい人達に好かれてるなんて羨ましいですな」

「今の会話で好かれてる要素あった?」

「もちろんですよ。お二人ともツガヤマさんが心配でしようがないって顔をされてますからね」

心配というより、信用が無いの間違いではなからうか。二人の方を見てみると、クウは手をもじもじと動かして照れた顔をしている。何やってもかわいいなこの子は。

対してキーラは、「心配なんてこれっぽっちもしてないわよ」と強い口調で言い放った後そっぽを向いてしまった。こいつには愛嬌というものが無いのか。

「でも依頼を受けて下さるのならありがたいです。そこでなんです。が、まず手始めに各自の装備を整えるのなんてどうでしょうか?」

相変わらずにこりと優しい笑みを浮かべて提案してきたシャバラの案に否と答える者はおらず、俺達は装備調達の為にシャバラのおすすめの武器屋へと向かう為、席を立つ事にした。



「装備つつても何買えばいいんだ?」

武器屋への道中、半ば独り言で呟いてみる。

「そうですね。やはりここは御三方の得意分野をより強める為の何かを買うのがおすすすめですよ」

俺の独り言にシャバラが返事をしたと思うと、続けて俺達一人一人におすすすめを話した。

「キーラさんですと、見たところ剣士のようですし、より良い剣で攻撃の質を高めたり、もしくはアーマーなどで防御の底上げなどですかね」

「いいわね。フルプレートアーマーとか欲しい！」

「フルプレートとなると、そこそこの値段がしますよ?」

「おいおい、予算は依頼の前払いで貰った金貨10枚だぞ。お前のアーマーでほとんど持ってかれるじゃねーか」

このままじゃほんとにアーマーを買われそうなので釘を刺しておかねば。

「クウさんなら、魔術師なのでマジックロッドなどで魔法の威力を上げたりですかね」

へー、ロッドで魔法の威力が上がったりすんのか。まんまRPGみたいだな。

「ツガヤマさんは、短刀を持っている所を見るに索敵や敵の攪乱なんかをされていると思うので、重い装備ではなくスモールシールドや籠手、弓矢なんかもいいかもしれませんね」

「なるほどなあ」

「後はやはり、皆さんの適正やスキルに合わせて選ぶのがいいと思いますよ」

籠手は確かにいいかもしれない。敵の攻撃を防げつつ、接近戦でのパンチの威力も上がるだろうからな。弓矢も適正があれば『絶対不可避』と相性がいいだろうし。

少しばかりの期待と高揚感を胸に店に行つて選ぶのを楽しみにしている、シャバラが一つの店の前で立ち止まる。

「着きました。ここが『セルカの武器屋』です」

そこにあつたのは、外見は少し大きい程度のごく普通の民家の玄関先に、店の名前の書いた看板が置かれているだけの建物だった。

セルカの武具屋

「いらっしやい！【セルカの武具屋】によろこそ！」

シャバラが店のドアを開けると活力に溢れた女性の声で迎え入れられる。

「つてなんじゃ。シャバラか」

「そんなあからさまに嫌そうな顔しないで下さいよセルカ」

随分とサイズの大きいオーバーオールを着た女性はシャバラの顔を見るなり砕けた口調になり、あからさまにテンションが下げたが、「ん？」

「ど、ども」

「お客さんじゃ！」

シャバラの陰に隠れた俺と目が合ったので三人で挨拶すると、顔に花が咲いたように明るい笑顔でこっちに近寄ってきた。

「いらっしやい！あたしはセルカ この店の店長兼鍛冶師じゃ！
ゆっくり見ていってくれ」

セルカはそばかすの下の鼻を手袋で擦ると自慢げに胸を張る。確かに、歳の頃も俺とそう変わらなそうなのに自分の店を持つてるなんて大したもんだ。

「皆さん、こちらのセルカは僕の幼馴染でして…腕は確かなので信用して下さい」

感心しているとシャバラはセルカの紹介をしながら一礼する。

「いやーシャバラ、ちゃんとお客さん連れてきてえらい！」

わははと笑いながらシャバラの背中をバシバシ叩くセルカ。

「ほんとに…腕は確かなんです」

「で、お客さん今日は何をこそ望じゃ？」

申し訳なさそうな顔をしているシャバラの背中を叩き続けるセルカを見て、【鬼人】の背中をこんなに叩ける人なんて世の中にそんないないだろうなあ、とつまらない考えを巡らせているとセルカが訊ねてくる。

「ああ、予算は金貨10枚程で俺達三人の装備を整えたいんだけど：できそうかな？」

「金貨10枚!？」

「やっぱ足りない?」

三人分ともなるとちゃんとしたもの揃えたらやっぱり高くつくのかな。

「いやいや、とんでもない!久しぶりの大仕事でビックリしただけじゃ。安くて質もいいがモットーの「セルカの武器屋」にお任せあれ!」

自信に満ちた表情で胸を一つ叩いたセルカは店の裏に入っていたかと思うと、両手に大量の荷物を抱えて戻ってきた。

「まずは、その人に合った武器を探すところからじゃ」

そう言いながら店のカウンターに並べた武器や防具は様々な種類があり、一つ一つ見ていくだけでも丸一日かかりそうな量だ。

「じゃあまずは、そこの嬢ちゃんからじゃ。」

「私?」

突然呼ばれたキーラは少し戸惑いの表情を見せながらもセルカの元へと近寄ると、セルカは何も言わずにキーラをじっと見つめ出した。

「これ、何されてるの?私」

「ふむふむ、なるほどじゃ」

セルカはしばらくキーラの周りを歩きながら全身を舐めるように見たかと思うと、一人で何かに納得したように頷くとカウンターの武器から一つ選んで持つてくる。

「これなんかどうじゃ?持つてみ?」

「随分と細い剣ね」

セルカが持つて来たのはレイピアの様に細い刀身をした剣だが、刺突に特化している訳ではなく刃が付いているようであった。

キーラは勧められるままその剣を握って感触を確かめてみる。

「意外と重いわねコレ」

「そうなんじゃー！これはマジスト鉱石を使って作った特別製でな、この細さだが重さは鉄の二倍はあり、魔法耐性もあるからなんと！魔法も切れる…かもしれないのじゃ。マジスト鉱石は加工が難しくてなあ、ほんとは普通のレイピアを作るつもりだっ…たんじゃが、偶然刃ができてな」

キーラの反応に食いついて、早口で説明を始めるセルカ。てか今サラツと、かもしれないとか偶然とか怪しい単語口走ってなかった？

「キーラ嬢は剣士としても優れとるみたいじゃが、魔法適正もそこそこのもんじゃろ？」

「え、なんで知ってるの？」

キーラの適正を知っているかのように話すセルカだが、彼女の言っていることは的中している。キーラは剣術適正Aを持っていて同時に魔法適正もBある。これはなかなか珍しい事らしいのであまり人に言わないようにしていたのだが、あっさりで見抜かれたことに俺達も驚きを隠せない所に、シャバラが口を開く。

「彼女は魔眼保持者なんです」

「魔眼？」

どっかで聞いたことあるなと考えていると、ふと思いつく。そういえば、プリムも魔眼を持つて言ってたな。彼女の魔眼は魔力の流れを察知する事に優れており、そのおかげで相手の攻撃を予知できるとか。

「じゃあセルカも魔力の流れとか分かるの？」

「魔力の流れ？なんじゃそれ？」

俺の予想は外れたらしく、セルカは小首を傾げて自身の魔眼について説明を始める。

「あたしのは『真贋の魔眼』見たものの本質を見抜くことのできる魔眼なんじゃ」

セルカの説明では、その魔眼で人の適正やポテンシャルなんかを見抜けるらしい。

「すげー便利じゃん」

「じゃろ？だからキーラ嬢にはこの武器がぴったりと見た訳じゃ」

「キーラはその武器どうだ？」

「確かに今まで持った事ない感じだけど、なんかしっくりくるわね」

キーラは剣を何度か振りながらにこりと頷く。

「セルカ、この剣はいくらだ？」

「そうじゃなあ、マジスト鉱石は高いから金貨3枚つてとこじゃな」

武器を買ったことないから高いのか安いのか分からないが、予算から見ればちょうど三分の一だし、キーラも気に入ってるみたいだし、セルカが魔眼で見てこれがいいって言ってくれてるからな。

「じゃあこれ買おうよ」

「まいどありー！」

ついでにブレストアーマーと関節などに付ける防具を買って、セルカに金貨を渡すと、彼女は次のターゲットにクウを選んだようである。

「じゃあ次はクウ嬢じゃな」

はたしてクウに合った武具とはなにになるか。セルカはクウの全身をまたじつと見つめ出した。

漢のロマンのマジックロッド

「ふむ…」

セルカはクウをしばらく眺めた後、キーラの時と同じくカウンターに並べた数多ある武器の中から一つを取り出して戻ってくる。

「これなんかどうじゃ」

「これ、なんですか？」

クウが戸惑うのも無理はない、セルカが持ってきてクウに渡したのは、何かの金属でできていると思われる手のひらサイズの立方体だった。

「こいつは、あたし特製マジックロッドじゃ」

「ロッド…ですか？」

どう見ても杖には見えないが、どういうことだ？

「ふっふっふ、まあ物は試しじゃ。クウ嬢、このキューブに魔力を流してみ」

キューブって言っちゃってるじゃん。というツツコミは口には出さず、クウが言われた通り魔力を流し込むのを見守ることにすると。

「わっ！」

クウの驚く声と同時に、キューブがカタカタと小刻みに震えたかと思うと、ロボットアニメの変形シーンのようにみるみる形を変え、クウの背丈と同じ程の長さの杖に変形したではないか。

「なにそれかつこいいい！」

「じゃろ？」

俺が思わず漏らした感嘆の声にセルカは満悦したようで、無邪気な笑顔で鼻高々である。

「す、すごいですねこれ」

クウもこの物珍しい物に感動したようで、杖を高く上げて眺めてみたり、少し振ってみたりして関心を示している。その姿は、子供用の魔法少女おもちやで遊ぶ女兒にしか見えないが、かわいいから黙っていよう。

「これはな、中に液体魔晶が入ってるんじや」

「液体魔晶？初めて聞きます」

疑問の声に反応し、セルカは待つてましたと言わんばかりに早口で話し出す。

「よくぞ聞いてくれた！魔晶は本来マジックロッドの先に付けることで魔力の伝導率を高める効果があるんじやが、いかんせんロッドの先にあるせいでロッドを通す時にいくらか魔力がロスしてしまうんじや、そこであたしが偶然発明したのがこの液体魔晶じや。こいつは普通の魔晶と魔力の伝導率は変わらいなに液体であるという優れものじや。それにより本来ロッドを伝つて魔晶に魔力を注ぐ工程を無視し、てロッドの中にある液体魔晶に直接魔力を注ぐ事ができる奇跡の一品じや！それにな…」

この子は、あれだな。武具のことになると話が止まらないタイプのオタクだな。というかあんなに勢いよく熱弁してるのに、それを真剣な顔で聞いているクウも真面目だなあ。

「セルカ、また悪い癖出てますよ」

「おっと、すまんすまん」

話が止まりそうにないのを傍から見てみると、またシャバラが助け舟を出してくれた。

「でもセルカ、凄いのは分かりましたが、なぜ初めからロッドの形をせずにキューブの形なんですか？」

今度は単純に気になつたらしく、シャバラが質問する。

「それはな…」

「それは？」

「かつこいいいからに決まつとるじやろー！」

今日一番の渾身のキメ顔で言い放つセルカを呆れた顔で見るシャバラキーラ。

だが、これに関しては申し訳ないのだが俺はセルカぬ全くの同感であった。いいじゃない、不必要な変形にこそロマンが詰まつてるんじゃないか。

「そんな理由で一手間付けないでください。だからお客さん増えないんですよ。」

「でもでも、このキューブ状態から魔力を流すことによって、その人に合った長さのロッドに変形する様に設計するの大変だったんじゃないぞ?」

無駄にクオリティ高いな。

「そんな所にこだわるならもう少し、量産できるような武器を作れといつも言ってるでしょう?」

「……はい」

叱られた犬のように落ち込むセルカに、心の中で「俺は分かるぞ」と同意の念を送りつつ、クウの方に視線を向ける。

「私もこれ、なんだか気に入っちゃいました」

「お、クウ嬢!分かってくれたか」

「でも、ちなみにこのロッド、おいくらなんですか?」

値段は確かに大事だ、さっきのキーラの剣は金貨3枚の値段だったが、

「そうじゃな、金貨2枚つてとこじゃな」

「えっ!さっきの剣より安い?!」

俺とクウの声が同時に出る。

「これってすごいものなんじゃ?」

「そうだよ、こんなにかっこいいのに」

「かっこいい?」

つい口から出た「かっこいい」に反応してキーラに冷ややかな目線が注がれる。そんな目で見るなよ。男の子はああいうの好きなんだよ。

「いやー、実はその武器は多分二度と作れないんじゃない」

「作れない?なんで?」

「いやー、それは、そのーなんというか」

「それについては私から説明します」

歯切れの悪いセルカを見ていられなくなったのかシャバラが割って入ってくる。

「皆さんには説明が遅れてしまいましたが。この子は基本武器製作の過程でできる偶然の産物で武器を作ってるんです」

「なんだそれは、つまりは毎回奇跡的にこういう武器が作られる訳か？ギャンブルが過ぎねえ？」

「その為、性能はいいんですが、再現性のない一点物の武器ばかりが出来る訳です」

「それは、なんとというか」

「はい、商売としては破滅的ですね」

「そうだろう、それが本当ならたとえいい商品ができたとして、複数の人が同じ武器が欲しいと言っても買えないのでは商売にはならない。」

「ですが！本当に性能は確かなんです、その証拠に私の剣もセルカが作った物ですし…この子がポンコツなだけなんです」

「おい！誰がポンコツじゃ失礼な！」

「いや、別に疑ってる訳じゃないから大丈夫だよ」

「酷い言われように憤慨するセルカを片手で制止しながらも、彼女の事を思っただけで弁明するシャバラを見て、これは幼馴染というよりお兄ちゃんみたいだなと思いつつ、心配する必要がない旨を伝える。

「それに、俺はセルカの作る武器結構好きだし」

「ほんとか!?コウイチは分かってくれると思つとつたんじゃ！」

「あなたは社交辞令という言葉を知らないんですか」

二人のコントのようなやり取りを見て和みつつ、クウのマジックロッドの会計を済ませていよいよ俺の武器選びを始めようとセルカに体を見てもらっていると、

「ん？なんじゃこれ？」

「どうかしたか？」

セルカが何やら気になったような声を出したので聞いてみる。

「コウイチ、変な事を聞くようじゃが…お前さん神様と知り合いだったりするか？」

「へえ!？」

心当たりしかない事を急に問われて思わず変な声が出てしまった。

新装備

「その反応！本当にいるのか!？」

予想外な質問に変な声を出してしまったせいでセルカに詰め寄られる、しかしクレナの事は誰かにバレちゃいけない筈だからな。どうにかして誤魔化さねば。

「いないいない！いる訳ないだろ？」

「うーむ、何かこう神の加護の的な神々しいものを感じたんじゃが」

セルカはこめかみを人差し指で抑えながら口をへの字に曲げ、なんだか抽象的な言い方をする。

「そんなもの、あつたら嬉しいぐらいだよ」

本当にあつたら嬉しいけど、俺が困るのを見て楽しむようなあのクレナがそんなものをくれる訳がないしな。

「というかコウイチは今まで見てきた人とはどこか根本的に違う感じがするんじゃよな」

それはまあ、そもそも生まれた世界が違いますし。

「そんなことより、俺に合う武器分かった？」

「それなんじゃが…」

セルカは少し言いづらそうに言葉を溜めてから、

「分かん」

「なんで!？」

『真贋の魔眼』とやらで見てくれるんじやなかったんですか？

「いやー、なんか分からんがコウイチはあたしの魔眼で見てもよく見えないうんじや」

「それは、どうなの？」

「あたしもこんなの初めてじゃからなく。びっくりじや」

ははは、ととぼけた笑いを飛ばしながら頭をかくセルカ。「びっくりじや」じゃねーだろ

「じゃあ俺の武器どうやって決めればいい？」

「コウイチの適正教えてくれ」

「普通に聞くんかい！」

そんなわけで、魔眼で武器を決めるもクソも無いただ適正を教えておすすめの武器を持ってきてもらうという、普通の武器選びをする羽目になった。

「それじゃあ、これとかこれなんかどうじゃ？」

「お、これは…」

セルカが持ってきたのは指の部分は動きやすくするためか布の様なもので覆われて、金属部分は青色に染められた籠手と俺の持っている短刀よりやや長めの刀身を持った短刀だった。

そういえば、店に来る前シャバラにも籠手をおすすめされていいかもって思ってたんだよな。

「この籠手ってどういう特徴があるんだ？」

「普通の籠手じゃな。一応塗装で魔術耐性を少し高めてはいるが」

俺の時だけ説明内容薄くねっ!？」

「こいつはシャバラに言われて作った量産ができる籠手じゃからな」

こいつ、自分が作りたくて作ってないからあからさまに愛着ねーじゃねーか。

「じゃ、じゃあもしかしてこっちも？」

なんとなく嫌な予感を感じながら短刀の方を指差して聞いてみると、

「うむ、量産可能なやつじゃな。でも本来の短刀より刀身を少し長くすることで剣と短刀のハイブリッドって感じに仕上げた扱いやすいタイプじゃな」

やっぱりか。さつきクウのかっこいいマジッククロッド見た後だからどうしても見劣りしちゃうけど、まあ魔眼で見てもらえないんじゃないかな。俺も自分に合った武器とか欲しかったけどなあ。

「じゃあその籠手買うよ。後、この短刀の修理とかやってできる？」

籠手の代金は量産できるので銀貨5枚と比較的安かったので支払いをしつつ、自分の持っている短刀をセルカに見てもらうことにした。

この短刀はゴートに貰った物だし大事にしたいのだが、ここ最近度

重なる戦闘ですでにボロボロになってきていたので修理できるならしてもらいたい。

「ふむ なかなかいい短刀じゃな。これぐらいなら修理できるぞ」

「ほんとか！じゃあ頼んでもいい？」

「もちろんじゃ。修理代は銀貨2枚でいいじゃろ」

「それと、修理してる間はさっきの短刀を貸しといてやるから持つてっいいぞ。壊したら弁償じゃが」

セルカにお礼を言いつつ修理代を支払い、短刀を借りることにした。壊したら弁償なので、できれば使いたくないが無いと心許ないから腰に差しておくだけになりそうだな。

「いやー、久しぶりにこんなにお客さんが来たし、今日はいい日じゃ。コウイチの短刀も腕によりをかけて修理しておくから楽しみにしてくんじゃぞ」

今日の買い物で支払った金貨や銀貨をにやけた顔で見ながら喜びを隠せないセルカに別れを告げて、俺達は『骸狩り』の情報収集をするべく、探索者ギルドに足を運ぶことにした。

搜索開始！

「うーん、『骸狩り』：ですか、聞いたことないですね」

受付嬢のロゼルさんに「力になれずすみません」と謝られたが、ダメもとで聞いたことなので気にしないでくださいという旨を伝えてから今度はギルドの食堂に顔を出すことにした。

探索者仲間のシェイクに何か知っていたりしないか聞きたかったのだが：

「いないなあ」

どうやらタイミングが悪かったらしく不在らしい。普段なら昼間っから酒でも飲んでるのに。

「キーラとクウは誰か探索者に知り合いいたりするか？」

「いないわね」

「いないですね。すみません」

キーラに続いてクウも知り合いはいないらしい。うーん、なんとなく人見知りパーティー。

「ていうかキーラはよく話しかけられるんだから普段からもうちよつと愛想よくしてるよ」

「なんであたしが言い寄ってくる有象無象に愛想良くしなきゃならんいのよ」

「有象無象で…」

なんともお高くとまった元お嬢様である。

「話しかけてももらえなくてすみません」

「いやいや、クウは悪くないんだぞ？」

申し訳なさそうに俯いて謝るクウを宥める。クウの場合、話しかける奴がいたらそいつはもれなくロリコン認定されるから誰も話しかけないだけだと思うが。

「あたしの時と全然態度違うじゃない！ロリコン！」

「ロリコンじゃねーよ！それに態度が違うのはあれだよ…」

「なによ？」

キーラは今にも殴りかかりそうなほど目を吊り上げて俺に言葉の先を話すように促す。これは間違ったこと言ったら殺されるやつだな。よし、ここは覚悟を決めて。

「日頃の行い、とか？」

「あんた殺すわ」

「ちよつと待つてキーラさん!? 僕は試し斬りをする為の道具じゃありませんよ!」

さつき買ったばかりの剣に手を伸ばして襲いかかってくるキーラをシャバラとクウが抑えてくれていた間、椅子の影に隠れてガタガタと震えることしかできない自分が嫌になった。

「やはり足を使つて聞き込むしかないですかね」

キーラをなんとか落ち着かせた後、少し肩を落としながらそう呟くシャバラに同意しつつ、これからどうするか考えを巡らせていると：「あの、コウイチさん。サルビアさんに聞いてみるのはどうですか？」

クウのその言葉で思わず膝を打つ。そういえばこういう情報を知つてそうな奴を俺は知っていることを思い出す、どこから仕入れてきているのか分からないが信用できる情報屋サルビアを。

「その手があつた。さすがクウ天才か？」

「えへへ」

頭を掻きながら照れ隠しをするクウを褒めちぎつて、シャバラ、それとキーラも会つたことがないので二人に俺が個人的に情報を教えてもらつているサルビアの事を説明した。

「なるほど、その方なら期待できるかもしれませんね」

「ああ、だからもう一度コルト亭に戻つてサルビアが来てるか見に行こう」

俺の提案にシャバラは「ですが」と横槍を入れて続ける。

「これ以上四人で行動して無駄足になるのも非効率ですし、ここは二手に分かれましょう」

「二手？」

「はい。コウイチさんとキーラさんでそのサルビアさんに会いに行つ

ている間、私とクウさんで街の方に聞き込みをしておけばいいかと
なるほど。それはいい考えである。しかし一つ気掛かりなのは、

「その分け方には何か意図が？」

「いえ別に、適当に決めました」

まあ、これ以上とやかく言うともたキーラに襲いかかられんな。

「分かった。じゃあその二手に分かれよう」

ということ、サルビアに会いに行く俺・キーラ班と街で聞き込み
のシャバラ・クウ班で三時間後に探索者ギルド前集合と相なった。

「それじゃあ三時間後にな」

「あ、コウイチさん」

「ん？」

シャバラ班に別れを告げようとした時、シャバラが近寄ってきて耳
元で囁く。

「さつきは適当に決めたとはいいましたが、あれは嘘です。キーラさん
のご機嫌を取ってあげて下さいね」

そう言つて、爽やかにウインクまでして去っていくシャバラ。いら
ん気を使いおつて、この元お嬢様は扱いが難しいからクウに任せてお
いた方が丸く収まるのに、と内心毒づきながらキーラと二人コルト亭
へと向かう。

しかし、シャバラの言うことにも一理ある。ここは一つご機嫌取り
しておくか。コルト亭への道中、キーラに話しかけてみる。

「キーラ、いやキーラ様」

「なによ。急に畏まって」

「怒ってます？」

「…………怒ってないわよ」

ホッ。良かった。なんだあんまり怒ってないじゃん。ただの取
り越し苦勞だったか。

「怒ってないけど、一つ約束しなさい」

「はっ！なんなりと」

「これからはあたしにもクウと同じような態度で接しなさい」

なんだそれは？よく分からんが、

「あれか？クウにしてるみたいに頭などでとかして欲しいってこと？」

「あんたやっぱ死にたい？」

「嘘です嘘です！だから剣に手を伸ばすのやめてください！」

「もういいわ。あんたに期待したあたしが馬鹿だわ」

キーラは少し抜いた剣を鞘に納めながらため息をつく。なんか俺勝手に失望されてる？

「あの一、結局私はどうしたらよいの？」

「どうもしなくていいわよ。馬鹿はいつも通り馬鹿でいればいいの」

そう言うと彼女は呆れたように微笑を零す。

女の子が考えてることは、よく分からんが機嫌は良くなったみたいで一安心だな。

そうこうしているうちに、コルト亭はもう目の前に迫ってきていた。

路地裏

コウイチ達がコルト亭へ向かっている時、探索者ギルド前にて、

「さて、では我々も聞き込みに行くのでしょうか。クウさん」

コウイチさん達と別れた後シャバラさんに言われるまま、私達は街へ聞き込みをしに歩き始めた。

いつもお話しはコウイチさんに頼りきっているせいで、あまり知らない人と行動するのは初めてで緊張するけど、頑張らなければ！

「どこから行きますか？」

「そうですね。まずは街の人に最近何があったか聞いてみますか」

シャバラさんが言うには、どんな些細なことから事件に繋がるか分からないから、騎士団は普段から街の人と会話して情報を集めているらしい。

そのおかげで街の方からあんなに慕われているんですね。素晴らしい取り組みです、きっと騎士団長さんはこの王都を大事に思っただけでしょう。この間ギルドで会った時は、少し怖い人かと思いましたが…

騎士団の方達の日頃の行いに感心しつつ、シャバラさんについて行き街の方達に話を聞いて回ってみたが目ぼしい情報は手に入らなかった。

「やっぱり簡単には分からないですね」

ため息混じりに悩むように中空を見つめるシャバラ。

「すみません。わたしも大した役に立たず」

「いえいえ、私もダメでしたし、クウさんのせいではないですよ。こういうのは根気が大事ですし、何も無いということは平和ということですからね」

慰めるようにそう言ってくれるシャバラさんは、少し考えるように俯いた後、「あそこならもしかすると」と呟く。

「あそこってどこですか？」

「街の各所にある路地裏です。そこならよからぬ事を企む連中も集まりやすい場所なので、ですがあそこは…」

「何か問題があるんですか？」

「はい、言ったとおり不良の溜まり場となつていたので、女の子が行くにはいささか危ない場所かと。我々騎士団も嫌われているので…」

私の質問に、少し言いづらそうに危ない場所だと告げるシャバラさん。

ここクエス王都には多くの民家や商店が建ち並ぶ、その為その建物の間だつたりには路地裏が数多く存在する。

「だけど、私が一緒だから行けないなんて迷惑はかけられません！」

「私なら大丈夫です！これでも探索者ですから危険は慣れっこです！」

出来る限りの自信に満ち溢れた表情でシャバラさんに問題がない事を伝える。本当は普段、コウイチさんが私やキーラちゃんを心配して薬草採取しかしていないので危ない依頼なんてやった事ないですが…

「では行きましようか、くれぐれも私の傍を離れないで下さいね」

「はい」

私の言葉で納得してくれたのか、シャバラさんは「こっちです」と言つて路地裏へと向かつて歩き出す。おそらく人が屯している場所を把握しているだろうシャバラさんについて行くと、しばらく歩いた所でふと立ち止まる。

「ここから行ってみますか」

シャバラさんが見る先には民家の間から入つて行く路地裏へと続く入り口がひっそりとあった。ただ道を通つて行くだけの人は目も向けない。そんな表の通りからは別世界へ繋がっているような感じがした。

「では、行きましようか」

「…はい」

路地を進んで行くと少し開けた空間に出た、どこを見ても家の裏側

である壁に囲まれたその場所にはいくつかのグループがそれぞれ違う場所で話したり、何かを受け渡してお金を貰ったりと思いいいにごしているようである。

「おい、あいつ」

「騎士団様がこんな所に何のようだ？」

「なんだあのガキ？」

そんなあからさまに怪しい人達が集まる所に騎士団の服を着た人物と子供が一人入ってこようものなら、彼らは当然警戒と疑いの色の濃い目を向けてくるわけで。

すっごい見られてる。こ、怖い。

「おい、ここはおめーらみたい奴らが来る所じゃねーぞ？道間違えたんなら帰んな」

こちらを見ていた人の一人が、私達に敵意剥き出しに話しかけてくる。

「私達は何も君達を捕らえにきたわけじゃないですよ。そんなに邪険にしないで下さい」

「ああん？じゃあ何しにきたんだよ」

ガタイのいい男はシャバラに鼻がつきそうになる程顔を近づけて詰め寄る。

「誰か『骸狩り』についての情報を持っている方がいたら教えていただきたいんです」

笑顔を崩さずに淡々と喋り続けるシャバラさん。この人よく変えずにいられるんだろう。私は怖くてついシャバラさんの後ろに隠れてしまった。

「知らねえなあ『骸狩り』なんて、知ってたとしても騎士団なんかに教えるわけねえだろ。失せろ」

「まあまあそう言わずに、教えていただければ多少は何かお返しできると思うのですが…」

シャバラはポケットから巾着袋を取り出して軽く振ってみせる。袋は動いたたびにジャラジャラと音を鳴らして男に少なからずの金銭が入っている事を伝える。

「……で、何が知りたいんだ？」

金の魔力に眩んだ男は鼻をならしてシャバラに質問を続けるよう促す。

「ありがとうございます。聞きたいのは『骸狩り』のアジトの場所と幹部が根城にしている場所なんです……」

「たのもー！ー！！！！」

シャバラが男に質問をしようとした時、突然路地裏の空間に透き通る高い声が響き渡る。

誰もが突然の大きな声に驚き、声のした方に目を向ける。

そこにいたのは、淡い紫の色をしたミディアムロングの髪をおさげにしてくりつとした目が特徴的な女の子が腰に手を当てて堂々と立っていた。

「なんだテメー！でけー声で喋ってんじゃねーぞー！」

不良の一人が彼女に向かって近づいて啖呵を切る。

「やかましいのはお前だ！」

「げえっ！」

近づいてきた男の鳩尾に、彼女は迷う事なくパンチを打ち込み、男は腹を押さえてその場にうずくまってしまふ。

「誰か『骸狩り』のカリムって奴に会いたいんだが、誰か知ってるか？」

紫髪の女の子は、路地裏にいる全員に聞こえるように大声で質問する。

突如現れた女の子が私達と同じ『骸狩り』を探している事に驚きつつ、仲間がやられた事で路地裏全体に緊張感が増すのを感じた。

「これ、まずい雰囲気じゃないですか？」

スイレン

「さあ、さっさとカリムの居場所を教えな」

突如現れ『骸狩り』のカリムを探しているという謎の少女の出現に、路地裏にいた全員が動揺を隠せないでいた。

「テメー、よくも俺のダチを!!」

「当て身ッ!」

「ごほッ!」

先程、少女に殴り顔された男の友人らしい男が激昂して殴りかかるも、少女は涼しい顔のままパンチをひらりと躲しながら首に手刀を入れると男はそのまま地面に伏してしまう。

「あいつはあんたらの仲間か?」

先程までの一連の騒動を見て私達が情報を聞こうとしていた男の人が敵意に満ちた目でこちらを見て聞いてくる。

「ちち、違います!知りません!」

「そんなに動揺してるところを見るにますます怪しいなあ!」

「待って下さい!私達は本当に彼女の事は知りません」

「おいお前ら!こいつらもその女のグルだぞ!」

「あわわわっ」

私を取り乱したせいで、シャバラさんの説得虚しく私達もあの少女の仲間だと思われるってしまったようで、あつという間に5人の不良に取り囲まれてしまう。

「これは、戦うしかないみたい、ですね」

「は、はい!」

腹を括つたらしく、腰の剣を鞘に差したまま構えるシャバラさんの後ろに付いて、さつきコウイチさんに買ってもらったマジッククロッドをキューブ状態から展開して私も構える。

覚悟はしてたつもりですけど、やっぱり怖いです!私、実はまだ攻撃魔法覚えてる途中なんです!

「みんなやっちまえ!」

「はあ！」

一人目がナイフを取り出して走って走るとシャバラの剣は滑るように相手の首を直撃して、男は空中で一回転して地面に落ちる。

「テメー！やりやがったな！」

「おらあ！」

今度は二人がかりでシャバラさんに襲い掛かる不良達。片方は鉄の棒を持ち、もう片方はナイフを持っている。

「ふっ！」

シャバラは振り下ろされた鉄の棒を素早く受け止めると、もう一人に蹴りを入れて退かせた後鉄の棒を押し返して胴に横振りを入れる。

「チツ、先にこっちのガキやるぞ」

「ひっ！」

シャバラを倒すのは厳しいと判断した不良二人がクウに標的を変え向かってくる。

『バインド』！

「がつ!?何だこれ！」

このマジックロッド凄い。今の『バインド』発動からほとんどタイムラグがなく出た。

「ガキが舐めやがって！」

クウがマジックロッドに関心している間、拘束魔法で一人は身動きが取れなくなりその場で止まるがもう一人はクウに向かって猛然と駆け寄ってくる。

「とうっ！」

「ふん！」

「ぐはあ!？」

クウまで後一步の所で紫髪の少女の飛び膝蹴りとシャバラの一閃が不良の顔と胴に直撃し、男は空中で数回転して落ちる。

「大丈夫ですかクウさん！」

「はい。ちょっとびっくりしましたがけど、それよりあの子……」

心配そうに聞いてくるシャバラさんに返事をしながら少女の方に目をやる。

「あんたらはこいつらの仲間じゃないみたいだけど、なんなんだ？」
「なんなんだじゃないですよ。あなたのせいで貴重な情報を聞き損ねたでしょう！一般人も巻き込んで！」

随分と気の抜けた言い方で話す少女に大人しそうだと思っていた
シャバラさんも少し声を荒げる。

「うるせーな。別に誰も怪我してないんだからいいだろ？なあ？
そのガキンチョ」

「はい!?私ですか？」

ガ、ガキンチョって言われた。見たところそんなに歳に差はなさ
うなのに…やっぱりわたし子供っぽいのかなあ、シヨックです。

「怪我がなければいいというものじゃありません。それよりなんで
あなたは『骸狩り』を探してるんですか？」

「ああ、そういえば自己紹介もしてねーな。あたしは【スイレン】
ロンシャ王国から来たんだ」

ロンシャ王国というところからどうしてクエス王国に？
と何かの本で読んだ気がする。

「ロンシャ王国なんて遠いところからどうしてクエス王国に？」

「師匠に言われてうちの流派の後継者探しで世界中旅してんだ。たま
たまこの国で『怪腕』って二つ名で呼ばれてる強い奴がいるって聞い
てさ。そいつを追ってたら『骸狩り』って組織に辿り着いたってわけ
よ」

一人でそこまで調べるなんて、この子案外凄いや。

「どうやって調べたんです？」

シャバラさんが当然の質問を投げると、スイレンは満面の笑みで答
える。

「こういう路地裏片っ端から回って、全員ぶっ飛ばして聞いてきた」

前言撤回です。この子危ない子です。その殺伐とした説明を笑顔
でしているのが余計怖さを増幅させてます。

「今すぐにも庁舎に引っ張って事情聴取したいところですが、今は
あなたのような暴力犯にかまっている時間はありません」

「誰が暴力犯だよ！あたしが殴ってるのは先に殴ってきた奴だけだ

！」

それでも十分駄目だとは本人に言える筈もなく、ただ二人の口論を眺めることしかできない自分が嫌になります。

「それより、今はあいつです」

シャバラは、突つかかってくるスイレんに黙るように言うと、拘束魔法を外そうともがく力も無くなったらしくぐったりとしたまま直立で縛り上げられている不良に目を向ける。

「たしかに、こいつならカリムの居場所も知ってそうだな」

「部外者は入ってこないで下さい」

「テメーらこんな事してタダで済むと思うなよ！」

こちらが見ている事に気付き、また暴れ出した男を尋問という名の暴力を振るう気満々のスイレんにシャバラは厳しく告げると、男に近づいていき朝コウイチにした時とは全く別の、見る者に恐怖を覚えさせるほど嘘っぽい笑顔で話しかける。

「少しお話を聞きたいのでご同行願えますか？」

「……………はい」

シャバラの顔を見たクウは、この人も怒らせないようにしようと思っただけ震えていた。

女王様

「サルビア？ああ、あの怪しい人ね。今日はまだ見てないけど」

コルト亭に戻ってシャロットにサルビアが来ているか質問してみて返ってきた返事である。

「うーん、…どうしたもんか」

「考えるふりして寝ようとしなさい！」

「いでっ」

食堂のテーブルについて顔を伏せながら話すと寝ようとしていたのがバレたらしくキーラに後頭部を叩かれる。

昨日の晩から、ろくに寝てないせいでいい加減に眠気が限界である。

「んな事言っただって、サルビアさんがいないんじゃ話にならないだろう？来るのを待つぐらいしかできないじゃない」

「それはそうだけど、サボろうとしないの」

少しでも瞼を閉じようものならすぐにでも鉄拳が飛んできそうなので、大人しく座り直してからシャロットに料理を注文してサルビアを待つ事にした。

「あっちの二人、上手くやってるかしら。クウって人見知りだしちよっと心配ね」

「大丈夫だろ クウはああ見えてしっかりしてる子だし、シャバラも変な奴じゃないから」

しばらくはクウ達の心配をしながらご飯を食べて時間を潰していると、コルト亭の入り口が開いて髪の毛の長い怪しい雰囲気を纏った男が一人入ってくる。

「いやー、待たせちゃったみたいだねコウイチ君」

それは髪の毛のせいで目元は見えないが、口元は笑みを浮かべてこちらに話しかけてくるサルビアだった。

「なんで待ってるって知ってたんだ？」

「なんとなくだよなんとなく」

相変わらず何を考えているのか分からない様子ではぐらかすサルビアだったが、待っていたのを知っていたのなら話は早い。

「早速んだけどサルビアさん。俺達『骸狩り』のアジトと幹部の居場所を探してるんだけど、なんか知ってたりしない?」

「もちろん知ってるよ」

「じゃあ…」

さすがというべきか、知っているとと言うサルビアに情報を聞こうとすると手の平を突き出されて制止される。

「ただし、教えられるのは『妖香』の二つ名を持つカシユームの居場所だけだね」

「それ以外のやつの情報は?」

「残念ながら持っていないだよ。すまないね」

残念ながら『骸狩り』全ての情報は手に入らなかったが幹部の一人の居場所は知っているのでそれを聞く事にする。

「報酬はいつも通り、またお酒でもご馳走してくれればいいよ」

「いつも悪い」

「それじゃあ教えるけど、カシユームはもうじきどこかに移動してしまふと思うから場所を聞いてらすぐにでも向かったほうがいいよ」

そう前置きしてから教えられたカシユームの潜伏場所は、ここからギルドとは反対側に位置する場所の路地裏らしい。

確かに王都って入り組んでるから路地裏なんかは潜伏場所に向いてるかもなどと思いつつ、急いだ方がいいらしいのでサルビアに感謝をしながらキーラと一緒に足早にコルト亭を出た。

「聞いた感じだと、この辺りか」

「手分けして探すのも危ないし、一緒に路地裏回っていくわよ」

サルビアに教えられた場所は路地が入り組んでおり、行きたい場所に行こうとしてもどこを通ればいいのか分からない程だ。

キーラと路地裏の迷路を探索していると、明らかに悪そうな人相をした連中が屯しているらしい広場を見つける。

「あそこか?」

「どうかしら カシユームって奴を見つけないきゃよね」

少し離れた曲がり角から広場の様子を伺ってみると…

「うーん、みんなちよつと頑張り足りないんじゃない?」

「す、すみません!」

男ばかりの溜まり場で珍しい女性の声が出たと思うと、その女が座って話しているのに対して五人ほどの男達は立ったまま全員頭を下げて謝罪していた。

「……なんだあれ」

「こつちが知りたいわよ」

見たところ女王様と家来といった風に見えるが…

「あいつがカシニウムか?」

女王様風の女は体のラインが強調された服を着ており、正直目のやり場に困るが、歳は見たところ二十代後半と言ったところで大人の女性の雰囲気のでている。

「……エロいな」

「は!? あんた、あんなのがいいわけ!」

「違う違う! ちよつと思っただけです!」

キーラからの軽蔑の眼差しを感じながら、気を背けるように広場の方を見直すと…

「なにか匂うねー。私と違って美しくない匂いがするー」

空中の匂いを嗅ぐ仕草をした後明らかに俺とキーラが隠れている方を向いてきた女と目が合ってしまう。

「見つけたー。みんなあの子達捕まえてきてー」

女の一言で、男達はこちらに向かって一斉に駆け出してきた。

「なんかこつち来た!」

「逃げてどうすんのよ!」

つい逃げ出そうとした所をキーラに襟首を掴まれて止められる。

「さつさとあいつら倒してあの女もとつ捕まえるわよ!」

やる気満々で買ったばかりの剣を抜いて臨戦体勢をとるキーラを止められるわけもなく…

「やるしかねえか」

俺も拳を構えて走ってくる男達を相手することにした。

もうどうにでもなれってんだ！

V S. カシユーム？

『正拳突き』！

「うぐつ！」

人が横に二人並ぶので精一杯の狭さの路地で、一心不乱に突進してきた男の顔に真正面から拳を放つと、籠手を着けているおかげもあつてか簡単に一人を殴り倒す。

「ヨクモ、仲間を！」

一人を倒したせいで後ろに控えていた男達が声を上げながら細い路地に流れ込んでくる。それにしても全員目が血走つてて言葉遣いも片言で怖いんですけど！

「うらあ！」

「キーラ！」

「分かつてるわよ！」

次に向かつてきた男は握っていた剣を振り下ろす形で突進してきたので、すぐさま体勢を低くしてキーラに剣を受けてもらう。ガキんと刃同士のぶつかり合う音が聞こえてキーラと男の動きが止まったところで男の腹に低い姿勢からアッパー気味のパンチを打つ。

「ぶっ！？」

綺麗に鳩尾に入ったパンチで男は口から空気が漏れる声を出しながら膝から崩れ落ちる。

残る暴漢は後三人。

「コロス！」

「任せなさい！」

激昂している男達に向かつて言葉と同時に駆け出したキーラは、素早い身のこなしであつという間に一人の男の懐に入り込み剣の柄で顎を下から突き上げると、続け様体を捻りながら回転させ後ろにいる男のどうに刀身を振り抜く。

「ぶっ！？」

「があ！？」

「こ、殺してないよな？」

「大丈夫よ。ちゃんと剣の腹で叩いたから」

あつという間に男二人をのしてしまったキーラに少し怯えながら声をかけてみると俺の心配などどこ吹く風といった様子で剣を肩にかけながら余裕で話すキーラ。

「やっぱりこの剣いい感じね。気に入ったわ」

「ユルサンー」

新しくした剣を眺めながら軽口を叩くキーラの背後から残った一人の男が短刀を振りかぶって襲いかかる。

「危ない！キーラ！」

男とキーラの間に入って左の籠手で短刀を受け止めてから右で男の顔に一発。

運良く相手の顎に当たった拳はゴツと鈍い音をさせたと思うと男は声も無く崩れ落ちる。

「余所見すんな！危ないだろ！」

「わ、分かっているわよ！」

あいかわらず危なっかしい元お嬢様はさておき、これで取り巻きは倒したし後はあの女がカシユームかどうかの確認だけだ。

「あれー？もしかしてあの子達倒されちゃった？」

広場に出ると、つまらなそうに欠伸をしていた女は俺達が路地から出てきたのを見て驚いた顔をする。

「あんたがカシユームか？」

「あれ？どこかで会ったことあるっけー？確かに私はカシユームだよ」

随分と呑気な話し方で答える女はあっさりと自分がカシユームであると認めた。

それにしても、この辺なんだかい匂いがするな。

「だったら話が早いや。黙って捕まってくれないか？」

「えー？どうしよっかなー」

「コウイチ こんなふざけた女さっさとふん縛って連れていけばいいのよ」

カシユームの話し方に痺れを切らしたらしいキーラは剣を構えてすぐにでも飛びかかりそうだ。

「いや、穏便に済ませられればそれでいいだろ」

「かわいい坊やの為に付いて行ってあげたいけど。お姉さん忙しいんだー。ごめんね?」

唇の前で指を立ててウインクをするカシユームに、齒軋りをしながら苛立ちを隠しきれないキーラ。

うーん。やはりこの人、どことなくエロいな。実は聞いてたほど悪い人じゃないんじゃない?

「一緒に来る気がないんなら無理にでも連れてくだけよ。行くわよコウイチー!」

「ああ、ウン」

「…コウイチ?」

そうだよ。やっぱりこの人が悪い人だなんて思えない。俺が守らないと。

「ちよっ!?あんた、なんでその女の横に立ってんのよ!」

「カシユームサマ、オレガマモル」

「はあ!」

「あははっやっつと効いたみたいねー」

カシユームはコウイチとキーラを見ながら面白そうに高笑いをする。

「どういう事よあんた!コウイチに何したの!」

「さあー?なんでしようー?」

カシユームは素知らぬ顔でとぼけてみせる。

私の『妖香』の匂いを嗅いだ異性は精神操作の魔法にかけられるのよー。ま、このお嬢さんには分からないだろうけど。

「じゃあー、コウイチくん?この子倒しちやっつてー」

「ハイ、ヨロコンデ」

「喜ぶなー!」

コウイチが拳を構えるの見てすかさず剣を構えるキーラ。

コウイチのバカ!敵の女に惑わされるなんて、斬られても文句言わ

ないでよね！

次の瞬間、操られたコウイチがキーラに向かって駆け出す。

V S. コウイチ

「カシユームサマ、バンザイ！」

「知らない女に鼻の下伸ばしてんじゃないわよ！」

心ここに在らずといった表情のまま次々と拳を繰り出すコウイチに声をかけながら攻撃をいなすことしかできないキーラは迷っていた。

このバカ、意外に強いわね。気絶させるつもりで加減して斬りかかっても籠手で弾かれるし…どうしたもんかしら。

「カシユームサマ、チョウゼツビジン！」

カシユームサマ、エロカワイイ！」

目から生気が失われ、半ばグールのように呻きながら殴りかかってくるコウイチ。

あの台詞、あの女が言わせてるなら趣味悪いわね。

しかし、ほんとにどうしようかしら。本気で斬ればスキルで攻撃避けられないコウイチは倒せるだろうけど、今はクウがないから治療できないし…

「あれー？、もしかして諦めてくれた？」

「諦めてないわよ！あんたなんかすぐとっ捕まえてやるから覚悟しなさいー！」

コウイチを相手に攻めあぐねているキーラを手近な木箱に腰掛け足を組んだ上に肘をつきながら恍惚の表情を浮かべているカシユーム。

はー。やっぱり私の『妖香』^{パフューム}で男を操ってアベックの仲を引き裂くのはいつやっても気分がいいわあー。

カシユームは他人の幸せを容認できないタイプの人間だった。

この後はどうしようっかなー。目の前で彼氏と私がキスしてあの小娘の精神をズタズタにしてやろっかなー。大体ついこの間産まれましたってぐらいのガキが一丁前に男作ってんじゃないわよねー。

カシユームはどうしようもないほど他人の幸せを容認できない人間だった。

「戦わないのなら帰ればー？コウイチ君は私に夢中みたいだしー？コウイチくん。私とキスしちやおっかー」

「カシユームサマト、キス、シマス」

コウイチはカシユームに言われるがまま彼女のそばに寄り、腕を伸ばして顔を近づけ……

「もうあんたに慈悲は必要ないわね」

キーラはその一言と同時に一切の躊躇なくコウイチの顔に剣を振り下ろす。

「カシユームサマ、アブナイ！」

「甘いのよ色ボケコウイチ！」

コウイチはキーラの攻撃に瞬時に反応し、籠手で受け止めようとするも、彼女の太刀筋は籠手に当たる直前で軌道を変え、コウイチの腕をすり抜けて肩から真下に向かって斬り下ろされる。

「ガアッ!？」

その光景を目の当たりにして、カシユームは困惑を隠せずにいた。

「こんの小娘！ほんとに自分の彼氏斬りやがった！」

「次はあんたよ！」

「ぐっ！」

キーラは振り下ろした剣を切り返すようにすぐさまカシユームに向かって斬りあげるも寸前の所で短刀に防がれ鏢迫り合いの形になる。

「大事なボーイフレンドに手を上げるなんてどうかしてるんじゃない?」

「こんなの彼氏でもなんでもないわよ！」

「くっ！」

語気を強めながらジリジリとカシユームを追い詰めるキーラだったが、押し切る直前に弾くように横っ跳びで鏢迫り合いから抜け出される。

「逃げんじやないわよ。さっさと斬ってしよっぴくから」

「随分イカれた小娘だつて事は分かったわー。でも私、忙しいから今日はここまでかなー」

一步、また一步とゆっくりキーラから距離を取ったかと思うと、胸の谷間から手のひらサイズの水晶玉を取り出した。

あれは、魔封晶？まずい！逃げられる！

キーラが魔封晶に気付いてカシユームの動きを止めようと動き出した時には、彼女は魔封晶を地面に向かって投げつけようと振りかぶっていた。

魔封晶はカシユームの手を離れ、地面に叩きつけられて音を立てて割れる……はずなのに、いつまで経っても魔封晶の割れる音はしない。

「あなた誰よ!？」

「悪いが、逃すわけにはいかないのでな」

そこに現れたのは、地面に着く前に魔封晶をキャッチして、のそりと立ち上がる茶色い肌の大男、『宵の手』のメンバーのグレゴリだった。

嵐の前

「さて、じゃあ『骸狩り』について知ってる事を全部吐いてもらいましようか」

ここは騎士団庁舎の取調室。机を挟んでシャバラと向き合う形で座らされているのは捕まった不良の男。

「それ、教えたらくここから出してくれんのかよ？」

「そうですね。教えてくれたら私達を襲った事は不問にしましょう」

目を逸らしながら僅かな抵抗とばかりに外へ出してくれと言う男は、悠然とした態度で笑うシャバラの瞳を見て背筋が凍るのを感じた。

こいつ、目の奥が全然笑ってねーじゃねーか。

「どうかしましたか？」

「い、いや」

目は笑っていないのに優しい口調で話すシャバラに、言いようのない恐怖を感じた男は口を開いて知っている事を話し出す。



「いやー、それにしてもクウ。お前かわいいなー。こんなかわいい子見たことないぞー？」

「へっ!?そ、そうですか?えと、ありがとうございます?スイレンさんも美人だと思いますよ」

「いいこと言ってくれんじゃん!ーよーしよし」

取調室から少し離れた庁舎内の別室にて、シャバラにここで待つよう伝えられたスイレンとクウだったが、次から次へと話しかけてくるスイレンにたじろぎながら頭をぐしゃぐしゃと荒く撫でられるクウの姿がそこにあった。

「ところでスイレンさんは、武術の後継者を探してここまで来たんですよね?」

「そうだぞ」

ボサボサになった髪を少し整えながら、話を逸らすために逆にスイ

レンに質問することにしたクウ。

「じゃあ、そのカリムって人が後継者の素質を持ってたらどうするつもりなんですか?」

「そりゃあ、ふん縛って国に連れてくたろ」

「でも、カリムはこの国で悪い事をしてる犯罪者なんですよ?」

「その辺は大丈夫!我らが武術【崩山拳】ほうざんけんの修行を積んでる内に身も心も鍛えられるから、マスターした頃にはあたしみたいな立派な真人間になつてるよ!」

情報を集めるために片っ端から殴って話を聞いているスイレンとお立派な真人間と言えるのか疑問に感じるクウだったが、スイレンに直接は言えない。

「でも、騎士団の人達はカリムを捕まえたらスイレンさんには渡してくれないと思いますけど…」

「なに!?…でも言われてみれば確かにそうだな」

スイレンは少し考える素振りをしたかと思うと、「よし!」と立ち上がり、

「じゃあ、あたしはあたしでカリムを捕まえるから早い者勝ちだな!」

「え!?!」

それだけ言って部屋から出て行ってしまい、部屋にはクウだけが残った。

い、行っちゃった。嵐みたいな人でしたけど、止めた方がよかったですでしょうか。止める間もなく行っちゃったけど…。

「すいません。お待たせしました」

部屋でスイレンが出て行ったドアを呆然と見ていると、そこからシャバラが戻ってきた。

「おや?スイレンはどこですか?」

シャバラにスイレンが出て行った旨を伝えると、

「あの女も縄で縛っておくべきでしたね」

片手で頭痛をがするように頭を抱えて呆れるシャバラだったが、気を取り直して取り調べの結果を伝え始めた。

「話を聞いたところ、いくつかのアジトの場所とカリムの居場所が分

かりました。アジトには他の騎士を向かわせたので、我々はカリムの所に数人の騎士を連れて向かいました」

シャバラがいうにはカリムは捕まるリスクを下げるため拠点を転々と移しているらしいのでコウイチ達を待つより、先に自分達で捕まえに行くのが先決とのこと。

「では行きましょう」

簡潔に説明を終えると三人の甲冑を着込んだ騎士達と共にカリムが潜伏しているというクエス王国の南西部に位置する居住区へと向かうことにした。

V S. カリム

「取調べた男に聞いた情報だとあそこの家ですね」

シャバラの見る先は数多く建ち並ぶ普通の民家の一つだった。

「思ってたより普通ですね」

「まあ目立ってたら逆に怪しいですから外見はあくまで普通の民家を装ってるんでしょう」

「どう攻め込みますか？」

「男ならやっぱ正面突破じゃねーか？」

家から少し離れた所で様子を伺いながらシャバラに質問すると突然後ろから知らない声が聞こえた。

振り返るとそこには見たことのない大男が立っていた。着ている服は至る所が破れており、そこから見える体には古傷が無数に付いているのが見てとれた。

「来るならアポ取ってもらわねーとなあ？」

大男は騎士二人の兜を両手で掴むと地面に向かって勢いよく叩きつける。

叩きつけられた騎士は声も出さずに動かなくなってしまう。

クウはその一瞬の出来事に立ちすくむことしかできなかった。

「貴様！よくも！」

「よせ！」

同僚をやられたことでパニックになり、闇雲に剣を抜き大男に斬りかかる騎士をシャバラが制止しようとするも時すでに遅く、感情的に振るった剣は簡単に躲され鎧をもともしないボディীবローをくらって吹っ飛んでしまう。

「おい、なんだ？」

「え、人が倒れてるわよー！」

流石にここまででの出来事で周囲にいた通行人が異変に気付いて声を上げる。

「クエス王国が誇る騎士様がこの程度とはなあ。ちよつと残念だぜ」

「君がカリムか？」

シャバラは手でクウを後ろに下げながら剣を構えて大男に問う。

「そうだけど、お前は誰だよ？」

「クエス王国副騎士団長のシャバラだ。大人しく投降してくれると助かるんだが」

「ぎゃっはは！それ言って付いてくやついんのか？」

カリムはそういうと人の顔程はありそうな大きな拳をシャバラに打ち下ろす。

「はあー！」

振り下ろされた拳を剣の腹でいなすとそのまま流れて地面についた拳は舗装された道路をいとも簡単に砕く。それに怯むことなく剣を振るうシャバラ。

「よつと」

カリムは完全に体勢を崩した状態で振るわれた剣をいつの間にかバックステップで避ける。その巨体に似つかない身軽さに、シャバラも驚愕する。

「副騎士団長サマの剣もこの程度か？」

「少し驚きました、ですけどそこまで騎士団を愚弄されたら黙ってはおけないかな」

剣と拳を構え直し対峙する二人に一瞬の静寂が流れる。

先に動いたのはシャバラ。滑るような大きな一歩でカリムとの距離を詰め剣の間合いに入る。

居合の形で左の腰の鞘側から流れるように振り抜く。

『硬腕』

カリムはその剣を生身の腕で受け止め、刃を皮膚すら傷つけず止めてしまう。驚きを隠せないシャバラを見てにやりと笑い、空いている左腕でシャバラを殴りつける。

「ぐっ!？」

シャバラは間一髪腕を畳んでガードするもするも、あまりの力に体が浮いて吹き飛ぶ。

「はっはー！まだまだあー！」

『バインド』

「む？」

ここぞとばかりに追撃をかけに行くカリムを地面から伸びる光る縄が絡みつき動きを止める。

「大丈夫ですか！シャバラさん！」

マジックロッドを掲げたクウが呼びかける。

「助かりました」

シャバラは大丈夫だと返事をするも、だらんと下に伸びた右腕を押しさえながら立ち上がる。

（折れてはならないのだが、しばらく使えないかもな…）

自分の腕を触りながら感覚を確かめる。

「なんだかこの場に似つかわしくないガキがいると思ったら魔法使いか」

カリムはクウの方に目をやり首を一回鳴らす。

「先に潰しちまうかあ？」

「ひっ」

カリムに睨まれたクウはその目から飛ばされた殺気に喉から空気を漏らす。クウが一瞬怯んだのを見たカリムは巻きついた縄を力任せに引きちぎると、クウに向かって勢いよく駆け出す。

『アゲインスト』！

「む!？」

すぐさま気を取り直したクウが放った魔法で、カリムに強烈な突風が吹き動きを鈍らせる。その間にシャバラがクウに近づき守りを固める。

『ヒール』

続け様シャバラに回復魔法をかけ痛めた腕を癒すと、シャバラはしばらくは動かさせないと思っていた腕が感覚を取り戻すのを感じる。

「クウさんが来てくれて正解でした。これ以上かつこ悪いところは見せられませんね」

シャバラがそう言うと同時に、突風が途絶えたことで動けるようになったカリムが今度こそ勢いよく襲いかかってくる。

先程と同じ形で相對するシャバラとカリム。同じように左から劍を振るうシャバラを見て、同じく右腕で受け止めようとするカリム。

「そいつはさつき見たぜえ！『硬腕』！」

「さつきとは少し違うぞ」

劍の刃は腕に止められるも、今回はカリムの腕から少し血が噴き出る。

「ぐぬっ!？」

「はああああ！」

焦りの表情を見せたカリムを氣迫の込もった声と共に劍を振り抜いて吹き飛ばすシャバラ。

「鬼人と呼ばれる副騎士団長がチンピラごときに負ける訳にはいかなのでな」

いつの間にか口調が変わり、顔からは笑顔の消えた冷たく相手を見据えるシャバラがそこにはいた。

V S. カリム その2

「つてーなあ!!やるじゃねーか!」

怒りながらシャバラを称賛して立ち上がるカリム。そんな彼は内心不安に駆られていた。

カリムが『怪腕』という二つ名で呼ばれる理由はその腕に関するスキルにある。

一つは右腕の『硬腕』。これは右腕を硬化させることのできるスキルで、カリム程の使い手になると鋼鉄以上の硬さにすることができ、攻守共に扱いやすいスキルである。

もう一つは左腕のスキルだが、こちらは攻撃特化のスキルで使い勝手が悪いのであまり使うことはない。

なにより、カリムにとつて戦闘で右腕に傷が付けられるというのはじめての経験で異常事態であった。

シャバラ^あただもんじゃねーな。流星はクエス王国副騎士団長サマか…認識を改めねえとな。左を使う事も視野に入れねえと。

「……ツツ!」

カリムが様子を伺いながらどう戦うか思案しているところに、一直線に突進してきたシャバラの渾身の振り下ろし攻撃が地面を抉る。

「どうした? 『骸狩り』の幹部はこの程度か?」

「さっきまでのお上品な感じはどこいったよ兄ちゃん」

明らかに威力の上がつているシャバラの剣撃と彼の明らかに変わった目つきを見てうつつすらと冷や汗が出るのを感じる。

「言ったはずだぞ。さっきまでとは違うと」

(ガキの方は支援魔法やらで妨害してくるから先に潰したかったが、それどころじゃなさそうだな)

「どうした、びびって動けないか?ならこっちから行ってやるぞ」

「なめんなよ!!」

挑発しながら、もう一度正面から突進してくるシャバラを迎え撃つ。

『臘梅斬り』！

『硬腕』！

「ぐっ!？」

シャバラの放つ首目掛けて飛んでくる剣を右腕を出して防ごうとするも先ほど斬られた所と同じ場所に剣を当てられ傷が深くなるのを感じる。

「死ねや!!」

カリムは傷を抉られるのを感じながら右腕ごと剣を押し退け左腕を突き出す。

『巨腕』!!

スキルの発動と同時にカリムの左腕はみるみる大きくなり、一瞬のうちに拳だけで人一人分はある程の大きさにまで膨れ上がる。近くで見れば最早壁のようなそれは、吸い込まれるシャバラに向かって降り落ちる。

『アトラクト』

クウの唱えた言葉と同時にシャバラの体が何かに引つ張られるようにクウのいる後ろに飛ぶ。標的を失った左腕はそのまま地面に激突し、小さい隕石でもぶつかつたかのようにクレーターを作る。

「ガキがあ!!邪魔しやがって!」

「はひっ、ごめんなさい!」

完全に虚を衝く必殺の一撃を無駄にされた事で鬼気迫る形相で怒鳴るカリムについて謝りながら小さくなってしまいうウを見て余計に苛立ちが増すカリム。

こんなガキが一丁前に戦闘に割り込みやがって。うっとうしい。

こうなったら…

「まとめて潰す!」

地面に突き刺さつた腕を引き抜いて二人に向かって走り出す。

「クウさん逃げて下さい!」

「遅えよ!」

大きくなった腕は物理的に距離を縮める。拳が二人に到達するのには一秒も要さない。

『スリッパ』！

「ぐがあ!？」

クウの咄嗟に出した魔法で足を滑らせて顔から地面にこけた事で拳は二人に届く前に勢いを無くす。

「さつきからうつとうしい魔法でちまちまちまとお!!」

「あつはつはつは。めちやくちやダサイじゃん!」

「ああん!？」

「ここだよここ」

どこからか聞こえる笑い声に怒りを露わにして立ち上がりながら声の主を探すカリムを嘲笑うように上から呼びかける人影。

「スイレンちゃん登場!!」

屋根の上からジャンプしてクウとシャバラの前に優しく着地する彼女はくるりとカリムの方に向き直り指を差す。

「あんたがカリムだろ? 失望したぞ!」

「はあ? 誰だよおめえは!」

「あたしは『崩山拳』伝承者の一人、スイレン様だ!」

「聞いても誰か知らねえよ!」

「別にあんたにもう興味ないから知らなくていいよ」

ふうと息を吐きながらやる気無さげに首を振るスイレンに苛立ちが頂点に達したカリムは体をわなわなと震わせて巨大な左の拳に一層の力を込める。

「もうお前らまとめて死ねや」

力強く地面を蹴って高く飛び上がったカリムは落ちる勢いそのままに更に一回り大きくなった左腕を三人目掛けて振り下ろす。

『降石拳』!

メテオナックル

「おいスイレン、ここにはクウさんもいるんだぞ!? どうするつもりだあんなの!」

「まかせなつて」

クウとシャバラに目もくれず、拳の親指だけを立てて返事をする
と、飛んでくるカリムの拳に照準を合わせて構えるスイレン。

崩山拳奥義『山嵐』!

やまあらし

腰を落とした姿勢から、回転を加えて放たれたスイレンの拳とカリムの拳が真正面から衝突する！

謝罪

クウ達がカリムと戦っている丁度その頃、コウイチ達は…

「ねえなんで!? また俺キーラに斬られてるんですけどなんで!?」

カシユームの精神操作が解け、我に返ったコウイチは体に走る痛み
に叫んでいた。

「おいおい、暴れるなコウイチ。傷が開く」

「元はと言えばあんたがあの子に操られるのが悪いんでしようが」
「痛い痛い! 死ぬ死ぬ!」

騒ぐコウイチを落ち着かせようとするカシユームを脇に抱えたグ
レゴリと我関せずとそっぽを向いて冷たくあしらうキーラとでカオ
スな空間になっていた。

「これだけ騒いでれば大丈夫だろうが、一応これを飲め」
「んむっ!」

グレゴリは空いた手で腰のポーチから取り出した小瓶の中身をコ
ウイチの口に流し込むと体の傷がみるみる治っていく。

「治ったー! 生きてるー!」
「そのまま死んでも良かったのよ?」

「お前何回俺のこと斬れば気が済むんだよ! 命いくつあっても足ん
ねーよ!」

「まあまあ、二人ともそう騒ぐな。彼女はこれでも命に別状が無い程
度に浅く斬ってくれてたんだぞ?」

「斬られてるんですけど!? 浅い深いじゃなく!」

「まあそれは事実だがな、今はそんなことよりこの女の子をしよう」

コウイチの軽口を笑って流して脇に抱えたカシユームについて話
を始めるグレゴリ。カシユームはグレゴリの攻撃で完全に伸びてお
り、体は力無くだらんとグレゴリの腕に引っかかっている。

「どうするって言われても、騎士団に連れて行って捕まえてもらうだ

ろ」

「そうなるだろうが、『宵の手』としては迷惑をかけられた相手だからなあ、連れて帰ってちよいと痛い目を見てもらいたいんだが」

頬をぽりぽりと搔きながら、さりとカシユームを私刑にかけると言うグレゴリを見て、そういえばこの人優しい口調だから忘れそうになるけど馬鹿みたいに体の大きい秘密結社のメンバーだったと思いつ出すコウイチ。

「駄目に決まってるでしょ？」

答えに困っているコウイチの横から声を出したのはキーラだった。体を一步前に出してグレゴリを見上げたまま続けて、

「あんた達が私の事誘拐して殺そうとしたの許してあげたんだから今回は見逃しなさい。それでチャラよ」

凜とした表情を変えず、グレゴリ相手に物怖じもせずそう言うキーラを見て、また一つ笑いを零すグレゴリ。

「それもそうだな、キーラお嬢さんが一枚上手だったか。この女は持つていくといい。じゃあ私はこれで失礼するでしょう。さっきのポーション代はいらんから気にするな」

それだけ言った後コウイチの方に近づいて「彼女に謝っとけよ」と囁いた後、転移魔法で姿を消してしまった。

「なんかあつさり帰っていったな」

取り残されたコウイチがさつきまでグレゴリがいた場所を見ながら呟く。

「借りを残しておきたくなかっただけでしょ？前に謝られた時からそんな感じだったし」

吐き捨てるように言いながら、カシユームを縄で縛り始めるキーラの背中を見ながら、どこか機嫌が悪い感じがしてどうしようかと悩んだ末、

「あの、キーラさん？」

「なによ」

こちらを振り返りもしないキーラの背中に話し続ける。

「さつきグレゴリが言ってたけど。死なないように加減して斬って下

「さったんですよね？」

「それが？」

「えーとですね、なんと申しますか、助かりました。ありがとうございます？」

「……………」

返事がない。しかばねではないからただの無視のようだ。近づいて顔色を伺おう。

「あの一。キーラさん？」

「うう…」

「ええ!？」

キーラの前に出て顔を覗くと、そこには目に涙をいっぱい溜めて顔を歪めた彼女と目が合う。

「別にあたしだって斬りたくて斬ってるわけじゃないのに」

「で、ですよね！もちろん存じておりますとも！」

「クウもないからどうしたらいいか分かんなかったから。でも斬らないとあんた止めれなかったからあ」

普段つんけんしているキーラがこんな表情をしているのを初めて見たせいか、女の子を泣かせた罪悪感からくるのか、どうしていいか分からずとりあえず全肯定することにする。

「だよね！でも死なない程度に斬ってくれたんだもんね！流石キーラだなあ！俺、キーラになら何回斬られてもいいって思っちゃうなー！」

「斬りたくないって言うてんでしょー！うわーん！」

「斬りたくないよねー！だよねー！」

「嫌われたくてやってる訳じゃないのにー！」

わんわん泣き出すキーラにどう言葉をかけていいか分からず泣いてる子供をあやすような言葉遣いになってしまう。

「…泣いたらすつきりした」

しばらく泣いた後、目の周りを赤くして鼻をすすりながら呟いたキーラの言葉を聞いて少しホツとする。

「さつきとこの女連れて行きましょ。それと、さつき見た事聞いた事は記憶から消しなさい」

「はい」

「誰かに言ったら斬るから」

「はい」

結局斬るんかい。などという言葉をぐつと飲み込み。泣き疲れたせいはいつもより弱々しい口調で釘を刺すキーラを見て、これ以上怒らせる訳にはいけないと軽口を挟まずただただ黙って首を縦に振るコウイチだった。

その後、カシユームを騎士団に渡す為コウイチとキーラは集合場所のギルド前に行く前に庁舎へと向かった。

合流

「ちよつと遅れるかもな」

「しようがないでしょ。幹部を捕まえたんだし遅刻ぐらい許してくれるわよ」

地理的な関係からカシユームを庁舎の騎士達に渡した後にギルドに向かうと集合時間には間に合わないと考えられる為、ぼやきながらずり落ちそうなカシユームを抱え直す。

「三人のうち一人が案外簡単に捕まえられたし、あつという間に三人捕まえれるかもね」

さつきまで泣いていたのは無かったかの様に気持ちを切り替えたのか、すっかり普段通りに戻ったキーラは呑気なことを呟く。

本当によく分からんやつだなあと口に出さずに歩いていると、騎士団庁舎が見えてくる。

騎士団の人に事情を説明してカシユームを預けた後、庁舎を出ようとした時、

「あ」

「おや?」

庁舎前に着くとそこにはクウとシャバラ、と知らない女の子と縄で縛られてシャバラに引き摺られている知らない大男が庁舎に入ろうとしている所に鉢合わせた。見るに大男の方は左腕が随分とボロボロに傷ついているようだが。

「コウイチさん!」

「なんでクウ達もここにいるんだ?それにその人達…」

「こいつは『骸狩り』幹部のカリムです。捕らえたので一旦庁舎に預けようと思ってます」

状況が理解できていない俺に説明する為、話し始めたシャバラ。

「こっちはついでに捕まえた暴力犯です」

「まだあたしのこと犯罪者呼ばわりかよ!あたしはただの通りすがりの武闘家スイレン様だって」

年齢は俺と変わらなさそうなのに随分と自信家な女の子らしい。でもシャバラに犯罪者って言われてるけどどういふこと？

「スイレンさんは凄いですよコウイチさん。このおっきい男の人を一撃でやつつけちゃったんです」

「よせやいクウ。照れちゃうじゃん」

未だに理解できないままいると、スイレンという名前らしい女の子を褒めるクウと仲が良さそうに返事をするスイレン。

「こいつがクウの言ってたコウイチか？武術が得意そうには見えないが」

「え、はい？」

顔が付きそうなほど近くまで寄って、ジロジロと品定めでもするよ
うに俺の顔を見つめるスイレンに照れておどおどとしてしまう。

近い近い！女の子にこんなに近づかれると恥ずかしいって！

「ちよつと離れなさい」

俺とスイレンの間に手を入れて、スイレンを押して引き剥がすキ
ーラ。

「なにー？こいつの彼女か？」

「そんなんじゃないから」

茶化すようににやけ顔で話すスイレンに冷たく一言で返すキーラ
だったがそんな彼女を見てスイレンはさつきより密着するように俺
の腕に組み付いてくる。

「じゃああたしがもらおうかな」

「はあ!？」

「ええ!？」

悪戯っぽく笑いながらそう言うスイレンにキーラとクウが驚いた
ような声を上げる。

「だつてもしこいつが武術得意なら婿として捕まえれば絶対逃げられ
ないっしょ。そうすれば後継者問題も解決してあたしも結婚して幸
せで一石二鳥じゃん？」

「絶対無理よ!」

「絶対無理です!」

冗談であろうスイレンの言葉に全力で否定の言葉をかける二人。そこは無理じゃなくてダメとか言っただけで欲しかったが…無理とか言われるとちよつと傷つくぞ。

「コウイチが結婚なんて無理に決まってるでしょ？大体自分から誘っておいて先にパーティー抜けるなんて許さないし」

「そうですよ！コウイチさんに結婚はまだ早過ぎます！しなくていいです！」

スイレンは何も言っていないのに続ける二人。そんなに言われたら俺泣いちゃうかも。

「分かってるって。冗談よ冗談。君随分大事にされてるねえ」

俺の腕を離して二人に謝るスイレンは俺にそんな事を言っただけで微笑む。今のは大事にされてると言うよりか蔑まれているように感じています。

「まあ冗談はさておき、カリムを牢屋に入れてくるので四人共私の仕事部屋で待っていてもらえますか？スイレンは捕まえてはしませんが今度こそ大人しく待っていて下さいね。聞くことは山ほどあるんですから」

「へーい」

俺達のやりとりに少し笑みを零すとカリムを縛っている縄を掴んで庁舎の中へと入っていくシャバラを見送り、クウ達に案内されてシャバラの仕事部屋へと向かう。

合流 その2

『骸狩り』のアジトの一つ、居住区内のとある空き家にて――、
「ゼルバートさん！大変です！」

「アジトでは静かに喋れと言っているだろう」

「す、すいません」

慌ててゼルバートの部屋に駆け込んできたチンピラは、叱責を受けて声のトーンを二つ落としてから続けて話す。

「今仲間から連絡がきたんですが、カリムさんとカシユームさんが騎士団に捕まったようです」

「なに？あの二人が？誰にだ」

「どうやら、副騎士団長と探索者が数人だそうです」

ゼルバートは部下の口から伝えられた青天の霹靂に一瞬驚きの表情を見せるが、すぐさま落ち着きを取り戻し思考を巡らせる。

「昨晚の今日でもう二人も捕まるとは予想外だった。しかし、副騎士団長？騎士団長ではなく？こんな犯人逮捕なんて大事件、あの騎士団長めだちたがりが出てこない訳がないの……」

「いや、出てこないんじゃないよ？出てこれなかったのか？突発的な逮捕で報告している時間が無かった、あるいはこの街にいない？」

急に黙りこくった自分を前に、どうしたらよいか分からずそわそわとしている事しかできない部下を尻目にしばらく思考を継続した後、ふと立ち上がるゼルバート。

「目立たないように人を集めておけ。僕の予想が正しければ今夜にでも騎士団を潰せる」

「は、はいー」

もし騎士団に致命的ダメージを与えられれば、しばらくの間警備も手薄になりこの国で好き勝手ができる。そうなれば、その間に国中に麻薬をばら撒いて国ごと支配できる。



そんな事など露知らぬコウイチ達はというと…

「おいコウイチ、あんた武術適正持つてるってほんとか？」

「え、まあ一応は…」

「何できるか見せてみなよ」

シャバラを待つ部屋にて、暇を持て余していたスイレンに肩を組まれてカツアゲでもされているように話しかけられるコウイチは、言われるがまましぶしぶ『正拳突き』を見せることにする。

『正拳突き』

「どう？」

「ふーん、まあまあかな」

自分から見せろって言つといて随分な言い草だな。

「スイレンって防禦系の武術とか知ってる？できれば教えて欲しいんだけど」

折角出会えた武術家だ。強い技とかはいらないから、身を守るのに有用な武術があれば教えて欲しいのだが。

「うーん、うちの武術は攻撃的な武術だからなー。これといって防禦の技はないんだけど…」

「じゃあカリムを倒した時の技見せてあげて下さい。あれとっても凄かったですし」

横からクウがそんな事を提案する。そういえばさつき見たあの犬男を倒したって言ってたっけ。

「見せるのはいいけど、あの技は難しいぞ？あたしでも習得するのに半年はかかったんだぞ？」

口では渋るように言いつつも、褒められたことでまんざらでもない様子で椅子から立ち上がり構え出すスイレン。

この子も案外チヨロいなあ。

「見とけコウイチ！これが崩山拳奥義『山嵐』だ！」

スイレンが構えた状態から拳を前に突き出すと、拳の回りの空気が震え、風が巻き起こる。風は突風となり拳の方向に吹き荒れて見事部屋を打ち砕く。

「何やってるんですか!？」

そこに血相を変えたシャバラが入ってくる。

「ごめーん。ちよつと威力強かったわー」

「建物を壊さないで下さい! どうするんですかこれ!? ああ、団長に怒られる…」

悪びれもしないスイレンに怒りをあらわにして、壊れた壁を見て
スメラギ
団長に怒られる事を危惧するシャバラ。

一通りシャバラからのお叱りを受けた後、今日は一旦帰ろうかという話になった時のこと、何かが爆発したような突然の轟音が庁舎に響き渡る。

「あたしじゃないって!」

反射でシャバラに睨みつけられたスイレンが抗議の声を上げると同時に、遠くから騎士の声が聞こえる。

「侵入者だー! 全員捕らえろー!」

「皆さんは危ないのでここに隠れていてください!」

俺達にそう言った後、部屋から出て行くシャバラを見送った後、何やらそわそわしていたスイレンが喋り出す。

「楽しそうな事になってきたなあ! 行くぞ!」

「ちよつと待て待て!」

ずんずんと部屋から出て行くこうとするスイレンの腕を掴んで止める。

「なんだコウイチ? 武闘家ならこんな楽しそうな事見逃すなんてあり得ないだろ」

「武闘家じゃねーよ! 危ないから大人しくしとけって言われたろ?」

俺の制止など関係ないといった様子で笑顔で部屋から出て行くこうとするスイレンを見てどこぞの戦闘民族かこいつはと考えていると
:

「コウイチ! 危ない!」

キーラの声が聞こえたと同時に、俺とスイレンのいた部屋の床がひび割れたかと思うと、あつという間に崩れ落ちる。

落下

騎士団庁舎に襲撃事件が起きる少し前、庁舎内の牢屋にて――、「ここで大人しくしている!」

「そんなに怖い言い方しないでもさつきから大人しくしてるだろ?」

後ろ手に鎖で繋がった枷を付けられながら、牢屋の中に放り込まれたカリムは溜息混じりに悪態をつく。

「カリムも捕まったの?」

「ああん? って、なんでカシユームもいるんだよ」

自分の名を呼ばれ振り返ると、牢屋の奥の影から顔を出したのはカリムと同じ『骸狩り』の幹部、カシユームだった。

「なんでお前も捕まってんだよ」

「それはこっちのセリフよ。カリムちゃんは戦闘要員でしょ? なんで負けてる訳?」

「腕の立つ武闘家と魔法使いがいてな、一人ずつならなんとかかなりそうなもんだが、同時に相手は厄介だった」

「言い訳なんですけど」

「うるせえな。次戦えば勝てる」

そう話すカリムの目は、怒りに満ち鈍く光っていた。

「もう捕まってるから、次とかないと思うけど」

カシユームが諦めたように中空を見つめながら呟いた時、遠くから爆発したような大きな音が牢屋に響く。

「なんだ!?!」

牢屋から少し離れた場所にいた見張りの騎士が声を上げると甲冑を着込んだ男が走ってくる。

「大変だ! 庁舎に侵入者が、それも何十人と!」

「なに!?!」

「すぐ手を貸してくれ!」

「分かった。どこだ?」

「ここですよ」

「はがっ!？」

見張りの騎士が加勢に向かおうと駆けつけた騎士に背を向けた瞬間、駆けつけた騎士の手から魔力の塊が放たれる。

「まったく、二人して捕まるなんて何事ですか」

甲冑を脱ぎながら顔を出した『骸狩り』幹部のゼルバートは牢屋で枷に繋がれた二人を見て呆れたような声で話しかける。

「ちよつとハマしちまってな」

「さすがゼルちゃん! 助けに来てくれると思ったよ」

「さつきまで観念してたくせに調子のいい奴だな」

「じゃれあつてる場合じゃないですよ」

ゼルバートは二人の枷を小さな魔弾で壊しながら話を続ける。

「どうやら、今この国には騎士団長がいらないらしいです。あなた達を助けるついでに騎士団に致命的なダメージを与える良い機会ですよ。やってくれますね?」

「丁度むしゃくしゃしてた所だ、うつとうしい騎士団をぶっ飛ばせるなら、なお良しだぜ」

「そうね。ストレス発散は大事だし、いい男がいたら連れて帰つてもいいよね?」

「カリム、これを」

「お、悪いな」

カリムはゼルバートから回復ポーションを受け取ると、それを一気に飲み干す。

「そのレベルの怪我なら完治はしないだろうが痛みはマシになるでしょう」

「これなら十分暴れられるぜ」

『骸狩り』の三人は各々、甲冑を脱ぎ、枷を外し、言葉は交わさず別々の方向へと散らばって行く。



「んぐつゝゝ!？」

突然抜け落ちた床に反応できる訳もなく、尻から勢いよく階下に落下し声にならない悲痛の音が喉から漏れる。

「おっとっと、大丈夫かコウイチ？」

隣には体操選手のように両足でぴたりと着地してこちらを心配するスイレンの姿があった。

落ちた場所は物置か何かだろうか。明かりは無く、抜けた上の穴から微かに光が漏れるだけの薄暗い部屋だった。

「スイレンが暴れるから抜けたんじゃねーのかこれ？」

「違うって！これは絶対違うって！なんか下から気配したからそいつだっけきつと」

「下から気配？、んなこと言われたって…」

ふと周囲を見渡してみるも暗くて全容は分からず、人がいるかどうかなど確認できない。

「コウイチさん大丈夫ですか？」

上の穴からクウが心配そうに顔を覗かせる。

「おー、こっちはなんとか大丈夫だ。今からそっちに戻るから待ってくれ」

出口を探そうともう一度辺りを調べると、一つの床辺りからうっすらと光が漏れているのを見つける。

「あそこにドアがあるみたいだし、とりあえず出るか」

「オツケー」

スイレンを連れて明かりの側に近寄り、手で当たりをつけて周辺を探るとドアノブに触れる感触がする。

「お、あったあった」

ガチャリという音と共にドアが開き、部屋の中に明かりが入ってくる。

明かりが入ってきたのだが、大きな影も同時に視界に入ってきた。「お前も騎士か？」

大きな影の主を見上げると、そこにはグレゴリ程の明らかに人相の悪い大男が立っていた。

「失礼しましたー」

何も見なかった事にしてドアを閉め直す。

「なんで閉めるんだよコウイチ。出るんだろ？」

ドアの影にいたせいで大男を見ていないスイレンが不思議そうに聞いてくる。

「なんか居たんですけど!?!」

「おーい、そう恥ずかしがるなよ」

背後からドア越しに声が聞こえてくると、ドアが外から弾けてコウイチの体ごと吹き飛ばす。

「誰かと思えばあたしにぶっ飛ばされたダサイ大男君じゃん」

「早速お前をぶっ飛ばせるなら機会がくるとはなあ!」

コウイチとドアが吹き飛んだ事で、カリムとスイレンが相見える。

卑怯とは言うまいな？

なんか今日痛い目にばっかり遭ってる気がするんだけど、俺そんなに悪いことしたかな？

吹き飛ばされたドアの破片や元々そこにあつた騎士団の備品らしき物に埋もれながら体の痛みを味わいながらそんな事を考えていると話し声が聞こえてくる。近くににいるはずなのに、物に隔たれたせいか遠くで話しているように感じる。

「丁度強いやつと戦^やりたいと思つてたところだ。俺をぶつ飛ばしたお前なら最高だぜ！」

「うるさいなあ、そんなでかい声出さなくても聞こえるつての」

あたし、一回倒した相手はもう興味ないんだけどなあ。

嬉々として声を上げるカリムに対して、冷めた態度で頭をぽりぽりと搔くスイレンは突然思いついたように顔をはつとさせるとニヤリと笑つてから話し出す。

「戦つてあげてもいいけど、その前にあんたが吹っ飛ばしたあいつ倒せたら戦つてやるよ」

「何言つてんの!?!」

突飛な事を言い出したスイレンに驚いて瓦礫の中から飛び上がるコウイチ。

「お、やっぱり元気そうだなコウイチ」

「元気じゃねーよ！ボロボロだよ！」

「騒げてるから大丈夫だな」

「おい女、こいつぶつ飛ばせば俺と戦うんだな？」

「いいよー」

「良くないですけど！」

「ここだとやりづらいし外出てやろうよ」

「いいだろう」

「え、あの、俺の話…」

コウイチの声など聞こえていないように振る舞つて部屋を出て行

く二人を眺めていると、スイレンに手招きされるまま彼女に近づく。側に寄るとスイレンは耳元に口を近づけてきて囁く。

「戦い始めた瞬間、さっきあたしが見せた『山嵐』打ってみてよ」

「え？でも一回見ただけで打てるか分かんないし…、ていうかもっと言えば戦いたくないし…」

「いいから、やれ」

肩をがっしりと組まれ、有無を言わさぬ言葉と顔の圧力に負け、「はい」と返事せざるをえなかった。

「よし、ここならいいだろう」

カリムが立ち止まった場所は庁舎のど真ん中、口の字に建物で囲まれた庁舎の騎士達が鍛錬を行う場所で、シャバラが順位戦を行った場所でもあるが、今は誰一人人はおらず正門の方からガヤガヤと騎士達の声が聞こえる。

「じゃあ、早速始めるか」

首を左右に動かして、指の骨を鳴らしながらやる気に満ち溢れているカリムを見て、あんな大男と今から戦うのかという恐怖で少し震えるコウイチ。

じりじりと距離を縮めていくカリムとコウイチ。

先に動きを見せたのはカリム。一撃で終わらせるつもりで右腕の『硬腕』を発動させる。

『山嵐』

「なに!？」

危険を察知したコウイチは咄嗟にスイレンに言われるがまま、さつき見ただけの『山嵐』を放つ。それを見たカリムはスイレンとの戦闘がフラッシュバックした事で攻撃の動作を止めて顔の前に両腕を構えてガードする。

コウイチの拳がカリムの腕に当たると、拳からは弱々しい風が吹いてカリム髪を揺らす。

コウイチはやはりこうなるかと絶望したのか固まってしまふ。

「なんだア？今ののは？」

あ、これ俺死んだな。

ガードを解いて眉間に皺を寄せたカリムと目が合って自分の未来を予見したコウイチは全身の血の気が引くのを感じる。

「こんなのは俺がくらった技じゃ…」

『山嵐』いいー!!」

カリムが喋っている途中で、横からスイレンの全力の『山嵐』が彼の横つ面に直撃する。

さつきコウイチが放ったそれとは別格のスイレンの『山嵐』は、横にいたコウイチですら吹き飛ばされそうになるほどの風圧を発する。

一方でそんな威力の攻撃を不意にくらったカリムははるか遠くで完全に気を失っているようである。

えー！

コウイチは目の前で何が起きているのか理解できずに思考が停止してしまふ。

「私は手を出さないとはいってないからな！」

はははと笑いながらそんな事を言うスイレンを見て言葉も出てこない。

「おま、俺のこと囮に使ったの？」

「うん。その方がさつきと倒せそうだったし」

泣きそうになりながら、やっとのことで出た質問に何の悪びれもせずに答えるスイレン。

「あいつが逃げ出してるなら、コウイチ達が捕まえてきた奴も逃げ出してるかもな。よし、全員ぶつ飛ばしに行くぞコウイチ！」

新しいおもちゃでも見つけた子供のように目を輝かせているスイレンを尻目に、へたりとその場に座り込んでしまふコウイチ。

「どうした？コウイチ」

「腰抜けた…」

コウイチは激しく後悔する。

スイレンはアレだ、今まで出会ってきた中で一番やばい奴かもしれん。絶対関わっちゃ駄目な子だ。

先程、カリムから感じた殺意を思い出して。そんな危ない罠を何の説明もなくさせたスイレンを見ながらコウイチの目からは涙が一筋流れる。

パニツク

騎士団庁舎の正門を少し入った敷地内は現在、押入ってきた『骸狩り』の構成員とそれを阻止する騎士とで、鬩ぎ合いせめになっていた。

ギルバートの指示の下、準備をして攻め込んで来た『骸狩り』陣営と違い、急襲された騎士団がやや押され気味の戦況の中、族の侵入をあと一步の所で抑え込んでいるのは騎士達の日々の鍛錬と駆けつけたシャバラの指揮によるものに他ならない。

「全員盾で壁を作り囲むように押し込め！これ以上の侵入を許すなよ！」

「はい！」

シャバラが穏やかな普段と違う大きく通る声で号令を出すと、一糸乱れぬ動きで盾の壁が作られみるみる『骸狩り』を壁へと押し込んでいく。

「クツソ！押し返せ！」

声を上げながら抵抗するも、じりじりと壁際へと追い込まれた族を一斉に捕らえようかといったその時、シャバラだけが背後からの殺気を感じた。

「ふん!!」

さつきに気付くと同時に振り返り、飛んで来た魔力の塊に剣を叩きつけて相殺させる。

「まさか自分から捕まりに来てくれるとはな『魔弾』ゼルバート…。後ろの連中はお前の手下か？」

「まさかまだ自分達が有利な立場にいると思ってるんですか？本当に騎士団つてのは団長以外は愚図の集まりみたいですねえ？」

「あ？」

『魔連弾』

ゼルバートの言葉にシャバラが苛立ちを感じ踏み込もうと考えた瞬間、両手を前に出したゼルバートの手から無数の『魔弾』が放出される。

「クソっ!？」

凄まじい勢いと数で飛んでくる魔弾を剣撃でいくつか潰すも一人で全て対処できず、いくつかの魔弾はシャバラの後方、つまりは『骸狩り』を抑え込んでいる部下達の方へと飛んでいく。

シャバラの横を抜けていった魔弾は背を向けた騎士達に直撃して盾の壁が崩壊してしまう。

「ゼルバートさんが来てくれたぞ！俺らも続け！」

活路が開けたことでそこから一齐に雪崩れ込む『骸狩り』の部下達を止めることが出来ず庁舎内への侵入を許してしまう。

「行かせるか！」

「こっちの台詞ですよ？」

抜け出してきた『骸狩り』を阻止する為、部下達の方へと駆けつけようとするも、ゼルバートの魔弾に邪魔されてしまう。

「別に放っておいてくれてもいいんですけど…」

ゼルバートはそう呟くと、今度は両手を庁舎に向けて魔弾を放ち建物破壊し始める。

「厄介極まりないな」

再度対峙するシャバラとゼルバート、二人の間に静寂が流れる。



「おー、遠くから見てもデカいですねー騎士団庁舎はー。盛り上がってるみたいだし、そろそろ行こっかなー」

庁舎から少し離れた民家の屋根の上に、呑気な声を出しながら庁舎の様子を伺うスーツの男が一人いた。



「さあ、可愛い私の下僕達。あの小娘共をやっちゃってー」

「ちよつともー！なんなのよあいつら！」

「分かりませんが、とりあえず逃げるましよう！」

息を切らしながら庁舎の廊下を走るキーラとクウ。後ろからは目が虚な騎士達とカシユームが迫ってきていた。

コウイチと会話をした直後のこと、シャバラの部屋で待機していた彼女たちの元に押し掛けてきた騎士達の様子がおかしかった事と後ろにキーラが対峙したカシユームがいた事でいち早く危険を察知したことで、スイレンが壊した壁から逃げ出せたのだが…

『スリップ』！

クウの魔術で床を滑らせることで騎士達を足止めして逃げる事で中々捕まらない彼女達に、カシユームは苛立ちを隠せずに行った。

「何やってるのよ小娘二人に！」

カシユームのスキルにより、彼女の虜になっていく騎士達は増え続け、徐々に彼女たちの距離は狭まって行く。

庁舎内は現在大混乱である。

窮地

「しまった、行き止まりじゃない！」

「ど、どうしましょう！」

カシユームの操る騎士達から逃げていたキーラとクウは庁舎正門から反対に位置する廊下の袋小路に追い込まれていた。

「もう追いかけてこは終わりねー」

庁舎を走り回りながら確実に数を増やしていったカシユームに操られた騎士は10人を超えていた。

「あんたは次見つけたら殺すって決めてたから丁度いいわ」

キーラに目を向けながら騎士達を差し向けるカシユーム。

『バインド』！

「ううー！」

呻き声と共にクウの魔法で動きを封じられる騎士だが、

「一人止めたくらいじゃもう意味ないわよクウ」

「で、ですよね〜」

「その剣士の女は殺さずに捕らえなさい。ガキの方は好きにしてい
いわよ」

カシユームの一言で、操られた騎士達はじりじりと二人の方へとに
じり寄っていく。

「こんな数捌ききれないわよー！」

次々と襲い掛かる騎士達に、鞘を付けたままの剣で応戦するキーラ
とクウだったが、逃げ場もなく狭い廊下での戦闘に加え、数の暴力で
徐々に押されていく。

「このままじゃ、まずい。誰か…コウイチ…」

「失礼しまーす」

キーラ達が騎士達に服を掴まれるほどの距離まで追い詰められ打
つ手が無くなったその時、彼女達から少し横にズレた背後の壁が扉の
ように開きそこからスーツを着た男が顔を出す。男は薄い茶色のレ

ンズが付いた眼鏡をかけており、髪も茶色でセンターで分けられたやや長めの髪型をしている。

その場にいた全員が男の方を向き、一瞬の沈黙が流れる。

「お取り込み中みたいっすねー。失礼しましたー」

「待ちなさい待ちなさい！」

キーラは不自然に開いた壁を閉めながら出て行こうとする男に助けを求めるため呼び止める。

「どう見ても襲われてるんだから助けなさいよ！」

「えー。なんかめんどくさそうなんすけど。まあいいっすよー」

男は見るからに嫌そうな顔をしつつも「えい」と一言発して手を振るうと騎士達の横の壁がみるみる形を変えキーラ達以外を包み込むようなドーム状になる。

「な、なんですか今の!?!」

「ちよーつと壁をイジっただけっすよ」

目の前で起きた不可解な現象に戸惑いを隠せず声が漏れるクウ。

「ちよつとどういうことよ! あんた何者よ!」

戸惑っているのはカシユームも同じようで、突然現れた男のせいで取り巻きがいなくなったことに声を上げる。

「あれー? 誰かと思えばそこにいるのって『骸狩り』のカシユームじゃないっすかー?」

「私を知ってるみたいだけど、あんたは誰なのよ!」

カシユームに問われると、男は歯を見せて笑みを浮かべた後、仰々しく挨拶を始める。

「これはこれは、申し遅れたっす。自分、秘密結社『宵の手』の財政担当メンバー【ガグマ】っす。以後お見知り置きを…」

「なっ、『宵の手』…ですって?…」

自らをガグマと名乗る男が『宵の手』の名前を出したことでカシユームの表情が強張る。

「さつきは人がいっぱい気付かなかったっすけど、都合良く『骸狩り』の幹部に出会えてラッキー」

そう言うとうとガグマは開いた手を掬うように自分の前に差し出した

後、その手を握り締める。するとカシユームの立っていた石でできた床が生き物のように蠢いて触手となつて彼女にまとわりつき動きを封じる。

「ちよっ!?!なんなのよこれ!?!」

「すごいっしょよ?俺のユニークスキル『即席工作』って言うんすよ」

石でできた触手はカシユームに絡まった後、初めからそういう形だったように固まってしまふ。

「じゃあうちの組織にちよっかい出してる奴を懲らしめるとしますかー」

ガグマは笑つてカシユームの方へとゆっくり歩き出す。

壁の中から

「さて、どうしますかねー?」

「ちよつと待って下さい!」

ガグマがうつすらと笑いを浮かべながらゆっくりとカシユームへと歩を進めていると、後ろからのクウの声に振り返る。

「なんすか?」

「その人、多分ですけど精神操作系の魔法で男性を意のままに操ることができるようです」

クウはカシユームや騎士から逃げながら、相手の魔法の気配を察知し、分析することでカシユームの魔法の本質を突き止めることに成功していた。

「…なるほどつすね。じゃあこいつは君達に任せて自分は他のとこ手伝ってきますねー」

「え?ちよ、ちよつと待って」

「じゃあ、お願いしまーつす」

ガグマはクウの返事も聞かず、来た時と同じように壁をドアのように開けて外へ出て行ってしまった。後にはただの壁が残った。

「なんだったのよ。あいつ」

『『宵の手』の方って不思議な人が多いですよね』

「ただの変人の集まりでしょ」

キーラは呆れたようにさっきまでガグマがいた場所を見ながらため息を吐くと、身動きが取れないカシユームの方を向き直す。

「な、なによ!何見てんのよガキが!」

目が合うと眉間に皺を寄せて睨みつけてくるカシユームにつかつかと歩いて近寄っていくキーラ。カシユームもなんとか石の触手から抜け出せないかともがいてみるが、やはり抜け出すことは不可能な様子。

「やっぱりあんた。結構なおばさんよね」

「ああん!？」

カシユームに近寄ったキーラは彼女の顔を見ながら挑発するとカシユームも癩に触ったようで、声を上げて怒りを露わにする。

「怒ったら余計小皺が目立つわよ?」

「ガキがあ、絶対ぶっこ……きゆう」

カシユームが喋り切る前に、彼女の脳天に鞘に差したままの剣を叩きつけて意識を刈り取る。

「さ、庁舎ここは危なそうだし、コウイチを助けに行つてあげるとしましよ
う?」

「そうですね。私もコウイチさんが心配です。でもスイレんさんも一緒なので大丈夫だとは思いますが…」

「だといいんだけど」

二人は来た道に戻つてコウイチを探しに向かう。



「もう嫌です!動きたくありません!」

「そうグズるなよコウイチ!武闘家だろ?」

「武闘家じゃない!なつた覚えはない!」

庁舎中央の広間の一角にて、精神にダメージを受け幼児退行したコウイチとそんな彼を無理矢理連れて行こうと腕を引っ張るスイレんの姿があった。

「つたく、どうすつかな」

スイレんがグズるコウイチに困り果てている時、近くの壁が大きい音を立てて弾け飛ぶ。

「ふう。少し骨の折れる相手だったな」

破壊された壁からは、『骸狩り』の幹部ゼルバートが出てきた。彼の体と服は傷ついている様子で、ついさっきまで誰かと戦闘していたことを物語っていた。

「お前も『骸狩り』の幹部かなんかか?」

スイレんに声をかけられて人の存在に気付き振り向くゼルバート

は、彼女の後ろの方に同じ幹部のカリムがぐったりと地面に倒れているのを見つける。

「あなたがカリムをやったんですか?…:ん?」

ゼルバートはスイレンを見据えると、すぐ近くにうずくまっていたコウイチを見つける。

「やつと会えましたね少年」

「へ?」

『魔弾』

「いきなり何すんだ!」

コウイチを見つけるなり放ってきた『魔弾』を拳で撃ち落とすと声を上げて牽制するスイレンドったが、

「その割に嬉しそうな顔をしているが?」

「そうか?」

「待て待て!」

強敵の登場に興奮を抑えられていない様子のスイレンの手を掴んで走り出すコウイチ。

「なんだコウイチ!今いいとこだったろ!」

「それどころじゃねーよ!」

「なんだよ?元気になったかと思ったらまた逃げるのか?」

「あいつはやばいんだって!マジで!」

「せっかくの再会だ、逃げることないだろう?」

「めちやくちや追ってきてるー!」

駆けるコウイチ達に後ろから魔弾を放って追いかけてくるゼルバート。

「離せコウイチ!あたしはやるぞ!」

コウイチの腕を払い再度ゼルバートと向き合うスイレン。

「君に用はないんですが…」

「あたしはあるんだよ。いいから戦おうぜ」

その言葉だけを交わして一方は魔弾を放ち、一方は距離を詰めるために大きな一歩で踏み込む。

包囲

庁舎内の広場に響く魔弾と拳の衝突する炸裂音。

「これじゃ近付けないぞー！」

秒単位で飛んでくる数十の魔弾を処理するのにスイレンはその場で動きを封じられていた。

「これなら・・・どうだー！」

『山嵐』!!

無数に飛び交う魔弾の一瞬の隙について放った一発の拳が、眼前の障害を全てかき消す。

言葉も発さず踏み込みゼルバートとの距離を詰めようとするスイレンだったが、あと一歩進めば拳の届くところで急ブレーキをかける。

次の瞬間、スイレンの目の前の地面が弾け飛ぶ。それに反応して身構えた彼女の隙についてゼルバートは彼女から距離をとる。

「まさか今のを避けるとは、少し驚きました」

「怪しい臭いがプンプンしてたぞ？」

下から出てきた魔弾の跡は、一文字の形に地面を抉り、人に当たれば容易に二つに切れてしまう威力なのが見てとれる。

スイレンは間近でそれを見た事でにやりと笑いながらも背中に汗が伝うのを感じた。

「手以外から出せるならそう言っとけよ」

「別に手からしか出さないとはいってなかったと思いますけど？」

ゼルバートの『魔弾』の真骨頂は範囲内ならどこからでも出せる事と、魔弾の形状変化による攻撃の属性変化による変幻自在な戦法にある。

『魔弾』

奇襲が失敗し、魔弾の手の内が看破されたと感じたゼルバートは、出し惜しみせずに全方向から球状の打撃特化の魔弾、薄く弧を描く形の斬撃特化の魔弾、先を細く尖らせた円錐形の刺突特化の魔弾を放

っ。

「これは、やばいな…」

さつきまでの前方からしか飛んでこない魔弾とは違い、スイレンを取り囲むように飛んでくる魔弾に、拳で応戦することは無意味であると察した彼女の顔から笑顔は消え、全力で回避することに集中した。

彼女に当たらず地面に激突する魔弾は、地面を抉り、切りつけ、貫き破壊する。

「これでもまだ粘りますか」

神経を張り巡らせ、紙一重の所で魔弾を躲し続けるスイレンを見てそう呟いたゼルバートは、魔弾により一層の魔力を込めると、魔弾はそれに反応し数を増やし、威力も増してスイレンに襲いかかる。

躲す。

弾く。

受け流す。

躲す。

受け流す。

波の様に押し寄せる種類の違う魔弾は、確実にスイレンの集中力をすり減らし…

「がっ…!?!」

ついに、処理しきれなかったスイレンの脇腹に球状の魔弾が直撃する。スイレンの体は、投げられた人形の様にごると宙を舞うとコウイチの近くに落ちる。

「スイレン!?!大丈夫か!」

「ちよつと…まずつた」

力無く声を発するスイレンは、糸が切れた様に気を失ってしまった。

「さて、邪魔者も消えた事ですし」

離れたところからゼルバートがゆつくりとコウイチに近寄る。

二人の戦いを間近で見っていたコウイチは、絶対に勝てないの悟りその場から動けなかった。

まずい。俺、死ぬじゃん。
コウイチに、ゆつくりとゼルバートの手が差し伸ばされる。

なんでこうなった

「あれ、やばそうじゃない?」

「急ぎましょう!」

コウイチを探していたキーラとクウは庁舎の広場で起きているスイレンとゼルバートの戦いを廊下から目撃する。

「コウイチさんも一緒にたいです!」

スイレンの後ろで地面に座り込んでいるコウイチを見つけて声を出すクウ。

「なに腰抜かしてんのよ、あのバカ!」

次の瞬間、ゼルバートの放った魔弾が直撃して宙に浮くスイレンが見える。

ゼルバートがコウイチに近づいていくのが目に入る。ここからはどれだけ急いでも二人の元にたどり着くのに、あと数秒はかかる。後ろを付いてきていたクウも庁舎を走り回っていたせいで息が上がり、どんどん速度を落としていく。

「なにやってんのコウイチ!早く逃げなさい!」

駆けながら声をかけると、ゼルバートには聞こえたらしくこちらをちらと見たが不敵な笑みだけ浮かべてコウイチに向き直る。

ダメ!間に合わない!



ゆっくりと伸びてくるゼルバートの手を、動くことすらできず眺めていることしかできない。

今更逃げようとしたところで、俺はあの魔弾を視認することもできないし、避けることもできないのだ、もう、打つ手がない。

遠くから俺の名を呼ぶ声が聞こえる。だが、ゼルバートの手から目を背けることができない。

もうあと数歩で目の前にくる。近づいてくる。

目の前に来た。手を伸ばしてくる。

顔の目の前に手がある。今魔弾を撃てば俺の顔は消し飛ぶのだから。

もうなにも見たくない。目を瞑る。

顔に手が触れる。

そして、――

「んむっ!?!」

唇に何か柔らかい物が当たる感触がして、とつさに身を引く。

何された?今、

目を開けると、しゃがみこんだゼルバートと目があう。

「今更まだ逃げる気かい?」

そう話す彼の顔はどことなく赤みを帯び、目はまぶたが下がって来てとろんとしている。

「な、なな、何やってんのよあんた!?!」

ふと近くから声が出たのでそちらを見ると、これまた顔を赤くしたキーラが立っていた。

「何って、キスだが?」

何食わぬ顔でそう答えるゼルバート。

は?キス?

俺、今キスされたの?

「君と前に会った後、ずっとお菓子かったんだ。何をしようにも君の顔が思い浮かぶ。そして気付いたんだよ、これは恋だと...」

何言ってるの、この人。

「さあ、僕と結婚しよう」

「はあ!?!」

キーラと俺の声が重なる。ちよつと理解が追いつかない。何を

言ってるんだこいつは。

「ちよつとコウイチ！どういうことよこれは！」

「いや待ってくれ。本当に意味が分から……、あ、」

「どうかしたのかい？」

目の前で本心から心配そうに俺の顔を覗くゼルバートを見て思い出す。

そういえば俺は、こいつに市場で買った惚れ薬を飲ませた。しかも、本来飲み物に数滴垂らすだけで効果があると言われたものをひと瓶丸ごと。

「あんた、まさか心当たりあるの？」

「えつとですね……. なんと言いますか。なあゼルバート、さん？」

「なんだい？」

真つ直ぐすぎるぐらいな眼差しで返事をするゼルバートはどこか上の空でぼーつとしている。そんな彼を見てなんとやっていいかわからず、次の言葉に迷っていると、

「あれー？もう終わっちゃったすか？」

今度はまた別のところから男の声が聞こえる。振り返ると、見たことがないスーツ姿の男がいる。

「助けようと駆けつけたんすけど、さすがボスが認めるコウイチさん。

『骸狩り』の幹部を籠絡してるとは、さすがっす！」

「そんなんじゃないから!?!てか誰だよ」

「どうも、『宵の手』の財政担当のガグマっす。お見知り置きを」

「何？『宵の手』だと？」

グリムの言葉に反応しゼルバートがゆらりと立ち上がり手を彼に向ける。

「ストップストップ！」

「大丈夫だよコウイチ。こんな奴はすぐに殺してしまうから」

物騒なことを言い出す、薬のせいで俺に心酔しているゼルバートをなだめる。

「まあまあ、そんな物騒なことしないでくださいよ」

「ふむ、コウイチがそう言うのならやめておこう。じゃあさっきの続

きを・・・」

「ちよつ、それもちよい待って!」

やおらこちらに顔を近づけてくるゼルバートを止めて立ち上がる。
ど、どうしようこの状況。

「じゃあ、こうゆうのはどうつすか?」

ガグマが俺に耳打ちをしてくる。

「なぜ僕はダメでその男は近づいていいんだコウイチ」

ガグマが俺に近寄るのに難色を示すゼルバート。

もうあんたちよつと黙っててくれ。

そんなことを考えながらガグマの声に意識を向けると、彼からまさかの提案をされる。

「は?そんな事できんの?」

「大丈夫つす!信じてください!」

ニツコリと笑って親指を立てるガグマを見ながら、半信半疑でゼルバートの方へと一歩踏み出す。

こんなの上手くいくかどうか、もうどうにでもなってくれ。

ファーストキスを失った悲しみを背負いながら、ゼルバートにガグマに言われた通り話しかける。

あつけない終幕と、

コウイチはガグマの言葉を信じていいのかどうか半信半疑のままゼルバートに近づくと、意を決して話し出す。

「ゼルバート。お願いがあるんだけどいいかな？」

コウイチ本人は気付いていないが、彼の顔は半分引きつっているし、喋り方も片言になっている。

「なにかな？」

「オレモ、ゼルバートガ、スキナンダー！」

「本当かい!？」

あからさまに喜びの表情を表に出すゼルバートの事は見ない事にして続ける。横からキーラも「何言ってるのよあんた!」とか言ってる声も聞こえるが、それも無視。

「も、もちろん。でも、一つお願いがあるんだけど聞いてくれるか?」「君の頼みならなんでも聞くともし！」

前のめりに歩み寄りつてきて、今にもまた唇を重ねそうな程の距離のゼルバートから半身を引きつつ、ガグマに言われた通りの要求を話す。

「俺もゼルバートと一緒に居たいのは山々なんだけど、犯罪者はちよつとさ……」

「そんな!?!じゃあどうすればいいんだい?」

「だからさ、一回騎士団に捕まってもらって、ちゃんと罪を償ったら一緒にしろ。俺、ずっと待ってるから」

こんな鵜呑みにして言うこと聞く奴がいるわけないだろ。

「分かった。捕まるよ」

「マジで!?!」

横で何を見せられているのやらと呆れていたキーラと声が被る。

「ああ、本当だよ。コウイチが待っていてくれるなら喜んで捕まろう」

「おいおい、あの惚れ薬やべーよ。本当に惚れ薬か疑い始めるわ。」

「コウイチさん!大丈夫ですか!」

惚れ薬の効き目に若干の恐怖を感じた頃、丁度いいところに身体中傷だらけのシャバラが現れた。

「いいところに来たな副騎士団長。さあ、私を捕まえてくれ」

ゼルバートはそう言いながら両手を前に出して拘束してくれとジエスチャーをとる。

「はあ!？」

突拍子もない庁舎襲撃の首謀者による自首宣言に困惑の声を漏らすシャバラ。

「コ、コウイチさん。これは一体どういう状況ですか?」

ボロボロの身体のまま剣を構えていたシャバラは目を丸くしてその場に固まる。当然の反応である。



「待っていてくれコウイチ! 罪を償ったら帰ってくるから!」

「大人しくついて来い!」

騎士が五人がかりで抑えながら連れていかれるゼルバートは涙ながらにコウイチに叫ぶ。

「あの惚れ薬、何入ってたんだろ。怖いわ」

建物の陰に消えていくゼルバートを見ながら、金貨一枚もした怪しい薬のせいであんなのにファーストキスを奪われた事を嘆く。

「惚れ薬ってなんのことですか?」

横にいたクウがコウイチの言葉を聞き逃さず問うてくる。

「え!? なに? 惚れ薬? なにが?」

「コウイチさんって分かりやすいですよね」

若干呆れたような目で見られる。クウに誤解されるのは辛い。惚れ薬はやましい気持ちで買ったから誤解も何も無いが...

「いや、違うんだクウ。これには深い訳があつてだな、説明すると一晩で足りるかだろうか」

「何の話してんの?」

コウイチが慌てている姿を見て近寄ってきたキーラ。

まずい。キーラと一緒に市場に行つたときに買ったなんて知られたら、なんて言われたか分かつたもんじゃない。どうせ「あたしに飲ませようとしてたんでしょ！」とかなんとか面倒臭くなるのが目に見える。どうにか誤魔化さねば。

「なに黙つてんのよコウイチ」

こんな時に限つて、いい言い訳が出てこない。どうしよう。

「三人共、ここでしたか」

「シャバラ！」

言い訳を考えて頭を抱えているところにシャバラが手を振りながらやってきてくれた。ナイスタイミング！

「皆さんのおかげで無事『骸狩り』の連中と幹部三人を捕らえることができました。感謝します」

言葉の最後に、「約一名の情緒が不安定ですが」と言つた気がするが聞かなかつたことにしよう。

こうして、騎士団長スメラギから依頼された『骸狩り』幹部の捕獲と、突如起こつた騎士団庁舎襲撃事件は無事幕を閉じたのだつた。



事件から数日後、スメラギが帰つてきたので騎士団に呼ばれた俺たちは騎士団長の執務室にいた。横にいるシャバラのさらに横をみると、スイレンの姿もある。ここ数日は庁舎を宿屋として使っていたらしい。相変わらずどういう神経してんだこいつは。

「お前らがなぜ呼ばれたか分かるか？」

威圧的な声色で話すスメラギ。

「依頼の成功報酬渡すためだろ？」

分かりきつた事を聞いてきたので素っ気なく返事すると、

「そんな訳ないだろうが！なんだこの惨状は！」

スメラギが指差す先にはなにもない。というより無くなっている。そこには壁が、天井があつたはずなのだが、先日の襲撃により無くなつたせいで、今や執務室は堅苦しい感じなど一切感じない青空執務

室となっている。

「リ、リフォーム？」

「こんな劇的ビフォーアフターあってたまるか！」

　　どうやら騎士団長には、この匠の技がわからないようである。

後片付け

「あ、暑い」

照り付ける恒星の光線を浴びながら瓦礫を集める。

「コウイチさん、頑張ってください、もうちよつとですよ！」

「へーい」

コウイチは今、名も知らぬ騎士に励まされながら汗を流して、庁舎の後片づけを手伝っていた。

スメラギから『骸狩り』の壊滅による報酬を受け取った後、さつさと帰ろうとしたところ「追加報酬を払うから庁舎の瓦礫除去作業を手伝え」と言われてしまった。当然、そんな面倒臭そうなことは断ろうとしたのだが、クウに「困った時はお互い様ですし手伝ってあげましょうよ」とまっすぐな目で言われたので今に至るわけである。

「それにしたって暑すぎるー！」

「泣き言言つてないで、これが最後だからさつさと持って行きなさい」

「へいへーい」

隣で手押し一輪車に瓦礫を積み込んでいるキーラに注意され、動き出す。

季節は夏真っ盛り。なにもしていなくとも汗が滲むというのに、この重労働である。泣き言の一つも出てくるといふものだ。ここ数日間の瓦礫除去作業もいよいよ大詰め、庁舎内に散らばっていた瓦礫はほとんど無くなって、それらは正門近くの空いたスペースに集められていた。

瓦礫の山は文字通り山の様相を呈しており、騎士団総動員でやったとはいえよくここまで集められたものだと感じてしまうほどである。

「コウイチさん、お疲れ様ですー！」

「お疲れクウ」

瓦礫の山を『バインド』の魔法で崩れないように固定しているクウは、山の近くにちよこんと座り込んでいる。

「コレで最後だったさ」

「やっと終わりましたね。すいません、私がもつと力持ちなら手伝えたんですが…」

瓦礫を一輪車から落としていると申し訳なさそうにクウに謝られた。クウには『バインド』で瓦礫を一日中固定してもらっているし、謝ることはないと思うのだが…

「この仕事終わったらお金も入るし、みんなでゆつくりどっかに旅行してもいいかもな」

「ほんとですか?!是非行きましょう!」

なんとなく言ってみた提案に思いの外食いついてきた。確かにこの国にきてからゆつくり過ごせた事ないし、たまにはみんなでどこか出かけるのも悪くないかな。お金はあるし。

「じゃあ、スメラギに報告してくるよ」

「はい、いつてらっしゃいます」

クウと別れて、スメラギのいる青空執務室へと向かう事にした。

「コウイチ!」

庁舎の広場を歩いてみると、どこからか声をかけられたので周囲を見回すと、広場に接する廊下からスイレンが顔を出して手招きしている。彼女はここ数日、崩れた瓦礫の中でも大きすぎて運べないものを砕いて小さくする仕事をしていたのだが、瓦礫も無くなって暇をしているのだろうか。

「どうした?」

「ちよつと話があんだけどいいか?」

カリムの一件で彼女には恐怖心があるのだが、いきなり取って食われることもないだろうし話ぐらいは聞いてあげよう。



「団長、瓦礫の撤去完了しました」

「ん、そうか。ご苦労だったな」

青空執務室にて、シャバラから報告を受けるスメラギは国に提出する書類を書いていた。

「撤去の後は修繕だが、なかなか高くつきそうだな」

撤去は騎士団の者たちで済ませたので実質タダだが、修繕となると騎士にそんな知識はないので外部に頼るしかない。スメラギは、いつそ自分でやってしまおうかとも考えたが、多忙を極める彼にそんな時間はなかった。この後もすぐに王城に行かねばならない用事がある。

どうしたものかと、予算を見ながら考えていると執務室のドアがノックされる。

「入れ」

「どもーっす。こないだ振りっすねー」

入れという言葉とほぼ同時にドアが開けられ、そこから顔を出したのは『宵の手』のガグマだった。

「なにしに来た？自首でもしに来たか？」

「まっさかー、お手伝いですよお手伝い」

「手伝い？」

威圧的な声と目で話すスメラギを物ともせず、呑気な調子で続ける。

「自分のスキルなら、庁舎の修繕なんてあつという間にできちゃいますよ？どうですか？」

「……なにが狙いだ」

「やだなー、狙いなんてないですよ。もちろん修繕費なんていらないですよ？ただの慈善事業なんです」

どこが慈善事業なものか。要は騎士団に借りを作りたいのであると横で聞いていたシャバラですら分かる。

「団長！こんな奴の話を聞く必要はありません！今すぐ捕まえましょうー！」

「では、頼むとしよう」

「分かりました！」

「修繕の方だ」

「ええ!？」

腰の剣に手をかけていたシャバラは力が抜けてしまう。

「ですが団長?」

「じゃあお前にはタダよりいい修繕方法があるのか?」

「そ、それは…」

「大丈夫だ。責任は俺が持つ」

スメラギの言葉に負けて大人しく一步引くシャバラは、ガグマを睥睨する。

「じゃあ、ちやちやつと終わらせちゃいますねー」

その言葉通り、ガグマはクウのいる瓦礫の山に向かいそれに触れると、瓦礫はたちまちドロドロと溶けて粘土のように一つの塊に姿を変える。それを次々と庁舎の壊れた部分を埋めるように合わせていくと、粘土は固まり、元の庁舎の姿へと戻っていく。庁舎が完全に修復するの要した時間は、ものの三十分程度だった。

「本当にあつという間だったな」

つい感嘆の声を漏らすシャバラの横では、実際にガグマのスキルを目の当たりにしていたキーラとクウも規模の大きさに驚きを隠せないでいた。

「こんなこともできたのね、あいつ」

「すごいスキルですね」

「どうですか?すごいっしょ?」

鼻高々に話すがガグマを尻目に、スメラギが近づいてくる。

「手伝ってもらって助かった。これは約束の報酬だが、コウイチはどこだ?」

「あれ?そういえば見てないわね」

不思議そうに周りを見るキーラ。

「私はスメラギさんに報告しに行くって聞きましたが、来てませんか?」

「い、いや?来てないが」

クウに話しかけられると、なぜか少し緊張した様子で返事をするスメラギに遠くから騎士が声を上げながら駆けてくる。

「団長!探しました。さつき、スイレン殿からこちらを預かったので

すが…」

そう話す騎士の手には一枚の紙が握られていた。

「なんだ？どうせ逃げたのだろう。元より胃国民だし、ややこしいから放っておくつもりだったが、手紙を書くとは案外律儀だな」

受け取った紙に目を通してながら話していたスメラギは、紙に書かれた内容を見て顔色を変えてキーラとクウに向き直る。

「どうかしました？」

キョトンとした顔でスメラギをみるクウに「これを…」とだけ言つて紙を渡す。

キーラとクウはなんだろうと思ひ手紙に目を通すと、そこにはお世辞にも綺麗とは言えない字でこう書かれていた。

(コウイチは貰ってくわ！短い間だったけど楽しかったぞ！)

「こ、これって…」

「誘拐、されたようだな」

日も沈みかけた頃、まだ西日は強く照り付けていた。

新天地へ

「うーん、むっ、もぐっ!？」

体に揺れを感じて目が覚めると、口に布をかまされていて喋れない。というか全身を縄で縛られているため動くこともできない。芋虫のように床に放置されている。

明かりはなく薄暗いが天井から白い光が漏れているところを見るに

「お、起きたかコウイチ。よく寝てたな」

頭上から声が聞こえたのでふと見上げると、何かの肉を焼いた串焼きを頬張りながらこちらを見下げているスイレンと目が合う。

「むー!むおー!!」

「コウイチも腹減ったのか?今取ってやるからちよつと待てよ」
串焼きを口に咥えて俺の口に噛ませている布を解くスイレン。

「誰か助けて下さい!この人誘拐犯——、ぐふう!？」

助けを求めようと声を出したコウイチは、高速で繰り出されるスイレンの拳により意識を刈り取られた。



「もがつ!」

再び目を開くと、また口に猿轡をかまされていた。

先程目覚めた時とは違い、上から降ってきていた明かりもなく辺りは暗闇に包まれているので現在は夜らしい。揺れもないし、多分馬車も止まって休んでいるのだろう。

「んー!んんー!!」

「んえ?ああ、また起きたのか?」

闇の中から寝ていたであろうスイレンの声が聞こえてくる。

「むがむがつ!」

「しようがねえなあ——、フンっ！」

「ぶっ！？」

不条理な暴力がコウイチを襲い、意識を刈り取る。



次に目が覚めると、明かりが戻っており馬車も絶賛稼働しているらしく揺れも戻っていた。

「……もが」

「お、起きたか。寝過ぎだぞコウイチ。もう叫ばないなら解いてやるけど守れるか？」

寝てたわけじゃねーよ。お前に無理矢理気絶させられただけだろうがと言つてやりたいがこの状態ではどうにもならないのでこくりと頷いて返事をする、口の布を解かれる。

「夜に起きた時にはもう助けを呼ぶつもりなかったのになんで殴ったんだよ」

「え？夜起きたのか？寝ぼけてて気付かなかった」

じゃあ俺は無意識で殴られたんですね。

「もうお前に従うから体の方も解いてくれると助かるんだが…あと何か食べ物を下さい」

起きては気絶させられるの繰り返しで1日以上飲まず食わずのせいか喉も乾いたし空腹もひどい。とりあえず何か口に含みたい。

「いいよー」

気の抜けるような声で返事をしてコウイチの縄を解くスイレン。

「はいこれ」

やっと縄から解放されて、久しぶりの自由を感じているとスイレンが荷台の中にあつた箱の中からリンゴを一つ取り出して投げ渡してきた。

「……一応聞くけど、このリンゴはスイレンのだよな？」

「いや？ここにあつたから貰つた」

誘拐だけに飽き足らず窃盗にまで手を染めた犯罪者が目の前にい

ますと叫びたいぐらいだが、もう殴られたくないので黙ってリンゴに口をつける。五臓六腑に染み渡るほどうまい。

「で？俺どこに連れてかれてんの？」

「そういえば言っただけな。これから行くのはあたしが生まれ育った武の都【ロンシヤ王国】だ」

お互いにリンゴを齧りながら一番気になっていた事を聞いてみると知らない国の名前が出てきた。

「それってどこにあんの？」

「クエス王国からなら、馬車を乗り継いで行って二ヶ月ぐらいってとこかな」

「遠っっ!!ていうかクウは？キーラは？一緒じゃないの？」

「興味あるなら追いかけて来いって手紙置いてきたから大丈夫だろ」

「一緒でよかったじゃん！」

「だってコウイチのこと誘っても絶対断ると思ったから」

変な所で勘のいいやつである。

「安心しろコウイチ。ロンシヤ王国に来ればお前も立派な武闘家になれるから」

「なりたくねーよ！」

俺の意志に反して、馬車は着々とロンシヤ王国に向けて歩みを進めていく。

——ロンシヤ王国到着まで、あと57日。

カカマオの町にて

降り立った街ごとで逃げ出そうとするもいつの間にか意識を刈り取られ気が付けば馬車の荷台というシチュエーションを繰り返すこと約一ヶ月、もう逃げようと思えるのも諦め始めた頃。今、俺とスイレンはロンシャ王国に入つてすぐの国境付近にあるカカマオという町の宿屋にいた。

「それにしたつて暑いな」

「そうか？あたしにとつてはまだ涼しいぐらいのもんだけど」

肌を刺すようなジリジリとした熱光線と何もせずとも喉が乾く乾燥した空気に包まれているこの街はキャラメル色の砂漠に囲まれている。

「ここからロンシャ王国へは歩いてしか行けないから覚悟しとけよ。今日はここでゆっくり休んで準備を整えるから」

今さらつと死刑宣告された気がするんだけど。この草すら生えそうにない不毛の土地を歩いて行くつて？冗談ですよね？

「なんならまた気絶させて担いで行ってやろうか？」

「人を簡単に気絶させようとするのやめなさい！」

自然と物騒な発言をするスイレンを見ているとため息も出るというもの。

「もういいよ、どうせ行くんだし。とりあえず飯でも食いにいこう」

「お、いいな！行こう行こう。コウイチの奢りで」

「お前が一文無しだからだろうが」

急に誘拐されたとはいえ手元にいくらかのお金を持っていたのは唯一の救いだつた。おかげで砂漠のど真ん中で野宿せずにすんだ。

スイレンを連れて外へ出ると室内と違い太陽の眩しさが一段ときつく感じる。スイレンのオススメの店があるらしいのでそこへ向かつて歩き出すとクエス王国とはまるで違う町並みに異国の地へ来たのだなという思いがより強くなる。

クエス王国を英国とするなら、ここはエジプトと言ったところか白

いレンガの街並みが印象的だったクエス王国と違い砂漠の色と似ている茶色いレンガで造られた建物が並び、そこら中にある屋台らしき店は屋根代わりに特徴的な模様が施された大きな絨毯のような布が掛けられている。風が吹けば砂埃が舞い、舗装された道路などはない。

「着いたぞここだ」

周囲を見ながらスイレレンについて行くと、彼女は一つの建物の前で立ち止まった。

「このランチは絶品だぞ！期待しとけ！」

「俺の金だけだな」

俺の嫌味は耳に入らないらしく、何の反応もなく店内に入っている。

「大将久しぶり！」

「おお！お嬢久しぶりだな！」

スイレレンが店に入りながら大声で呼ぶと、丁度皿を運んでいた髭をたくわえた男が返事をする。

「ていうかお嬢って何？コレが？どこをどう見てお嬢になるというのか。」

「ランチセット二つね！」

「あいよ！ちよいと待っててくれよ」

そう言いながら厨房があるらしき裏へと入って行く大将を見送ると手近な席に着くスイレレンを見て俺も同じテーブルに着く。

店内を見ると、今いる客は俺たちだけらしい。この町に着いたのもつい先程のことだし、宿を探しているうちにランチと言うには少しばかり遅い時間になってしまったからだろう。

「はいおまち。特性ランチ二人前」

スイレレンとロンシヤ王国に向かう行程を確認しながら待っていると大将が自ら料理を持ってきてくれた。

「いったただつきまーす！」

むしやむしやと料理にがつつくスイレレンを尻目に、出された料理に口をつける。

「ん！うまい！」

出された料理は米らしき穀物を細かく刻んだ野菜とスパイスで炒めたシンプルな見た目の料理だったが、穀物の味も米に近く久しぶりに懐かしい味を食べた気がして感動した。

「そう言ってもらえると嬉しいねえ」

俺の反応を見て大将も満足そうに頷いている。

「お嬢、ちよつといいかい？」

「どした？」

大将の料理を堪能した後、食休みも兼ねて一息ついていると、神妙な面持ちで大将が話しかけてきた。

「さっきちらつと聞いたが、今ロンシャ王国に帰るつもりなら、やめといたほうがいいぜ」

「何で？」

大将は言い辛さからか少し間を置いて口を開く。

「ロンシャ王国内は今、内戦状態にあるらしいんだよ」

「内戦!？」

どうもまた話がややこしくなりそうである。

急行

「内乱といってもまだ小競り合いってところで、激化はしてないみたいだけどな」

「内乱って、何でそんなことになってんだよ!？」

スイレンは声を荒げて大将を問い詰める。

「俺も見てきたわけじゃないから詳しくは知らないが、どうも国王に反旗を翻した組があるらしいんだ」

「どこの組だよ?まさかクソ親父か?」

まくし立てるように話すスイレんに気圧されて、大将は上体を反らして慌てて訂正する。

「違う違う!カエン組じゃないよ!」

「あの、ちよつといいか?組がどうかカエンじゃないとか話に付いていけないんだけど...」

スイレンもヒートアップしてきているので落ち着かせるためにも話に入って行くことにする。

「ああ、コウイチにはまだロンシャ王国の詳しい説明してなかったな」

俺に話しかけられて我に帰ったスイレンが大将に一言誤った後、ロンシャ王国について話し始めた。

「ロンシャ王国は、武と任侠の国だ。言ってしまうえば強い奴が偉い、この一言に尽きる。国王を表のトップとしてその下で裏社会を支配している組がいくつかが存在する。あたしの家もその一つだ」

「それがカエン組ってどこか?」

「そう。あたしのフルネームは カエン・スイレンっていうんだ」

だからお嬢なんて言われてるわけか。

「なんとなく理解できたよ」

「それで、どこの馬鹿が内乱なんて引き起こしたんだよ?」

スイレンは俺への説明が終わると、改まって大将に向き直り聞き直す。なぜか嬉しそうな顔をしているのは俺の見間違いだろうか?」

「それが、最近力を付けてきてるロメロス組ってところらしいんだ」

「聞いたことないところだな」

大将からロメロスという名前を聞いて考え込むように俯くと、急に立ち上がって俺の手を取ると、

「考えてても分かんねえから今からすぐ向かうぞ」

「は!?今から!?一ヶ月かかるんだろ?」

「もつと早く行く方法もある。いいから付いて来い」

「ちよちよっ!」

急いで出て行くこうとするスイレンを止めて、大将にお金を払ってから店を出る。

「それにしたって、どうやってロンシヤ王国に行くつもりなんだよ」

俺の手を引いたまま無言で歩みを進めるスイレンに質問する。

「砂塵虎サントトラを使う」

「サントトラって、何?」

「見れば分かるよ」

一旦宿屋に戻って荷物を取ってから露店で軽い買い物を買わせてカカマオの町を出ると、砂漠をずんずん進んで行くスイレン。そんな彼女の後を付いて行くことしばらく、急に立ち止まったスイレンが周りを見渡しはじめた。

「どうした?」

「しっ、来るぞ」

スイレンのその言葉の直後、少し離れた所の砂丘から何かが飛び出してきて砂埃が舞うと俺たちの近くに大きな影がドスンと音を立てて落ちてきた。

「ガルルルウ」

鋭く尖った牙をむき出して威嚇の声を出すそれは、まさに虎だった。今まで見たことがある虎と違いがあるとするれば、大きさは倍以上あり、体の模様も砂漠に合わせた保護色なのか砂色だが所々に色の濃い縞模様も付いている所だが、外見は虎である以上あれがスイレンの言っていた砂塵虎なのだろう。

「あれ、やばくないですかスイレンさん?」

「大丈夫だからコウイチはあたしの後ろに隠れてろ」

のそりのそりと距離を測るように俺たちの周りを回る砂塵虎と、それに合わせて常に砂塵虎と正面の位置を取り続けるスイレン。

勝負は一瞬で決まった。

先に仕掛けたのは砂塵虎の方だった。少し屈んだと思った次の瞬間、猛スピードでこちらに飛び掛かってくる。

「はっ！」

瞬時に反応し砂塵虎の飛びつきに合わせたスイレンは砂塵虎の横っ面に蹴りを入れると、砂塵虎は体勢を崩しながらも体を捻って地面にふわりと着地する。

着地した砂塵虎が顔を上げると視界にはコウイチの姿しか入らなかった。今戦っていたスイレンの姿を探すため首を振ったほんの一瞬、その一瞬の隙を突いて上に飛んでいたスイレンが回転しながら砂塵虎に落下する。

『雪崩』!!

「ブニャ!？」

脳天に上から落ちてくる勢いのついたかかと落としをくらって、砂塵虎はその場で倒れてしまった。

「す、すげえ」

一部始終を見ていた俺は詠嘆の声を漏らしてしまう。

「こいつは自分より強い奴にしか懐かない動物なんだ。だから一回しげげば言う事聞くようになる。こいつが起きたら乗って行こう。この大きさの砂塵虎ならロンシャ王国には三日もあれば着くだろう」

話しながら砂塵虎の横に座り込んで、もたれかかるスイレンは端から見れば蛮族の女王とかの類いにしか見えないな。

数分後、意識を取り戻した砂塵虎はさっきまでの態度が嘘のようにスイレンに擦り寄って懐いており、その巨体の背中に俺とスイレンを軽々と乗せて砂漠を駆け出したのだが…

「早い早い！落ちるって！」

「この早さで落ちたら無事じゃ済まないから、あたしにしっかり捕まるんだぞー。内乱なんて楽しそうなことやってんなら参加しない手は無いからな！」

結局こいつ誰かと戦いたいだけの戦闘狂じゃねーか。店で見せた笑顔は見間違いじゃなかったようだ。

早い。それもとんでもなく。

スイレンが歩いて一ヶ月の行程を三日と言うのも納得するほどであるが、景色を楽しむ余裕すらない（どうせ周りは砂漠だから景色も何もないのだが）スイレンの腰にがっしりとしがみついて目を閉じる。

夜が来たら野宿をして、また朝がきたら砂塵虎に乗って砂漠を爆走。

そんなこんなで本当に三日後、俺たちはロンシャ王国の王都サランに辿り着いたのだった。

王都サラン

「し、死ぬかと思った」

もう二度と乗りたくないと思いつながら砂塵虎から降りてロンシャ王国の王都サランの地に降り立つ。

「とりあえず、あたしの家に行くとするか」

砂塵虎から降りたスイレンは砂塵虎を労うように撫でてから砂漠に逃すと夜の街を歩き出す。

時間は夜で、街には一定間隔で置かれた石の台座に薪が焚べられており、暗い街をほんのりと照らしているが少し冷える。

「静かだな。内乱が起きてるって聞いたからちよつと身構えてたけど」

「いや、静かすぎるぐらいだな」

スイレンの言う通り、静かすぎる街を歩いていると道の向こうからゆらゆらと揺れる火がこちらにやって来る。火が俺たちの前まで来ると、火に照らされた若いながらも風格を感じる眼鏡をかけた強面の男の顔が浮かび上がった。

「おいお前ら、夜は危ないから早く家に帰れよ。この辺は俺らカエン組が巡回してるから大丈夫だが」

「なんだよシジマ。随分と偉そうな口聞くようになったな？」

「ス、スイレンお嬢!？」

シジマと呼ばれた男はスイレンの顔を見ると顔色を変えて驚きを隠せない様子だった。

「帰ってきたんですか。何か便りでも送ってくださいればお迎えに上がったのに」

「急ぎで戻ってきたからな。なんか楽しいことやってるみたいじゃない？」

「内乱のことはもう知ってるんですね。なら早速親父に会いに行きましよう」

シジマはそこまで話したところで横にいる俺の方に目をやる。

「ところでこちらの方はお嬢の知り合いですか？」

「こいつはコウイチ。崩山拳の後継者候補として連れてきたんだ」

「いや、ちよっ…」

当然のように俺の意思と反する説明をするスイレンにツツコもうと思つた時、予想外に驚いたのはシジマの方だった。

「見つかったんですか!?! そいつはよかったですね! ではコウイチ殿も是非いらして下さい。大したもてなしもできませんが」

こちらですとシジマに言われるまま彼の後について行く。

「あれなんだ?」

道中、スイレンがクエス王国に行くまでの間にあつた出来事なんかを面白おかしく話している時のこと、ぽうつと遠くから一際明るい光が発するのが見えた。光の色から炎だというのがなんとなく分かる。

「あれは…まさか!?!」

俺の言葉で火に気付いたシジマが神妙な面持ちになったのも束の間、先の道の角から何やら慌てた様子の若い男が現れた。

「シジマの兄貴、大変です! ササンカ組のアジトがやられました!」

「ササリ組長は無事か!?!」

「それが、まだ部下達と一緒にアジトに取り残されたようで…」

「馬鹿野郎! ササンカ組長の命が最優先だろうが!」

短い言葉で部下を叱りつけた後、こちらを向いて「すみませんが少し行ってきます」と言つて火が上がっている方に駆け出すシジマをスイレンが呼び止める。

「人命救助なら人手は多い方がいいだろ? あたしらも行くぞコウイチ」

「今回ばかりはスイレンに同意だな。行こう!」

まだあの燃え上がる火の中に人がいて、何か手伝える事があるというなら危ない事はしたくないなんて言つてられない。

「帰ってきて早々すいません。こっちはです」

感謝を述べる代わりに軽く頭を下げた後、改めてササンカ組のアジトへと駆け出すシジマの後を追う。

「こいつは酷いな」

シジマの言葉通り、現場は凄惨だった。

「誰か医者を！」

「何やってんだ！早く水魔法が使える魔法使い呼んでこい！」

「この中にまだいるみたいだぞ！誰か手え貸してくれ！」

ササンカ組のアジトは木製の門をくぐった先にあり、とてつもなく大きな平家で家も木造で、日本家屋を彷彿とさせる障子に似たドアも取り付けられている。こんな状況でなければどこか日本を懐かしむ気持ちにもなっただろうが、今その美しいはずの平家は至る所で火の手が上がっていた。

シジマが近くにいた煤だらけで座り込んでいる男を見つけて声をかける。

「ササンカ組長はまだ中にいるのか!？」

「そう、みたいです。すみません」

謝る男に「大丈夫だ」と言つて肩を叩いて立ち上がる。

「まだ中にいるようですね。どうしましょう?」

さつき駆け回っていた男達の話聞く限り、待つていれば水魔法を使える人が来てくれるかも知れない。しかし、そんなのを待つている時間があるだろうか。

「行くしかないだろ！」

俺の思考を遮るようにシジマに返事したのはスイレンだった。彼女は近くで建物にバケツで水を掛けていた男達からバケツを半ば奪うようにもらつてくると、頭から水を被った。

「これならなんもないよりマシだろ」

三人で顔を合わせて頷くと、俺とシジマも水を被つてアジトの中へと踏み込んでいく。

火中

ササンカ組のアジトの中に踏み込んだ瞬間、水を被っていても感じる肌が焼けそうな熱さに足が止まってしまふ。天井付近には黒い煙が逃げ場を無くしたように溜まり、アジトの中はそこから上がっている火にあかあかと照らされている。息をすれば喉も焼けそうだ。

「ここは、別れた方がいいですね」

服の袖を口に当てながら「危険を感じたらすぐに避難するように」と言うシジマの提案に賛成する言葉の代わりに頷いて各通路に別れた。

「誰かいますか!」

呼び掛けに答える声はなく火が爆ぜるパチパチと言う音だけだ聞こえ木でできた扉が崩れる。このままではアジトの倒壊も時間の問題だろう。半ば叫ぶように呼び掛けを続けながら廊下を進む。

「うう…」

歩いているうち一つの障子の向こうから呻き声が聞こえた。

「大丈夫ですか!」

火の付いている障子を蹴破って中に入ると、そこには二人の人がいた。

一人は頭の横を刈り上げて柿渋色の肌をした若い男で、もう一人は恰幅の良い中年の男だった。中年の方がさつき聞いた呻き声を出した男だろうとすぐに分かった。と言うのもその男は今でも呻き声をあげているからであり、若い男に顔を驚掴みにされて足が床から浮いているからである。

「ん?誰だ?」

若い男が中年から手を離してこちらに向く。落とされた中年は力無くその場に倒れてしまった。よく見れば酷い怪我をしているようで、顔は脂肪だけのせいではない腫れようだった。

「何してんだ!ここは危ないから早く避難しろ!それにこの人、お前がやったのか?」

「そいつは俺がやったが、お前は… どうやら組の者じゃないみたいだな。火事を見つけて助けに来た民草か。殊勝な心掛けだな」

問いかけに、男は俺の顔を品定めするように見た後、特に興味も無さげに返事をする。

「なんでこんなこと…」

男から目を離さないようにしながら中年に近寄って抱き起す。

「そんなことは決まっている。こいつが悪で俺が正義だからだ」

俺が抱き抱える男を軽蔑するような目で見下して話す男はこう続ける。

「名も知らぬ民草。よく覚えておけ、俺の名はロメロス。この腐敗した国、ロンシヤ王国に革命を起こす者だ！」

驚きについて目を見開いてしまった。この男がロメロス、ロンシヤ王国で内乱を引き起こしている張本人だと言う。

「民草を巻き込むわけにはいかんし、今日は帰るとしよう。運が良かったなあササンカ！」

ロメロスの言葉で、自分が支えている相手がこのササンカ組の組長だという事の察しがつく。

「フーン…」

ロメロスは体を壁に向けた後、声と共に勢いよく壁を殴りつける。すると、壁は大きな音と火の粉を発しながら綺麗な円の形にくり抜かれた。壁の向こうはすぐに外なっており、眩しく燃え上がる室内と対照的に月に照らされた静かな夜が広がっていた。

「ではな民草。またいずれ会うかもしれない」

「ま、待て！」

「…なんだ？」

つい呼び止めてしまった。こいつをこのまま行かせてはいけない気がしたから。

だが、俺に何ができる？

「なんなら一緒に来るか？」

俺が言い淀んでいたのを見かねて、歯を見せて笑いながらこちらに手を差し伸べてくるロメロス。そんな彼の顔はどこか優しげで、吸い

込まれそうだった。

はつと我に帰り首を振る。

「そうか。じゃあ今度こそさらばだ」

ロメロスそう言うと、壁にできた穴からゆっくりと夜の闇へと消えていった。

「うう…う。ゴホツ」

しまった。ササンカの事をすっかり忘れていた。俺も少し煙を吸いすぎたのか息が苦しい。全身を水で濡らして来た筈なのに全て乾いて熱を帯びているように感じる。

「早く出なきや…」

辺りを見渡すが、もうどこも火の手が迫っており、逃げ出すことができなさそうだ。ロメロスが空けた穴以外は。

「ここしかないか…」

火事を起こした張本人が空けた穴に助けられるとは皮肉なもんだが。

「重いっ!」

ササンカの体は重く、力が入っていないせいで余計に重い。なんとか外に出たのと同時、さつきまでいた場所が天井から崩れた。

「大丈夫かー!」

「誰かいるのか!」

命からがら脱出したのも束の間、近くの壁から、木と火を吹き飛ばしながらスイレンとシジマがアクション映画顔負けのスタントのように飛び出して来た。

もつと普通に出て来れんのか…。

「コウイチ!」

「ササンカ組長!」

各々が俺とササンカに気が付いて駆け寄ってくる。あんな登場の仕方をしたせい、心なしか二人の動きがスローモーションに見える。

というより、動きも遅いしばやけて見える。視界の端から夜のもの

とは違う闇が降りてくる。

——ここで俺の意識は途切れた。

夜は明けて

「うーん…。」

目が醒めると、どうやら布団に寝かされているらしかった。寝ている部屋は、い草に似た匂いのする草か何かで作られた畳が敷かれた和室のような部屋で、開けられた障子の向こうに見える庭先には眩しい日が射し込んでいる。

体を起こしてみる。どこかに異常があるようには感じない。部屋から廊下に出てみるも人の気配も感じない。

「んん、どこだ？」

どこまでも続きそうに感じる長い廊下を歩いていると、突き当りで少し開けた場所に出た。どうやら中庭のようで庭には水の流れを象かたどるように小石や大きな岩が置かれていた。こういうのは確か、枯山水とか言うんだっけ？

「あ…。」

「ん？」

そんな枯山水の一際大きな岩の上で胡座をかいて目を瞑っている人を見つける。他でもないスイレンだった。

「おー、コウイチやつと起きたか」

俺に気付いたスイレンは綺麗に波紋の形に溝を作られた小石の上に豪快に飛び降りたかと思うと踏み荒らしながらこちらに歩いて来る。

「お前、それそんなに踏んでいいのか？」

「大丈夫だろ。ただの石だし」

俺の心配など気にも留めず話す言葉の節々でざつぎと石を踏みつけた後、俺のいる縁側に登って座り込む。

「お嬢!?!何やってんですか!?!」

突然、後ろから声が聞こえてびっくりした。振り返るとシジマが顔を真っ青にしている。

「あーあ、おやっさんが大事にしてる庭なのに…。怒られるの俺なん

ですから勘弁してくださいよ」

シジマは庭の惨状を見て絶望の表情を浮かべながら肩を落とす。

「スイレンちゅわーん。おっはよーん」

今度は右の廊下から、随分気の抜けるような猫撫で声が聞こえる。声の方に目をやるとくすんだ紫の髪に作務衣のような服を着た中年男が目尻を下げながら近づいて来た。

「おやっさん、おはようございますー!」

「親父おはよー」

男を見かけるとシジマは頭を下げ、挨拶して、スイレンは手を手を振って返事する。

「え、スイレンの親父さん!」

ということは、確かカエン組つてとこの組長だっけか。ヤクザだかマフィアだか知らないけど、そのボスに生きてる内に会うなんて考えもしなかったが、さっきの声を聞く限りただの子煩悩のおっさんにか見えんな。

「君がコウイチくんか、娘から話は聞いたよ。わしはカエン・オニバスだ。随分煙を吸って気を失ってたようだが、もう大丈夫そうか?」

「あ、どうも。わざわざすいません。布団まで借りちゃったみたいで」
感謝も込めて頭を下げると、「かまわんかまわん」と笑って返事をしながら庭を見るとスイレンが踏んだせいで綺麗に整備された枯山水の一部が荒れているのを見つけてしまう。

「わしの自慢の庭が!?!誰だこんなことしたのは!?!」

「あ、ごめん。あたし」

悪びれもしない様子でスイレンが返事をする。

「スイレンちゃん...この庭作るの大変なんだよ?いいけど...いいんだけどね?」

「おやっさん、後で若い衆に元に戻すよう言っておきますから、気を落とさず」

荒れた庭を悲しい目をして見ながら愛娘に強く言えないのか、もごもごとした口調になっているオニバスに、シジマが心配そうに声をかけている。

「そんなことより飯食おう！飯！コウイチも起きたし腹減っただろ」
呑気な調子で立ち上がって廊下を歩き出すスイレンの後ろについて
行くと、後ろからしゅんとした表情で付いてくるオニバスとそれに付
き添って歩くシジマ。

どうやらこいつに振り回されてるのは俺だけではないようで少し
安心してしまった。

スイレンの向かった先は随分と大きな広間で、四十畳はありそうな
広々とした空間の真ん中に、数十人は座れそうな脚の短い長テーブル
が置かれている。

「よっこいしょっと。コウイチもこっち座れ」

手近な場所に座り込んだスイレンに呼ばれるまま、彼女の横に座
る。オニバスは床の間を背負う形で、シジマは俺達が各々席に着くの
を確認すると部屋を出て行って閉まった。

「失礼します」

シジマが出てから数分もしないうちに、声と共に広間の襖が開けら
れて数人の女性は表れた。彼女達は各自お盆の上に食器を載せてお
り、座っている人の近くに寄ったかと思うと、机に食事を並べ出す。

「では食べるでしょうか」

「いったただっきまーす」

「…いただきます」

女性達が配膳を終えて部屋を出て行ったのを確認すると、オニバス
の一声でスイレンが食事ががつつき始めたので、俺も続いて箸を取
る。

出された食事は日本食に似た見た目目、おかずも三品ほどあり見事
に一汁三菜の形になっていて、随分と懐かしい見た目なので内心期待
しながら口に運ぶ。

うん、めちやくちや美味い。味も濃すぎず薄すぎず自然と箸が進
む。

「ところでスイレンちゃん。今日はどうするんだい？」

食事に舌鼓を打っているとオニバスがスイレンに問いかける。

「ん、今日はヨン老師のところにコウイチを連れてくつもりだよ」

「そうか、せっかく帰ってきたんだから、もうちょっとゆっくりしてもいいんじゃないか？」

「親父があたしと一緒にいたいだけだろ？ヤダ」

「そ、そっか…」

ぼつさりと振られて先程よりしよぼくれた顔をしているオニバスが少し不憫に思えてしまう。…

ところでスイレンがヨン老師って言うってたけど、誰なんだろうその人？なんだか訳も分からないまま話がどんどん進んでいる気がする。

俺の考えを読んだのか、スイレンがこちらに振り向いて笑いかける。

「コウイチ、今日から楽しくなるぞ」

分からない事だらけだが、こいつが楽しいと言ってる事は俺にとっては楽しくないということだけは分かる。

その予想は見事的中するわけなのだが…

密会

「はあ、気が重いなあ」

ロンシヤ王国王宮にある一室の前にて、肩を落としながらため息をついているオニバスの姿があった。

せつかく愛娘が家に帰って来たというのに、内乱なんぞが起きているせいでおちおち一緒に過ごすこともできないまま、国王に呼び出されて今に至る。

覚悟を決めて部屋をノックする。

「入れ」

一瞬の間があつた後、中から返事が聞こえて扉を開ける。

「来たかオニバス」

部屋の真ん中には丸テーブルが置かれており、三人の男が座っていた。一人はさっきの声の主でもあるロンシヤ王国国王のバルクラヤだったが、他の二人は剣を携えた男とこの国ではあまり見ないスーツを着た男で、オニバスは見たことがない人間だった。

「バルクラヤ様、そちらの二人は？」

「この二人は俺の知り合いだ。今回の内乱の件で来てくれた」

やはり内乱のことで呼び出されたのは間違いないようだが、

「見たところこの国の者ではないようですが…大丈夫ですか？」

部外者にそんな話をして外部に情報が漏れたりなどしたら取り返しがつかないことだつてあり得るが。

「安心しろ。この二人は情報を流したりしないし、何より俺より強い」

オニバスは驚いた。このロンシヤ王国は何よりも強さを重要視する国である。そのため、この国の王は必然的に国内で最も強い者だ。その王が自分より強いとさりとらうと言ってしまったことに驚きを隠せなかった。

「紹介しないとな、スメラギとヤクモだ」

その言葉と共に剣を携えた男が立ち上がる。

「どうも、スメラギです。今回はバルクラヤ様に無理を言つて首を

突っ込む形になってしまい申し訳ありません」

随分と礼儀正しい男だと感じた。それと同時にスメラギと正面で対峙して分かる。おそらく自分ではこの男に手も足も出せずに負けるだろう。それほど強者のオーラを感じた。

「ヤクモです。どうぞよろしく」

スーツの男の方は立ち上がり、こちらを向いてその場で頭を少し下げて挨拶する。その笑顔からはどこか胡散臭い感じられた。しかし、もつと気になるのはヤクモからは強者の雰囲気を感じられないことだ。王が言うのだから自分より強いのだろうとは頭では理解しているが、この男に勝てそうだと長年の戦闘経験から感じられてしまう。

「まあ座れオニバス」

オニバスの警戒を感じてか、席に座るよう促すバルクラヤの指示に従って四人でテーブルを囲むように着席する。

「今からする話は他言無用だ。いいか？」

バルクラヤの念押しという言葉と共に密談は始まった。



「コウイチ。せつかくだし、ちよつとこの辺見て回っていくか？」

「お前が行きたいだけじゃないだろうな？」

「違うつて。サランの雰囲気はコウイチに見せたいんだよ」

ヨン老師なる謎の人物に会いに行く為、サランの街に出た俺とスイレンだった彼女のその言葉で道草を食うことが確定した。

「で、どこ行くんだ？」

「特に決めてないな。歩いてれば分かると思うし」

サランの雰囲気って言ったって、ここに来る時に寄った力カマオの町と特段大した差はないように感じながら歩いていると、一つの店の中から何やら騒がしい声が聞こえてくる。

「表出ろやゴラァ！」

「なんだあ？やんのか？」

「喧嘩だ喧嘩だ！」

「お、いいぞお！やれやれ！」

「お前どつちに賭けるよ？」

酒場らしい店の中からそんな声と共に睨み合った屈強な男が二人と、それを煽るように声を出す他の客がぞろぞろと外に出てきた。

「喧嘩か。危なそうだし避けようぜ」

わざわざピリついた場所に近寄ろうと思うはずもなく、違う道を探そうかとスイレンに話しながら踵を返そうとすると服の襟を掴まれた。そのせいで少しえづいてしまう。

「何すんだよ!？」

「それはこつちのセリフだぞ。まさに探してたのがアレだよ！」

目を輝かせながら話すスイレン。

「見せたいものって・・・喧嘩のことか？」

「そうだよ？」

なんで喧嘩なんぞ見ねばいけないのか理解ができない。大体喧嘩なんてクエス王国でも見たことぐらいある。酒が入って気が大きくなった連中が突っかかって暴れ回るなんて大なり小なりどこでも起きることだ。

「分かってねえなあコウイチ。ここは武の都ロンシャ王国だぜ？」

「だからなんだよ？」

「その辺で見る喧嘩とは訳が違うってことだよ」

含みのある笑顔でそう話すスイレンに手を引かれるまま、喧嘩がよく見えるように近くまで移動してみると目を疑う光景が飛び込んできた。

喧嘩と啖呵はロンシヤの華

「お前んとこのちっこい流派の名前なんて聞いたことねーなあ！健康のために始めたのか？」

がっしりとした筋肉質で体格の大きい男が語気を強めて話す。

「言ってくれるじゃねーか！有名だから強いって勘違いしてるお前みたいなのやっ見てると笑っちゃまうぜ」

すらりとした体格の細い男は嘲笑うように返す。

睨み合っている二人は、お互いに啖呵を切ったかと思うと明らかに素人とは思えない構えをとる。

「いいねえいいねえ。見とけよコウイチ。今から始まるのが武術を修めた者同士のガチ喧嘩だ」

スイレンの言葉に合わせるように男たちはお互いに飛びかかる。「オラア！」

体格の大きい方が振り下ろす拳は、細い男が体を反らして避けたことで地面に突き刺さると鉄球でも落ちてきたかのように地面を抉る。それは、つい最近見たカリムの拳の破壊力に匹敵するほどなのに、速さはカリムの比ではなかった。それを避けた細い男も良い眼と度胸を持つているのだと思うが、それにしても大きい男の拳の破壊力が目に付いてしまう。

「コウイチはどっちが勝つと思う？」

その様子を見て、スイレンがニコニコ笑いながら訊いてくる。

「そりゃあ、あのパンチ見たら細い方のやつが不利なんじゃないか？」
重量で考えれば明らかに階級が違う。体術だけの接近戦なら重量はそのまま強さに変換されるのだから。

「あたしはその細い方が勝つと思うぞ。まあ見とけ」

何か確信があるのか、スイレンはさらりと言い切ってしまう。

地面を叩きつけて舞い上がった土埃が晴れ、男達は再び構えをと

る。

「避けてるだけじゃ勝てねーぞ?」

大きい方が肩を回しながら歩き、相手との距離を縮める。次々と振り抜く素早く重い拳を紙一重で躲され続け、フラストレーションが溜まっていき腕の振りはどんどん大きくなっていく。

決着は一瞬だった。

大きい男が痺れを切らし、一際大振りになった拳を細い男がひらりと避けたかと思うと、振り抜いた腕に自分の腕を巻きつけて関節を極めることで動きを封じると同時にしゃがみ込む。

関節を極められていることで、細い男の動きに合わせるように大きい男の体勢も低くなる。

大きい男がしゃがみ込むのを確認した瞬間、細い男が起き上がり関節を極めたまま腕を上に向けて後ろに回すと、大きい男は重さが無くなったかのように宙に浮き、背中から地面に勢いよく叩きつけられる。

「がつ?」

受け身も取れず地面に激突した大きい男は息苦しそうに声を上げるが腕が離された事で自由になったのですぐさま起き上がるが、細い男にすぐに距離を詰められ懐に潜られる。

「ぐうっ!」

大きい男が呼吸が困難になりつつもなんとか放った拳は相手に届くより先に自分の顎に肘鉄を入れられた事で力無く空を切る。

ドサリという音と共に大きい男は膝から地面に倒れ込み勝負は決した。

「おおー!」

「かーっ! 負けたかー」

「なかなか面白かったぞー」

「兄ちゃんも中々やるな!」

周りで見ていた男達は各々自分の感想を述べながら大きい男を担いで細い男と店の中に戻っていった。店の前はまるで何も起きていなかったかのように人気が無くなる。

「な！細かい方が勝つただろ？」

それ見た事か何故か鼻を高くしながら話すスイレンだが、

「いや、確かにそうだけど何今の!?みんなあつさりしすぎじゃない!」

あんなに本気の喧嘩が起きていたというのに笑いながら店に戻っていく男達には違和感しか感じない。

「あんな喧嘩はこの街じゃ日常茶飯事だからな」

「あんなのが日常茶飯事って…」

「喧嘩と啖呵はロンシヤの華って言うからな。ビビリのコウイチに見て欲しかったんだ」

「これ見て俺にどうしろって言うんだよ」

「これから『崩山拳』を習得するまでこの街で暮らすんだからああいうことに巻き込まれることを覚悟しとけよって話だ」

「覚悟でどうこうできる話じゃなくない？」

俺の返事に笑いながら歩き出すスイレンの姿を見ながら、もし喧嘩に巻き込まれたら回れ右してダツシユで逃げようと固く決心した。

ヨン老師

——ロンシヤ王国内某所、ロメロス組の潜伏地にて。

「ごほつ、はあ」

ほぼ閉め切った窓から漏れるわずかな光だけが部屋をほのかに照らす中、体調が悪そうに咳き込みながら椅子にもたれかかるロメロスの姿がそこにはあった。

「苦しそうだね。大丈夫かい？」

そんな彼の近くの一際陰の濃い場所から、心配しているのか嘲笑っているのか分からない曖昧な色の声がする。声の主の姿は見えない。

「お前か、何しに来た」

相手を知っているらしいロメロスは鼻を鳴らした後、不愉快そうに話す。

「いやなに、ちよつと革命家様の様子を見にきただけさ」

「そんな大層なものじゃない。俺は自分のやるべきことをやるだけだ」

「それは大変結構なことだけど。アレはちゃんと飲んでる？」

「結局それが心配で来ただけだろ。言われなくても分かっている」

ロメロスは素っ気なく返事をする、ズボンのポケットの中から小さな麻袋を取り出すと、その中から何か小さな錠剤のような物を一つつまみ上げると口に放り込み飲み込んだ。

「これで満足か？」

「急かすつもりはなかったんだけど、ちゃんと二日に一回は飲むようにしてね」

「分かっている。それよりお前…」

ロメロスが何か話しかけようとした時、すでに影の向こうにあった気配は消えていた。

「自分勝手なやつだ」

まあ、あんな奴はどうだっていい。俺には使命がある。この国の腐った連中を倒し、新たなロンシヤ王国を創り上げる。だが、ササン

カの所で少し派手に暴れすぎた。しばらくは警戒も厳しいだろうし、身を潜めていた方がいいだろう。

「(っ)ほっ(っ)ほっ、チッ」

椅子から立ち上がりながら咳き込むと、口に当てた手には血がついていた。



「着いたぞここだ」

激しい喧嘩を見た後、スイレンの行くまま後を付いていくこと十分ほど歩くと、一つの門の前で立ち止まったスイレンがそう言った。門は赤く塗られており、人が通るには大きすぎるぐらいの立派な造りだ。

「で？もう聞くのも面倒だったから聞いてなかったけど、そのヨン老師って誰なんだ？」

「ヨン老師は『崩山拳』の師範だよ」

「じゃあ俺は今からその人に『崩山拳』を教わるわけね」

「そんな簡単にいくかは分かんないけどね」

教える為に誘拐してきたというのに、そんな簡単にいくか分からないとはどういうことだと思いつつ、古きからか軋む音を上げながら開く門をくぐり中に入る。

門の中に入ると綺麗に舗装されている石畳の奥に三重の屋根が付いている塔が聳え立っており、その下に杖をついて立っている老人が見えた。

「ヨンのじいちゃん久しぶりー」

「ん、スイレンか、久しぶりじゃな。最近見なかったが何しとった。ちゃんと鍛錬はしとるんじゃない？」

スイレンの呼びかけに半ば閉じかけている眼を少し開いて答える老人。どうやらこの人がスイレンの言うヨン老師で間違いないよう

だが、随分と年配だな。頭は剃っているのか抜けたのか分からないが綺麗なスキンヘッドで、肉付きが良いとは言えない細い体に布を巻き付けただけのような服を着ている。まさに仙人って感じはするけど、ほんとに大丈夫なのかこの人。急に倒れられても納得がいくような虚弱さすら感じるが。

『崩山拳』の新しい弟子探しに行つて来いつて言ったのヨンのじいちゃんだろ？今日は見つけたから連れてきたんだよ」

「そういえばそんなことも言ったっけかな」

ほんとに大丈夫かこの爺さん。

「お前がそうか？」

ヨンはスイレンの横に立つ俺に視線を向けて話しかけてくる。

「どうも、コウイチです。半ば無理矢理ですが連れてこられました」

「ふむ…」

挨拶をすると、ヨンはしばらく俺の事をじっと見つめてきた。数秒間、何を見られているのか分からず眺められるままじっとしていると、ヨンが口を開く。

「素質はあるな。だが精神が全くもって話にならん。小心者で度胸が足りん」

随分な言われようである。数秒見ただけで何が分かるというのかと言つてやりたい所だが、言われた内容が間違っていないだけに言い返せない。

「どう？修行つけてくれる？」

スイレンの問いにしばらく考える素振りを見せた後、ヨンが答える。

「まあいいじやろう。ギリギリ及第点じゃ」

「良かったなコウイチ！」

何故か嬉しそうに俺の肩を叩くスイレン。

これって教えてやらないって言われたらどうなったんだろうと気になったので後々スイレンに聞いてみると、どうやらその場で帰つていいと言われたらと教えられた。誘拐されて連れてこられたのに勝手に見定められて帰つていいと言われる側の気持ちにもなれよ

と思ったが、後になって考えれば帰っていいと言われた方がどれだけ良かっただろうか。

「じゃあ早速始めるとするか」

「え？何を？——って、へぶっ!?!」

おもむろに構えだすヨンに困惑していると、目にも止まらぬ速さの突きでヨンに顔を殴り飛ばされた。

「いつてえなあ！何すんだ急に!?!」

「おいおい、こんなのも避けれんようじゃ話にならんぞ?」

「こんのジジイ…」

避けないんじゃないやなくて避けられないんだっつーの！そういえばスイレんにも『絶対不可避』のことは説明してなかったっけ。早めに教えとかないとこのままじゃボコボコにされる。

「あいな、俺は実は…」

スキルの説明をしようとしたコウイチの口がパクパクと音を出さず動いた後、止まる。

なんか、いつもいつも俺ばっかり痛い目に遭ってんのおかしくないか？『崩山拳』の師範だかなんだか知らないが、いきなりぶん殴られてるのに殴られっぱなしってのも癪だし、たまにはこっちからやってやろうじゃねーか。

「どうしたコウイチ?」

その様子を見ていたスイレんが不思議そうに声を掛ける。

「いや、なんでもない。ところでヨンの爺さん」

「なんじゃ?」

「今度は俺の攻撃避けてくれよ」

「…構わんぞ」

コウイチの顔には、明らかに何かある笑みが浮かんでいる。ヨンはそれを承知でコウイチの提案を受けて立った。

「よーっし言ったな?避けるよ?絶対避けるよ?」

「そんなに念を押さずとも貴様ののような未熟者の攻撃ぐらい目を瞑っても避けれるわい」

「絶対だぞ？絶対ぜーったい避けるよ？」

自信満々で話すコウイチの姿を見て、ますます不思議そうに顔を傾げるスイレン。

コウイチの自信はどこからきているんだ？確かに一度『正拳突き』のスキルは見せてもらったが、筋は良いなと思った程度でまだまだ発展途上なのが否めない代物だった。これと行って突きの速度が速かったわけでもなく、かといって当たったら恐ろしいと思えるほどの威力があったようにも感じない。それなのにこの男はヨン老師に自分の攻撃を当てるつもりでいるらしい。

「どうやって？」

スイレンの疑念は拭えないまま、コウイチはヨンに向かって拳を振り抜く。

「よっしやくらえや！『正拳突き』!!」

しかし、彼女の疑念はすぐに吹き飛び驚愕に変わった。

正確に言えば、結果的にコウイチのパンチを避けれず受けたヨンが後ろに十メートルほど吹っ飛んだ瞬間に。

『絶対不可避』とは

コウイチがヨンに放った『正拳突き』はなんの変哲もないただのパンチだった。近くで見えていたスイレンにはそれがよく分かった。だからこそ、その拳をヨンが避けられなかったことに対する一連の動きの違和感は到底理解できるものではなかった。

走り出したコウイチの動きは単調で分かりやすく、そのうえヨンはコウイチの拳のスピードも軌道もタイミングも把握していたはずだ。それを分かった上で確実に回避するように体を動かし始めた…。はずなのだが。

なぜか、動き始めたヨンの体はその瞬間に強張ったように固まってしまう、結果コウイチの拳をモロに受けてしまった。

「ほんとに当たった…。」

後ろに吹っ飛びながら宙を舞うヨンの姿を口を開けて見ているスイレンと、

「あれ？そんなに吹っ飛ぶ？」

そして、何故か自分のやったことに驚いているコウイチの姿があった。

そんな二人が見守る中、吹っ飛んでいるヨンが空中でぐるりと一回転したかと思うと音もなく地面に優しく着地した。

「これは驚いた。なにしたんじゃ？」

顔の前に手をかざしながらゆつくりと姿勢を正すヨンを見て、直撃を免れて手で受けた後に威力を殺すために自分から後ろに飛んだのだとスイレンはすぐに気づいたが、

「はっはっは！どうだ見たか！」

そんな事は露知らずのコウイチは当てたことが嬉しいらしく呑気に笑っている。

「どうやったんだよコウイチ！ヨンのじいちゃんに当てるなんてお前案外すごい奴なのか!？」

「あつたりまえよ！誰だと思ってんだ俺を！」

「見直したぞー。ただのもやし男かと思ってたのに」

「誰かもやし男だよまったくこの暴力女はー」

「誰が暴力女だよこのー」

「一回当てたぐらいで、そんなに騒ぐなアホ共！」

「いでっ!？」

「あたっ!？」

はははと笑い合うスイレンとコウイチはいつの間にか近づいたヨ
ンに拳骨を入れられ悶絶してうづくまる。

「さて、落ち着いたか？」

「はい、すみませんでした」

地面に横並びに正座させられて大人しくなった二人を見て、一つ咳
払いをしてから話し出すヨン。

「で、小僧。さっきなにをしたか教えてくれるか？」

スイレンも思ったのと同じように、ヨンもまた自分の身に起こった
ことが不思議でならなかった。確かに自分は避けようとした、それな
のに避けようとした途端、何故か体が動かなくなってしまった。咄嗟
の判断で受け止めて威力を殺すようにしたが、今までの長い武闘家人
生の中でも初めての経験だった。

「ああ、それなら俺の『絶対不可避』ってスキルのせいだと思うよ」

その言葉を聞いたヨンとスイレンは目を見開いて固まってしまう。

「え、どうかした？」

「今、『絶対不可避』と言ったか？」

「う、うん知ってるのか？」

その言葉に返事したのはスイレンだった。

「知ってるなんてもんじやないぞ！なんでコウイチがそのスキルを
持ってんだよ!？」

おお、なんだか新鮮な反応だな。今まで珍しいスキルだから知って
る人なんていなかったのに。

「そんなに凄いスキルなのか？使いづらいただけだぞ？」

「なんといいことを言うんじゃないやお前は！」

なぜかヨンに怒られてしまつて戸惑う。

「一体『絶対不可避』ってなんなんだよ？なんでそんなに騒いでんだ？」

コウイチの質問に答えたヨンの答えは予想外のものだった。

「小僧、お前の持つとる『絶対不可避』のスキルは、このロンシャ王国の国教としているクレナ教が崇める武神クレナ様が持っていたとされるスキルの一つじゃ」

「はあ」

「リアクション薄くない？」

クレナってあのクレナのことだよな。その本人からもらったスキルだし、驚きはしないけど。そう聞かされた上でも、この使いづらいスキルがそんなに凄いものだとは到底思えないし、第一スキルを与えたクレナ自体が『絶対不可避』で事件に巻き込まれて困ってる俺を見て楽しんでるなんて事は言えないが…

ただ一つ分かったのは、この国がそんなおかしな女神を崇めた宗教を国教にしているヤバい国だということだ。

「まだ今ひとつ凄さを分かつたらんようじゃな。武術を教える前に、その『絶対不可避』がいかに凄いものなのかしっかり教えてやらねばいかんようじゃな」

その言葉とともに、ヤバい宗教をやっている人によるヤバい女神の説明会が始まったのだった。

武の女神

「まず大前提として、女神クレナについて説明しなければならんのだ
が…」

そこまで話したところで、ヨンはふと上を見上げる。見上げる先には雲一つない空に眩いばかりの太陽が輝いている。立っているだけで汗が垂れてくるほど暑いほどに。

「ここではなんじやから中に入るか。ついてこい」

ヨンは振り返って塔に向かって歩き出す。

塔の中は板張りの床で内装はほとんど手が入れられておらず簡素な造りになっていた。冷房なんてものはあるはずもなく、まだ暑さは残るが日陰になっているため外にいるよりははるかに過ごしやすい。「それじゃ始めるとするかの」

壁に掛けてある黒板の前に立ち、その前に俺を座らせたヨンの講義が始まる。スイレンは話が長くなるのを察したのか散歩に行ってしまうなどと抜かしてそそくさといなくなってしまった。

「まず女神クレナ様とは遙か昔に我々と同じロンシヤ王国に生まれた普通の人間だった方が神となった存在な訳じやが…」

「すいません。もう付いていけません」

開始5秒で手を上げてヨンの講義を遮る。

「あいつ元々人間だったの？」

「あいつとはなんじや！クレナ様を友達みたいに呼ぶな！」
「ツ~~~~!!」

私怨からつい口をついて出てしまった為、再び拳骨が飛んできて頭を抱えてその場にうずくまる。

痛みに悶える俺を放置してヨンの講義は再開される。

「クレナ様はロンシヤ王国の建国者にして初代国王として民を導き、この枯れ果てた砂漠の土地に人の住めるように水源を掘って街を作ったんじや」

あんなヤバい女についていった民がいたことが信じられんが、言葉

にするとまた拳骨が飛んできそうだし黙って聞いておくことにする。
「彼女はロンシヤ王国の代名詞でもある武と義に重きを置き、武術の
発展と自ら自警団として悪を挫く活動をされて民にも大層慕われて
いたという。そんな彼女はとても清廉な方で困っている人がいたら
必ず助けたらしい」

「ダウト!!」

今度は言葉もなく殴られた。ちよつとツツコんだだけなのに…。
てかその逸話多少どころではない脚色がされているとしか思えな
い、だって俺の知るクレナは人が困っているのを見てケラケラと笑っ
ているような奴なのだから。

「そんなクレナ様はロンシヤ国王にふさわしく、様々なスキルと武術
を習得しており、その数ある内の一つが…」

言葉を区切り俺に目を向けるヨン。

「俺の持つ『絶対不可避』だと」

「その通りじゃ。クレナ様の持っていたとされるスキルを習得してい
る者は過去の歴史の中でもロンシヤ王国で生まれた者しか持ってい
ないはずなんじゃが…、そこに現れたのがお前じゃコウイチ」

なんとなく話は分かった。この国の人たちが信仰してる女神クレ
ナ様の持っていたスキルを俺みたいな余所者が持っているから不思
議に思ったのだろう。

だが、俺は今の話を聞いてそんなことよりもっと気になることがで
きた。それについて聞かねば気が済まない。

「それは分かったんだけどさ、そのクレナ様が持ってたスキルって他
にはどんなのがあんの？」

その質問にヨンは、俺がクレナに興味を持ったのだと勘違いしたの
か嬉しそうに答えてくれた。

「そうじゃな。有名なものだと、あらゆるものを破壊するという拳の
『灰燼撃』^{かいしんげき}、目にも止まらぬ速さで移動する『閃脚』^{せんきやく}、風と雷の力を纏
う『風雷坊』^{ふうらいぼう}、など様々じゃな」

「……………ふーん」

そつちよこせや!!!!!!

なんで、そんな数ある強そうなスキルの内の『絶対不可避』やねん！

「どうかしたのか？」

「…いや、なんでもありません」

黙り込んでしまった俺に不思議そうに問いかけてくるヨンには特に何も言わず返事をする。心の中ではいえ、つい使ったこともない関西弁でツツコンでしまった。

「じゃがクレナ様はスキルだけで強かったわけではないんじゃないぞ。さつきも言った通り彼女はあらゆる武術を習得していたからスキル無しでも一人の武術家としてとんでもなく強かったらしいからのう」心からクレナを尊敬しているらしいヨンは、何故か自分のことのように自慢げに話す。そしてふと俺の方に視線を戻すと、藪から棒に「ところでコウイチ。お前クレナ教徒か？」と聞いてきた。

「ああ、まあ……一応、そうみたい」

「なんじゃその煮え切らん返事は！」

またポカリと殴られる。

「クレナ教徒だけど、それがどうしたんだよ!?つかいちち殴んな！痛いんだよ拳骨！」

実は、スキルのせいとはいえ避けると言つてコウイチに拳を当てられたことを地味に根に持っているヨンは、そんなことを本人に言うはずもなく拳骨でちよつと嫌がらせをしていただけなのだが、コウイチにはこの老人はすぐに手を出すヤベー奴だと認識されていた。

「クレナ様の神聖なスキル頂いたことに感謝を込めて一緒にクレナ様に祈りを捧げるぞ」

ヨンはそう言うと、目を閉じて両手の中指だけを立てて天に掲げる。

それを見てコウイチは、ああ、そういえばクレナ教の祈りはこんなだったなあと思いつつ、やっぱりこんな祈りのポーズをしてい

る宗教が崇めている女神はろくなもんじやないと確信したのだった。

仕組み

ヨンにお前もやれと言われるまま、不本意ながらクレナに祈りを捧げた後、いよいよ『崩山拳』の修行が始まるうとしていたが、

「せっかくじゃし、スイレンもたるんどらんかチエツクせんとな」

とのことなので散歩という名の逃走をしたスイレンが帰ってくることを待つことになった。

「そういえば俺はあんまり知らないんだけど、スイレンの実家のカエン組ってこの国じゃすごいところなのか？」

ただ待っているだけでも暇なので、時間潰しにヨンに質問をしてみることにする。その質問にヨンは、「ほんとになんも知らん奴じゃな」という顔をしながらも答えてくれる。

「カエン組はロンシャ王国の中で名実ともに一番の組じゃな。現ロンシャ国王のバルクラヤが元カエン組の組長じゃしな」

「え!?じゃあスイレンって国王と親戚かなんかだったりするの?」

「いや、血は繋がっていない。バルクラヤがカエン組の組長だった時の右腕がオニバスだったんじや。バルクラヤが国王になった事で空位になった組長の座にオニバスが入った形じゃな」

「じゃあ、そのバルクラヤ様ってのは元々王族だったのにヤクザなんかやってたのか?」

俺の問いはどうやら的を射ていなかったらしく、溜息混じりに回答が返ってくる。

「いいかコウイチ。この国がどういう国か忘れたか?」

「どういう国って、さっき言ってた武と義に重きを置く国ってやつか?」

「そうじゃ。この国は強い奴が偉い。これは絶対不変じゃ。その意味するところは、いくら国王の血族だろうと弱ければ国王にはなれんという事じゃ」

それって、国として大丈夫なのか不安になるんだけど。

「心配になるのも分かるがそれなら大丈夫じゃ。さっき言った通りそ

の規模と実力から、ここ数百年はカエン組の組長が国王に就任しているから安定しておる」

心でも読んだのか、俺の気がかりに答えるようにヨンは話す。

「よいか？この国は強い奴が上に立つ。そのシステム上、もし強い奴が現れたら国王になろうと国王に挑戦しようと思うじゃろ？」

「そうなるな」

「そうなる」と国王は日々やってくる挑戦者の相手をしなければいけなくなる。そのために裏を仕切るヤクザがいるんじゃ。

トップに国王がいて、その下に各ヤクザがいる。そのヤクザはもし国王に挑戦しようなどと考える輩にまずは俺たちを倒してからにしてといったふうには阻止する訳じゃ。そうすれば国王より弱いヤクザも倒せんようでは話にならないと言えるからの。そうすれば国王も国の運営に集中できるんじゃ。

最近は何にやらヤクザ相手に暴れ回つとるイキのいいのがあるみたいじゃし…。」

聞いてみるとなるほど、思ったよりしつかりしてるなど感心してしまふ。

「じゃが、バルクラヤのやつは自分で戦いたがっておるじゃろうなあ」
国王の話をするヨンはどこか楽しそうに見える。

「え、そうなの？」

「そりやそうじゃろ。自分の腕だけで国王になったんじゃから、この国で一番喧嘩が好きなのはあいつじゃろうな」

「ヨンのじいさんって国王と知り合いなの？」

「知り合いも何も、あいつに『崩山拳』を教えたのはわしじゃからな」
「ヨンのじいさんって実はすごい人なの？」

「当たり前じゃろが！ただの超絶イケメン老人じゃないんじゃぞわしは」

誰もイケメンなんて言っていないが…どうやらただの変な老人ではないことは確からしい。

「あいつは不完全ではあるがクレナ様が持っていたスキルであり、彼女が作った『崩山拳』の奥義でもある『灰燼撃』を使えるからのお」

「それすごくね？」

「確かに今まででの『崩山拳』の使い手でも使えたのは数人と聞くしな」

流石に武術家が多くいるこの国のトップにもなる人だけあるんだな。俺が仮にも神であるクレナに貰ったようなスキルを自力で身に付けるなんて。

「そんなに驚かんでもコウイチもそのうち『灰燼撃』を見ることになる」

「え？それってどういう——、」

「ただいまー。話終わったかー？」

ヨンの言葉の真意が分からず、聞こうとしたところでスイレンが帰ってきた。

「話はまた今度じゃな」

手を振りながら戻ってきたスイレンを迎えたヨンは、門の前で俺と「なんであたしまで…」と愚痴るスイレンを横に並べると、

「それじゃあさっそく修行を始めるとするか、覚悟はいいか？」

自称超絶イケメンの顔に不敵な笑みを浮かべてそう言った。

修行開始と

「じゃあスイレン。コウイチといつもの外周に行つてこい」

ヨンの指示にスイレンは「へーい」と明らかに嫌悪の色を滲ませた返事をしながら俺を連れて門の外へと向かっていく。

「じゃあコウイチは初めてだし、ゆっくり行くからしつかり付いてこいよ」

言葉通りジョギング程度の速さで走り出したスイレンと並走する。

「ところで外周つて何周ぐらいするんだ？」

「え？なんだよコウイチ結構やる気あるんだな」

俺の言葉をどう受け取ったのか思っていた反応と違う言葉が返ってくる。確かにここの道場は結構な大きさだけど外周一周程度なら軽い運動程度だろうと思つたから何周か聞いただけなんだが。

「何周でもいいけど、まずは一周できるかどうか心配した方がいいぞ」

「え？だつてこの建物の周り一周するだけだろ？」

「あははっ、そんなわけないだろ。外周つてのは道場の外周じゃなくて、ここの王都サランの外周のことだよ」

「はあ!?この街一周つてどんだけかかるんだよ!」

「このペースで行つてたら日は暮れるだろうな。てことで徐々にペース上げてくからしつかり付いてくるように」

そう言うと、スイレンのペースがグツと上がり隣り合っていた俺との距離が開く。

「待って待って!」

「ちなみに外周してるときは、この間の砂塵虎サントラまでとは言わないが危険な生物もいるから、私と一緒にやなきや食べられるぞー」

話しながらも、どんどん俺との距離を離していくスイレン。死なないためにも体力の温存はやめて全力で走るしかないようだ。照りつける太陽と乾燥した空気で体力はどんどん失われていくのに、このままでは倒れて死ぬか何かに食われて死ぬかの二択である。

そんな絶望を感じながら、『崩山拳』の修行が始まったのだつた。



「あつつつついわね、ここ」

「で、ですね。頭がクラクラしちやいます」

ここはロンシャ王国の砂漠に散らばる街の一つ、テサボンにある通りの一角にて、日差しから身を守るための布を頭から体全体にゆったりと巻きつけた服を着たキーラと、同じ服装のはずだが、体の小ささから布が余って側から見ると布のお化けみたいになりながら、ふらふらと今にも倒れそうなクウの姿がそこにはあつた。

「ちやんとこまめに水飲みなさいよクウ。倒れちやうから」

「あ、はい」

キーラから渡された水筒に口をつけてごくごくと喉を潤わせるクウは、飲み終わった口を拭いながら人で賑わうテサボンの街を眺める。そこには露店が立ち並び、キーラと同じように布を巻いた服を着た人たちが大きなかごを頭の上に抱えて歩いたり、日陰にあるテーブルに座って談笑したりしている。

「コウイチさん、どこにいるんでしょう？」

そんな人混みの中に誘拐されたコウイチを探しながら呟くクウ。

「そうね、でもこのロンシャ王国のどこかにはいるみたいだし、とりあえず王都のサランってところに行くのがいいと思うけど…」

二人はスイレンが騎士団に渡した手紙を読んだ後、大した準備もせずにクエス王国を飛び出したのだが、

「もう、お金もあんまり残ってませんもんね…」

二人の所持金は、ここまでの移動費や食料費などで、ここテサボンの街で底をつきかけていた。

「みんな普通に過ごしてるけど、この国今内乱を起こしてる奴もいるっていうし」

「コウイチさんが巻き込まれてなければいいですが」

二人はコウイチの『絶対不可避』のスキルのことを思い出しながら、しばらく悩んだ後、考え出した結論は同じだった。

「絶対に、巻き込まれるから、その前に捕まえるわよ！」

「絶対に、巻き込まれるので、その前に助けましょう！」

顔を見合わせて頷き合うと、まずは資金問題を解決するために動き出すことにした二人は、仕事を探すためにロンシヤ王国の探索者ギルドへと向かうのだった。

途中経過 その3

「はあ——、はあ——。」

暑い。暑すぎる陽の光のせいで汗は止まらず、その吹きこぼれる汗が口に入ってこようとすることを、口を窄めて息を吹き出すことで防ぐ。

もう何時間走ったのだろう。代わり映えのしないはずの辺り一面の砂漠の景色は、疲れからか、それとも陽炎のせいか、ぼやけて歪んで見える。

「大丈夫かコウイチー」

前を走るスイレンの足取りは、一切の疲れを感じさせず、まるで近所でジョギングでもするかのようである。

「大丈夫なわけっ！——、あるかっ！——ぜえっ」

二人がサランの外周を走り終わり、道場に戻ってきたのは、日もどっぷりと暮れた頃だった。

「今日はなんにも出てこなくてよかったな」

そう話すスイレンは一人になれば危険だから頑張っついで来いと言いながらも、ギリギリのところまでコウイチとの距離を離さないように走っていたのだが、コウイチ本人は自分の事で手一杯だったため気付いていないようである。

「帰ってきたか。随分かかったのう」

塔の中からあくびをしながら出てきたヨンは、地面に倒れこんでいるコウイチを見ながらかかかかと笑った。

実際のところ、ヨンの予想で今日は途中で倒れてスイレンに抱えられて帰ってくると思っていたので、少し驚いていた。

「さっき見た時になんとなく分かっていたが、普段から多少は鍛錬を積んどるようじゃが、なにかやっておったのか？」

「暇な時は剣の素振りとかしてたよ。一時は山の中で狩りとかしてた

から多少は体力あると思うけど」

「なるほどの。今日は動けなさそうじゃしここまでにするか。それからコウイチ。今日からここで寝泊まりしていけ。その方が寝ても起きても稽古できるからな」

「えっ!？」

疲労は限界を超えて身動きが取れないコウイチは突然の逃さない発言に震える。

「この塔はわし一人で住むにはちと持て余すしな、タダで住ませてやるんじやから感謝せいよ」

なんとも身勝手な言い草に言い返したい所だったが、そんな余力もなく今はもうどうせここに住むならもう寝てしまおうと目を瞑ってしまったコウイチはそのまま意識を失った。

ふと目を覚ますと、スイレンかヨンが運んだのか塔の中の一室らしい布団で横になっていた。近くにある木の格子でできた窓から見える空はまだ暗く、月と星の明るさだけが空を覆っていた。

「あ、起きた」

近くから声が聞こえた。その声はヨンでもスイレンのものでもなかったが、コウイチはその声を知っている。

「なにしに来たんだよ」

「そんなこと言うてほんまは会えて嬉しいくせに。様子見に来たつてんで？」

にやりと笑いながら話かけてくる声の主は、つい先程ヨンが熱心に話していた人物、女神クレナが布団から起き上がった俺の右側の少し離れた所に座り込んでこちらを見ていた。

こいつの姿見たらヨンのじいさん腰抜かすんじゃないかな。仮にも熱心に信仰してる宗教の神だし。

「まさかロンシヤ王国に来るなんてな、うちも久しぶりに来たわ」

立ち上がったクレナは窓からサランの街を眺めながらこちらを

見もせず話す。その横顔は故郷を見て何か思うことでもあるのか、どこか優しく見える。

「で、今日はまた途中経過を見に来たのか?」

俺の言葉にクレナはくるりとこちらに向き直ると、にこりと笑う。「察しが良くて大変よろしい。でも、今日はそれともう一つあんねん」
「もう一つ?」

「最近、更生も順調に進んでるみたいやし、頑張ってるコウイチにこの女神クレナ様ありがたい助言をしに来てあげたんや」

「助言ねえ。ほんとに役立つのかそれ?」

「神様のありがたい助言にケチつけるようなこと言いなや! あんたは黙って有り難く受け取ればええねん!」

そんな押し売りみたいな助言聞いたことないが。まあここは黙って聞いてやるとしようかと思いつつ先を話すように手を出して促す。

「コウイチ。どれだけ時間がかかっても、あんたはここで『崩山拳』を習得しなさい。強くなるのがこの先のあんたの為になるから」

「はあ?なんで俺が『崩山拳』なんて習得しないとだめなんだよ?」

「あんたの魂胆は分かってんで? さっさと自分に才能がないことを認めさせてこの国から出ようとしてるやろ?」

クレナの指摘に驚いて、一瞬言葉が返せなかった。彼女が言ったことは、まさにコウイチが実行しようとしていたことだった。このままでは本当に『崩山拳』を習得するための本格的な修行が始まってしまふ。そんなものは望んでいないし、さっさと帰ってキーラとクウとのんびり薬草採取でもしたかった。

「あんたが愛しのキーラとクウに会いたいのはよう分かるけど、一生会われへんわけちゃうし、しばらくの我慢やな」

「いや、別にあいつらに会いたいわけじゃねーし! 自分からやりたいとも言うてない『崩山拳』の修行を受けたくないだけだよ!」

あまりにも的確な言葉に照れ隠して声を大きくしながらも、『崩山拳』の修行は本当にしたくないことを伝える。

そんなコウイチとは対照的に、クレナはいたって真剣な表情で話を

続ける。普段からは考えられない真面目な顔をしたクレナから発せられた予想外の言葉に、コウイチはまた言葉を失うことになる。

「別に修行を受けへんのはええけど。このままやと、あんた天寿を全うする前に死ぬで？」

覚悟

「近いうちに死ぬって、なんでだよ？」

普段のおちやらけた調子とは違い、真剣に話すクレナに少し圧倒されて聞き返してしまう。

「ほんまはあんたも薄々気づいてるやろ？」

確かに以前からなんとなく自覚はある。

そんな俺の心当たりがあるのを見抜いてか、クレナが話だす。

「問題はコウイチ、あんたの弱さや。プリムと戦った時も、ゼルバートと戦った時も、カリムとの時も、全部が全部ただ運が良かっただけ、あんたの強さで勝てたことなんて一回も無かった、そうやろ？」

クレナの言うことはなにも間違っていない。押し黙る俺を見て、反論してこないのを肯定したとみなしてた話を続ける。

「プリムの時はクウの支援魔法と相手が油断してたの、それでもってグレゴリが割り込んできてくれたからだし、ゼルバートの時は惚れ薬を飲ませる機転が利いた所は評価するけど、その場にプリムがいてくれたから実行できただけ、カリムの時に関しては意にも介されてなかったし、スイレンが不意打ちしようと思ってたから助かっただけ。もし、ちゃんと戦わされてたらあんた数秒も持たへんかったやろうし…。」

全くもってその通りである。今までの何度かの戦闘で、俺一人で何かを成し遂げたことは一つもない。

「だから俺に『崩山拳』を学べと？」

「そろそろ覚悟決めろってことや。あんたが『絶対不可避』を持つてる限り今までみたいなことに巻き込まれるのは避けられへん。これから先も、今までみたいに運だけでどうにかやっていけるとは思わん方がええってことや。もし、一緒におるキーラやクウに危害が加わるような事態に巻き込まれた時、なんもできひんかったらどないするん？」

確かに、俺には今ひとつ覚悟が足りていなかったのかもしれない。

運だけで助かってきたが、クレナの言うように俺なんかと一緒にいる
せいでキーラやクウに危険が迫った時、なにもできないのは、嫌だ。
「分かった．． お前の言う通り覚悟を決める」

その言葉を口にしながら、自分の中で何かが吹っ切れたような気が
した。このままじゃだめだ。降りかかってくる火の粉をのらりくら
りと避け続けることはできない。振り払う術を覚えなければ。

この世界で死なない程度に生きる術をゴートに教えを乞うた時と
は違う、誰かと戦って勝つ術を身につける為に『崩山拳』を学ぶ。

コウイチの顔を見たクレナは満足したように笑みを零すと、
「ほな今日はこれぐらいにして帰るとするわ。次会う時はもつとええ
男になってることを期待しとくで」

そう言い残して、景色に溶けるように姿を消してしまった。

窓から見える東の空には、降りていた夜を押し上げるようにほのか
に青い空が昇ってきていた。



コウイチがヨンの元で修行を始めてから、あつという間に三ヶ月の
時が過ぎようとしていた。

「おっすー。おはよー」

まだ外は少し暗い時間、ヨンの道場に軽い調子で入ってきたスイレ
ンは迷わずに台所へと向かう。そこには、美味しそうな匂いを漂わせ
ながら火の様子を見ているコウイチの姿がそこにはあった。

「おお、スイレン。おはよ。もうできるからヨンのじいさんも起こし
てきて」

修行が始まってから住んでいるこの道場も、随分と住み慣れたもの
になりつつある。右から三番目にある戸棚を開けて、調味料を鍋に入
れながら少しだけスプーンに取ってスープの味を確かめる。

「うん。今日もうまいな。俺天才」

朝ごはんの出来に満足していると、起きてきたヨンとスイレンを

ちやぶ台に座らせて料理を運ぶ。

「うくん。やつぱりコウイチの料理は美味しいよな。最近は家の朝ごはん食わずにこっちで食べることも増えたし」

「そのせいで食費が嵩かさむんじゃからちよつとは遠慮せんか」

並べられたご飯を満足そうに頬張りながら賑やかな朝食を済ませた後、軽い準備運動をしてからまだ人気の少ないサランの街をスイレンと一緒に走り出す。

「随分走るのも慣れてきたんじゃないかコウイチ？」

「来る日も来る日も外周させられてたら流石に慣れてもらわんと困る」

軽口を挟みながらもスイレンに離されることはなく付いていく。クレナとの話の後、真面目に修行を始めようと思ったはいいものの、ヨンからの修行の内容はただひたすらに外周をすること。だけだった。

それからというものの、最初の一月は丸一日をかけて外周を一周。二ヶ月目は日が暮れる前に帰ってこれるようになり、三ヶ月目の最近では朝に出て、昼過ぎには帰ってこれるようになっていた。外周以外の時間はただひたすらヨンに命令された家の雑用をこなす日々。

「今日から新しい修行を始めるぞ」

外周を終えて帰ってきたので、昼食の用意でもするかと考えていたらヨンに呼び出されて塔の外の広場にやってくると、軽い感じで外周以外の修行が始まることを告げられた。

「で、なににするんだ？」

ただ走るだけのマラソン選手のような日々から解放され、やっと始まる本格的な修行に少しの期待を覚えながらヨンに訊いてみる。

「とりあえず今からスイレンにお前のことをボコボコにしてもらう。話はそれからじゃ」

修行を楽しむにしていた俺の淡い期待は、一瞬にして絶望に変わったのだった。

殺気

ボコボコにしてもらおうというヨンの言葉通り、一人で鍛錬をしていたスイレンを呼び出して、向かい合った状態で広場に立たされる二人だったが。

「え、ほんとにボコボコにされちゃうの俺？」

いまだに、自分の置かれている状況が飲み込めず呆然と立ち尽くすままのコウイチと、何故か理解が早くぴよんぴよんとその場で跳ねてやる気十分のスイレレン。

「別にただやられとは言わんぞ。やり返せるならやり返していいからの」

やれるもんならやってみろと言わんばかりの笑いを漏らしながら言い放つヨンに苛立ちを覚えつつ、構えるように言われるまま正面に立つスイレレンと相對する。

「恨むなよコウイチ」

スイレレンは、そんなに俺を殴れることが嬉しいのか邪悪な笑みを浮かべながら構えを取ったままジリジリと距離を縮めてくる。

「ぐっ、くそっ！」

こうなったら、せめて一発でも当ててやる！

決心して思いっきり一歩踏み出して正拳突きを放つ。

避けられないことが分かっているスイレレンは落ち着いた様子で拳の横から尺骨を当てて受け流すと、すぐさま空いている腕でコウイチの鳩尾にアッパー気味のパンチを返す。

「ゲエツ!？」

攻撃が来ることは分かっていたので、咄嗟に腹筋に力を入れて堪えたが、それでも一瞬息ができなくなってしまうほどの威力。だが、このまま止まってしまうえば追撃がくる。出ていくばかりの息を止めて反撃に出ようと拳を振りかざすと、目の前にいたはずのスイレレンが視界から消えていることに気付く。

「ど、どこいった？」

消えたスイレンを探して首を振ってみるも、彼女の姿は捉えられない。

「ちえいつー！」

「あがつ!？」

突如聞こえた気の抜けるような声と共に後頭部に衝撃が走り、前に向かって吹っ飛ばされる。

「ちゃんとガードしろよコウイチ」

スイレンは変わらず悪戯な笑みを浮かべたまま、蹴ったのだと思われる振り上げた足を下ろしながら話かけてくる。

「できるわけねーだろ死角から蹴り飛ばされて！」

まだ痛みが残る頭を押さえながら大声で返すと、

「それを分かるようになれってことだよっ！」

言葉と同時に、またスイレンの姿が再び消える。今回はしっかり見ていたので、彼女が地面を蹴ったのだけは分かった。分かったのだが…

「見えん…！」

凄まじい速さで地面を蹴る音だけが聞こえるが、一向に視認することができない。

「どこ見てんだ？」

音を追うように目を動かしていると、どこからともなく目の前に拳を構えたスイレンが現れた。

（まずいつー！）

顔の前に腕を出してガードの姿勢を取るも、甘いガードもろとも強烈なパンチをくらい宙に浮く。

「クツソオ、好き放題しやがって…！」

ガードした腕が鼻に当たったことで鼻血が地面にポタリ、ポタリと地面に二、三滴落ちる。

鼻を嚙り、垂れる血を親指で拭いながら止まったことを確認してスイレンに向き直る。

それからと言うものは、なんとかこちらにも攻撃を当てようとやたら

めつたら腕を振るってみるも、そのことごとくをいなされ、殴られては倒れ、蹴られては倒れを繰り返すこと数十回。最初こそは一発当ててやろうと思っていたが、終盤はどこから飛んでくるか分からない攻撃をどうにかガードすることに必死だった。

反撃する気力も、立っている体力も無くなった頃には、日はとうに沈み、地面に寝転がる俺とその真上にある半分ほど雲に隠れた月と目が合った。

「どうじゃった？」

疲れ果てたコウイチに近づいてきたヨンが問いかける。

「どうって、なにが？」

宣言通りただボコボコにされただけで、それ以上でもそれ以下でもないと思うのだが。

「今のスイレンとの戦いで、何故自分が一方的にやられたか分かるか？」

「なんでって、そりゃあ俺とスイレンじゃスピードが違いすぎるし、パワーだって——」

そこまで話したところで、手を顔の前に出されて中断させられる。

「違う違う。全く見当違いじゃよ」

「なんだよ。勿体ぶってないで早く教えてくれ。意味もなく殴られたわけじゃないんだろ？」

業を煮やしたコウイチの質問に、やっと本題に入る気になったらしいヨンはにこりと笑った後、口を開く。

「殺気じゃよ『殺気』」

「殺気？」

「あらゆるものが攻撃の瞬間に無意識で発する気、それが『殺気』じゃ。それを感じ取ることができればいち早く相手の攻撃に気付き、対処したり、先手を取ることができる。それゆえ、コウイチがスイレンに攻撃をしても受け止められたり、受け流されたりして反撃を受けとったんじゃない。もっとも、最後の方はただやられるがままじゃったがな」

俺のやられっぷりは大層面白かったらしく、最後の方はただ馬鹿にされただけの気がするが……

「その『殺気』を感じ取れるようになってことか？」

「そう言うことじゃ。明日からは午前中は外周、帰ってきたら殺気を感じ取る修行を追加する。さっさと感じ取れるようにならんと体の傷は増えるばかりじゃから死んでくれるなよ？」

もう死に体になっていいる人間にそんなことを言われてもと思いがら、ついに始まった本格的な修行にやはりどこか嬉しさを感じて、起き上がることもできないほど疲れたコウイチは、そのまま眠りについていた。

ダンジョンアタック

時は遡り、テサボンの街にてお金が無くなり途方にくれていたキーラとクウは、ロンシヤ王国にもあるという探索者ギルドに訪れていたのだが…。

「仕事はないですって!?!」

「はい。採取依頼はそもそもこの不毛の土地に採取するようなものがないですし、討伐依頼は出ている時もあるのですが、出てもすぐに街の腕自慢の武闘家たちが倒してしまったりするので、探索者の方に依頼するものはない。と言うのが探索者ロンシヤ王国支部の現状です」
信じられないと言った表情のキーラに淡々と状況を説明する受付嬢パジルトは、このがらんとしたギルドにいるただ一人の職員である。

「探索者本部でも、この国に置く支部は必要ないと判断を下し、近々このギルドは引き払う予定です」

言い切ったところで決めポーズのように眼鏡をくいと掛け直す。ピンでぴつちりと抑えられた前髪から出た白い額。真面目を絵に描いたような見た目のパジルトだが、何故こんな仕事の無いような国に来たのか分からない少女二人を前に困惑しているのは彼女も同じだった。

「あ、あの、じゃあこの国でお金を稼ぐ方法って何かありませんか?」
最後の望みを断られたかのように焦っていたキーラの横からパリスに声をかけたのはクウだった。

「お金を稼ぐ方法——、ですか」

この国でお金を稼ぐ方法と言われてパジルトが思い浮かぶものは一つしかなかった。

「そうなるややはり迷宮攻略——、ですかね」

「ダンジョンアタック、ってなに?」

初めて聞く単語を不思議そうに聞き返すキーラに、パジルトは説明を始めてくれる。

「迷宮攻略とは、人工的や自然的に作られた迷宮などを探索することです。ここロンシャ王国の資金源は、この広い砂漠の大地に数多くある大小様々な迷宮から得られる財宝などによるものです」

パジルトの言う通り、このロンシャ王国には、遠い過去から存在するダンジョンが数百とある。その中にはロンシャ王国の歴代国王たちの墓も含まれる。その全てのダンジョンにあるとされる金銀財宝の総額は、金貨にして約一億枚以上あると言われている。

その中で、現在見つかつている内容はその半分にも満たず、まだ残り半分が各地にあるダンジョンに眠っているとされ、国中のヤクザや一攫千金を狙う者たちがダンジョンアタックを繰り返し、未だ日の目を見ない財宝を探している。

「そ、そんな大金が眠ってるんですか」

王都まで行くお金さえ手に入ればと思っていたところに、予想以上の儲け話に驚いてしまうキーラとクウ。

「とは言っても、めぼしいダンジョンはもう探し尽くされていますし、ダンジョンは見つかっているものの財宝が見つかつていない場所は我先にと財宝を探す競合相手がいますから、その方々と衝突してしまうかもしれませんのでおすすめはできませんよ?」

提案してみたはいいものの、目の前にいるのは女性二人、しかも片方は見たところ年端もいかぬ少女。そんな人を金を稼ぎたいなら荒くれ者達がいるダンジョンに行けと言うのはあまりにも酷だとパジルトは後悔した。

「じゃあ、そこに行くから場所教えてちょうだいよ」

「ちよ、私の話聞いてましたか!?!」

何がダメなの?と言った顔で場所を聞いてくるキーラに驚きを隠せないパジルトは、助けを求めるようにクウに目をやるも、その幼い少女までも教えてくれと言った顔で頷くだけだった。パジルトがその二人の瞳から感じたのは、何かの決意満ちた光だった。

「~~~~ツ!..... 分かりました。教えます。教えますが、どうなっても知りませんからね!」

こうして、二人の圧に負けたパジルトの口からダンジョンの場所が

伝えられる。

探索者ギルドの受付嬢としてのプライドで、探索者を無駄死にさせないためにも、教えたダンジョンは比較的に小さめで危険の少ない場所にしたが。

「ありがと。じゃあ今から行くとしましょうかクウ」

「はい！パジルトさんもうありがとうございます」

ダンジョンがテサボンの街から歩いて行ける距離にあると知るやいなや、すぐさまギルドから出て行ってしまった二人を見送って、あの二人が無事に帰ってくるかどうか確認するまではこの国を離れるわけにはいかないと心に決めたパジルトだった。

ガマラダンジョン

キーラとクウの向かうダンジョン。テサボンの街から砂漠を歩くこと半日の場所にあるその場所は「ガマラダンジョン」と呼ばれている。

「ここがガマラダンジョンね」

ダンジョンに辿り着いたキーラが、地下へと続く階段を覗き込む。「暗いですね」

クウは、その入り口が二人を飲み込もうとする大きな口に見え、少し身震いをする。

「じゃあ、行くわよ」

「…はい」

意を決した二人は、ガマラダンジョンへと足を踏み入れていく。

『光球』

キューブ状態だった杖を展開したクウの言葉と共に小さな光の球が宙に浮き、辺りを照らす。

「やっぱり魔法って便利よね」

「未だに攻撃魔法は使えませんが、こういうのならたくさん使えますよ」

キーラに褒められたのに嬉しさ半分、情けなさ半分といった反応で微笑するクウを後ろで歩かせながらダンジョンを進むキーラは道の途中で、石の壁をくり抜いたような部屋を見つける。

「ここは…、特に何もないみたいね。流星にこんな分かりやすい所の宝なんてとつくに誰かに見つけられてるだろうし」

部屋をある程度探った後、落胆していたキーラにクウが語りかける。

「あの、私、宝探せるかも、です」

「え!?!ほんとに!?!どうやって!?!」

思いもよらぬ発言に目を丸くしてクウに詰め寄るキーラ。

「えっと、私の習得している魔法の中に『探知』と『果報』っていうのがあるんです。『探知』は何か物を探すときに便利なんですすがなんでもいいから探したい時は精度が落ちて、石ころのような物にも反応しちゃうんですが、『果報』を使って私自身の運をあげれば宝に反応してくれる可能性が上がります。そうすれを使えば隠された宝を見つけられるかもしれません」

浮かぶ光球によってか彼女自身によってか、キーラの顔がパアッと明るくなる。

「さつすがクウ！天才！かわいい！」

「えへへ、」

わしやわしやと頭を撫でられ表情が緩むクウは、杖を構えて早速『果報』と『探知』を発動する。

「あっちの方から何か感じますね」

「よーし、じゃあ早速行くわよー！」

クウの感じる先に向かって意気揚々と歩いていく二人の姿が、ダンジョンの奥へと消えていく。



——キーラとクウの向かうガマラダンジョンの奥深くにて、

「うう…」

「いてえよお」

「ここはロメロス組の縄張りって言ったよなー？聞いてなかったー？」

ダンジョンアタックをしにきた腕自慢の数人の男達が皆うずくまるのを笑い、悠然と歩きながら話す面長で垂れ目の男が一人。身長は二メートル近くあり、気に触るような言葉の伸ばし方で喋るのが特徴的である。

男の名はラクズン。ロメロス組幹部の一人である。

「お前ら、こいつらの所持品かつぱらった後はテキトーにその辺でお宝探してこーい」

「はい！」

ラクズンの抜けた声に返事をする部下たちは、言われるまま倒れている男たちの体を弄り始める。

「ふ、ふざけるなあー！」

倒れていた男の一人。バンが、最後の気力を振り絞ってラクズンの部下を払い飛ばす。

「ん？何か言ったかー？！」

垂れた目をギョロリと見開いて、声を出したバンを睨みつける。

「ロメロス組だかなんだか知らないが、ダンジョンは誰のものでもない！好き勝手やるのも大概にしろ！」

バンは近くに落ちていた槍を手に取り、まるで自分の手足の如く振り回すとラクズンに向かって構える。

「長物使えば勝てると思ったのかー？甘いねー」

大きい体をくねくねと動かしながら挑発するラクズンに隙ありと見たバンは目にも止まらぬ突きを繰り出すも、いつの間にか動いていたラクズンは槍の柄を踏みつけて穂を地面に叩きつけるとあっさりと折ってしまう。

「なに!？」

バンは確実に捉えたはずのラクズンの動きが見えなかったことに驚いていた。

「そんなに驚いてどうしたよー？なんか不思議なことでもあったかーい?？」

驚いていたのも束の間、次の瞬間にはいつの間にか懐に入り込み目の前に聳え立つラクズンに目を見開く。全く目で追えなかった。まるで、瞬間移動でもしたかのように。

「遅いおそーい」

「ぐっ!？」

そのまま顎を蹴り上げられたバンは高さ四メートルはある天井に吹っ飛び頭がめり込む、そのままだらりと力を無くしたように宙ぶらりんになってしまう。

「我らがロメロス様は次期国王だよー？そのロメロス様に認められた

俺に楯突くなんて、死に値するよねー？」

蹴り上げた足を下ろすと同時、壊れた天井と共に地面に落ちてきた
バンを高笑うラキズンの声がダンジョン内に響きわたる。

深層

「結構奥まで来たわね」

ダンジョンの暗さも、クウの光球の明るさも変わらないはずだが、長くダンジョン内を探索して心なしか暗さがより一層まりましたように感じながらも歩みを進めるキーラ。

「そろそろ反応があつた場所です。頑張りましょう！」

しばらく魔法は使わないと思つたクウは、杖をキューブに戻してポーチにしまったことで空いた両手を体の前に構えてキーラを鼓舞しながら彼女の後ろをトコトコと付いて行く。

「あ、その左の部屋です！」

キーラは、後ろから聞こえるクウの声に従い真つ直ぐ続く道の途中にある部屋の中へと足を向ける。

「ここが？」

部屋へ入つたキーラは首を傾げる。それもそのはず、クウが言つた部屋の中はもぬけの殻で、空間だけを切り抜いて煉瓦で囲つただけのようなその部屋に宝などと呼べるものは見当たらず、静寂の中に土埃だけが舞っているだけだつた。

「この…はずなんですけど…」

何も見当たらない部屋をキーラの背中から顔を覗かせたクウは尻すぼみに声が小さくなつていく。

「やっぱり私の魔法なんかじゃ当てにならなかつたみたいですよ」

そう話すクウのただでさえ小さい姿は、萎んだ風船のようにより小さく縮んでいくようにも見えた。

「そ、そんなことないわよ。クウが言うんだからこの部屋に絶対あるわ！一緒に探してみましょ？」

「……はい」

なんとかクウを励ますために探してみようとは言つてみたものの、どうしたものかと困り果てるキーラ。探すと云つても光球が放つ光で部屋全体は隅まで見える程明るく照らされ、何かを探そうにも何も

ないことは明白であった。

(でもクウを悲しませるわけにはいかないし、隠し部屋があつたりしないか、しちみつぶ風潰しに壁でもなんでも調べてみるしかないわね)

足取り重く壁や地面をペタペタと触って調べるクウの悲壮感を纏った後ろ姿を見ながら、真剣な眼差しで部屋を調べるキーラ。

「…？これって…」

十分ほどなんの変哲もない壁と格闘していたところ、キーラの目線の高さにある煉瓦の一つに違和感を感じる。

「どうかしましたか？」

キーラの零した呟きに、相変わらずしょんぼりとした顔で振り返るクウ。

「この煉瓦、なんか変なのよ。ていうか」

煉瓦を触りながら話すキーラが煉瓦を少し押ししてみると、「ガコン！」という音と共に煉瓦が壁の奥へと消えていった。

「やっぱり！クウ！こっちこっち！」

「ほんとにあつたんですか!？」

ほぼ諦めて探していたクウは、目を開きながらキーラに近寄る。

「ちよつとこの中照らしてみてくれない？」

クウに頼んで煉瓦一つ分の隙間から光球を覗かせて中に光を入れてみると、確かにそこに空間があることが分かった。

「やっぱり隠し部屋よ！ほんとにあつたんだわ！」

「わ、私も見たい！見たいです！」

煉瓦の位置が高いせいで背を伸ばしながらその場で跳ねるクウの脇の下を持ち煉瓦の奥を見せてあげる。

「ほ、ほんとにあつた。よがっただです」

安堵からか涙を流して喜ぶクウを下ろして頭を撫でてあげる。

「でも安心するのはまだ早いわよクウ。問題はどっやつてこの中に入るかなんだけど…」

煉瓦一つの隙間では、流石に人は通れない。あの煉瓦がキーとなって扉のように開く気配もないので、見つけたのは偶然と建造物の劣化による物だろう。となると、

「この壁を壊すしかないわね…」

「こ、壊す。ですか？」

「ちようど試してみたいこともあるし、クウはちよつと下がって」「は、はい！」

壁を破壊するという提案に驚きつつ、後ろに二、三步下がって様子を伺うクウを確認して剣を抜くキーラ。

(さて、あんまり派手に壊しすぎると中の宝を傷つけちゃうかもだから威力は抑えめで、でも人は通れる程度の穴を開けるとなると、)

「このぐらいかな…」

その言葉と同時に、キーラの剣の刀身が紅く輝き出す。

v

「いくわよ。纏剣『火種』!!」

勢いよく振るった刀身が壁に激突すると同時に、ドンという大きな音と共に爆発が起こる。

爆ぜた壁と土埃が落ち着いた頃、さつきまで煉瓦の壁があった場所には大人が屈めば通れそうな程の穴が空いていた。

「す、すごいです！キーラちゃん！」

「クウに魔法教えてもらつたって正解だったわね」

ロンシヤ王国に来るまでの道中、馬車に揺られるだけでは暇だったのでクウに魔法を教えてもらつていたキーラは、ふんと息を出して自慢げである。

実際のところ、本来なら数ヶ月をかけて習得する魔法をわずか二ヶ月足らずでここまで習得するだけに留まらず、威力に調整をしながら剣に纏わせるまでの発展を見せるのはキーラの本賦の才によるものであり、クウも素直に驚いていた。

「さ、宝をいただいて王都に向かいますよ」

涼しげな顔をしながら隠し部屋へと入って行くキーラの後ろ姿を見ながら、自分も頑張らねばと気合を入れるクウだった。

遭遇

隠し部屋への抜け穴を通り中に入ったキーラとクウの二人は、光球の明かりを頼りに部屋を探索し始める。

「これ、なんででしょう?」

始めてすぐ、クウが部屋の奥にあった台座の上に置かれているのを発見した。それはどうやら杯さかづきのような何かだった。

杯は楕円形を半分に切ったような形に足を付けた様な形をしており、大きさは人が飲むには少し大きすぎるようで、クウが手に持つと少し抱えるようになってしまうほどである。しかし、その全体は錆のような汚れで覆われて黒ずんでおり、宝とは言い難い代物だった。

「これは…宝なのかしら?」

クウの持つ杯を見たキーラも疑問の言葉を呟く。

「と、とりあえず持って帰りましょうか」

クウは怪しみつつもポーチの中へ杯をしまうと、他にも何かないか部屋の中をまた物色し始める。

「… 何もないわね」

「… ですね」

しばらく部屋を物色してみたものの、杯以外のものは見当たらず思わずため息が漏れてしまう二人。

「ま、まあもつと奥に行けば何かあるかもだし、さっきのが見つかっただけでも良しとしましょ?」

「そうですね。先に行きましょうか」

二人がダンジョンに入ってから数時間が経過した中、見つかったのがガラクタにしか見えない杯だったため、どっと疲労感が出てきたが、まだ見ぬ宝を見つけるため再び『果報』と『探知』を発動し反応があつた方へと歩み始めるのだった。



「ちよつと、何よこれ！」

しばらくダンジョンの奥へと歩いた後、少し開けた場所で二人が目にしたのは傷だらけの半裸の男が四人、地面に突っ伏している惨状だった。

「大丈夫ですか!？」

「あ、うう…」

「ひどい怪我…」

「こつちもよ。でもみんな息はあるみたい！クウお願い！」

「はい！すぐ治します！」

なんとか一命を取り留めている負傷者達にすぐさま治癒魔法をかけて回ること以最悪の結果には至らなかった。

「ほ、ほんとに治ってる」

「助かったー」

「助かったよ。君たちが来なければどうなっていたか」

傷を治してもらったことで安堵の声を漏らす男達の中で、一際ひどい怪我をしていた男が感謝を述べた。

「俺はバン。ロンシヤの男として、この恩は必ず返す。本当にありがとう」

「そんなそんな！頭を上げてください！ほんとに大した事はしてませんから！」

座ったままとはいえ、いかにも屈強そうな男が地面に付くほど深々と頭を下げたことにクウは戸惑う。

「でもなんであんた達こんなところで倒れてたわけ？」

キーラの質問を聞いたバンは、顔をハッとさせて近くに落ちていた自分のものらしき槍を拾って他の男達に目配せすると、突然慌ただしく動き始めた男達。

「ちよつと、どうしたのよ急に」

「君たちも早くここを離れたほうがいい、ここは危険だ」

「危険って何がよ？」

「説明は後で、とにかくダンジョンの出口へ急がないと…」

「急がないとどうしたのかなー?」

バンがキーラ達を連れてこの場を後にしようとしたその時、ダンジョンの奥へと続く通路から妙に語尾を伸ばした口調の声が聞こえた。

「ラキズンツ!」

「おやー? 殺したと思ってたのに、随分元気になってるねー?」

通路の影の中から頭をかがめて出てきたバンがラキズンと呼ぶその大男は、薄ら笑いを浮かべながらバンの前に立つ。その大きさはキーラよりも大きいバンが小さく見えるほど大きい。

「ダンジョンなんて探索するの面倒臭くなつたから先に戻ってきてみれば、おかしなことになってるねー」

「そいつがあんた達をあんな目に合わせたの?」

「おやー? おやおやー?」

キーラの声を聞いたラキズンが、バンの頭の上から目を見開いて彼女の姿を捉える。そのなんとも言えない不気味な表情にキーラは身の毛がよだつ感じがして二、三步後ろに下がる。

「さつきはいなかった女がいるねー。しかも二人も」

クウの存在にも気付いたラキズンが首を回して彼女を見ると、クウは短い悲鳴を上げてキーラの後ろに隠れる。

「なんなのよあんた!」

キーラの怒声にラキズンは「おっと失礼!」と言って自己紹介を始める。

「俺は次期国王ロメロス様の部下のラキズンだよー。よろしくねー。いやー、それにしてもツイてるなー。あるかも分からないお宝を探すより、女を捕まえたほうがよっぽど確実に金になるしー。一人は小さすぎるかもだけど、それはそれでマニアが買うだろうしねー」

ラキズンはそう言うとおもむろに片足を上げて構え始めた。

「どうやら相当ヤバイ奴なのは分かったわ」

槍を構えたバン達と共に剣を抜いて迎撃する構えを取るキーラと、

後ろで杖を展開するクウ。
薄暗いダンジョンの中で、戦闘が始まろうとしていた。

成長

「ふむ、これは…。」

時は戻り、コウイチが殺気感知の修行を始めてから一ヶ月の時が経とうという頃、ヨンはコウイチの成長に目を見開いていた。

「はっ！」

「あぶねっ！そこか！」

今、ヨンの前では素早い動きでコウイチを翻弄しながら次々と攻撃を繰り出すスイレンの姿がある。ほんの一ヶ月前までは、どこから飛んでくるかも分からない攻撃にただ防御を固めるだけだったコウイチだが、今では確実にどこから狙われているか把握し、しっかりと攻撃に合わせてガードをした後、反撃にまで打って出ている。

元より適性があるのは理解していたヨンだが、それでも殺気感知を習得するにはもつと時間が掛かると踏んでいた。しかし、今のコウイチを見る限り彼はほぼ完全に殺気感知を習得しかけている。

「そこまで！」

ヨンの一声で二人の動きはぴたりと止まる。

「なんだよヨンのじいさん。今いいとこだったのに」

「そうだよじいちゃん。最近のコウイチいい感じじゃん」

急に止められたことに不満を漏らすコウイチとスイレン。

「口の利き方がなつとらんから拳骨を入れたいところじゃが、もう何時間やつとると思つとるんじゃ。さっさと晩飯の支度してくれんとわしが飢え死にってしまうわい」

ヨンの言葉で、コウイチとスイレンは夕日もとつくに沈むほど暗い時間になっていることに気付く。

「ほんとだ。もうそんな時間か」

「言われてみればお腹減ったな。コウイチの料理早く食べたい！」

時間の経過に気付いたことで自分の疲れを感じた二人は少し重い足取りで塔へと歩き出す。

「それにしてもコウイチあつという間に殺気感知習得しちやつたよ

な」

「普通はもつと時間掛かるもんなのか？」

「そりやそうだよ！コウイチに武術適正があるとはいえ、この速さは中々のもんだぞ！なんかあったの？」

コウイチの急成長に驚きを隠さないスイレンの言葉に、コウイチ自身も自己分析も兼ねて考えてみる。

「元々、興味があるものはとことんやり込んじゃう人間だったけど、案外やってみたら武術の修行って結構楽しかったんだろうな」

きつかけこそクレナの言葉だったが、実際コウイチは修行を始めてから寝食以外の時間はほとんど全てを武術に使っていた。ヨンとスイレンによる稽古が終わった後の一人の時間もイメージトレーニングやその日にやった組手の反省をするほどである。

「ふーん。まあなんにせよ、あたしとしては初めはイヤイヤやってたコウイチがやる気になってくれたのは嬉しいけどな」

そんな会話をしながら塔に戻り、お互いに風呂に入ってからヨンと共に食卓についた。

「そういえば、最近ロメロスの話って聞かないけどどうなったんだ？」

外周をする時に外に出る以外、道場に籠りっきりのコウイチは食事
中の雑談がてらスイレンに聞いてみた。

「うーん。それなんだけど、あんまり派手には動き回ってないみたいだな。サランで起こった事件もコウイチが来た時にあった一件だけだし、他の街でも時々ロメロスの部下を名乗る奴が組を襲撃したりしてるみたいだけど、ロメロス自身は現れてないみたい」

「じゃあまだ捕まってないのか」

ロメロスと初めて会った時の事を思い出しながら食事を口に運ぶコウイチ。

「いろんな組が潰されてロンシャ王国のヤクザ達は血眼で追ってるらしいけど、中々足取りが掴めなくて親父達も参ってるみたいだよ」

スイレンの親父達というカエン組の人たちの事だろう。ロンシャ王国一のヤクザが総動員で探しても見つからないとなると、捕ま

るのはまだ時間がかかりそうだな。

「あーそう言えば・・・」

机をばんと叩いて何かを思い出したかのような声を漏らすスイレ
ン。

「どうしたんだよ急に大声出して」

「ごめんごめん。一つ思い出してき。ロメロスの部下達にヤクザの組
が次々壊されていく中、テサボンの街は唯一ロメロスの部下を追っ
払ったっていうらしいんだよ」

「へー。そのテサボンには強い人がいたのか？」

「いや。テサボンはそんなに大きな街じゃないし、いる連中もサラ
ンに比べれば大したことない」

「じゃあなんで追っ払えたんだよ？」

「なんでも、異国の地から来た二人組が大立ち回りしたらしいんだよ。
しかもその二人、女らしいんだ。同じ女として鼻が高い話だから印象
に残ってたんだよなー」

「なるほどね」

スイレンの話を聞いてコウイチは料理を口に放り込みながら、こん
な国に来る女なんてとんでもなく腕に自信があるような奴等なんだ
ろうなあと勝手なイメージを膨らませる。

それと同時に、女二人組と聞いてキーラとクウの事を思い出して
いた。

二人は今どうしてんだらうなあ。早いところ『崩山拳』を覚えて強
くなって二人のところに戻りたいもんだ。コルト亭のご飯だつてし
ばらく食べてないし、なんだかホームシックの気分だな。

コウイチがキーラとクウに再会するのはまだまだ先のことである。

意外な再会

「今日は休んでいいぞ」

いつも通り朝ごはんを済ませた後、スイレンと外周を終えてから組手の稽古に取り組もうとした時のこと、ヨンから突然そんなことを言われた。ロンシヤ王国に来てからと言うもの、一日も休まず稽古を続けてきていたので、どうしたんだと聞いてみると、どうやらこの後客があるのだと言う。要は邪魔だから出ていけとのことらしい。

「休みって言われてもなあ」

スイレンと共に道場を出て、サランの街をこの後の予定を考えながら歩く。

「嬉しくないのか?」

「いや、まあ嬉しいのは嬉しいけど…」

この四ヶ月間、休みなく稽古に明け暮れていたのと武術にハマっていたこともあるので、急に休みと言われても稽古ぐらいしかやりたいことが思い浮かばないのは俺も随分毒されているのだろうと苦笑する。

「だったら今日はサランの観光でもしてみるか!」

スイレンの提案を拒否する理由もないので、彼女に街を案内してもらうことにする。思い返してみれば外周を走りに行く意外でサランの街並みをゆっくり見たこともないし、ちようどいいかもしれないな。

「ゆっくり見て回ると、案外道場っていっぱいあるんだな」

まだ日も高い時間なので、先に腹ごしらえをしようと言うスイレンに付いて人で賑わう街を歩いていると、至る所に道場と書かれた看板を掲げる場所が目に入る。

「武の国って言われるのも納得だろ?」

誇らしそうに話すスイレンに同意しつつ、数多ある道場の看板達に目をむけると、武術に剣術、槍術、棒術、弓術とその種類も流派も様々で、こんなに道場があったら潰れないかと心配になるほどだが、どこ

の道場も子供から大人まで多くの人が出入りをしているのを見る限り、どここの道場も繁盛しているらしい。

「そう言えば、『崩山拳』を習いにきてる人見たことないんだけど、いるのか？」

「今はあたしとコウイチ以外いないぞ」

スイレン行きつけだと言う店に入り、注文した料理を食べながら街を見て思った疑問を投げかけてみると、予想外の返事が帰ってきた。

「なんで!? 仮にも女神が使ってた武術なんだろう? みんな習いたいもんなんじゃないのか? それにあんな馬鹿でかい道場があるのに誰も門下生がいないって、道場が潰れるんじゃない?」

「確かにクレナ様の武術だから習いたかって人はいっぱいいるんだけど、そもそも道場に入れてもらえないだけだぞ。じいちゃんが入りた奴をテストして認められた奴しか入れないからな」

「え!? そうなの!？」

「そうだよ! じいちゃんに会うとき言っただろ? 簡単に入れるか分からないって」

そう言われればヨンのじいさんに会う時にそんな含みのあることを言ってた気もするが…。

「それはいいとしても、人がいないんじゃないや道場が潰れるだろ」

「その辺も大丈夫だ。『崩山拳』はクレナ様が作った武術なのと、現国王の使う武術でもあるから国によって保護されてるんだよ」

「なるほどな」

「どうやら無駄な心配だったらしい。」

「それにしても国王も『崩山拳』の使い手なんだな」

「たしかヨンがクレナの持ってたスキルで『崩山拳』の奥義を使えるとか言ってた気がするがそういうことか。」

「そうだ! なんなら会いに行ってみるか?」

「誰に?」

「誰って国王だよ国王。今の話の流れ的にそうだろう?」

「はい!？」

何をそんな軽いノリで言ってるんだこいつは。

「だって今の国王って前カエン組の組長だし、親父とも仲良いからあたしとしては親戚のおじさんみたいなものだよ」

「それは別にそうかも知れないけど、会ってどうするんだよ？」

クエス王国にいた時なんて国王って存在がいるのは知ってたけど会うようなことは絶対になかった。それを本当に親戚に会いに行くような感じで誘われてもなんと答えていいか分からない。

「最近真面目に修行してるみたいだし、バルクラヤのおじさんに会えば何か『崩山拳』のヒントを教えてくださいませんかよ？」

「いや、まあ、それはそうかも知れど……」

「迷ってても仕方ないし、とりあえず行ってみようぜ！」

「ちよ、心の準備が……！」

「そんなのいらんいらん、せつかくの休みなんだし。さ、レッツゴー！」

話しながら食べていた料理はもうなくなっていたため、さっさと勘定を済ませたスイレンは俺の腕を掴んで王宮のある方へとズンズンと歩き始めた。国王ってこんな勢いで会っていいのか？

スイレンの言っていたことが嘘とは思わなかったが、王宮の前にある屋敷が丸々一個通りそうなほど大きな門の横に立っていた警備と一言二言彼女が話すと警備員が通る用らしい小さなドアから中に入っていると言われて王宮の中へと足を踏み入れていく。

「ほんとに来ちゃったよ……」

「そんな緊張しなくても大丈夫だって。バルクラヤおじさん優しいから」

そんなこと言われても一国の主と会うことなんて普通に生きていたらまず無いのだから、緊張するなという方が無理な話である。

そんなことなど毛ほども察しないスイレンは自分の家でも歩くように王宮の中を進み続ける。

王宮内はどこを見ても高そうな調度品に溢れており、働いている使用人らしき人達からもどこか気品さを感じてしまうほどである。

「おや、コウイチ君じゃないですか。久しぶりですね」

しばらく王宮内を歩いてきた時のこと、近くのドアが開き中から人が出てくる。その男は横を通り過ぎたコウイチの姿を見つけると陽気に話しかけてきた。

アウエーの地で少し顔を下げながら歩いていたコウイチが顔を上げて振り返ると、そこには胡散臭い笑みをこぼしながらこちらに手をひらひらと振っているスーツ姿の男が立っていた。

その男は、秘密結社『宵の手』のリーダーであり、コウイチと同じ異世界更生者でもあるヤクモだった。

「え、ヤ、ヤクモさん!?!」

異国の地で初めて会った知っている顔がヤクモだったことに驚きを隠せずその場に固まってしまった。